ISSN 1882-9775

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 23（2011）年度

奈良市教育委員会

2014

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 23（2011）年度

奈良市教育委員会

2014

ＨＪ第 645 次調査　発掘区全景（南から）

ＨＪ第 645 次調査　井戸ＳＥ 502（北西から）

井戸ＳＥ 502 の仕口構造（南西隅の一部）

ＨＪ第 651 次調査　ＳＫ 30 出土土器

ＨＪ第 651 次調査　ＳＫ 30 出土青花皿

例　言

1．本書は、平成 23 年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と、埋蔵文化財調査センター紀要を収録したものである。

ただし、平成 23 年度に実施した調査のうち平城京跡第 649・656 次調査と史跡東大寺旧境内第 13 次調査については、次年度以降に報告する予定のため、本書には収録していない。また、赤田横穴墓群 9 号墓の調査概要は平成 22（2008）年度年報に掲載している。

2．平成 23 年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局　教育総務部
文化財課
課　　長　　西崎卓哉
課長補佐　　中井　公　大西章市（文化財総務係長事務取扱）
文化財総務係
主　　任　植松宏益　松浦五輪美
技術職員　大窪淳司
埋蔵文化財調査センター
所　　長　　森下惠介
所長補佐　　篠原豊一
主　　任　　三好美穂　鐘方正樹　秋山成人　安井宣也　武田和哉（現 大谷大学）　宮崎正裕
原田憲二郎　久保清子　池田裕英
技術職員　　久保邦江　中島和彦　原田香織　山前智敬　池田富貴子
事務職員　　松村健次
再任用職員　酒井真弓
嘱託職員　　大原　瞳　奥井智子（現　京都市教育委員会）

3．発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4．各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

ＨＪ　平城京跡　　ＤＡ　大安寺旧境内　ＧＧ　元興寺旧境内
ＴＤ　東大寺旧境内　ＳＤ　西大寺旧境内　ＡＤ　赤田横穴墓群

5．古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6．本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

ＳＡ（柱列・塀）　ＳＢ（掘立柱建物）　ＳＤ（溝・濠・溝状遺構・暗渠）　ＳＥ（井戸）
ＳＦ（道路）　　ＳＫ（土坑）　　ＳＸ（その他）

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7．本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査数の前に下記の略記号を使用し表記した。

国　―　独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）
県　―　奈良県教育委員会　および　奈良県立橿原考古学研究所
市　―　奈良市教育委員会

8．本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代　軒　瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会　1996
土　器：『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』奈良国立文化財研究所　1976
『平城宮発掘調査報告書XI』奈良国立文化財研究所　1982
古墳時代　須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
弥生時代　土　器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所　2003

9．発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」（1/2,500）を、また発掘調査地位置図については、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を利用した。

10．本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位（m）を省略した。

11．この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

12．第１・３章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第２章は分析機関である公益財団法人元興寺文化財研究所の報告を再編集して構成した。第４章は文化財課職員が執筆した紀要を掲載した。

13．本書の執筆および編集は平成 25 年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長森下惠介、所長補佐篠原豊一・三好美穂の助言を得て、鐘方正樹が編集を担当した。

目　次

巻首図版…… Ⅰ、Ⅱ

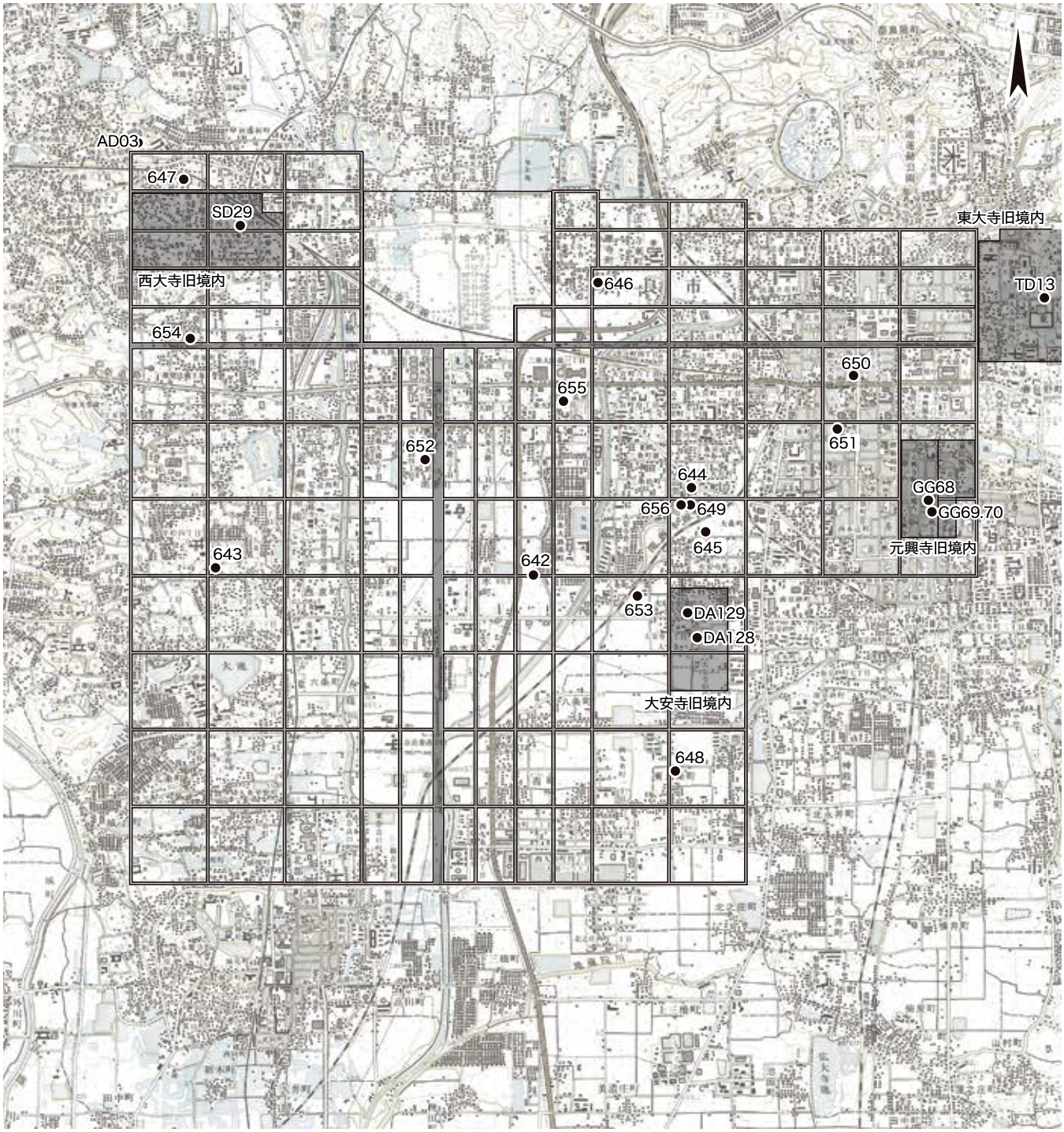
例言・目次…… i ～ v

第１章　平成 23 年度埋蔵文化財調査概要報告 …… 1
　１．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査…… 2
　　平城京跡（左京五条四坊七・十坪、東四坊坊間路）の調査　第 645 次 …… 3
　２．平城京跡（左京五条二坊四坪・五条大路）の調査　第 642 次 …… 14
　３．平城京跡（右京五条三坊十三坪・西三坊大路）の調査　第 643 次 …… 15
　４．平城京跡（左京四条四坊五坪）の調査　第 644 次 …… 17
　５．平城京跡（左京二条三坊一坪）の調査　第 646 次 …… 22
　６．平城京跡（右京北辺四坊三・四坪）の調査　第 647 次 …… 25
　７．平城京跡（左京八条四坊三坪）の調査　第 648 次 …… 27
　８．平城京跡（左京三条六坊七坪）・奈良町遺跡の調査　第 650 次 …… 34
　９．平城京跡（左京四条六坊一坪）・奈良町遺跡の調査　第 651 次 …… 38
　10．平城京跡（四条条間路）の調査　第 652 次 …… 45
　11．平城京跡（左京六条三坊九・十坪）の調査　第 653 次 …… 48
　12．平城京跡（右京二条四坊四坪）の調査　第 654 次 …… 52
　13．平城京跡（左京三条二坊十一坪）の調査　第 655 次 …… 57
　14．史跡大安寺旧境内の調査 …… 62
　　（１）東面回廊推定地の調査　第 128 次 …… 63
　　（２）食堂并大衆院推定地の調査　第 129 次 …… 68
　15．元興寺旧境内の調査 …… 71
　　（１）東塔院推定地・奈良町遺跡の調査　第 68 次 …… 72
　　（２）東塔院推定地・奈良町遺跡の調査　第 69 次 …… 74
　　（３）東塔院推定地・奈良町遺跡の調査　第 70 次 …… 76
　16．西大寺旧境内の調査　第 29 次 …… 77
　17．平成 23 年度実施小規模調査・試掘調査一覧 …… 79
　18．平成 23 年度実施踏査一覧 …… 79
　19．平成 23 年度実施工事立会一覧 …… 80

第２章　自然科学分析報告…… 85
　　平城京跡第 631 次調査　井戸ＳＥ 513 に転用された辛櫃の科学分析 …… 87

第３章　平成 23 年度保存活用事業報告 …… 97

第４章　紀要 …… 105
　　大安寺垂木先瓦考…… 107



平成 23（2011）年度　発掘調査地位置図（1/40,000）

平成 23（2011）年度　奈良市教育委員会実施　埋蔵文化財発掘調査一覧

№.	調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積（㎡）	担当者	事業者	事業内容	事業区分	届出受理番号
1	HJ642	平城京跡（左京五条二坊四坪・五条大路）	大安寺町 497 番 1	H23.4.5 ～ H22.4.13	120	奥井	個人	賃貸住宅新築	原因者	H22.3349
2	HJ643	平城京跡（右京五条三坊十三坪・西三坊大路）	五条三丁目 9 － 1	H23.4.11 ～ H23.4.27	336	三好	共栄社化学㈱	寄宿舎新築	原因者	H22.3364
3	HJ644	平城京跡（左京四条四坊五坪）	大森西町 216 番 1 の一部	H23.4.20 ～ H23.5.16	330	中島	個人	賃貸住宅新築	原因者	H22.3430
4	HJ645	平城京跡（左京五条四坊七・十坪・東四坊坊間路）	大森町 103 － 1 大安寺七丁目 676 － 1	H23.5.30 ～ H23.8.31	806	原田憲・池田富	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理都市再生推進事業	公共	H12.3145
5	HJ646	平城京跡（左京二条三坊一坪）	法華寺町 365 他	H23.5.24 ～ H23.6.10	140	原田香	㈱フォレストホーム	宅地造成	原因者	H23.3010
6	HJ647	平城京跡（右京北辺四坊三・四坪）	西大寺宝ヶ丘 651 の一部他	H23.6.8 ～ H23.7.1	210	池田裕	プレステ㈱	宅地造成	原因者	H23.3004
7	HJ648	平城京跡（左京八条四坊三坪）	東九条町 554 番他	H23.6.10 ～ H23.7.4	167	安井・奥井	㈱山金	宅地造成	原因者	H23.3019
8	HJ649	平城京跡（左京五条四坊八坪）	大森西町 172 － 1	H23.6.29 ～ H23.11.4	804	原田憲・大原	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理都市再生推進事業	公共	H12.3145
9	HJ650	平城京跡（左京三条六坊七坪）・奈良町遺跡	高天町 14	H23.7.21 ～ H23.9.1	158	奥井	個人	共同住宅新築	原因者	H23.3034
10	HJ651	平城京跡（左京四条六坊一坪）・奈良町遺跡	下三条町 8 － 1	H23.8.18 ～ H23.10.26	411	中島	大和ハウス工業㈱	共同住宅新築	原因者	H23.3017
11	HJ652	平城京跡（四条条間路）	四条大路四丁目 1047 番 1	H23.10.5 ～ H23.10.19	122	原田香	㈲石橋建築総合設計事務所	宅地造成	原因者	H23.3140
12	HJ653	平城京跡（左京六条三坊九・十坪）	大安寺三丁目 77-1　他 12 筆	H23.11.17 ～ H23.12.7	154	安井・原田香	㈱八州エイジェント	宅地造成	原因者	H23.3190
13	HJ654	平城京跡（右京二条四坊四坪）	菅原町 383 番 1	H23.11.21 ～ H23.12.2	157	中島	㈱フォレストホーム	宅地造成	原因者	H23.3192
14	HJ655	平城京跡（右京二条四坊四坪）	三条大路一丁目 645-2 の一部、645-32 の一部	H24.1.11 ～ H24.1.24	40	安井・原田香	大和ハウス工業㈱	宅地造成	原因者	H23.3272
15	HJ656	平城京跡（左京四条大路）	大森西町 173-3、173-4	H24.2.13 ～ H24.3.1	77	原田憲	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理都市再生推進事業	公共	H12.3145
16	DA128	史跡大安寺旧境内	大安寺一丁目 1290 － 1 の一部他	H23.7.11 ～ H23.8.4	34	原田香	奈良市教育委員会教育長	重要遺跡範囲確認調査	緊急	
17	DA129	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1058 － 1 他	H23.8.22 ～ H23.9.16	44	三好	個人	一戸建て住宅の建築	緊急	H23.1026
18	GG68	元興寺旧境内	芝突抜町 1	H23.9.5 ～ H23.9.26	30	原田香	個人	個人住宅新築	緊急	H23.3056
19	GG69	元興寺旧境内	毘沙門町 14 番 3	H24.2.13 ～ H24.2.21	20	中島	個人	個人住宅新築	緊急	H23.3301
20	GG70	元興寺旧境内	毘沙門町 14 番 1 の一部	H24.2.13 ～ H24.2.21	10	中島	個人	個人住宅新築	緊急	H23.3311
21	TD13	史跡東大寺旧境内	雑司町地内	H23.7.21 ～ H23.12.21		宮崎・原田憲・池田富・奥井	奈良市公共下水道管理者奈良市長	公共下水道築造工事	原因者	H21.1176
22	SD29	西大寺旧境内	西大寺小坊町 341 番 2	H24.1.10 ～ H24.1.16	60.5	池田裕	個人	個人住宅新築	緊急	H23.3274
23	AD03	赤田横穴墓群	西大寺赤田町一丁目 556 － 1 の一部他	H23.9.9 ～ H23.9.16	60	池田裕	奈良市教育委員会教育長	重要遺跡範囲確認調査	緊急	H22.3420

第 1 章　　平成 23 年度 奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告

1．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査

この調査は奈良市が進めるＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業 (総面積 14.6 万㎡) に係り、実施したものである。奈良市教育委員会では、平成 13 年度から当事業地内での発掘調査を行っており、平成 22 年度までに 35,999㎡の発掘調査を実施している。

調査位置は、ＪＲ関西本線、桜井線、および主要地方奈良生駒線の南に広がる水田地帯であり、東から西へと緩やかに低くなる沖積地上に位置する。また、事業地の中央には東西方向の用水路があり、南北方向の地形は、この用水路付近に向かい緩やかに下っている。

平成 23 年度は、都市再生推進事業の前年度の繰越分の発掘調査として合計 1,687㎡の調査を行った。

発掘調査位置は、平城京の条坊復原では、左京五条四坊七・十坪、左京五条四坊八坪、四条大路である。

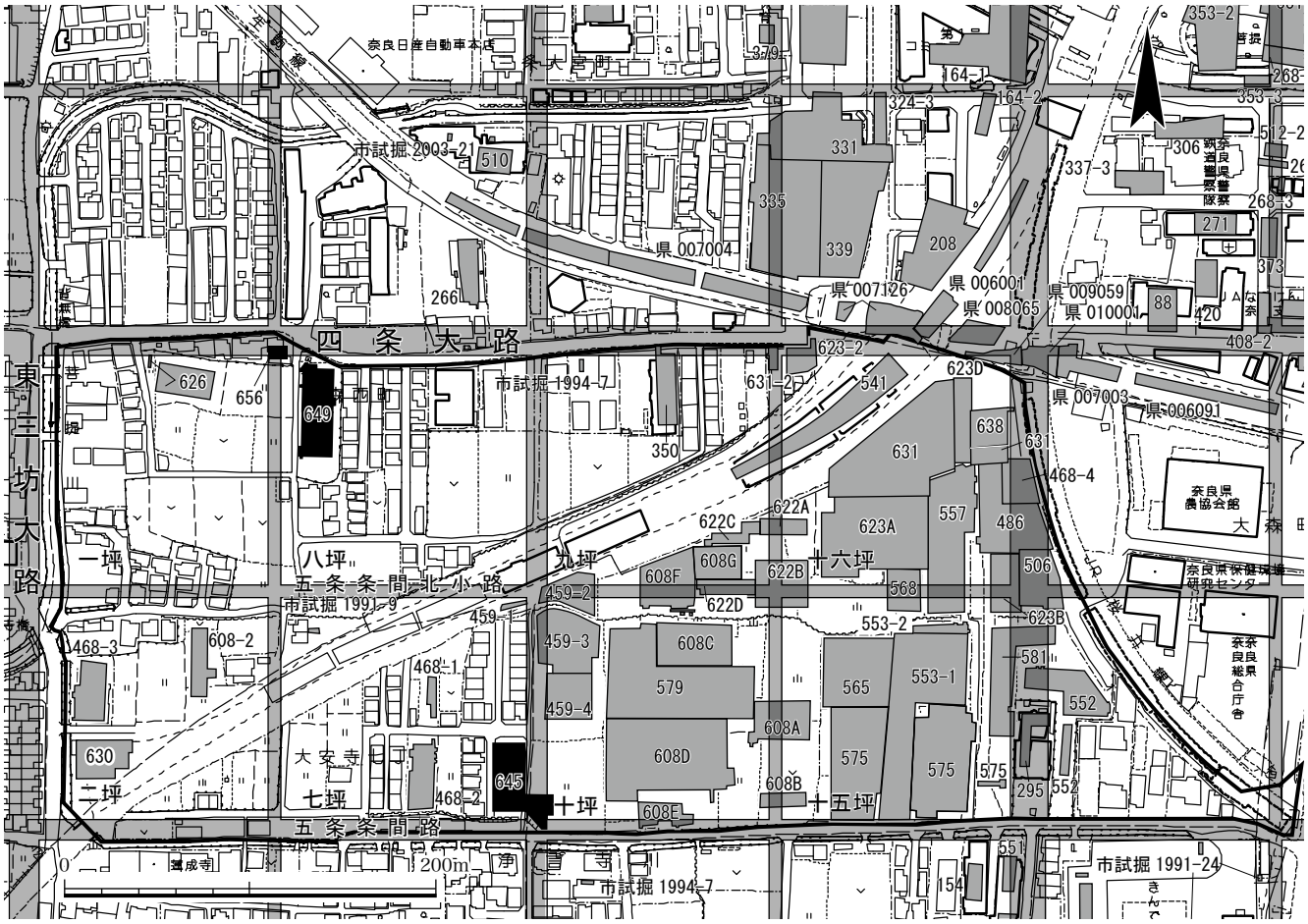
これらの事業と調査の概要は下記のとおりである。

このうち、今回報告する調査は、市ＨＪ第 645 次調査である。市ＨＪ第 649 次・656 次調査については、次年度以降に報告する予定である。

報告に際しては、古墳時代以前の遺構には２桁を、奈良時代以降の遺構には３桁以上の遺構番号を付している。これらは、当事業に係る調査で設定している遺構番号であり、条坊遺構･坪ごとに設定した通し番号である。

平成 23 年度　ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業　発掘調査一覧表

調査次数	事業名	遺跡名	調査面積	調査期間	調査地	調査担当者
ＨＪ第 645 次	都市再生推進事業（平成 22 年度繰越）	平城京跡 (左京五条四坊七・十坪)	806㎡	Ｈ 23. 5.30 ～ Ｈ 23. 8.31	大森町 103- 1、大安寺七丁目 676- 1	池田富
ＨＪ第 649 次		平城京跡 (左京五条四坊八坪)	804㎡	Ｈ 23. 6.29 ～ Ｈ 23.11. 4	大森西町 172- 1	大原
ＨＪ第 656 次		平城京跡 (四条大路)	77㎡	Ｈ 24. 2.13 ～ Ｈ 24. 2.29	大森西町 173- 3・173- 4	原田憲



ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内　発掘区位置図 (1/4,000)

平城京跡（左京五条四坊七・十坪、東四坊坊間路）の調査　第 645 次

Ⅰ　はじめに

市ＨＪ第 645 次調査は、条坊復原によると、左京五条四坊七坪の南東隅と十坪の南西隅、東四坊坊間路と五条条間路の交差点部分に相当する。

調査地周辺での調査成果は、市ＨＪ第 459-2 ～ 4・579・608 Ａ～Ｅの各調査が実施され、大きく５時期の遺構変遷が見られるが、分割されることなく１町利用が継続することがわかっている。また、埋納遺構が 10 基検出されていることも、十坪の特徴である。七坪内では、市ＨＪ第 459- １・468- １・２次の調査が実施され、奈良時代の掘立柱建物・塀、溝、土坑を検出している。東四坊坊間路は、市ＨＪ第 459-2 ～ 4 次調査でその東側溝を検出し、北へ向かって排水していることがわかっている。五条条間路は、市ＨＪ第 608 Ｅ調査区でその北側溝を検出しており、基幹排水路として西側へ排水していると考えられている。

今回の発掘区は、東四坊坊間路西側溝の検出、五条条間路と東四坊坊間路の交差点及び、七坪南東隅の様相の確認を目的として、東四坊坊間路とこれに面する左京五条四坊七・十坪にかけて設定した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、南半では造成土、耕作土、暗橙褐色粘質土と続き、現地表下約 0.5 ｍで礫を含む橙褐色砂質土の地山に、中央付近では、耕作土、灰茶色細粒砂、暗褐灰色砂質土、明灰色砂質土、暗橙褐色粘質土、暗茶灰褐色粘質土と続き、現地表下約 0.6 ｍで黄灰色～橙褐色粘質土の地山に至る。中央付近から北では、幅 20 ｍ以上で縄文～弥生時代の遺物を包含する北西 - 南東方向の河川を確認しており、耕作土以下、暗褐灰色砂質土、茶灰色砂質土、橙茶色粘質土と続き、現地表下約 0.5 ～ 0.9 ｍで、河川の埋土である橙茶灰色細粒砂～明灰色砂礫層となる。

遺構面は、現地表下約 0.5 ～ 0.9 ｍの地山上面と河川堆積土上面、および暗橙褐色粘質土、橙茶色粘質土の整地土上面である。遺構面の標高は、南端から中央付近にかけて 62.7 ～ 62.6 ｍ、北端では 62.3 ｍであり、南から北に向かって緩やかに下がっている。遺構検出作業は地山、河川堆積土、整地土上面で行なった。

Ⅲ　検出遺構

各遺構の概要については一覧表にまとめた通りである。以下、主な遺構について述べる。

奈良～平安時代の遺構

東四坊坊間路および東西両側溝、五条条間路北側溝、七坪の東面築地塀と同雨落溝・築地暗渠、十坪の西面築地塀と同雨落溝、十坪の南面築地雨落溝、七坪内を区画する溝・掘立柱塀、掘立柱建物、井戸を検出した。

条坊関連遺構　東四坊坊間路（ＳＦ 1007）、同西側溝（ＳＤ 1008）、同東側溝（ＳＤ 1009）、五条条間路北側溝（ＳＤ 2008）がある。

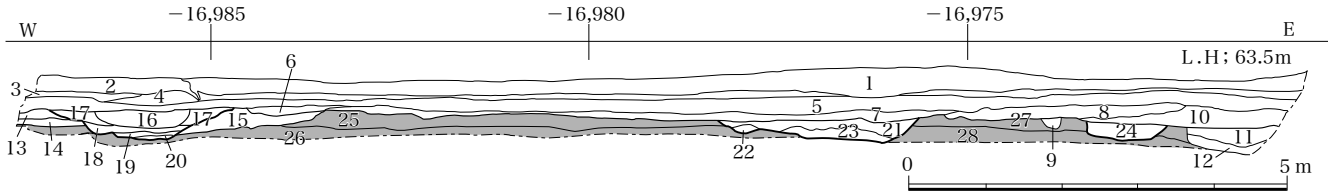
東四坊坊間路ＳＦ 1007 路面心の国土座標値はＸ＝−146,980、Ｙ＝−16,981.25、路面の幅員は、側溝心々間の距離で 9.1 ｍある。

東四坊坊間路西側溝ＳＤ 1008 の溝心と、県 2007 年度調査[1)]で検出した東四坊坊間路西側溝の溝心の国土座標値を結ぶラインの国土座標に対する振れは、Ｓ０°15′12″Ｗとわずかである。その位置関係からＳＤ 1008 を東四坊坊間路西側溝と考える。溝底は南から北へ向かって勾配をつけ下がる。発掘区北壁１のＳＤ 1008 土層断面から、西肩側は部分的に２度整地して補修されていることがわかった。坊間路西側溝ＳＤ 1008 の最上層は、後述する七坪東面築地塀ＳＡ 212 の堰板留めの柱穴よりも新しい。ＳＤ 1009 は、市ＨＪ 459-2 ～ 4 次調査区で検出した東側溝との位置関係から、東四坊坊間路東側溝と考える。溝底は、西側溝ＳＤ 1008 と同様に南から北へ向かって勾配をつけ下がる。

ＳＤ 2008 は、市ＨＪ第 608 Ｅ調査区で検出した五条条間路北側溝との位置関係から、五条条間路北側溝と考える。坊間路東側溝ＳＤ 1009 に合流し、東四坊坊間路ＳＦ 1007 を横断しない。なお、路面上で道路廃絶後の掘立柱建物（ＳＢ 201）を検出した。

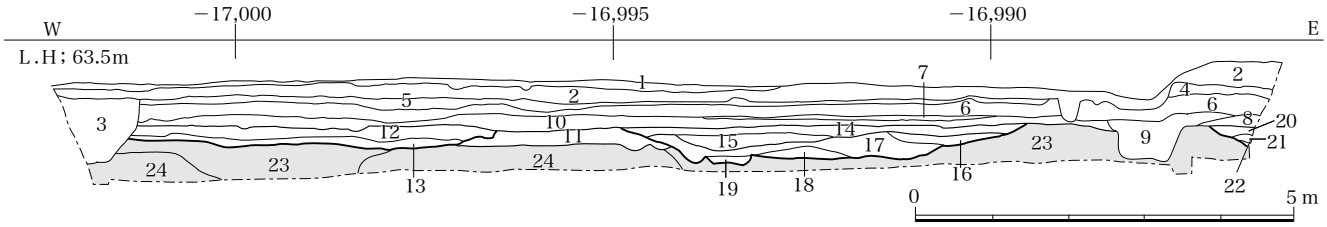
七坪の遺構　七坪東面の築地塀（ＳＡ 212）と同雨落溝（ＳＤ 108）、坪内を区画する東西溝（ＳＤ 109・112）と同掘立柱塀（ＳＡ 213 ～ 216）、築地暗渠（ＳＤ 110・111）、井戸（ＳＥ 501・502）、井戸屋形（ＳＢ 217）、井戸の排水溝（ＳＤ 113 ～ 116）、整地（ＳＸ 801 ～ 803）がある。

ＳＤ 108 はＳＤ 1008 の西に平行する南北溝で、七坪の東辺を限る溝である。当初掘削された幅の広いＳＤ 108 ａと、その埋没後に掘り直されたＳＤ 108 ｂが確認できた。ＳＤ 108 ａは、後述する東西溝ＳＤ 109 と接続する。ＳＤ 108 ｂは国土座標値Ｘ＝−146,970 付近で途切れており、ＳＤ 109 よりも新しい。ＳＤ 108 ａと東四坊坊間路西側溝ＳＤ 1008 との間には約 3.0 ｍの空閑地があり、築地堰板留め痕跡と思われる南北柱列を



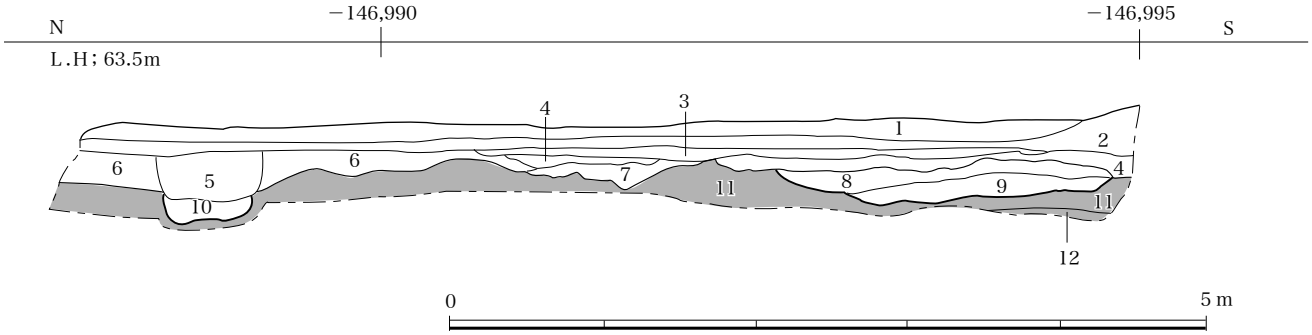
1　橙灰色砂質土（造成土）
2　黒灰色砂質土（耕作土）
3　灰茶色細粒砂
4　茶褐色細粒砂
5　明灰色砂質土
6　灰褐色砂質土
7　茶灰色砂質土含礫
8　暗灰褐色粘質土
9　茶褐色粘質土
10　茶灰色粘質土含橙褐色粘砂ブロック
11　黒灰色粘質土
12　茶褐色粘土
13　暗橙褐色粘質土
14　暗茶灰褐色粘質土（ＳＸ803）
15　橙褐色粘質土
16　暗灰褐色砂質土
17　橙褐色粘質土
18　茶灰色粘質土
19　茶灰色細〜中粒砂含礫
20　橙褐色砂質土（16 〜 20　ＳＤ1008）
21　暗褐色粘質土
22　橙茶褐色砂質土
23　茶灰色砂含礫（21 〜 23　ＳＤ1009）
24　暗黒褐色粘質土〜砂質土（ＳＤ106）
25　橙褐色粘質土含礫
26　橙褐色粘砂
27　橙灰色粘質土
28　暗灰色〜黄褐色粘砂（25 〜 28　地山）

発掘区北壁１　ＳＤ 1008・1009・106 土層図　(1/100)



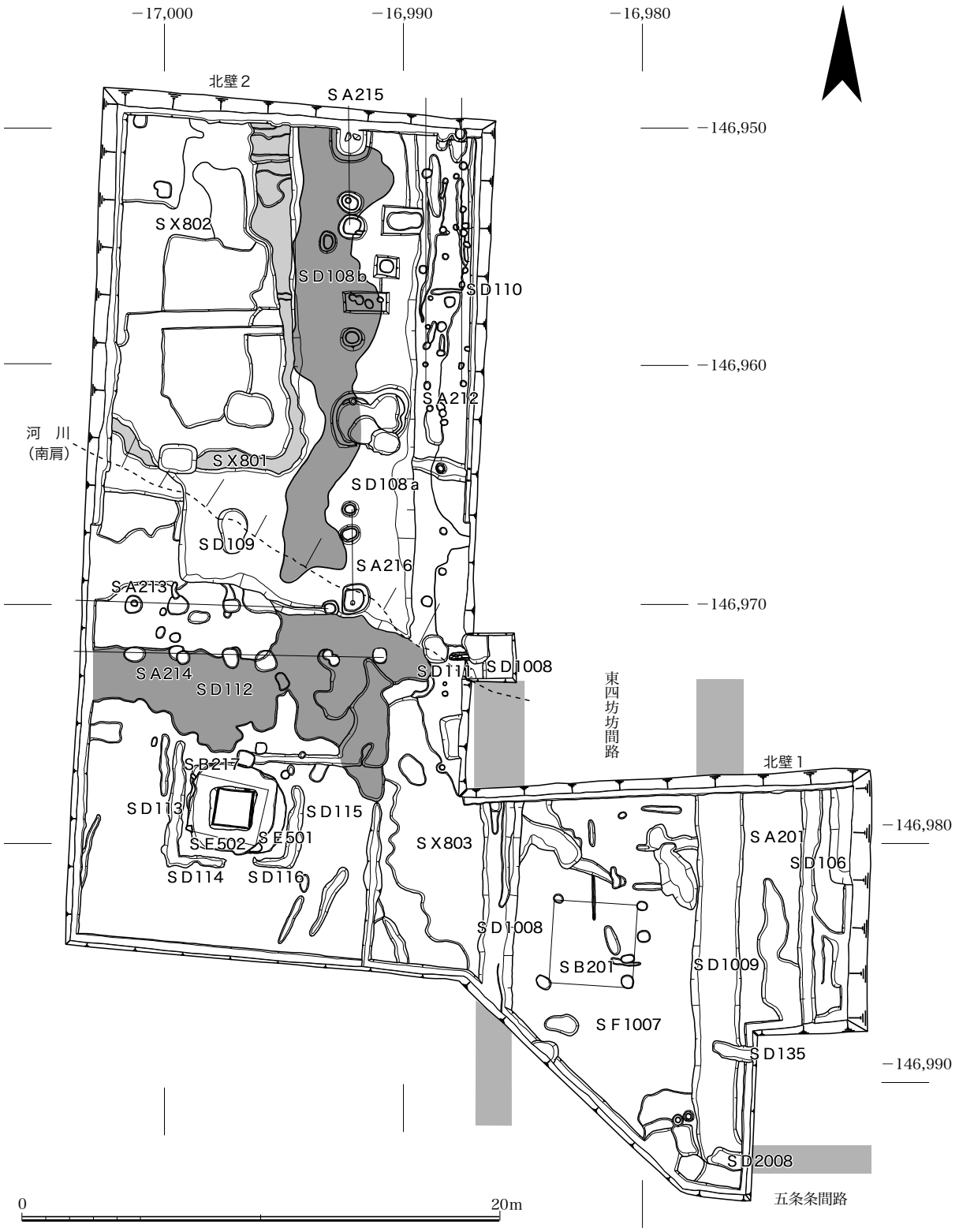
1　橙灰色砂質土（造成土）
2　黒灰色砂質土（耕作土）
3　暗灰色粘質土（撹乱）
4　橙褐色砂質土含灰茶色細粒砂
5　橙茶灰色砂質土
6　暗褐灰色砂質土
7　明灰色〜橙茶色砂質土
8　灰茶色砂質土
9　暗灰色粘質土（撹乱）
10　茶灰色砂質土
11　橙茶色粘質土含礫（ＳＸ801）
12　橙褐色粘質土
13　茶褐色砂質土（12・13　ＳＸ802）
14　明灰色砂質土
15　茶褐色砂質土（ＳＤ108ｂ）
16　暗灰色砂質土
17　茶灰色細粒砂
18　黒灰色砂質土
19　暗褐色粘質土（16 〜 19　ＳＤ108ａ）
20　茶褐色粘質土
21　橙茶褐色粘質土
22　橙茶灰色砂質土（20 〜 22　ＳＤ1008）
23　橙茶灰色細粒砂
24　明灰色砂礫〜細粒砂（23・24　河川埋土）

発掘区北壁２　ＳＤ 108・1008 土層図　(1/100)



1　橙灰色砂質土（造成土）
2　黒灰色砂質土（耕作土）
3　暗灰橙色粘質土
4　暗灰色中粒砂含礫
5　暗褐色砂質土
6　明橙茶色粘質土
7　暗褐色粘質土
8　暗灰褐色粘質土
9　暗褐色砂質土含礫（８・９　ＳＤ2008）
10　暗灰褐色粘砂含暗灰色中粒砂（ＳＤ135）
11　明褐色粘質土含礫
12　橙褐色砂質土含礫　(11・12　地山)

発掘区東壁ＳＤ 2008・135 土層図　(1/50)



発掘区遺構平面図　(1/250)

２条検出した。この空閑地には七坪東面築地塀ＳＡ212があったと考えられ、ＳＤ108ａ・ｂともに、築地の雨落溝も兼ねていたと思われる。

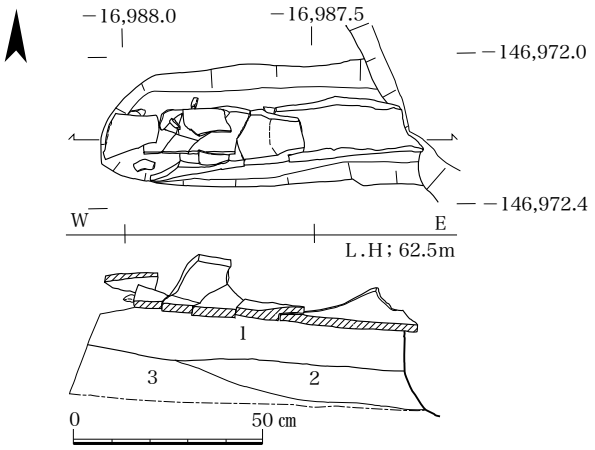
ＳＤ109は、五条条間路と五条条間北小路心々間の南から1/4に位置し、坪内を区画する東西溝である。国土座標値Ｙ＝−17,000付近から東で、検出面からの深さが約0.1ｍから約0.3ｍへと急に深くなる。西へは徐々に浅くなり、発掘区外西へは続かないようである。ＳＤ108ａとほぼ同時期に埋没しており、ＳＤ108ｂ、後述するＳＤ112よりも古い。ＳＤ110は、五条条間路と五条条間北小路心々間の南から1/3に位置する東西溝で、七坪から東四坊坊間路西側溝ＳＤ1008へ排水する築地暗渠である。築地の雨落溝ＳＤ108ａとそれに接続する東西溝ＳＤ109は、溝底の標高が約62.0ｍで、水が流れるような明確な勾配がついていない。宅地内の水は、ＳＤ108ａとＳＤ109に集められ、築地暗渠ＳＤ110・後述するＳＤ111を通じ東四坊坊間路西側溝ＳＤ1008へ排水していたと考える。

ＳＤ111はＳＤ110から15ｍ南に位置する東西方向の築地暗渠で、２本の瓦製土管を接続している。土管を設置する前に、暗茶褐色粘質土の掘形埋土で七坪から東四坊坊間路西側溝ＳＤ1008へ排水するように勾配を調節している。ＳＤ111と東四坊坊間路西側溝ＳＤ1008はその土層断面から、３時期の変遷が考えられる。ＳＤ111からＳＤ1008へ第６層が流れ込み（1期）、ＳＤ1008を掘り直した後に第３～５層が堆積（2期）、ＳＤ1008を再度掘削後、最終的に第１層で覆われる（3期）。ＳＤ111は、３期では廃絶していると考える。

ＳＤ112は、五条条間路北側溝と五条条間北小路南側溝心々間の南から1/6付近に位置する溝である。溝底は西から東に向かって勾配をつけ下がり、七坪内の水を築地暗渠ＳＤ111を通して東四坊坊間路西側溝ＳＤ1008へ排水したものと考える。ＳＤ108ａ、ＳＤ109、後述するＳＡ214より新しい。

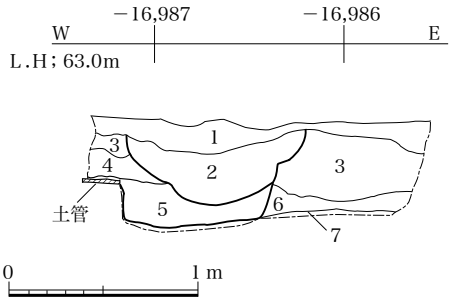
ＳＡ213はＳＤ109のすぐ南に平行する東西方向の掘立柱塀である。東から２つめの柱穴のみＳＤ109のあふれにより失われていると思われるが、ＳＤ109とともに坪内を区画する塀になると考える。ＳＡ214は、ＳＡ213から2.1ｍ南に平行する掘立柱塀で、ＳＡ213と柱筋がほぼ揃う。ＳＤ112より古い。ＳＡ214とＳＡ213には重複がなく新旧関係は不明である。

ＳＤ111(北から)



1　暗茶褐色粘質土（ＳＤ111掘形埋土）
2　暗灰色粘砂（河川埋土）
3　黄灰色砂礫（河川埋土）

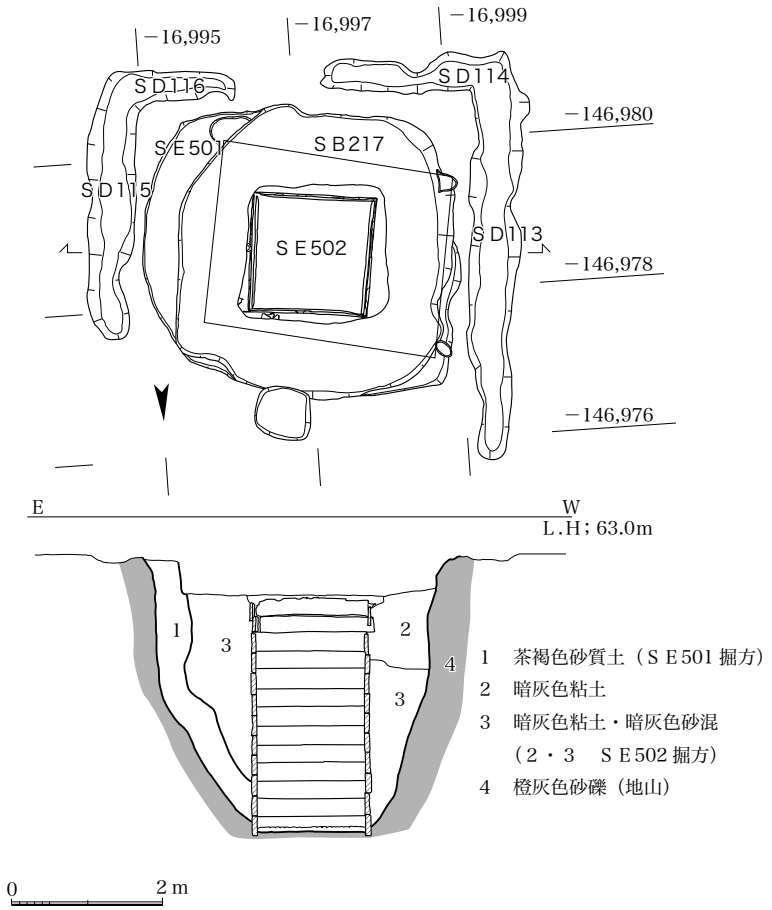
ＳＤ111平面図・断面図（1/20）



1　明灰色砂質土（３期：ＳＤ1008）
2　暗茶灰色粘砂（３期：ＳＤ1008）
3　茶褐色粘質土（２期：ＳＤ1008）
4　橙茶灰色粘質土（２期：ＳＤ111）
5　暗灰色粘砂（２期：ＳＤ1008）
6　明茶灰色砂質土（１期：ＳＤ1008）
7　明灰色砂礫（河川埋土）

ＳＤ111・1008断面図（1/40）

井戸ＳＥ 501・502　（北から）



井戸ＳＥ 501・502 平面・断面図　(1/100)

井戸ＳＥ 502 北西隅細部

井戸ＳＥ 502 最下段北東隅

ＳＡ215・216はＳＤ108ｂ上面で検出した掘立柱列である。柱間寸法と柱穴の平面規模が類似しており、柱筋もほぼ揃うので、ＳＤ108ｂ埋没後の同時期に作られた掘立柱塀と考える。

ＳＥ501・502は発掘区の南西部で重複して検出した井戸で、七坪の南東隅に位置する。ＳＥ501はＳＥ502の構築時に井戸枠を抜き取られ、掘方のみを検出した。

ＳＥ502の掘方は東西3.6ｍ、南北3.7ｍの隅丸方形で、深さは3.6ｍである。井戸枠は方形横板組で東・西側が12段、南側が13段、北側が11段分残存していた。方形横板組の井戸枠には、横板組相欠き仕口型と横板組井籠型があるが、ＳＥ502はどちらとも異なる組み方をしている。横板の両端に相欠きを入れて組むという点では相欠き仕口型と同じだが、相欠きを板材の両端に上下から入れるのではなく、厚さ６～７cmの木口の内面側にＬ形の相欠きを入れて、四隅で組み合わせて積み上げている。各段の高さを井籠組のように揃えずに、目地の食い違う互組にしており、その段差で四隅を固定している。各段は太枘で固定をしていない。横板の高さは25～30㎝と様々だが、木口の相欠きの規格はほとんど同じで、高さ、幅ともに２～３㎝である。各段の高さを揃えたり、相欠きの深さを調節したりする必要がないので、板材の加工は簡単だったと思われる。しかし構造的には弱いため、その構築は掘方内で四隅を組合せながら横板を積み上げていき、裏込めの土で固定して組み立てたと考える。残存する最上段の井戸枠には、上下に太枘の痕跡が残るが、組み立てには使用していない。また、２段目以下より少し外側に設置されているので、補修されている可能性がある。

井戸に伴う付帯施設には、ＳＢ217、ＳＤ113～116がある。ＳＢ217は東西１間、南北１間の東西方向の掘立柱建物である。方位が東で北に振れており、ＳＥ502の井戸枠と方位が合わないので、井戸枠が抜き取られたＳＥ501に伴う井戸屋形と考える。

ＳＤ113～116は、井戸の掘方の東西（ＳＤ113・115）と南側（ＳＤ114・116）をめぐる素掘溝である。北側には溝をめぐらさない。主に、南から北へ水を排水していた溝と考える。溝の方位は、ＳＥ502の井戸枠と合っているので、ＳＥ502に伴う排水溝と考える。

ＳＸ801～803は整地である。ＳＸ801はＳＤ108ａの西側とＳＤ109の北側に0.3～1.6ｍの幅で広がる、厚さ約0.2ｍの整地土である。ＳＤ108ａ・109より古い。ＳＤ108ａ・109の下層は河川の砂礫層が堆積して地盤が弱いため、整地されたものと考える。ＳＸ802は発掘区北西部に広がる落込みで、発掘区内では不整方形を呈するが発掘区外に続くため全形は不明である。ＳＸ801より新しい。ＳＸ802は、下層に堆積する河川の砂礫層の湧水などが原因でくぼんだために、その部分を再度整地したものと思われる。ＳＸ803は東四坊坊間路西側溝ＳＤ1008の西側に広がる整地である。

十坪の遺構　十坪西面の築地塀（ＳＡ201）と同雨落溝（ＳＤ106）、十坪南辺の東西溝（ＳＤ135）がある。

ＳＤ106は東四坊坊間路西側溝ＳＤ1009の東に平行する南北溝である。市ＨＪ第459-3・４次調査でも検出している十坪西辺を限る溝と考える。溝底は、南から北に向かって勾配をつけ下がる。西側に後述する西面築地塀ＳＡ201が想定されるので、ＳＤ106は築地の雨落溝もかねていたと考える。ＳＡ201は十坪西面の築地塀である。北へ約50ｍ離れている市ＨＪ第459-4次調査で、十坪西辺を限る溝ＳＤ106と東四坊坊間路西側溝ＳＤ1009との間の空閑地で築地堰板止め痕跡と思われる柱穴を検出し、この空閑地に十坪西面築地塀ＳＡ201を想定している。今回の発掘区内では、西面築地塀ＳＡ201の痕跡を確認できなかったが、市ＨＪ第459-4次調査地から築地塀は続いていたものと考える。ＳＤ135は、五条条間路北側溝ＳＤ2008の北に平行する東西溝である。位置関係から、市ＨＪ第608Ｅ調査で検出した十坪南辺を限る溝で、築地の雨落溝であるＳＤ135と同じ溝と考える。東四坊坊間路東側溝ＳＤ1009に合流する。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱で17箱、瓦類が46箱、木・金属・石製品などが３箱、合計66箱分の遺物が出土した。その内訳は、縄文土器、弥生土器、奈良三彩、８～９世紀の土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、９世紀末～10世紀前半の土師器、製塩土器、ふいご羽口、墨書土器、線刻土器、刻印土器、土馬、ミニチュア土器、平安時代末～鎌倉時代の輸入白磁、奈良時代の軒丸瓦、丸瓦、平瓦、塼、石器（サヌカイト製石鏃・剥片）、木製品（井戸枠材、曲物底板、斎串、横櫛）、金属製品（鉄釘）、銭貨（神功開寶）、ガラス玉、自然遺物（獣骨、種子類）がある。そのうち、ＳＥ502枠内出土土器について述べる。

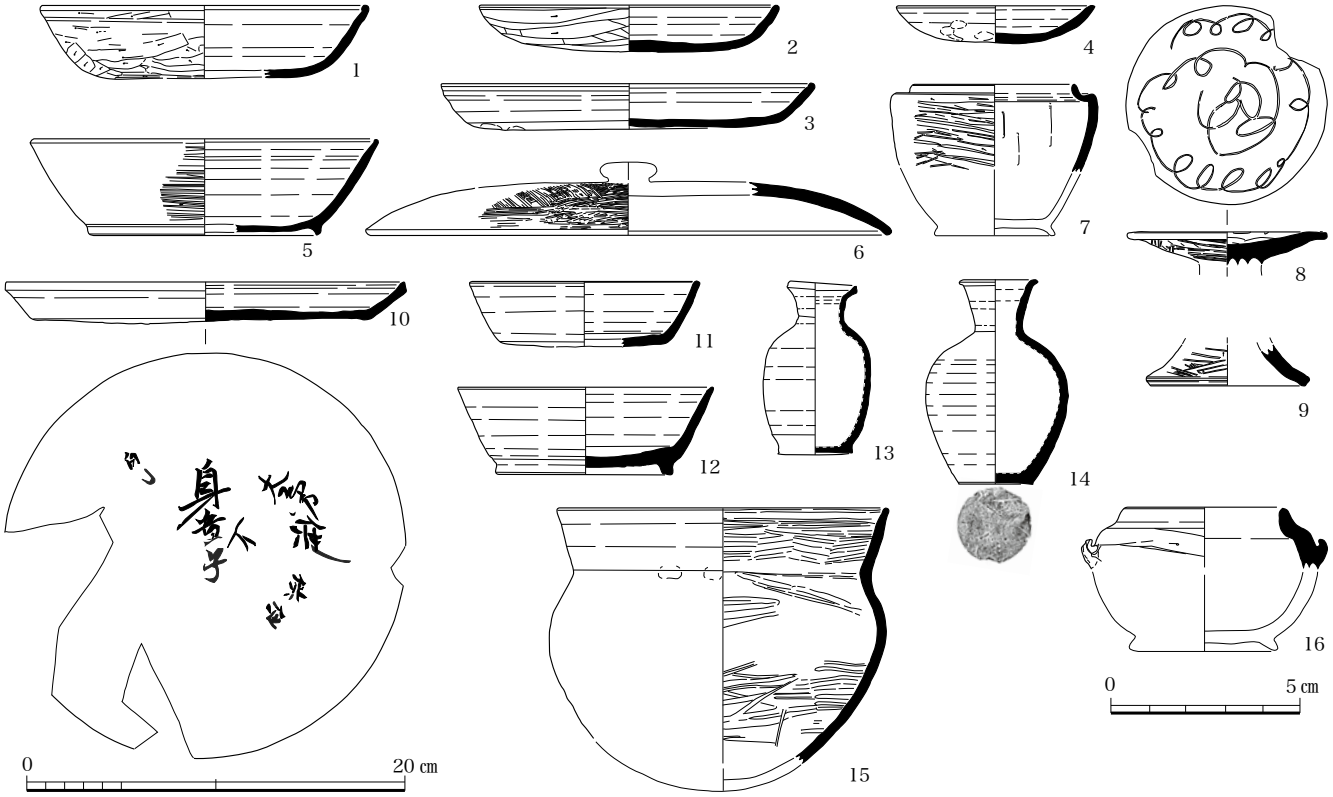
１～９は土師器である。１は杯Ａで、外面全体をヘラケズリ、内面から口縁部外面上半までヨコナデで調整する。口縁部外面上半のヨコナデで窪んだ部分には、ヘラケズリ調整が及ばない。２・３は皿Ａである。２は口径15.8㎝の小型の皿で、底部と口縁部の境はあまり明瞭ではない。口縁部はやや外へ開き気味で、端部は丸く収める。外面全体をヘラケズリで調整する。３の口縁部の

立ち上がりはやや外へ開き、口縁端部は小さく内側へ巻き込む。口縁部内外面と底部内面はヨコナデ、底部外面は指押さえで調整している。底部内面には、底部外面の指押さえの影響を受けて凹凸がみられる。４の皿Ｃは、口縁端部内面が内傾し、底部外面に指押さえの痕跡が残る。５の杯Ｂの高台は低めで、内面はヨコナデ、外面全体はヘラケズリで調整する。口縁部外面にはヘラケズリ後、ヘラミガキを施す。６は口径が 27.8㎝に復原できるので、おそらく皿Ｂの蓋になると思われる。内面はヨコナデ、外面はヘラケズリの後、細かいヘラミガキを施す。７は壷Ｅである。胴部外面はヘラケズリの後にやや粗いヘラミガキを施す。内面にはヘラ状の工具でなでた痕跡が残る。８は小型の高杯の杯部で、口径は 10.6㎝である。外面はヘラケズリ後粗いヘラミガキ、内面はヨコナデ後に口縁部から中心に向かって、らせん状暗文を施している。９は脚裾部である。裾部径は 8.6㎝に復原できる。残存部の上半外面はヘラケズリ、裾部外面から内面にかけてはヨコナデで調整する。外面にはその後、ヘラミガキを施す。８と９は、胎土・焼成・色調などが類似しているので、同一個体になる可能性がある。

10 ～ 14 は須恵器である。10 の皿Ｃは短い口縁部が、やや開き気味に立ち上がる。口縁部内外面と底部内面はロクロナデ、底部外面はヘラキリ後ロクロナデで調整する。底部外面に「身 / 身童子 / 万 / 大勇 / 供 / 供 / 供」の墨書がある。11 は杯Ａである。底部内面から口縁部内外面はロクロナデ、底部外面はヘラキリ後ナデで調整する。12 の杯Ｂは、高台が底部の外側寄りに貼り付く。高台貼り付け後のロクロナデがあまり丁寧ではなく、接合痕が残る。13・14 は壷Ｍである。両者とも内外面をロクロナデで調整し、底部外面は糸切り未調整である。14 の底部外面にはひらがなの「く」のような線刻がある。15 は黒色土器Ａ類の甕である。広口・短胴で、口縁部は垂直気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。胴部外面は煤が付着して調整が分かりにくいが、所々に指押さえとナデの痕跡がある。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面はナデで調整する。内面には主に横方向のヘラミガキを施す。16 は土師器壷Ａのミニチュア土器である。胴部外面はヘラケズリで調整する。これらの土器類は、８世紀末～９世紀前半のものである。

Ⅴ　調査所見

縄文～弥生時代　発掘区の北半で、縄文～弥生時代の遺物を包含する、北西 - 南東方向の河川の南肩を確認した。大森町内では今までに市ＨＪ第 557・579・568・608 Ｃ・608 Ｇ・622 次調査で縄文時代の河川を確認している。今回の河川が、それらと関連するものかどうかは不明だが、縄文～弥生時代の調査地周辺は、大小の河



ＳＥ 502 枠内出土土器 (1/4・16 は 1/2)

川が流れる低地であった様相の一端がうかがえる。

奈良時代

条坊遺構　①東四坊坊間路東西両側溝を検出し、その心々間距離を確認した。今回検出した東四坊坊間路の幅員が、県 2007 年度調査の左京四条四坊五・十二坪間で検出した幅員とほぼ同じであることが確認できた。

②東四坊坊間路東西両側溝ＳＤ 1008・1009 は、ともに南から北へ向かって勾配がついている。坊間路東側溝ＳＤ 1009 は、市ＨＪ第 459-2 ～４次調査で、北流して五条条間北小路を横断し、五条条間北小路北側溝に合流することを確認している[2)]。五条条間路北側溝ＳＤ 2008 は、東四坊坊間路ＳＦ 1007 を横断せず、坊間路東側溝ＳＤ 1009 に合流しており、基幹排水路ではないことがわかった。

七坪内について　①ＳＸ 802 からは８世紀中頃～後半を中心に、８世紀末頃までの遺物が出土しているので、湧水で窪んだ部分に整地が行われ続けたとみられる。東西溝ＳＤ 109・築地暗渠ＳＤ 110 は五条条間路と五条条間北小路心々間を基準に、東西溝ＳＤ 112 は五条条間路北側溝と五条条間北小路南側溝心々間を基準に設定されていると考えられ、ＳＤ 112 は、重複関係からＳＤ 109 より新しい。ＳＥ 501・502 は掘形の出土遺物から、奈良時代後半以降に構築されたことがわかる。以上のことから、整地（ＳＸ 801・802）→暗渠ＳＤ 110・111 と築地塀を設置し、ＳＤ 108 ａ・ＳＤ 109 から暗渠へ排水する時期（ＳＡ 212・ＳＡ 213・ＳＡ 214・ＳＤ 108 ａ・ＳＤ 109・ＳＤ 110・ＳＤ 111）→ＳＤ 108 ａが８世紀後半に埋没後、ＳＤ 108 ｂ・ＳＤ 112 から暗渠へ排水する時期 (ＳＤ 108 ｂ・ＳＤ 110・ＳＤ 111・ＳＤ 112・ＳＥ 501・502) →８世紀末にＳＤ 108 ｂが埋没後、掘立柱塀ＳＡ 215・216 がつくられる時期という大きく４時期の変遷が考えられる。

②井戸ＳＥ 502 の井戸枠は、今までに類例のない構造である。互いの木口をＬ形に削り欠いて厚みを減じ、各段の高さが揃わないように互組みしている。枠板材の高さが不揃いであるのは、構造上意図していると思われる。幅は 152㎝前後、厚さは６～７㎝とほぼ同じような規格である。枠板材の内側は平滑に加工しているが、裏側の処理は粗く、皮を剥ぎ取っただけのようなものもある。ほとんどの板材に、井戸枠に必要な加工以外見られないので、転用材の可能性は低い。

井戸の付帯施設として井戸屋形ＳＢ 217 と排水溝ＳＤ 113 ～ 116 を検出した。平城京内での井戸屋形の検出は、今回で９例目となる[3)]。排水溝は、井戸の周囲をめぐるものが多いようだが、今回、井戸の北側に溝は確認できなかった。周辺の地形が南から北へ低くなっており、すぐ北のＳＤ 112 に排水するなら、北側に溝は必要なかったと考えられる。排水溝は今回確認したものが平城京では８例目となる[3)]。

③坪内を区画する東西溝ＳＤ 109 と東西方向の掘立柱塀ＳＡ 213・214 を検出した。ＳＡ 213・214 の新旧関係は不明だが、ＳＡ 214 の廃絶後は、ＳＤ 112 で坪内を区画していると考える。一方で、 調査区の西で実施した市ＨＪ第 468-1・２次調査で検出した柱間寸法南北 11 尺・東西１間以上・南北２間以上の総柱建物ＳＢ 201 と柱間寸法 10 尺・桁行３間以上の東西棟ＳＢ 205 は、七坪の東西約 1/2 付近に南北 1/2 ラインをはさんで位置し、同時並存していたと考えられている[4)]。２棟を坪の中心建物とすると、方形横板組の大型井戸が主殿を備えた大規模宅地内で使用された時期があった可能性がある。現状では、ＳＢ 201・205 のほかに、ＳＥ 501・502 を伴うと思われる建物が七坪内で検出されていないので、ＳＤ 109・ＳＡ 213・214、ＳＤ 112 は、宅地を分割するための施設ではないと考える。　（池田富貴子）

1）「平城京左京四条四坊五・十二・十三坪、左京五条五坊一坪（ＪＲ奈良駅連続立体交差事業に伴う発掘調査）」『奈良県遺跡調査概報第一分冊　2007』奈良県立橿原考古学研究所 2008

2）「平城京跡（左京五条四坊七・九・十坪）の調査　第 459- １・- ２・- ３・- ４次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 13 年度』奈良市教育委員会 2004

3）篠原豊一「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1990』奈良市教育委員会 1990 で、平城京内の井戸屋形は２例、排水溝は３例報告されている。これ以後平城京内で井戸屋形は６例、排水溝は４例の検出例が見られる。

井戸屋形

①『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 - 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査 -』奈良国立文化財研究所 1995

②「柏木遺跡・平城京左京五条一坊十六坪の調査　第 338・370 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書（第２分冊）平成９年度』奈良市教育委員会 1998

③「西大寺旧境内（弥勒金堂推定地）の調査第 17 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 16 年度』奈良市教育委員会 2007

④「平城京跡（左京五条四坊十坪・坊間東小路）の調査　第 579・608 次Ａ～Ｅ」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 20（2008）年度』奈良市教育委員会 2011

⑤「西大寺食堂院・右京北辺の調査　第 404・410・415 次」『奈良文化財研究所紀要　2007』独立行政法人奈良文化財研究所 2007

⑥「左京三条一坊一・二坪の調査 - 第 478・486・488 次」『奈良文化財研究所紀要　2012』独立行政法人奈良文化財研究所 2012

排水溝

①②「平城京左京四条四坊十二・十三坪の調査　第 164・208・324・331・335・339 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成８年度』奈良市教育委員会 1997

③「左京二条二坊十一坪の調査　第 279 次」『奈良国立文化財研究所年報 1997- Ⅲ』奈良国立文化財研究所 1997

④『平城京右京二条二坊七・八・九・十坪調査報告』奈良県文化財調査報告書第 79 集　奈良県立橿原考古学研究所 1998

4）「平城京跡（左京五条四坊七坪）の調査　第 468- １、- ２次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 13 年度』奈良市教育委員会 2004

条坊関連遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な遺物	備考
ＳＦ 1007	南北道路	長さ 1.6 以上 × 幅 7.1 ～ 7.5				東四坊坊間路。路面心の国土座標値はＸ＝−146,980、Ｙ＝−16,981.250。東西側溝心々間の距離は 9.1 m。
ＳＤ 1008	南北溝	長さ 36.3 以上 × 幅 1.5 ～ 1.9	0.3	８世紀末	土師器杯Ａ・Ｃ、皿Ａ、椀Ａ、高杯、甕、壷、須恵器杯Ｂ、杯ヵ皿蓋、水瓶ヵ浄瓶、平瓶、甕、壷、輸入磁器、土馬、製塩土器、丸瓦、平瓦、炉壁ヵ	東四坊坊間路西側溝。溝底の標高は発掘区南端で 62.3 m、北端で 62.2 m。溝心の国土座標値は、Ｘ＝−146,980、Ｙ＝−16,985.800。
ＳＤ 1009	南北溝	長さ 15 以上 × 幅 1.6 ～ 2.1	0.2 ～ 0.25	８世紀末～９世紀初	土師器杯Ａ、皿Ａ・Ｂ・Ｃ、椀Ａ、高杯、盤Ｂ、壷Ｂ、鉢、甕、須恵器杯Ａ・Ｂ、皿Ａ・Ｃ、杯ヵ皿蓋、壷Ｇ、鉢、壷類、甕、黒色土器Ａ類杯・甕、墨書土器、製塩土器、ミニチュアかまど、丸瓦、平瓦	東四坊坊間路東側溝。溝底の標高は発掘区南端で 62.3 m、北端で 62.2 m。溝心の国土座標値はＸ＝−146,980、Ｙ＝−16,976.700。
ＳＤ 2008	東西溝	長さ 1.5 以上 × 幅 1.2	0.14	８世紀後半以降	土師器杯Ａヵ皿Ａ、椀Ａ、皿Ａヵ Ｂ、杯ヵ皿蓋、高杯、甕、須恵器杯Ａ・Ｂ、杯ヵ皿蓋、壷、甕、鉢	五条条間路北側溝。溝底の標高は 62.4 m。東四坊坊間路東側溝ＳＤ 1009 に合流し、東四坊坊間路ＳＦ 1007 を横断しない。

七坪内検出遺構（溝・整地）一覧表

遺構番号	掘形等			時期	主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）			
ＳＤ 108 a	南北溝	長さ 20 以上 × 幅 4.5 ～ 6	0.4 ～ 0.6	８世紀中頃～後半	土師器杯Ａ・Ｃ、皿Ａ、杯ヵ皿Ｂ、椀Ｃ、杯ヵ皿蓋、盤、高杯、壷Ｂ、甕Ｃ、甕、須恵器杯Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ、皿Ｃ、杯Ａヵ Ｂ、杯ヵ皿蓋、鉢Ａ、壷、甕、丸瓦、平瓦、円盤型土製品	七坪の東辺を限る溝（古）。七坪東面の築地雨落ち溝も兼ねる。溝心の国土座標値は、Ｘ＝−146,960、Ｙ＝−16,992。座標値Ｘ＝−146.970 付近で東西溝ＳＤ 109 と接続。東四坊坊間路西側溝ＳＤ 1008 との心々間の距離は 6.2 m。重複関係から、ＳＤ 112 より古い。
ＳＤ 108 b	南北溝	長さ 18 以上 × 幅 1.5 ～ 4	0.2	８世紀末	土師器杯Ｂ・Ｃ、杯Ａヵ Ｂ、皿Ａ・Ｂ・Ｃ、高杯、カマドヵ甑、甕、須恵器杯Ｂ・Ｃ、杯Ａヵ Ｂ、杯ヵ皿蓋、壷、甕、線刻土器、刻印土器、丸瓦、平瓦、製塩土器	七坪の東辺を限る溝（新）。溝心の国土座標値は、Ｘ＝−146,960、Ｙ＝−16,993.300。
ＳＤ 109	東西溝	長さ 8 × 幅 1.2 ～ 5.5	0.1 ～ 0.3	８世紀後半	土師器杯Ｃ、皿Ａ・Ｂ、杯Ａヵ皿Ａ、杯Ｂヵ皿Ｂ、杯Ａヵ Ｂ、杯ヵ皿蓋、高杯、鉢、甕、須恵器杯Ａ、皿Ｃ、杯Ａヵ Ｂ、杯ヵ皿蓋、鉢Ａ、平瓶、鉢、壷、甕、丸瓦、平瓦、製塩土器	五条条間路と五条条間北小路心々間の南から 1/4 に位置する坪内を区画する東西溝。南北溝ＳＤ 108 a と接続する。Ｙ＝−17,000 付近から西側と東側では約 0.2 mの段差がある。ＳＤ 108 b より古い。
ＳＤ 110	東西溝	長さ 1.4× 幅 0.3	0.05	不明	出土遺物なし	ＳＤ 108 a と東四坊坊間路西側溝をつなぐ築地暗渠。五条条間路と五条条間北小路心々間の南から 1/3 に位置する。
ＳＤ 111	東西溝	長さ 0.9× 幅 0.4	0.1	８世紀	瓦製土管、須恵器甕	ＳＤ 110 から 15 m南に位置する。瓦製土管を使用した、七坪から東四坊坊間路西側溝へ排水する築地暗渠。溝底の標高は西端で 62.3m、東端で 62.2m。ＳＤ 112 からの排水を流したと思われる。
ＳＤ 112	東西溝	長さ 14× 幅２～４	0.05 ～ 0.2	８世紀末	土師器杯ヵ皿、竈、甕、須恵器杯Ａヵ Ｅ、杯ヵ皿蓋、壷、甕、丸瓦、平瓦	七坪内を区画し、坪内の排水を兼ねている東西溝。五条条間路北側溝と五条条間北小路南側溝心々間の南から 1/6 付近に位置する。ＳＤ 108 a、ＳＤ 109、ＳＡ 214 より新しい。
ＳＤ 113・114	南北溝・東西溝	南北５・東西２× 0.5	0.1	８世紀	須恵器甕	井戸ＳＥ 501・502 の南西部をＬ字形に囲む溝。
ＳＤ 115・116	南北溝・東西溝	南北 3.5・東西 1.7 × 幅 0.4 ～ 0.6	0.1	不明	出土遺物なし	井戸ＳＥ 501・502 の南東部を逆Ｌ字形に囲む溝。
ＳＸ 801	不整形	東西８・南北 14× 幅 0.3 ～ 1.6		８世紀	土師器杯ヵ皿蓋、杯ヵ皿、甕、須恵器杯Ｂ、鉢Ｄヵ甕Ｃ、炉壁	ＳＤ 108 a の西側とＳＤ 109 の北側に広がる厚さ約 0.2 mの整地。ＳＤ 108・ＳＤ 109 の下層は、河川の砂礫層が堆積し、地盤が弱いため盛土されたものと考える。
ＳＸ 802	不整方形	東西５～ 7.5、南北 14	0.2 ～ 0.3	８世紀中頃～末	土師器杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂ・Ｃ、椀Ａ、杯ヵ皿蓋、高杯、鉢、壷Ａ、甕、須恵器杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ｂ・Ｃ、杯ヵ皿蓋、鉢Ａ・Ｄ、鉢、壷Ｅ、壷、甕、丸瓦、平瓦、製塩土器、羽口、縄文土器、サヌカイト石核・剥片、桃核	ＳＤ 108 の西に位置する不整方形の落込みで、発掘区外へ続く。ＳＸ 801 より新しい。河川の砂礫層からの湧水のためにくぼんでしまった部分に奈良時代の遺物を含む土で再度整地したものと考える。
ＳＸ 803	不整形	東西４× 南北 11	0.1	不明	出土遺物なし	ＳＤ 1008 の西側に広がる整地。ＳＤ 112 より古い。

七坪内検出遺構（築地塀・掘立柱建物・塀）一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		廂の出	柱穴の深さ	備考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	(m)	
ＳＡ 212	南北	基底幅 1.5						0.1 ～ 0.3	七坪東面の築地塀。基底幅は築地堰板止めの痕跡から判断。
ＳＡ 213	東西	4 以上	8.1 以上		西から 1.8-2.1-(2.1)-2.1			0.1 ～ 0.2	ＳＤ 109 のすぐ南に位置する。ＳＤ 109 とともに坪内を区画する塀。東から 2 つ目の柱穴はＳＤ 109 のあふれで失われていると思われる。礎盤の残る柱穴がある。
ＳＡ 214	東西	5 以上	10.5 以上		西から 2.1-2.1-1.5-2.7-2.1			0.2 ～ 0.8	ＳＡ 213 から 2.1 m南に位置する坪内を区画する塀。ＳＡ 213 と柱筋がほぼそろう。礎盤の残る柱穴がある。重複関係からＳＤ 112 より古い。
ＳＡ 215	南北	2 以上	4.2 以上		北から 3 -1.2			0.3 ～ 0.5	ＳＤ 108 b より新しい
ＳＡ 216	南北	2	3.9		北から 1.2-2.7			0.2	
ＳＢ 217	東西	1 × 1	3	2.4				0.3	井戸ＳＥ 502 の井戸枠と方位が合わないので、ＳＥ 501 の井戸屋形と考える。

七坪内検出遺構（井戸）一覧表

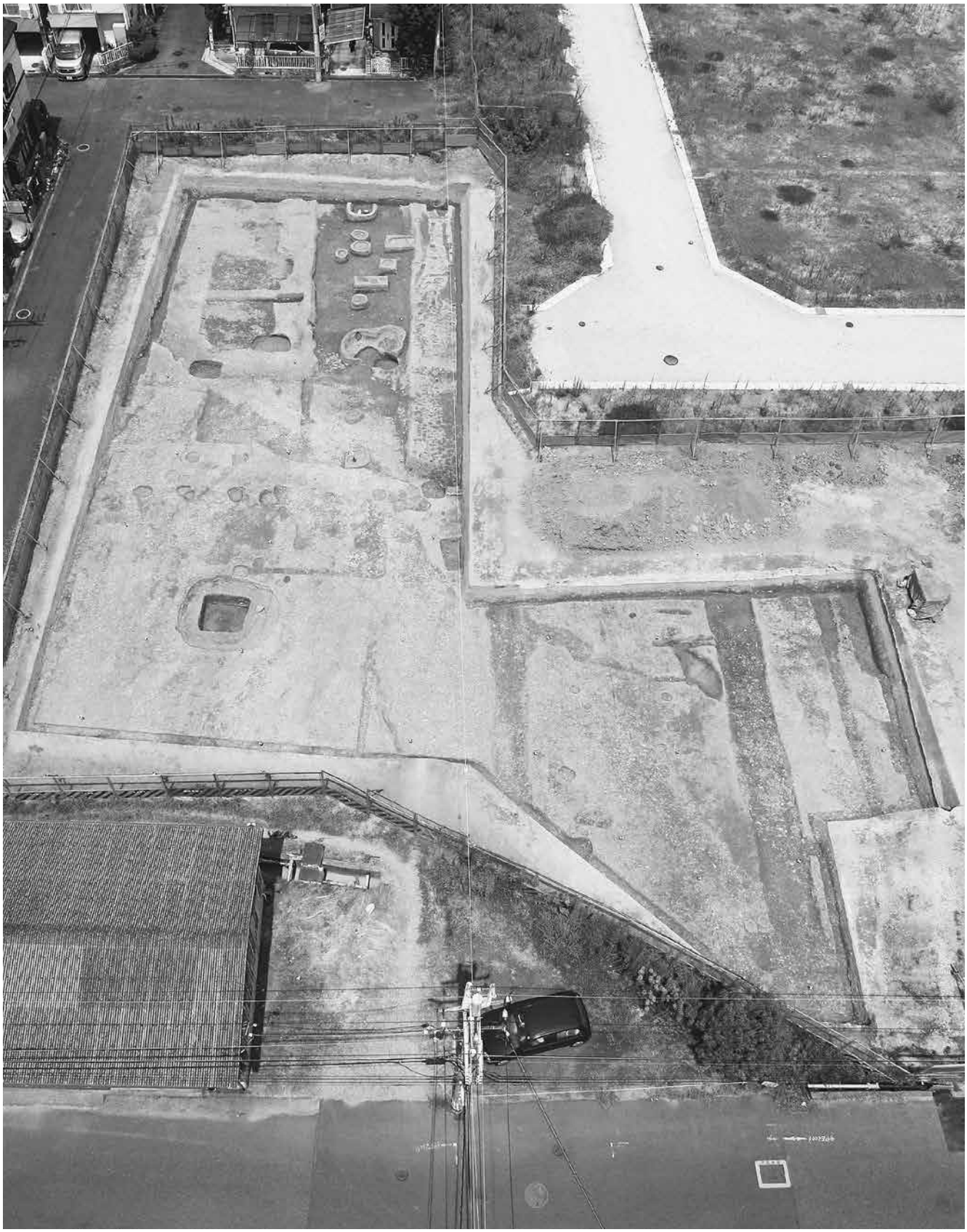
遺構番号	掘方等			井戸枠		水溜・濾過施設等	時期	主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法 (m)				
ＳＥ 501	隅丸方形	東西 4.3× 南北 3.5	3.5	抜き取られている			8 世紀後半以降	土師器杯ヵ皿、甕、須恵器壷、甕、黒色土器Ａ類杯ヵ皿	掘方のみ残存。
ＳＥ 502	隅丸方形	東西 3.6× 南北 3.7	3.6	方形横板組	東西 1.5、南北 1.5	礫敷き	8 世紀後半以降	（掘形）；土師器杯ヵ皿、高杯、鉢ヵ壷、甕、須恵器杯Ａ・Ｂ、杯ヵ皿蓋、壷、甕、黒色土器Ａ類杯ヵ皿、平瓦、塼、ガラス玉	横板が東・西 12 段、南 13 段、北 11 段分残存。厚さ約 6 ～ 7 ㎝、高さ約 25 ～ 30 ㎝の横板の木口の内面側にＬ形の相欠きを入れ、四隅を組合せて積み上げる。各段の目地はそろわない段組である。各段に太枘の固定は見られない。
							8 世紀末～ 9 世紀前半	（枠内）；土師器杯Ａ・Ｂ、皿Ａ・Ｃ、椀Ａ、高杯、壷Ｂ、甕、杯ヵ皿蓋、須恵器杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂ・Ｃ、杯ヵ皿蓋、壷Ｍ、鉢、甕、黒色土器Ａ類甕、奈良三彩、墨書土器、線刻土器、丸瓦、平瓦、土馬、円盤型土製品、ミニチュア土器、製塩土器、羽口、曲物、斎串、横櫛、神功開寶、鉄釘、ガラス玉、獣骨、桃核、植物種子類	

十坪内検出遺構（溝）一覧表

遺構番号	掘形等			時期	主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）			
ＳＤ 106	南北溝	長さ 9.7 以上 × 幅 0.5 ～ 0.9	0.15×0.25	8 世紀	土師器杯ヵ皿Ｂ、杯ヵ皿、須恵器杯Ｂ、壷、甕	十坪の西辺を限る溝。溝心の国土座標値は、Ｘ＝−146,980.000、Ｙ＝−16,972.900。東四坊坊間路東側溝ＳＤ 1009 との心々間の距離は 3.8 m。
ＳＤ 135	東西溝	長さ 1.6 以上 × 幅 0.6	0.15	8 世紀末	土師器杯Ａヵ皿Ａ、杯ヵ皿、甕須恵器杯ＡヵＢ、杯ヵ皿、杯ヵ皿蓋、壷、甕、丸瓦、平瓦	十坪の南辺を限る溝。溝心の国土座標値はＸ＝−146,988.800、Ｙ＝−16,976.000。東四坊坊間路東側溝ＳＤ 1009 に合流し、東四坊坊間路ＳＦ 1007 を横断しない。

東四坊坊間路路面上検出遺構（掘立柱建物）一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		廂の出	柱穴の深さ	備考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	(m)	
ＳＢ 201	東西	1 × 1	3.5	3.4				0.15 ～ 0.4	東四坊坊間路ＳＦ 1007 の路面上で検出。柱筋が西で北に振れる。道路廃絶後の建物。



発掘区全景 (南から)

2．平城京跡（左京五条二坊四坪・五条大路）の調査　第642次

事 業 名　賃貸住宅新築	調 査 期 間　平成23年4月5日～4月13日
届出者名　個人	調 査 面 積　120㎡
調 査 地　奈良市大安寺町497番地	調査担当者　奥井智子

Ⅰ　はじめに

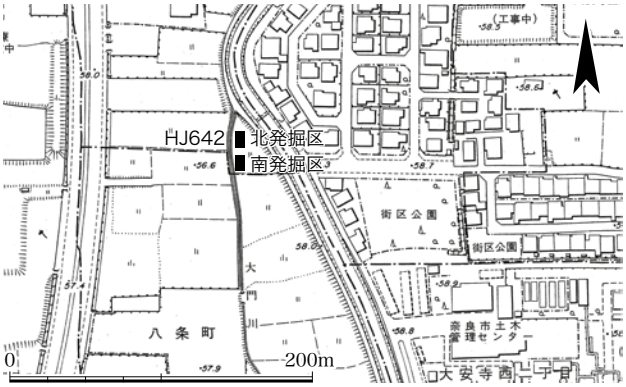
調査地は、左京五条二坊四坪の南東隅及び五条大路と東二坊坊間西小路の交差点部分にあたり、佐保川支流の菰川右岸に面する。同坪内における既存調査はないが、同坊三坪の調査（市HJ第20・383次調査）では標高57.1～56.8ｍで古墳・奈良時代の遺構を検出している。この他に、同坊十三・十四坪の調査（市HJ第438・249次調査）では、標高57.4～57.2ｍで奈良時代の掘立柱列や古墳時代の流路が、３坪分南に下った左京六条二坊三坪の調査（市HJ第225次調査）では、東二坊坊間西小路西側溝を検出している。今回の調査は、五条大路と東二坊坊間西小路の確認を目的として、南・北発掘区を設定して実施した。

Ⅱ　基本層序

南・北発掘区内の層序は、造成土と旧耕土の下に、灰色シルト、黄灰色粘土（７）、灰オリーブ色シルト（10）、灰白色シルト（12）、黄灰色粘土（13）、灰色粘土（15）と続き、北に向かって下り勾配の堆積状態である。建物基礎との関係から掘削深度に制限があり、地山を確認できなかった。

Ⅲ　検出遺構

各層とも明確な遺構は確認できなかったが、4・7・12層の上面で牛と考えられる動物の足跡を多数検出した。



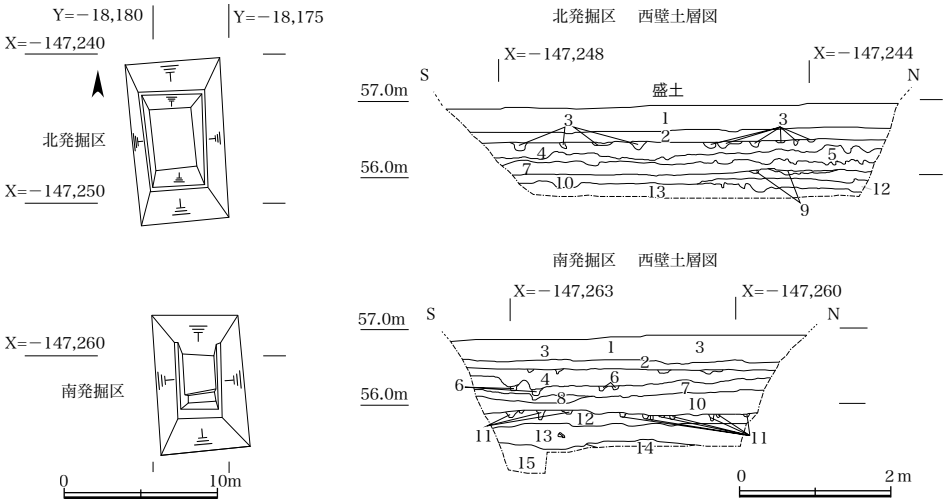
発掘区位置図（1/5,000）

Ⅳ　出土遺物

12・13層から８世紀代の須恵器杯Ｂや甕の体部、９世紀以降の土師器甕、７層から14世紀以降の土師器皿片、４層からは17世紀後半の国産陶磁器が合わせて遺物整理箱1/3箱分出土した。いずれも細片である。

Ⅴ　調査所見

今回の調査は五条大路と東二坊坊間西小路の確認を目的として行ったが、土層の堆積状況から側溝内であると判別できる可能性は低く、また関連遺構も確認できなかった。周辺地と比べ調査地の標高が全体的に低く、周辺で地割が乱れていることを考慮すると、調査地は菰川の氾濫原になっていたと考えられる。　（奥井智子）



1　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土（旧耕土）
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質土（旧耕土）
3　5Y6/2　灰オリーブ色細砂
4　5Y4/1　灰色シルト
5　2.5Y4/1　黄灰色粘質土（細砂多く含む）
6　5Y6/2　灰オリーブ色細砂
7　2.5Y5/1　黄灰色粘土
8　2.5Y4/2　暗灰黄色シルト
9　7.5Y7/2　灰白色シルト
10　7.5Y4/2　灰オリーブ色シルト
11　5Y6/1　灰色微砂
12　7.5Y7/2　灰白色シルト
13　2.5Y5/1　黄灰色粘土（微砂少量含む）
14　N5/　灰色細砂
15　N5/　灰色粘土

発掘区遺構平面図（1/500）・西壁土層図（1/100）

3．平城京跡（右京五条三坊十三坪・西三坊大路）の調査　第 643 次

事 業 名　寄宿舎新築	調 査 期 間　平成 23 年 4 月 11 日～ 4 月 27 日
届出者名　共栄社化学株式会社	調 査 面 積　336.3㎡
調 査 地　奈良市五条三丁目９－１	調査担当者　三好美穂

Ⅰ　はじめに

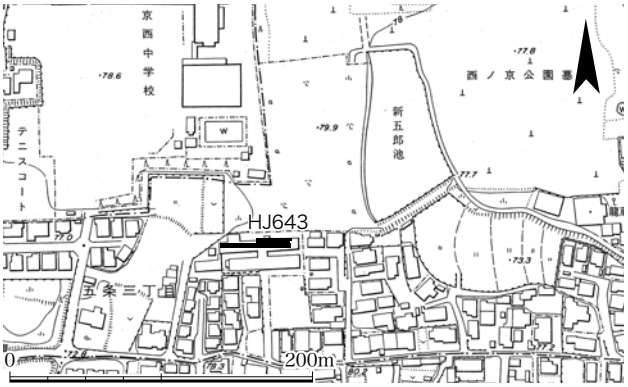
調査地は、平城京の条坊復原では右京五条三坊十三坪の中央西半部にあたり、西は西三坊大路に面する。地形的には西ノ京丘陵の台地上に位置し、東側と西側は浸食で生じた谷になる。現況は台地を盛土造成した平坦な宅地となっており、旧地形を留めていない。届出内の敷地南側で、平成 20 年度に奈良市が試掘調査（試掘 2008-2 次調査）を実施しており、奈良時代の建物・塀の一部とみられる柱穴と土坑を検出した。今回の工事範囲でも奈良時代の遺構が残存する可能性が高く、十三坪内の宅地利用状況および西三坊大路の検出を目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、発掘区中央部付近で造成土（厚さ 0.1 ～ 0.3 m）の直下が大阪層群のシルト質粘土の地山となる。一方、そこから東端にかけては造成土(厚さ 0.2 ～ 0.4 m)、暗黄色砂混じりの黒灰色砂（0.1 m）、明茶褐色細砂（0.1 m）、奈良時代の遺構面である明黄褐色シルト（0.2 ～ 0.4 m、無遺物層）と続き、シルト質粘土の地山に至る。発掘区西半部では造成土(0.1 ～ 0.8 m)、灰色粘土の旧耕土（0.2 m）、灰色砂（0.2 m）と続き、大阪層群の灰色～黄色のシルト混じりの砂層の地山となる。地山上面は、発掘区中央部付近はほぼ水平であるが、東・西に向かってそれぞれ低くなる。地山上面の標高は、東端が 78.3 m、中央部付近が 79.2 m、西半部が 78.4 mである。遺構検出は、基本的に地山直上でおこなった。

Ⅲ　検出遺構

造成工事及び旧建物基礎によって遺構面が広範囲にわたって壊されていたが、明黄褐色シルト上面で奈良時代の水溜遺構（ＳＸ 01）１基を検出した。ＳＸ 01 は、東西 3.2 m、南北 3.1 mの平面円形の掘方を呈し、検出面からの深さ 2.9 mを測る。掘方は二段掘りされており、検出面下 2.4 mから一辺 0.8 mの方形掘方となる。底部は、地山である大阪層群の灰色シルト層内でおさまっており、湧水層まで達していない。掘方埋土のほぼ中央では東西 2.2 m、南北 1.6 m、深さ 1.4 mの平面楕円形の抜取穴を検出した。掘方内埋土の状態から、内部には枠材が構築されていたことがわかるが、枠材はすべて抜き取られ残存していなかった。抜取穴の埋土から８世紀末頃の土師器、須恵器、軒丸瓦片とともに埴輪片が出土した。ＳＸ 01 は井戸というよりは水溜めの施設であると考える。



発掘区位置図（1/5,000）

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は、円筒埴輪、土師器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、鉄製の刀子が遺物整理箱で８箱分ある。これらは、耕作土、ＳＸ 01、撹乱坑から出土したが、その大半はＳＸ０１から出土した。

ＳＸ 01 出土遺物　枠の抜取痕跡から遺物整理箱３箱分の土師器・須恵器・瓦（丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦）・塼・埴輪（円筒埴輪・朝顔形埴輪）が出土した。

土師器には、杯Ａ・Ｂ、皿Ａ、高杯、甕片、須恵器には杯Ａ・Ｂ、皿Ａ、杯蓋、壷Ａ・Ｅ・Ｍ、壷Ａ蓋、浄瓶、甕片がある。小片で表面の剥離が著しく調整が分かるものは少ないが、形態的な特徴から８世紀後半のものと考えられる。

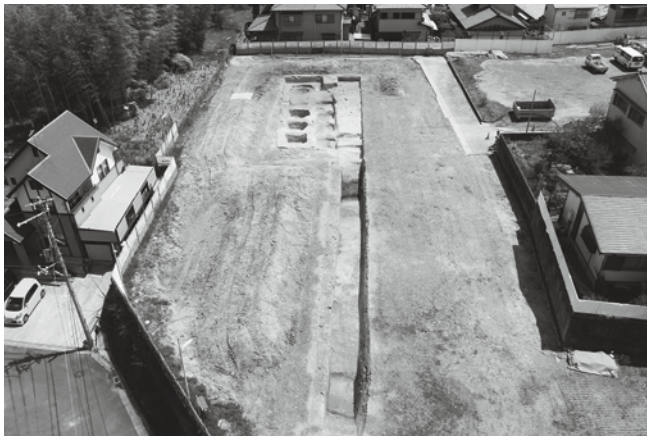
瓦は大半が丸瓦・平瓦で、小破片が多い。このうち粘土板桶巻作りの格子目叩き痕跡が残る平瓦が１点ある。軒丸瓦は２点（6313 型式Ａ種１点、型式不明１点）、軒平瓦は４点（6666 型式Ａ種１点、型式不明３点）ある。この他に、円筒埴輪片３点、朝顔形埴輪片１点が出土。縦方向のハケメ痕跡が残っており、埴輪編年のＶ期に位置付けられる。

Ⅴ　調査所見

今回の調査で、水溜め用と考えられる奈良時代後半の遺構を検出することができたが、西三坊大路に関わる遺構は確認できなかった。同じ敷地内で 2008 年に実施した試掘調査（2008-2 次調査）では奈良時代の柱穴や土坑等を検出していることから、少なくとも十三坪の西半部は

宅地として利用されていたことは明らかである。地山面の標高は今回の調査区内で 78.1 ～ 79.0 m、試掘調査区内で 79.3 ～ 79.8 mであり、遺構面が削平を受け、ＳＸ０１のように深く掘削された遺構だけが残存したとみられる。また、少量ながら埴輪片が出土しており、調査地近辺に古墳が存在していた可能性がうかがわれる。（三好美穂）

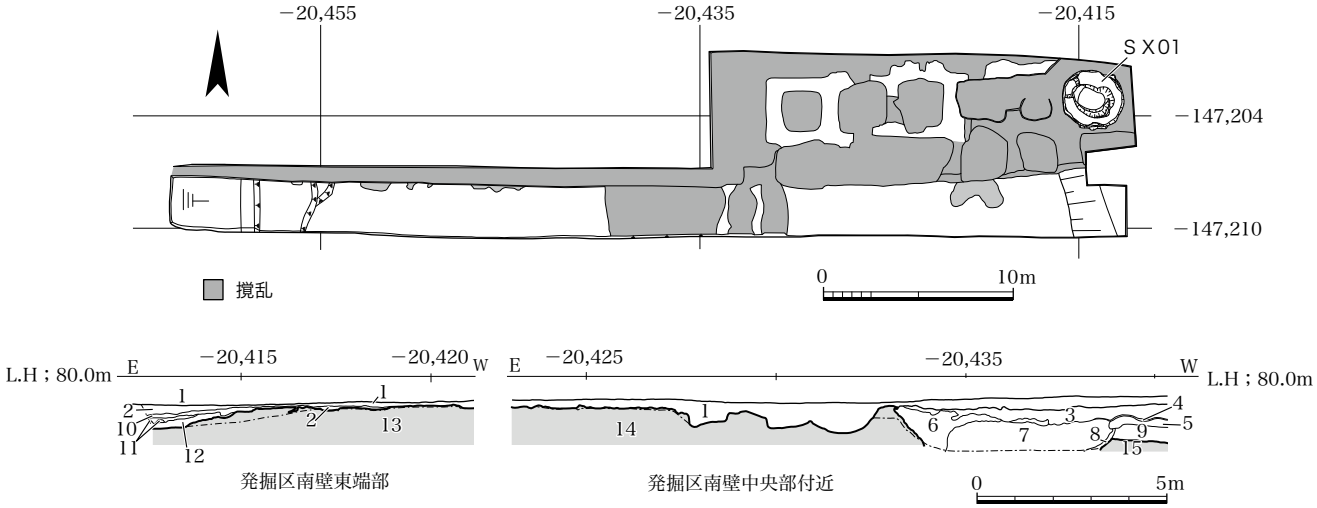
調査地とその周辺（東から）



発掘区全景（西から）

発掘区全景（上が北）

ＳＸ 01（北から）



発掘区南壁東端部

発掘区南壁中央部付近

1　褐色土（造成土１・瓦礫大量に含む）
2　赤褐色粘土＋黄灰色砂礫（造成土２）
3　淡青白色粘土（造成土３・褐色粘土混じり）
4　黒褐色土
5　灰色土（耕土）
6　褐色砂と灰色シルト（互層）
7　黄褐色粘土と黒灰色粘土（互層）
8　黄褐色粘土（灰色砂混じり）
9　灰色シルト
10　黒灰色砂（暗黄色砂混じり）
11　明茶褐色細砂
12　明黄褐色シルト（しまり悪い）
13　赤褐色粘土（黄褐色砂まじり・地山）
14　淡灰色シルト（地山）
15　黄褐色粘土（灰色砂混じり・地山）

発掘区遺構平面図（1/400）・南壁土層図（1/200）

4．平城京跡（左京四条四坊五坪）の調査　第 644 次

事 業 名　宅地造成・賃貸住宅新設	調 査 期 間　平成 23 年 4 月 20 日～ 5 月 16 日
届出者名　個人	調 査 面 積　183.5 ㎡
調 査 地　奈良市大森西町 216 番 1 の一部	調査担当者　中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊五坪の中央部のやや南東にあたる。調査地の東半部の発掘調査では、平城京の遺構とともに弥生時代後期の溝を確認している（ＨＪ第 266 次調査）。今回の調査は、平城京の遺構とともに、弥生時代の遺構の確認を目的とした。

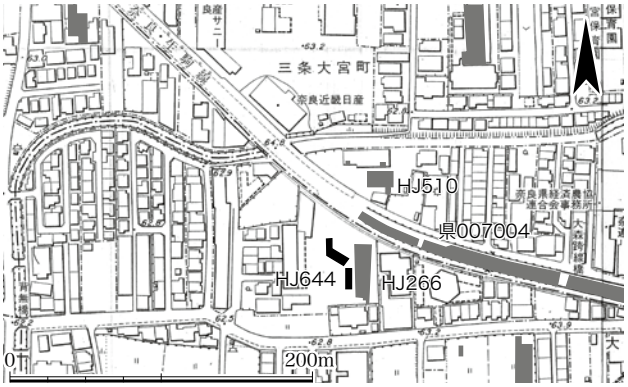
発掘調査は、道路計画部分について３箇所の発掘区（北から第１～３発掘区）を設定して行った。なお、後述する古墳の周濠の幅を確認するため、第１発掘区を南側に拡張し第２発掘区と接続した。また遺構番号は東側のＨＪ第 266 次調査からの続き番号とした。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、第１発掘区東壁で、上から現代の造成土（土層図１）、耕作土（２）、淡灰色砂質土（３）、明灰色砂質土（４）とつづき、地表下約 1.2 mで暗黄褐色粘質土（12）の奈良時代の遺構面となる。第２・３発掘区も同様な層序だが、部分的に３・４層がなく、耕作土直下で遺構面の場所もある。東側のＨＪ第 266 次調査成果から、この遺構面は弥生時代後期以降の時期とわかる。遺構面の標高は概ね第１発掘区で 62.15 m、第２発掘区で 62.1 m、第３発掘区で 62.0 mである。

Ⅲ　検出遺構

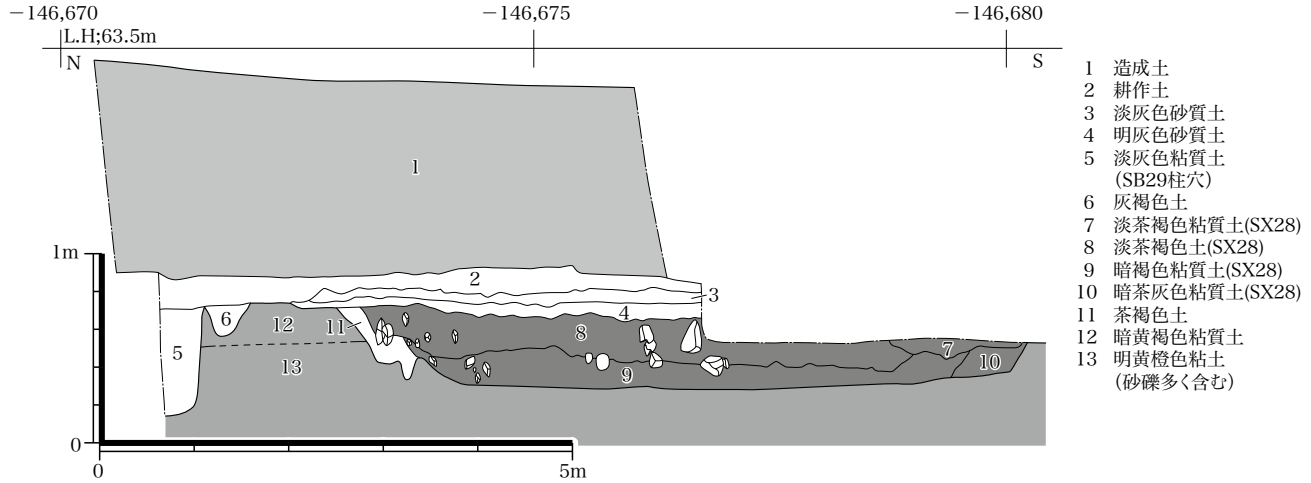
古墳時代前期の古墳の周濠１条（ＳＸ 28）、奈良時代の掘立柱建物５棟（ＳＢ 04・29・30・33・36）、掘立柱列４条（ＳＡ 31・32・34・35）、溝２条（ＳＤ 15・37）、江戸時代以降の土坑４基（ＳＫ 38 ～ 41）を検出した。詳細は遺構一覧表にまとめ、時代ごとに主要なものを記す。



発掘区位置図（1/5,000）

古墳時代の遺構　ＳＸ 28 は、第１発掘区で確認したほぼ直線的な東西方向の溝で、国土方眼方位東に対しやや北に振れる。後述するように、葺石の存在と円筒埴輪の出土から古墳の周濠と考えられる。また葺石の出土状況から、墳丘はＳＸ 28 の北側と推定できる。

ＳＸ 28 北岸からは 0.1 ～ 0.2m 大の河原石が多数出土し、これらは墳丘から転落した葺石と考えられる。濠底から約 0.15 m上には、原位置と考えられる葺石が５石ある。基底石と考えられる 0.1 ～ 0.2m 大の２石の上にやや小振りの石を積む。高さ約 0.2 m、長さ約 0.6 m



第１発掘区東壁・ＳＸ 28 セクション土層図（縦 1/40・横 1/80）

検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁間全長	桁行柱間寸法	梁間柱間寸法	廂の出	備考
		（桁行□梁間）	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	
SB01	東西	2 以上□ 2		4.8	2.7	2.4 等間		
SB02	南北	3 □ 2	4.7	3.0	1.6-1.5-1.6	1.5 等間		
SB03	南北	3 以上□ 2		3.2	1.6-1.5	1.6 等間		SD15 より新
SB04	東西	3 □ 2	9.0	4.8	3.0 等間	2.4 等間		
SB05	南北	3 □ 2 以上	4.5		1.5 等間	1.6 等間		
SB06	南北	3 □ 2	5.1	3.4	1.7 等間	1.7 等間		SD16 より新
SB07	南北	4 以上□ 2		3.4	1.8 等間	1.7 等間		SD16 より新
SB08	東西	2 以上□ 2		3.4	1.8 等間	1.7 等間		
SB09	?	2 以上□ 2 以上			2.4 等間	2.4 等間		SB08 より古
SA10	南北	5 以上	10.8 以上					
SB29	南北	4 以上□ 2 以上	12.1 以上	2.4 以上	2.7 等間	2.4	東 2.8	
SB30	南北	1 以上□ 2 以上	1.5 以上	1.5 以上		1.5		
SA31	南北	2 以上	3.6 以上		1.8 等間			
SA32	南北	1 以上	1.6 以上		1.6			
SB33	南北？	1 以上□ 1 以上	1.8 以上	1.4 以上	1.8			
SA34	東西	2 以上	3.6 以上		1.6 等間			
SA35	東西	2 以上	1.6 以上		1.6			
SB36	東西	2 以上□ 2	1.65 以上	4.8	1.65	2.4 等間		製塩土器、土馬出土

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SD15	東西	幅約 0.7 ～ 1.4× 長さ約 10.4	約 0.1	8 世紀以降	土師器杯	SB04 より古
SD37	東西	幅約 0.7× 長さ 1.4 以上	約 0.1	8 世紀後半以降	土師器甕、黒色土器 A 類杯	
SK20	長方形	南北約 5.0 m × 東西 15 m以上	約 0.2	8 世紀後半	土師器高杯・甕、須恵器壷・甕、製塩土器、平瓦	SE11 より新
SK38	隅丸長方形	幅約 1.1× 長さ 1.5 以上	約 0.3	17 世紀以降？	土師器甕、須恵器壷、瓦質土器擂鉢	
SK39	不整方形	幅約 1.5× 長さ約 1.9	約 0.6	17 世紀以降？	土師器甕、須恵器杯・壷、瓦質土器火消壷、国産陶器（瀬戸美濃産皿）、平瓦	
SK40	楕円形	幅約 1.1× 長さ 4.0 以上	約 0.4	17 世紀以降？	須恵器壷	
SK41	楕円形	幅約 1.3× 長さ約 1.8	約 0.4	17 世紀以降？	土師器皿・甕、須恵器壷・甕、国産陶器（信楽産擂鉢）、平瓦	
SX28	東西	幅約 7.0× 長さ 7.2 以上	約 0.4	古墳時代前期	円筒埴輪、土師器杯・甕、須恵器壷・甕（土師器と須恵器は奈良時代）、丸瓦、平瓦	古墳の周濠

分が残存する。周濠内に転落する石にはさらに小振りの 0.05 ～ 0.1 m大のものも多い。石材は多くがチャート系の河原石である。葺石の裏側には、厚さ約 0.2 mの茶褐色土があり、墳丘の法面を整形した際の盛土と考えられる。

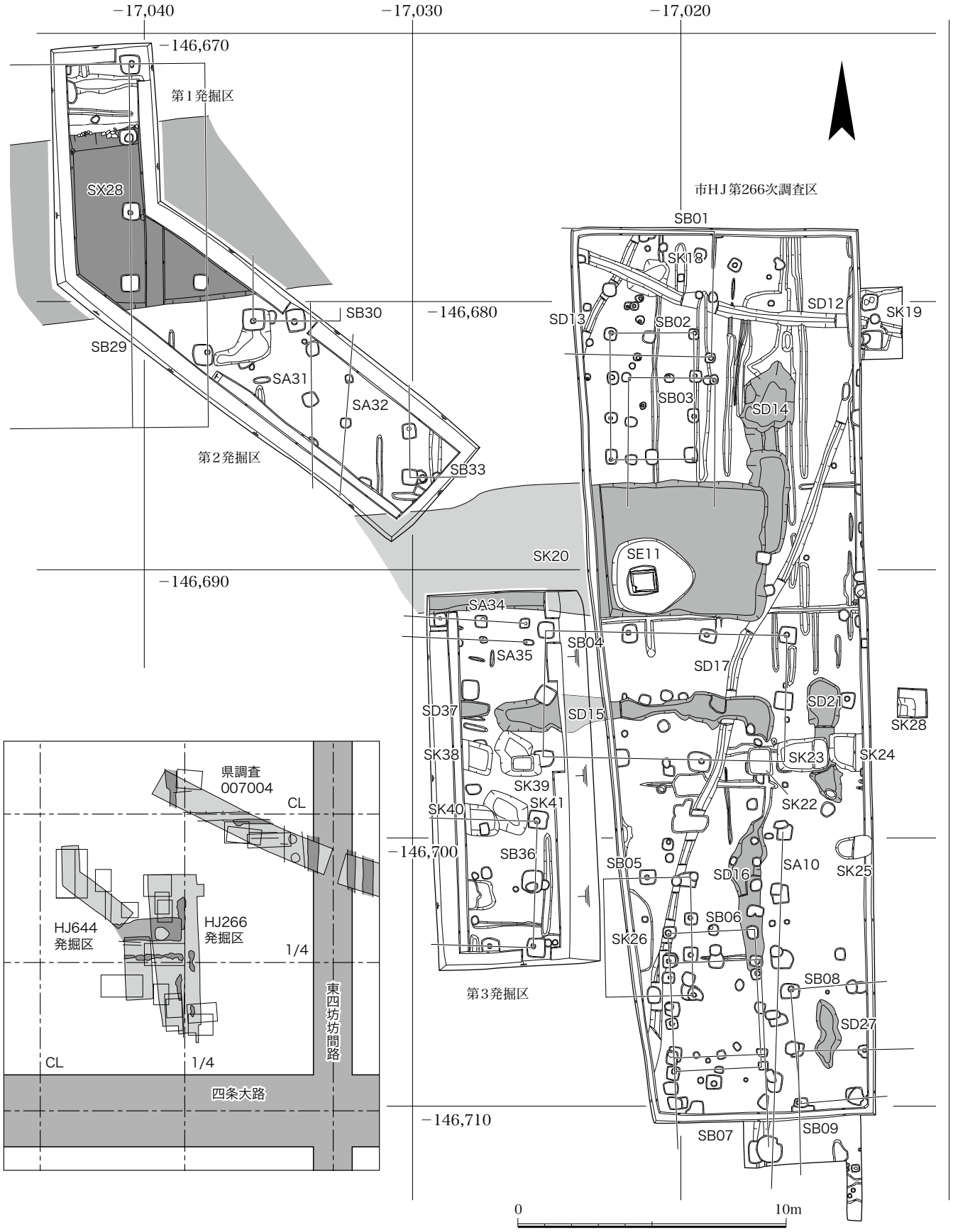
ＳＸ 28 の埋土は大きく上下２層に分かれる。上層は厚さ約 0.25 mの淡茶褐色土（８）で、円筒埴輪と奈良時代の土器を少量含み、墳丘側には多くの転落した葺石を含む。奈良時代の柱穴は上層上面から掘り込まれ、奈良時代に墳丘を削り周濠を埋め立てたことがわかる。下層は、厚さ約 0.15 mの暗褐色粘質土など（９、10）で遺物をほとんど含まない。ＳＸ 28 出土の円筒埴輪は多くが小片であり、原位置にある埴輪は確認していない。

奈良時代の遺構　発掘区が細長いため多くの建物・遺構が発掘区外に続き、全容が明らかなものは少ない。以下主要なものについて記す。

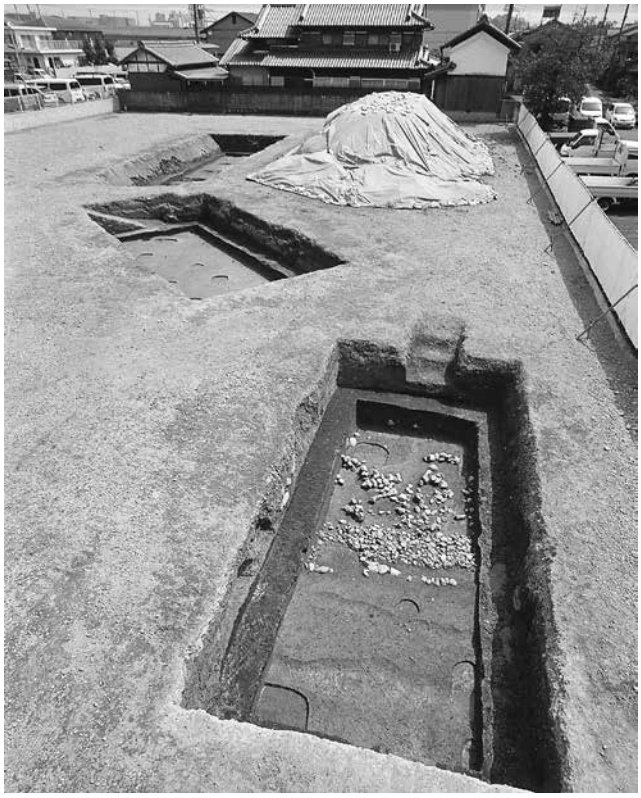
坪内区画溝　第３発掘区のＳＤ 15 は、東側のＨＪ第 266 次調査区からつづく東西方向の溝で、ＳＤ 37 に続き一連の溝になるものと考えられる。また第３発掘区北端では、東側の発掘区からつづくＳＫ 20 の南肩を、第２発掘区南端ではその北肩を確認している。ＳＤ 15 とＳＫ 20 は、おおよそ五坪の南北 1 / 4 のラインに位置し、南北に平行してあることから、坪内を南北に分割する東西通路の南北両側溝と考えられる。

同様に東側のＨＪ第 266 次調査区内では南北溝ＳＤ 16 とＳＤ 21・27 が平行してあり、これらも南北通路と想定される。この南北通路も、おおよそ五坪の東西 1 / 4 ライン上にある。これらのことから、五坪南半部では、坪内を通路で分割し、1 / 8 ～ 1 /16 坪分の宅地に分割していたと考えられる。

掘立柱建物　いずれも柱穴規模等から中小規模の建物と考えられる。第３発掘区のＳＢ 04 は、東側のＨＪ第 266 次調査区からつづく東西棟建物で、先述の坪内東西通路上に位置しており、重複関係からＳＤ 15 より新し

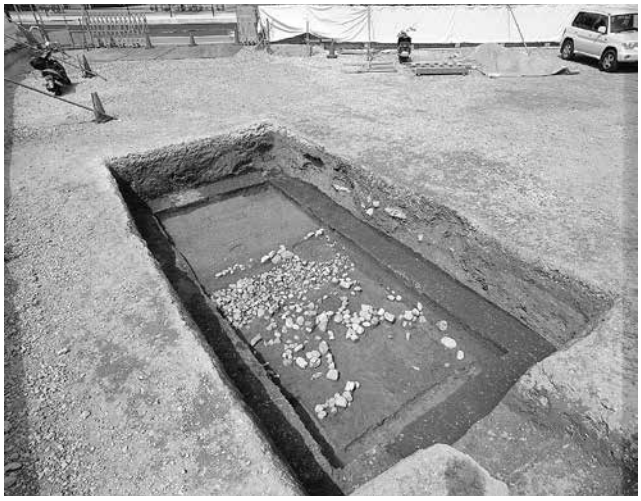


発掘区遺構平面図（1/200）と五坪南東部遺構配置図（1/1,200）

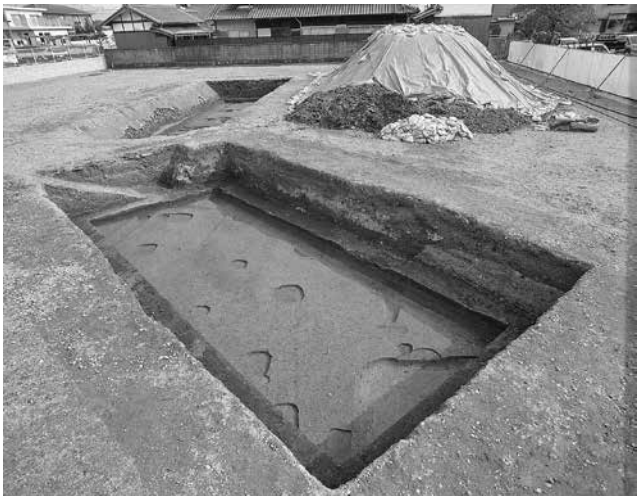


発掘区全景（北から）

ＳＸ 28 全景（南西から）



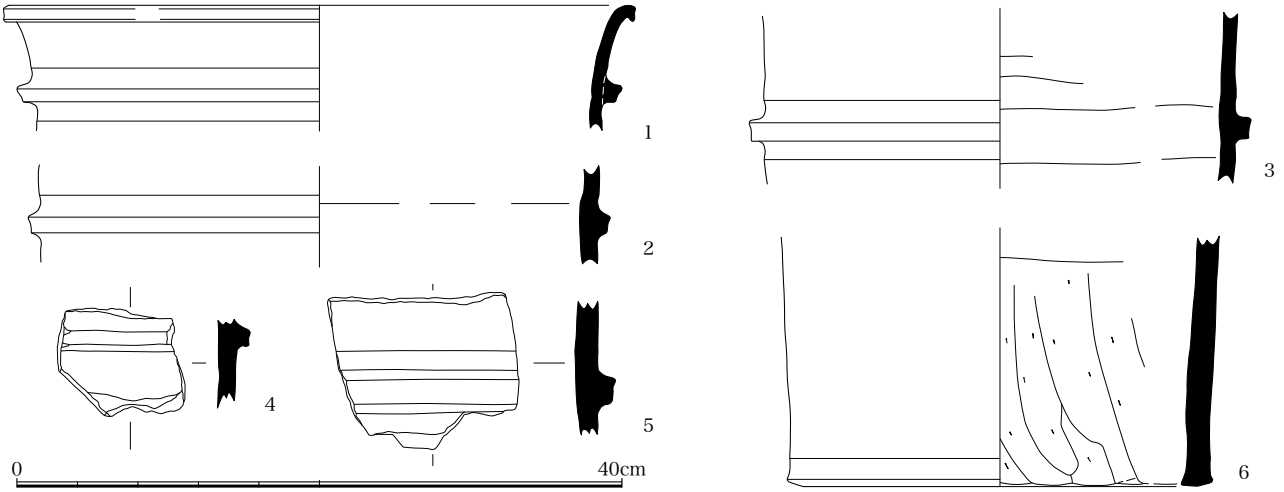
第 1 発掘区全景（南西から）



第 2 発掘区全景（北から）

ＳＸ 28 葺石転落状況（東から）

第 3 発掘区全景（北から）



ＳＸ 28 出土埴輪（1/ 5）

い。建物北側柱筋と東側柱筋にあわせてＳＡ 34・35 とＳＡ 10 があり、これら一連の遺構で 1/16 坪分の宅地の北西隅を区画している。

第 1 発掘区のＳＢ 29 は、東廂付きの南北棟建物で、古墳周濠ＳＸ 28 を埋め立て後に建てられる。1/16 坪分の宅地に分割した場合、ＳＢ 29 は宅地の南北中央の西端に位置する。廂側を正面とすると、東向きの 1/16 坪分の宅地が想定できる。

江戸時代以降の遺構　4 基の土坑（ＳＫ 38 ～ 41）は、いずれも重複関係から最も新しい遺構で、比較的しまりのない灰色系の土で埋まる。いずれも同時期・同性格の土坑と考えられ、ＳＫ 39 からは 17 世紀初頭の土器が少量出土しているが、詳細な時期は不明。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物には、遺物整理箱 3 箱分の土器類と 1 箱分の瓦類、砥石 1 点、鞴羽口 1 点がある。土器類には古墳時代前期の円筒埴輪、奈良時代の土師器・須恵器、室町～江戸時代の国産陶器（信楽産、瀬戸美濃産）、瓦質土器がある。各遺構出土遺物の概要は遺構一覧表に載せ、古墳の周濠ＳＸ 28 出土の埴輪について記す。

ＳＸ 28 出土埴輪　円筒埴輪が破片で 172 点出土しているが多くは小片で、内外面の調整も摩耗により詳細が不明なものが多い。円筒埴輪の全体形や突帯構成・間隔、透かし孔の形も不明で、口縁部の高さが 5.5 ㎝と判明する破片（1）が 1 点あるのみである。また底部の破片（6）からは、底部の高さが 16㎝以上で、比較的高いことが推定できる。

法量については、図示した資料から口径約 41.8㎝、体部径 31.0 と 37.0㎝、底部径約 28.2㎝に復原できるが、いずれも残存径が 1/ 6 ～ 1/ 8 のためやや前後することが考えられる。

体部の外面調整は、3 と 4 が横方向のナデ調整で、ハケメ痕跡を残さない板状工具によるものと考えられる。底部の破片（6）の内面は、下から上へ斜め方向のケズリ調整である。一単位のケズリ調整の断面形状はやや丸みを帯びており、板状工具により表面を掻き取るような調整であったと考えられる。また突帯の裏側の内面には、突帯貼付に伴う弱いヨコナデ調整がある。

突帯は断面台形の形態のみである。

黒斑があること、突帯・口縁部などの形態的特徴から、埴輪は川西編年Ⅱ期のものと考えられる。

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査では、ＨＪ第 266 次調査成果と合わせて、五坪の南東部の様相が一部明らかになった。五坪の南東部は、南北通路で東西 1/ 8 坪分に分割され、さらにその西側を東西通路で南北 1/16 坪分に分割することが判明した。また掘立柱建物・塀の配置から、南東部は 1/ 4 坪分を一体利用したとは考えられず、奈良時代を通して 1/ 8 ～ 1/16 坪利用されていたと想定できる。

一方、新たに古墳時代前期後半の古墳を検出した。周濠の一部を確認したのみだが、以下の点が指摘できる。

1　古墳は方墳または前方後円墳の前方部部分と考えられ、墳丘規模は不明で、幅約 7 mの周濠がある。

2　葺石と埴輪をもつが、埴輪列は確認していない。埴輪の時期は川西編年Ⅱ期である。

3　墳丘は奈良時代に削平されており、墳丘裾の葺石が僅かに残存する。

古墳の周濠は墳丘南側のもので、東側のＨＪ第 266 次調査区では検出しておらず、両発掘区間で北側に曲がると考えられる。西側隣接地では、古墳の西端が想定され、今後開発が予定される場合は注意する必要がある。

（中島和彦）

5．平城京跡（左京二条三坊一坪）の調査　第646次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成23年5月24日～6月10日
届出者名　株式会社　フォレストホーム	調 査 面 積　140㎡
調 査 地　奈良市法華寺町365・370番地	調査担当者　原田香織

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京二条三坊一坪の南半部中央西寄り部分に相当する。一坪の西側と北側西寄りは法華寺旧境内に面しており、法華寺旧境内北東隅には海龍王寺境内がある。一坪内の調査は今回が最初であり、坪内の遺構の残存状況や様相の確認を目的として、道路敷設予定地に東西4m、南北35mの発掘区を設定して調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

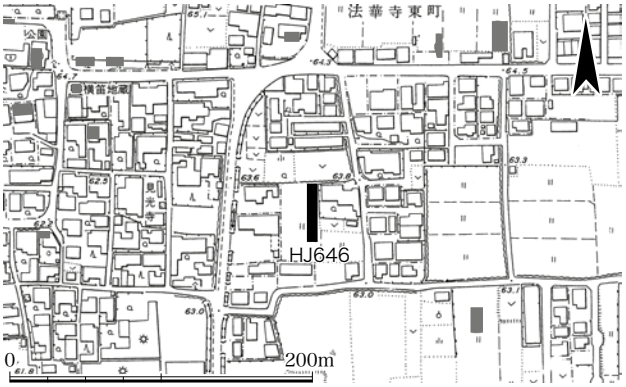
基本的には、上から造成土（厚さ0.4m）、耕土（同0.2～0.3m）、床土（同0.02～0.1m）、淡灰茶色土（同0.05～0.1m）、淡灰茶褐色土（同0.1～0.2m）、淡灰褐色粘質土（同0.1～0.2m）と続き、その下で淡黄灰色シルト質粘土や淡黄灰色粘土の地山となる。

ただし、発掘区南端では地山上面が約0.3m低くなり、淡灰褐色粘質土の下に9世紀前半の遺物を含む暗褐灰色粘質土（同0.03～0.15m）、9世紀の遺物を含む淡黄茶灰色粘土・地山ブロック混合土（同0.2m）がみられる。淡黄茶灰色粘土・地山ブロック混合土は、堆積状態から人為的に埋められた整地土と判断されるが、溝状や土坑状に厚い部分があり、同様の窪みが発掘区北半にも認められる。

奈良時代の遺構面は地山上面（標高61.8m～62.1m）で、南方に西流する菰川に向け緩やかに下る。また、平安時代の遺構面は地山及び整地土の淡黄茶灰色粘土・地山ブロック混合土の上面である。

Ⅲ　検出遺構

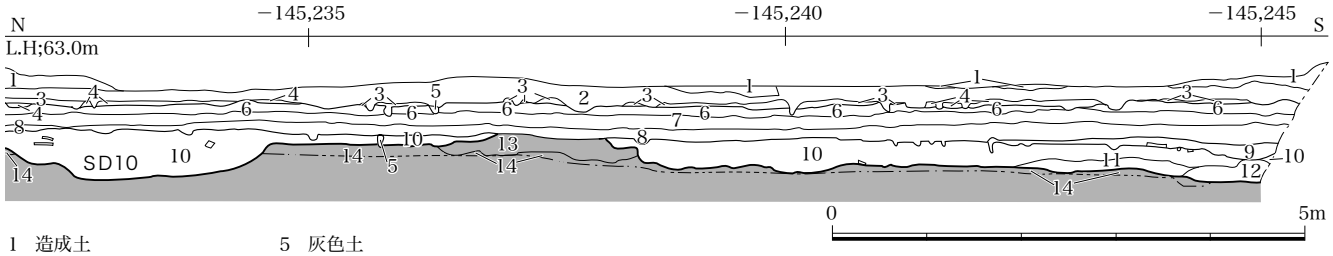
遺構検出は地山上面および整地土上面で行った。検出した主な遺構には奈良時代の掘立柱建物5棟（ＳＢ01～05）・掘立柱塀2条（ＳＡ06・07）・土坑1基（ＳＫ09）、平安時代初頭の掘立柱塀1条（ＳＡ08）・溝1条（ＳＤ10）、室町時代の土坑2基（ＳＫ11・12）がある。ＳＡ08以外はすべて地山上面で検出した。各遺構の概要については表にまとめた。以下はその補足である。



発掘区位置図（1/5,000）

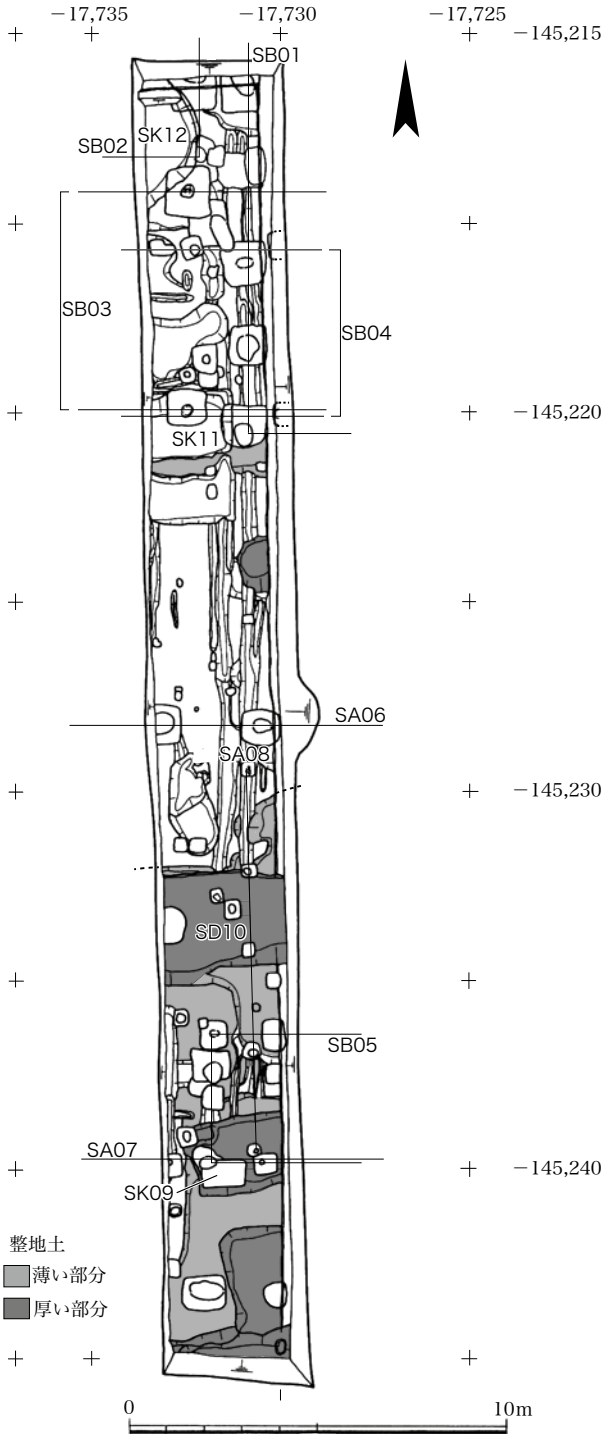
掘立柱建物・塀は、ＳＡ08を除いて、いずれも一部を検出したのみであり、全容が判るものはない。

ＳＢ01～03の柱穴は一辺約1.1～1.3mの大きなもので、柱はほとんどが抜き取られている。ＳＢ03の北側の柱穴には直径約35cmの柱根が残っており、下には沈下防止のために瓦が敷かれていた。柱根の下部には筏穴が認められた。ＳＢ03の南側の柱穴はＳＫ13により大きく壊されて柱根はなかったが、掘形底の中央で直径30cmほどの丸く扁平な河原石を検出した。ＳＡ08は、北端の柱穴を除いて整地土上面で検出した。南端の柱穴には柱抜取穴があり、その埋土は直上層の暗褐灰色粘質土に酷似する。掘形埋土には同様の土は混在しない。その他の柱穴には柱痕跡が認められた。5つの柱穴のうち中央の1つを除いて、柱沈下防止用に置か



1　造成土
2　暗灰色土(耕土)
3　淡灰色砂(床土)
4　淡灰茶色砂質土(床土)
5　灰色土
6　淡灰茶色土
7　淡灰茶褐色土
8　淡灰褐色粘質土
9　暗褐灰色粘質土
10　淡黄茶灰色粘土・地山ブロック混合(整地土)
11　淡灰黄色粘土・地山ブロック・淡灰色砂混合(整地土)
12　淡灰黄色粘土ブロック(整地土)
13　淡黄灰色砂・粘土混合(地山)
14　淡黄灰色粘土(地山)

発掘区東壁土層図（1/80）



発掘区遺構平面図（1/200）

発掘区全景（北から）

発掘区南部（南西から）

れた瓦類を検出した。

ＳＡ 08 以外の掘立柱建物・塀の柱穴からは出土遺物が少なく、とくに土器類は小片のため詳細な時期を示すものがなかった。ＳＡ 08 は９世紀の遺物を含む整地土上面で検出したことや柱抜取穴埋土が９世紀前半の遺物を包含する暗褐灰色粘質土と酷似し同時期の土器を含むことから、平安時代初頭の遺構と判断される。その他については出土遺物から暫定的に奈良時代の遺構と判断する。

なお、ＳＢ 03・04 の重複関係については、ＳＢ 04 の柱穴が後述するＳＫ 11 によって壊されていたために確認できなかった。同様にＳＢ 05 とＳＡ 07 の重複関係もＳＢ 05 の南側柱の東の柱穴が残っておらず確認できなかった。整地土の厚さよりも浅い掘方だった可能性が考えられるが、この場合、ＳＢ 05 は整地土上面から掘削されていた可能性がある。ＳＢ 01 と整地土の重複関係については、埋土が似ており、この部分の整地土がごく薄かったため十分に確認することができなかった。

ＳＫ 09 は掘方の壁面がほぼ垂直で、底面も平坦な箱型の土坑である。埋土は地山ブロック・淡灰色粘砂の混合土である。

ＳＤ 10 は整地土が部分的に厚く堆積するところの１つで、東西方向の溝状を呈する。周辺の低地とともに一括で埋められている。

ＳＫ 11 の埋土は淡灰色砂質土と地山ブロックの混合土、ＳＫ 12 の埋土は主に淡灰色砂質土や地山ブロックが混合した灰色粘質土で、埋土の質から耕作に伴う土坑である可能性が考えられる。

この他、発掘区全体で南北方向や東西方向の耕作溝を検出した。重複関係から上記の遺構より新しい。埋土から、14 ～ 15 世紀の国産陶器の破片が出土した。重複関係と出土遺物から、室町時代頃の遺構と判断される。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は遺物整理箱で 31 箱分が出土した。その内訳は、7 ～ 8 世紀前半の平瓦、8 世紀の土器類（土師器・須恵器）・瓦類（軒丸瓦 (6301B・型式不明各 1 点)・軒平瓦（6667A・6691A・6691B・6721J 各 1 点、型式不明 2 点）・面戸瓦・熨斗瓦・塼・丸瓦・平瓦）・土馬、8 世紀末～ 9 世紀の土器類（土師器・黒色土器 A 類、緑釉陶器・灰釉陶器、製塩土器）、12 ～ 13 世紀の土器類（土師器・瓦器・輸入青磁・輸入白磁）、14 ～ 15 世紀の土器類（土師器・瓦器・国産陶器）、15 ～ 16 世紀の国産陶器、18 世紀の国産陶器の他、鉄釘・坩堝・鉄滓である。

なお、発掘区内全般で出土した飛鳥時代～奈良時代前半の瓦については、近隣の海龍王寺で同時期の瓦が出土しているため、そこから持ち込まれた可能性がある。

Ⅴ　調査所見

調査地内では奈良時代の遺構が良好な状態で残っていること、一坪内が奈良時代から平安時代初頭にかけて宅地利用されており、室町時代頃には耕地化していたことが確認できた。

掘立柱建物 S B 01 ～ 03 の柱穴が大きいことから、奈良時代には比較的大型の建物を伴う邸宅があった可能性があり、建物の重複関係から 4 時期以上の変遷が認められる。また、S A 06 は坪内を南北に分割する南から 1/3 ライン付近、S A 07・S D 10 は南から 1/4 ライン付近にあり、一坪内を分割して宅地利用していた可能性がある [1)]。

東方の東三坊大路 [2)] や左京一条三坊十三坪 [3)] のように周辺では平安遷都後も宅地が存在したことが判明しており、当地にもそれが及んでいることが分かった。確実に同時代の遺構といえるのは掘立柱塀 S A 08 のみであるが、建物として組まないものの整地土より新しい柱穴が複数あり、他にも建物があったとみられる。9 世紀の遺物を含む整地土層については、S D 10 のような溝状や方形などの土坑状に厚い部分があり、これらは整地以前に存在した遺構を反映している可能性が考えられる。この場合、ある程度は堆積していたであろう遺構の埋土を除去してから埋め立てたと想定できることから、かなり大規模な造成が行われた可能性がある。　（原田香織）

［註］

1）割付けには奈良文化財研究所『平城京条坊総合地図　奈良文化財研究所史料第 60 冊』2003 を参照した。

2）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査　奈良国立文化財研究所学報第 23 冊』

3）奈良市教育委員会「平城京左京一条三坊十三坪の調査　第 440 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 11 年度』2001

遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		廂の出	柱穴の深さ	備考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	(m)	
S B 01	南北	桁行 4 以上	9.2 以上		2.3			0.8 ～ 1.0	S B 02 より古い
S B 02	?	1 以上	2.1 以上		2.1			0.7 ～ 0.9	S B 01 より新しく、S B 03 より古い
S B 03	東西	梁行 2 ?		5.9				0.8 ～ 0.9	S B 02 より新しく、S B 04 との重複関係は不明
S B 04	東西	梁行 2 ?	2.2 以上	4.4	2.2			0.35 ～ 0.5	S B 03 との重複関係は不明
S B 05	東西	1 以上 × 2	1.5 以上	3.4	1.5	1.8-1.6		0..25 ～ 0.5	SK09 より新しく、S A 07 と南側柱列が重複するが整地土とともに重複関係は不明
S A 06	東西	1 以上	2.7 以上		2.7			0.6 ～ 0.7	坪内南 1/3 付近
S A 07	東西	1 以上	2.4 以上		2.4			0.5	SA08 より古い、S B 05 南側柱列と重複するが整地土とともに重複関係は不明、坪内南 1/4 付近
S A08	南北	4	10.1		2.7-2.1-2.7-2.6			0.25 ～ 0.55	S A07・整地土より新しい

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
S K 09	方形	東西 1.2× 南北 0.8	1.0	8 世紀	土師器杯か皿、丸瓦・平瓦	S B 05・整地層より古い
S D 10	東西溝	長さ 1.7 以上 × 幅 2.4	0.4	9 世紀	土師器杯 A・皿 A（8 世紀後半・8 世紀末～ 9 世紀初）・杯か皿 B・杯 C（8 世紀末～ 9 世紀初）・椀 A（9 世紀）・高杯脚・高杯か盤・甕、須恵器杯 A（墨書底部外面「□」あり）・杯 B（8 世紀前期～中期）・杯 C・杯 E・杯か皿（転用硯あり）・杯蓋・長兄壺・壷・壷蓋・甕、黒色土器 A 浅鉢（9 世紀）・深鉢（9 世紀）・甕、製塩土器、軒平瓦（6691 A）・面戸瓦・丸瓦・平瓦（7 ～ 8 世紀前期あり）	S A 08 より古い 整地土で埋められている 坪内南 1/4 付近 ※出土遺物は整地土出土のもの
S K 11	方形	東西 2.0 以上 × 南北 1.8	0.3	14 世紀後半～ 15 世紀前半	土師器皿 B・皿（12 世紀後半～ 13 世紀前半・14 世紀後半～ 15 世紀前半）・羽釜（13 ～ 14 世紀）、須恵器杯か皿 B・杯か皿・椀 C・壷・甕、黒色土器 A 類椀か杯 B・杯か壷か鉢、灰釉陶器皿（9 世紀後半～ 10 世紀）・椀か皿（9 世紀前半）蓋、緑釉椀か皿、軒丸瓦（6301B）・丸瓦・平瓦（7 ～ 8 世紀前期あり）	S B 03・整地土より新しい
S K 12	円形	東西 1.4 以上 × 南北 3.4	0.75	14 世紀後半～ 15 世紀前半	土師器杯か皿・皿（13 世紀・14 世紀後半～ 15 世紀前半）・甕、須恵器杯か皿 B・杯か皿・壷・甕、黒色土器 A 類杯か椀か皿、灰釉陶器皿（9 世紀後半～ 10 世紀）・椀か皿（9 世紀前半）、丸瓦・平瓦	S B 02 より新しい

6．平城京跡（右京北辺四坊三・四坪）の調査　第 647 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 23 年 6 月 8 日～ 7 月 1 日
届出者名　プレステ株式会社	調 査 面 積　210㎡
調 査 地　奈良市西大寺宝ヶ丘 651 の一部他	調査担当者　池田裕英

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京北辺四坊三・四坪にあたる。調査地の周辺では過去に数度の発掘調査が行われている。本調査地の西で行われた三・六坪の調査（国第 151-26 次）では、奈良時代の大規模な掘立柱建物群と、平安時代の火葬墓が検出されている。

また、南に隣接する土地で行われた市ＨＪ第 532 次調査では古墳時代の方形区画溝、斜行溝、土坑、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸を検出している。この周辺は称徳天皇陵兆域・称徳山荘との関係が指摘されている地域で、発掘成果との関係が興味深い。本調査は、三坪と四坪とを画する遺構の検出や坪内の宅地利用の様子を明らかにすることを目的として実施した。

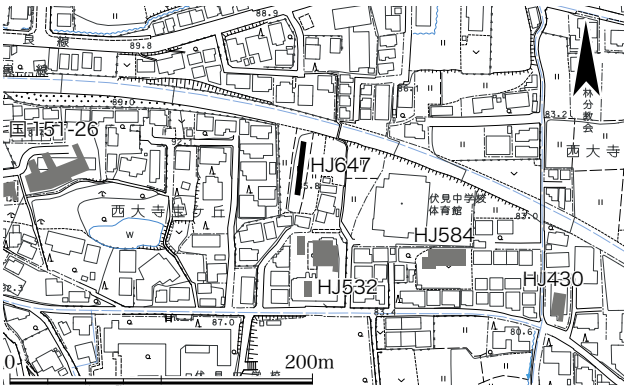
Ⅱ　基本層序

調査地の地形は西から東にむかって緩やかに下る丘陵の斜面上にある。発掘区内の層序は黒灰色土の下、灰白色砂質土、橙茶色土、灰褐色土、茶灰色砂質土と続き、現地表下約 0.6 ～ 0.8 mで茶黄色土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。地山上面の標高は発掘区西端で 85.4 m、発掘区東端で 85.2m である。

Ⅲ　検出遺構

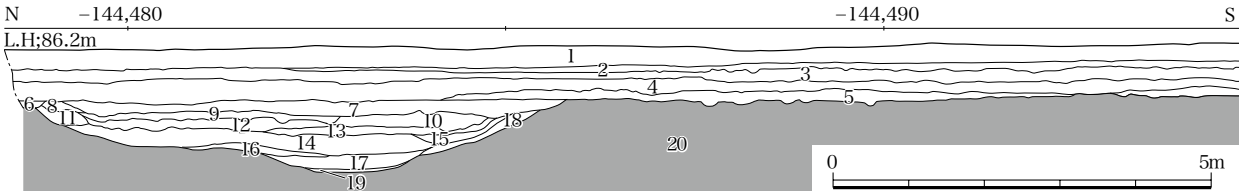
検出した遺構は古墳時代後半の掘立柱列・建物、奈良時代の掘立柱列・建物、古墳時代後半～奈良時代の溝である。

掘立柱列・建物の概要については別表の通りであるが、主軸の方向から大きく２群に分けることができる。一つは国土方眼方位北で西に傾く一群（ＳＡ 01・ＳＢ 02 ～ 04）であるが、ＳＡ 01・ＳＢ 03・04 とＳＢ 02 とは建物の主軸の傾きが違っており、時期が異なるものと思われる。もう一方は国土方眼方位に一致する一群（ＳＡ 05・06、ＳＢ 07 ～ 10）である。柱掘方から出土した遺物がいずれも小片であるため時期を特定することが困難であるが、重複関係からみて方位北で西に傾く建物は方位に一致する建物より古いことや出土遺物、周辺の調査例からみて、方位北で西に傾く一群は古墳時代後半、国土方眼方位に一致する一群は奈良時代の建物と推測する。



発掘区位置図（1/5,000）

ＳＤ 11 は北西–南東方向の溝である。幅 3.0 ～ 3.8 m、深さ 0.9 mである。溝の南北には水があふれたような堆積もみられた。溝東半に底が抉られたような形状で灰色砂が堆積している部分があり（土層図 19）、水流によるものと思われる。埋土の２層目以下（土層図９ ～ 19）から古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器・土師器片が出土したので、その時期の遺構と考える。最上層の暗茶灰色粘質土（土層図７）には地山の茶黄色土のブロックがみられ、奈良時代の土器片、軒丸瓦（6710D）が出土していることを勘案すると、奈良時代に人為的に埋め立てられたようである。



1　黒灰色土	6　緑灰色土	11　灰色砂質土	16　褐茶色砂質土
2　灰白色砂質土	7　暗茶灰色粘質土	12　灰茶色砂質土	17　褐灰色粘土
3　橙茶色土	8　暗黄茶色土	13　橙茶色砂質土	18　褐茶色粘質土
4　灰褐色土	9　暗茶灰色土	14　暗茶灰色粘質土	19　灰色砂
5　茶灰色砂質土	10　褐灰色粘質土	15　茶灰色シルト	20　茶黄色土（地山）

発掘区東壁土層図（1/100）

掘立柱列・建物一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行（南北）全長	梁行（東西）全長	柱間寸法（m）		廂の出	柱穴の深さ	備考
		桁行（南北）×梁行（東西）	(m)	(m)	桁行（南北）	梁行（東西）	(m)	(m)	
ＳＡ 01	北西 - 南東	4 以上	3.9 以上	–	1.3	–	–	0.1	国土方眼方位北で西に振れる
ＳＢ 02	北西 - 南東	4 以上 × 3	6.6 以上	4.2	2.1	2.2	–	0.1 ～ 0.3	国土方眼方位北で西に振れる
ＳＢ 03	北東 - 南西	1 以上 × 2	3.0	–	1.5	–	–	0.1	国土方眼方位北で西に振れる
ＳＢ 04	北西 - 南東	3 以上 × 2 以上	3.8 以上	1.7 以上	2.0–1.8	1.7	–	0.1	国土方眼方位北で西に振れる
ＳＡ 05	東西	3 以上	–	4.8 以上	–	2.4	–	0.4	重複関係から SB02 より新しい
ＳＡ 06	東西	3 以上	–	4.8 以上	–	2.4	–	0.3	
ＳＢ 07	南北	5 × 2	8.0	4.8	1.6	2.4	–	0.1 ～ 0.3	重複関係から SB02 より新しい
ＳＢ 08	南北ヵ	3 × 2 以上	6.0	2.1	2.0	2.1	–	0.1 ～ 0.4	
ＳＢ 09	東西ヵ	2 以上 × 2	3.6	1.8 以上	1.8	1.8	–	0.2	
ＳＢ 10	南北ヵ	3 以上 × 2	4.2 以上	4.2 以上	2.1	2.1	–	0.2 ～ 0.4	

Ⅳ　出土遺物

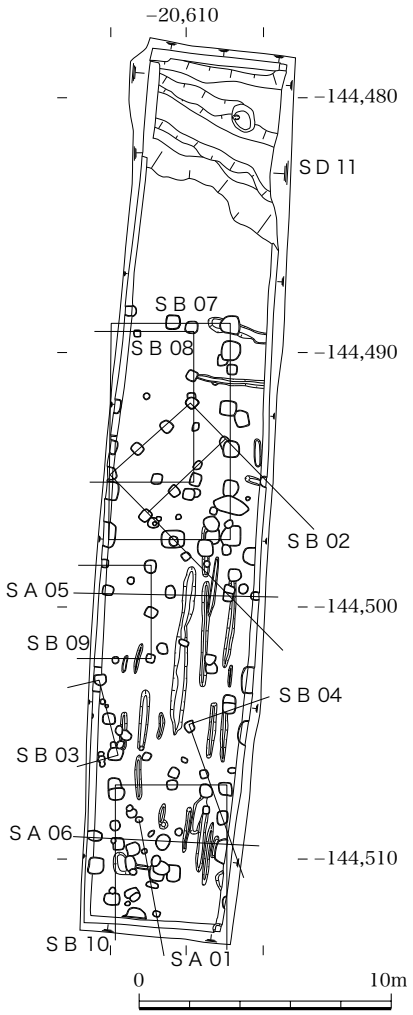
本調査では遺物整理箱にして７箱の遺物が出土した。ＳＤ 11 から古墳時代後期の土師器（高杯、甕）・須恵器片（杯身、杯蓋、壺、甕）、奈良時代の土師器（杯、甕）・須恵器（杯、高杯、壺、甕）片、土製品（竈）、軒丸瓦(6710D)、丸瓦・平瓦片、掘立柱列・建物の掘方から古墳時代後期の土師器・須恵器片、奈良時代の土師器・須恵器片が出土しているが、小片が多く、器種、時期がわかるものはない。

Ⅴ　調査所見

本調査では当初想定していた三坪と四坪とを限る道路遺構はなかった。北辺坊ではこれまでの調査でも東西方向の道路遺構はみつかっておらず、施工されていなかった可能性や三坪と四坪とが一体で利用されていた可能性も考えられる。ＳＢ 07 より北側には奈良時代の遺構はなく、北辺坊北端のあり方ともかかわるのかもしれない。

発掘区北端で検出したＳＤ 11 は方向からみると本調査地の南西約 100 mで実施した市ＨＪ 584 次調査で検出した斜行するＳＸ 14 とつながるとみられる。そう考えると、尾根の先端を巡る溝のような性格を有する遺構であるのかもしれない。南に隣接する市ＨＪ 532 次調査でも古墳時代後期の掘立柱建物を検出しており、この地に古墳時代後期～飛鳥時代の集落があったことは確実であろう。この地域の北にはほぼ同時期の赤田横穴墓群をはじめとするいくつかの横穴墓群があり、居住域と墓域との関係を考えるうえで興味深い。　（池田裕英）

発掘区全景（北から）



発掘区遺構平面図（1/300）

7．平城京跡（左京八条四坊三坪）の調査　第 648 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 23 年 6 月 10 日～ 7 月 4 日
届出者名　（株）山金	調 査 面 積　167㎡
調 査 地　奈良市東九条町 554 番ほか	調査担当者　安井宣也　奥井智子

Ⅰ　はじめに

調査地は、能登川と岩井川が形成した東から西に緩やかに下る扇状地の扇端に位置し、平城京の条坊復原によると左京八条四坊三坪の北西部分に相当する。

左京八条四坊三坪における過去の調査例はないが、東三坊大路を挟んで西側の左京八条三坊内では、東市跡推定地（五・六・十一・十二坪）や姫寺跡推定地（十五坪）において複数の調査が実施されている。奈良市教育委員会が実施した東市跡推定地と西に隣接する三坪内の調査では、扇状地構成層の地山上面（標高 56.0 m前後）で奈良時代から平安時代前半の条坊（八条条間路・東三坊坊間路）・東堀河・掘立柱建物・塀・溝・井戸・土坑、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物・塀・溝・井戸・土坑などを検出している。

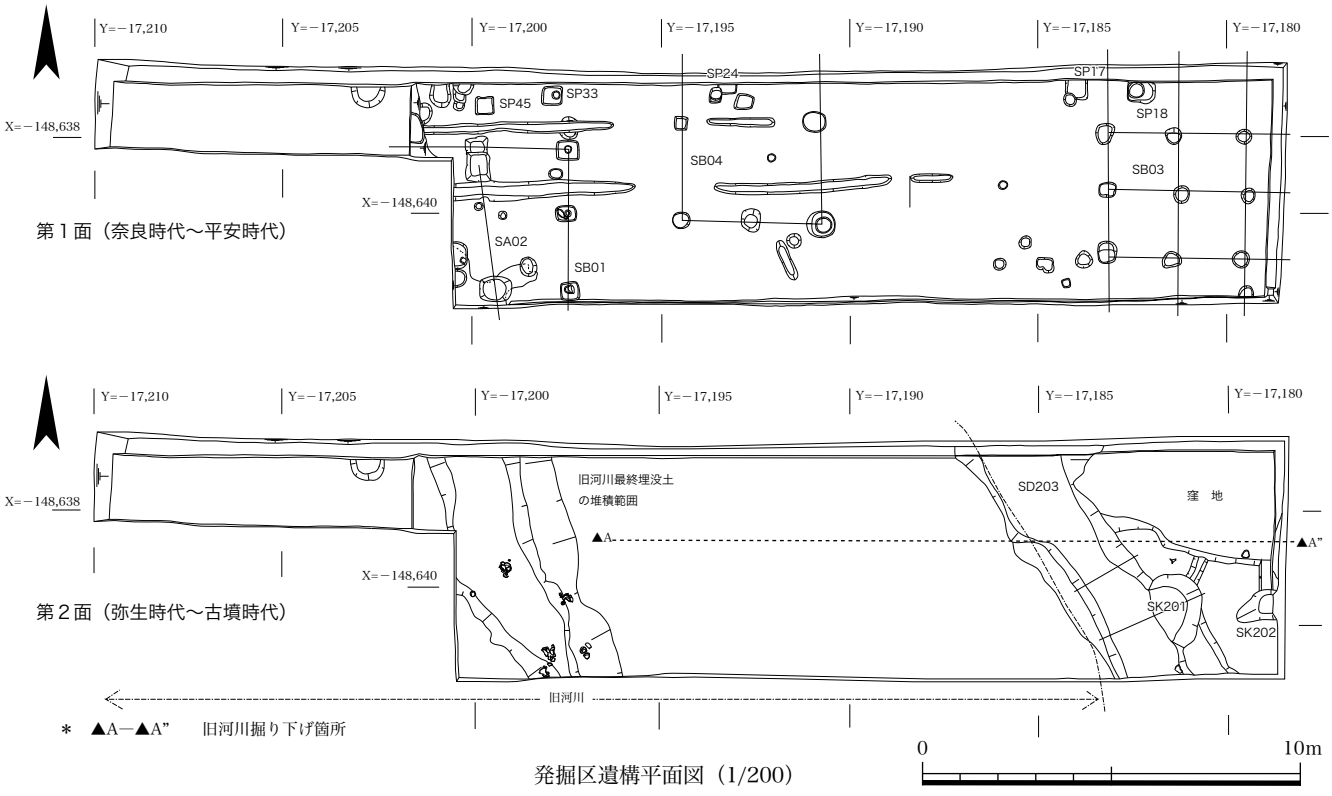
また、姫寺跡推定地及び九・十・十六坪内で奈良国立文化財研究所が実施した国第 93・94 次調査では、地山上面（標高 56.7 m前後）で弥生時代後期の甕棺墓・貯蔵穴、奈良時代の条坊（八条条間北小路・東三坊坊間東小路）、東堀河・掘立柱建物・塀、寺院の基壇跡、溝、井戸、土坑などが検出されている。地山上面は、現地形面と同様に東から西へ緩やかな下り勾配になっている。

発掘区位置図（1/5,000）

本調査は八条四坊三坪内の土地利用の様相確認を目的として、道路予定地内に発掘区を設定して実施した。

Ⅱ　基本層序（図４・５）

発掘区内の層序は、旧耕土（厚さ 0.1 m（以下同じ））、床土（0.05 m）の下に、江戸時代の遺物を含む砂粒の多い褐色粘質土（0.1 ～ 0.2 m）、奈良時代の遺物を多く含む黒色粘質土（0.1 ～ 0.15 m）、土器片をわずかに



発掘区遺構平面図（1/200）

含む褐色粘質土層0.2～0.3 m）があり、その下で明黄褐色粘質土の地山や後述する旧河川の埋土となる土層が確認できる。

黒色粘質土の直上（標高：59.0 m）は、奈良時代後半から平安時代末の遺構面となり、地山及び旧河川の埋土の直上（標高：58.8 m）は、弥生時代中期から古墳時代の遺構面となる。旧河川については、一部を断ち割り、土層の堆積状態の確認を行うにとどめた。

Ⅲ　検出遺構

黒色粘質土直上を第１面、地山及び旧河川の埋土の直上を第２面として遺構検出を行った。遺構面ごとに検出遺構の概要を以下に述べる。

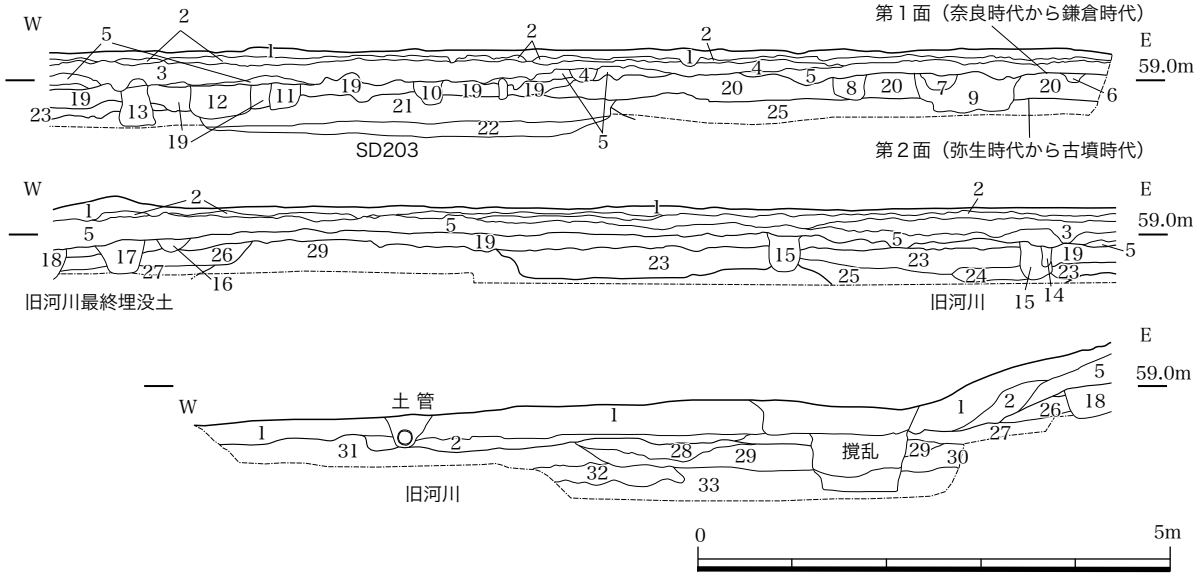
第１面　（奈良時代後半～平安時代前半の遺構面）

奈良時代後半の掘立柱建物１棟（ＳＢ01）・掘立柱列１条（ＳＡ02）、平安時代前半の掘立柱建物２棟（ＳＢ03・04）・小穴を検出した。

ＳＢ01・ＳＡ02　ＳＢ01は発掘区西寄りにある東西１間以上、南北２間以上の掘立柱建物である。柱掘方は、一辺0.5 mの平面隅丸方形で、深さは0.15～0.2 m。すべての柱穴内で柱痕跡と根固めの石を確認し、一部に礎板の石も認められた。柱間寸法は、南北1.8 m、東西2.4 mである。ＳＡ02は、ＳＢ01の南西にある南北１間以上の柱列で、建物か塀の一部になると考える。柱掘方は、一辺0.8 mの平面隅丸方形で、深さは0.4 m。北側の柱穴内では柱痕跡と根固めの石を確認した。柱間寸法は3.2 mである。これらの柱穴から８世紀後半の土器が出土。

柱穴の重複関係からＳＢ01はＳＡ02よりも古いことがわかる。

ＳＢ03・04　ＳＢ03は発掘区東寄りで検出した東西２間、南北３間以上の総柱建物である。柱掘方は、直径0.4 mの平面円形で、深さは0.05～0.2 m。柱間寸法



1	10YR５/2	灰黄褐色粘質土（旧耕土）
2	10YR５/１	褐灰色シルト（床土）
3	7.5Y4/１	褐灰色粘質土
4	10YR4/１	褐灰色粘質土（近世素掘溝）
5	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土
6	10YR4/１	褐灰色粘質土
7	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
8	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
9	7.5YR4/4	褐色粘質土（砂多く含む　柱穴）
10	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
11	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
12	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
13	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
14	10YR６/１	褐灰色粘質土（柱穴）
15	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
16	10YR4/１	褐葉色粘質土（柱穴）
17	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
18	10YR３/２	黒褐色粘質土（柱穴）
19	7.5YR4/２	灰褐色粘質土（砂多く含み、小片の土器が混じる）（遺物包含層　整地土？）
20	10YR２/１	黒色粘質土（遺物包含層　整地土？）
21	10YR３/２	黒褐色粘質土（細砂少量含む　SD203）
22	10YR３/２	黒褐色粘質土（粘性やや強く、小礫を少量含む　SD203）
23	10YR６/６	明黄褐色粘質土（旧河川）
24	2.5Y６/1	黄灰色微砂（旧河川）
25	10YR６/４	にぶい黄橙色細砂（旧河川）
26	2.5Y３/1	黒褐色粘土（旧河川最終埋没土）
27	2.5Y６/２	灰黄色微砂（旧河川最終埋没土）
28	５Y５/1	灰色細砂（旧河川上層）
29	５Y５/2	灰オリーブ色細砂（旧河川上層）
30	2.5Y４/2	暗灰黄色微砂（旧河川上層）
31	2.５Y５/2	暗灰黄色細砂（旧河川下層）
32	2.5Y４/1	黄灰色微砂（黒褐色腐葉土が互層に堆積　旧河川下層）
33	2.５Y５/2	暗灰黄色細砂（旧河川下層）

発掘区北壁土層図（1/80）

は東西・南北とも約 1.7 mである。ＳＢ 04 は発掘区中央部で検出した桁行１間以上、梁間２間の南北棟建物で、発掘区外北へ続く。柱掘方は、直径 0.5 ～ 0.7 mの平面円形で、深さは 0.15 ～ 0.4 m。柱間寸法は東西 1.9 m、南北 2.6 mである。ともに柱穴の埋土は黒褐色粘質土で、９～ 10 世紀の土師器片が含まれる。

第２面　（弥生時代中期～古墳時代中期の遺構面）

弥生時代中期から古墳時代中期の旧河川、弥生時代中期の土坑２基（ＳＫ 201・ＳＫ 202）・溝１条（ＳＤ 203）を検出した。

旧河川　南北方向の河道で、幅は 11 m以上ある。東肩は発掘区中央西寄りに位置し、西肩は発掘区内で確認できなかった。土層の堆積状態を確認するため、検出面から約１m下まで掘り下げた。埋土は大きく３層（最上層・上層・下層）に区分でき、最上層は黒褐色粘土、上層と下層は細砂や砂礫からなる。下層から弥生時代中期後半の土器、上層から古墳時代前期の土器、最上層から古墳時代中期末の土器が出土した。東肩から約 10 m東までの範囲に厚さ約 0.5 mの砂礫やシルトの堆積層が認められるが、この河道の埋没が進んだ段階で水流が河道外に及んだ結果であると考える。

旧河川掘り下げ箇所の堆積土層

ＳＫ 201　発掘区南東部にある平面円形の土坑で、西半部はＳＤ 203 により破壊されている。直径は約 2.0 m、深さは約 0.4 m。埋土からは弥生土器が出土したが、いずれも小片で詳細な時期は不明である。重複関係からＳＤ 203 より古いことがわかる。

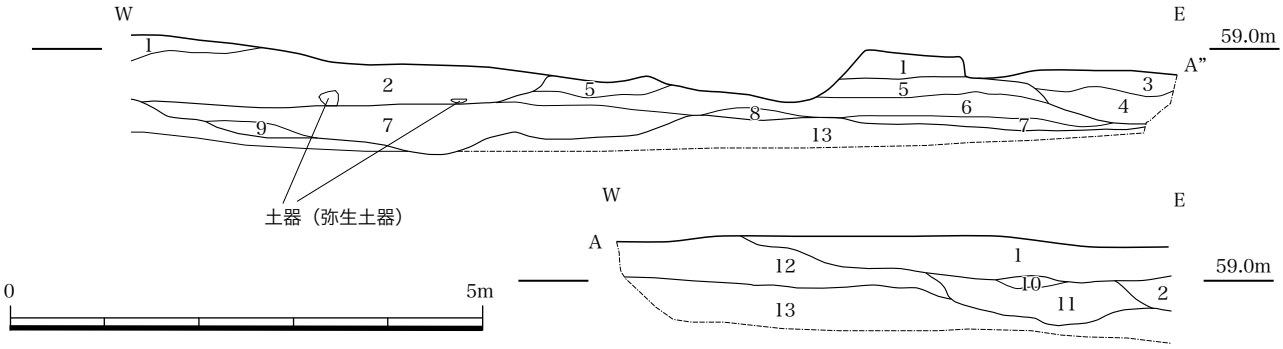
ＳＫ 202　発掘区東壁にかかる不定形の土坑である。南北は 0.8 m、東西は 1.0 m、深さは約 0.5 mある。出土遺物がないため時期は不明であるが、ＳＫ 201 と同時期の可能性が高い。底面の形状が不定形であることから、木の根株の痕跡の可能性が考えられる。

ＳＤ 203　発掘区東寄りにある北西から南東方向の溝である。東肩は地山、西肩は旧河川に関連する堆積層の直上から掘り込まれており、幅は 1.6 ～ 1.8 m、深さは約 0.3 mで、断面形は逆台形である。溝底の標高は約 58.4 m。埋土は主に黒褐色粘質土で、弥生時代中期後半の土器が多く出土した。

Ⅳ　出土遺物

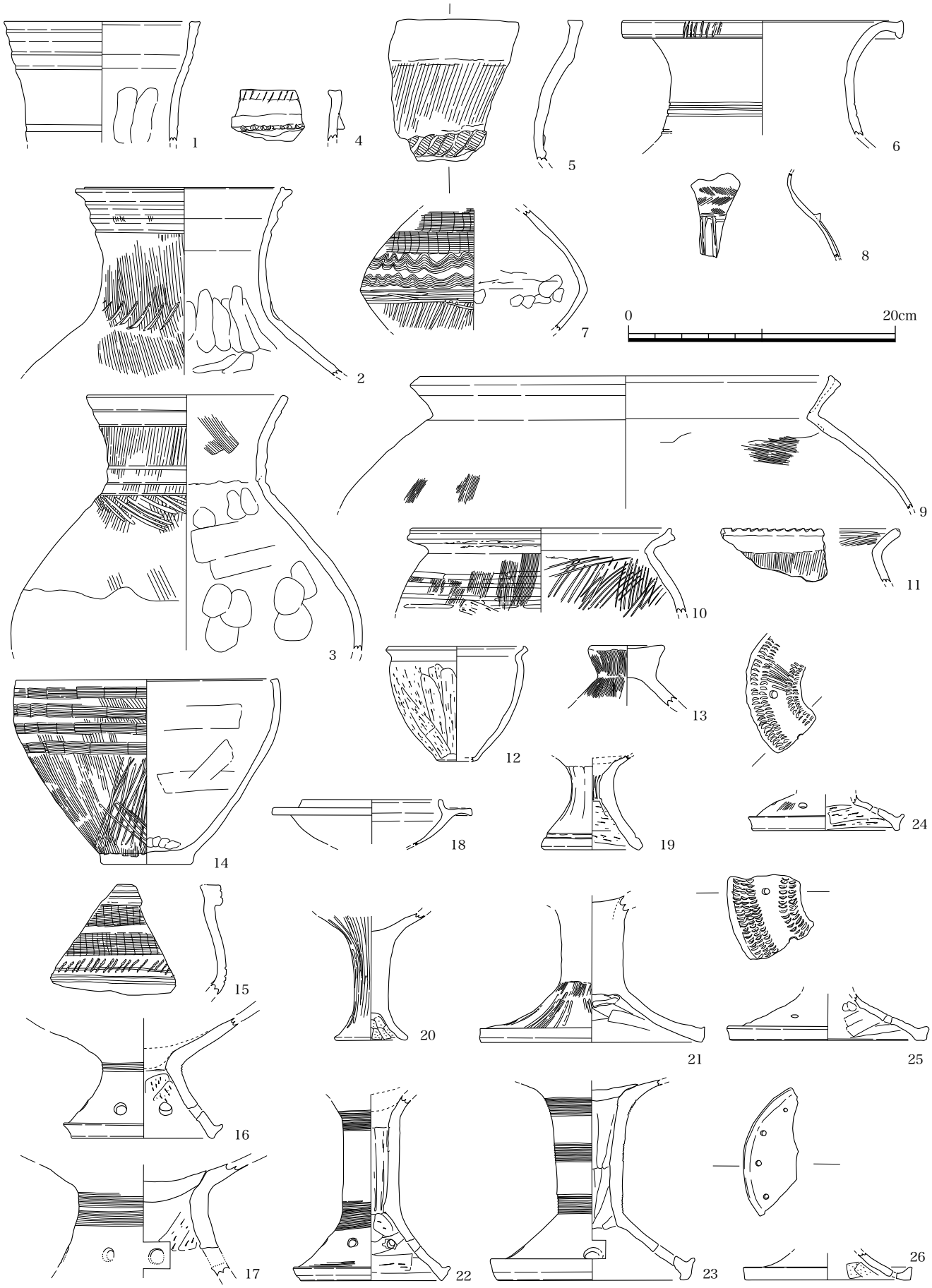
今回の調査では、遺物整理箱 13 箱分の遺物が出土した。主に、弥生土器・石包丁・石槍状石製品、５世紀代の土師器・須恵器、８世紀代の土師器・須恵器、９世紀代の黒色土器Ａ類がある。このうち、ＳＤ 203 と旧河川から比較的まとまって出土した遺物について、以下に述べる。

ＳＤ 203 出土土器（１～ 26）　ＳＤ 203 からは、遺物整理箱３箱分の弥生土器が出土した。器種は、壷、甕、鉢、高杯、蓋で、ローリングを受けているものは少ない。１～３は短頸壷である。外面は縦位ハケの後、口縁部外面にはナデにより２～３条の緩やかな段がつく。２の肩部にはヘラ状工具による右上がりの刺突文を７つ確認し

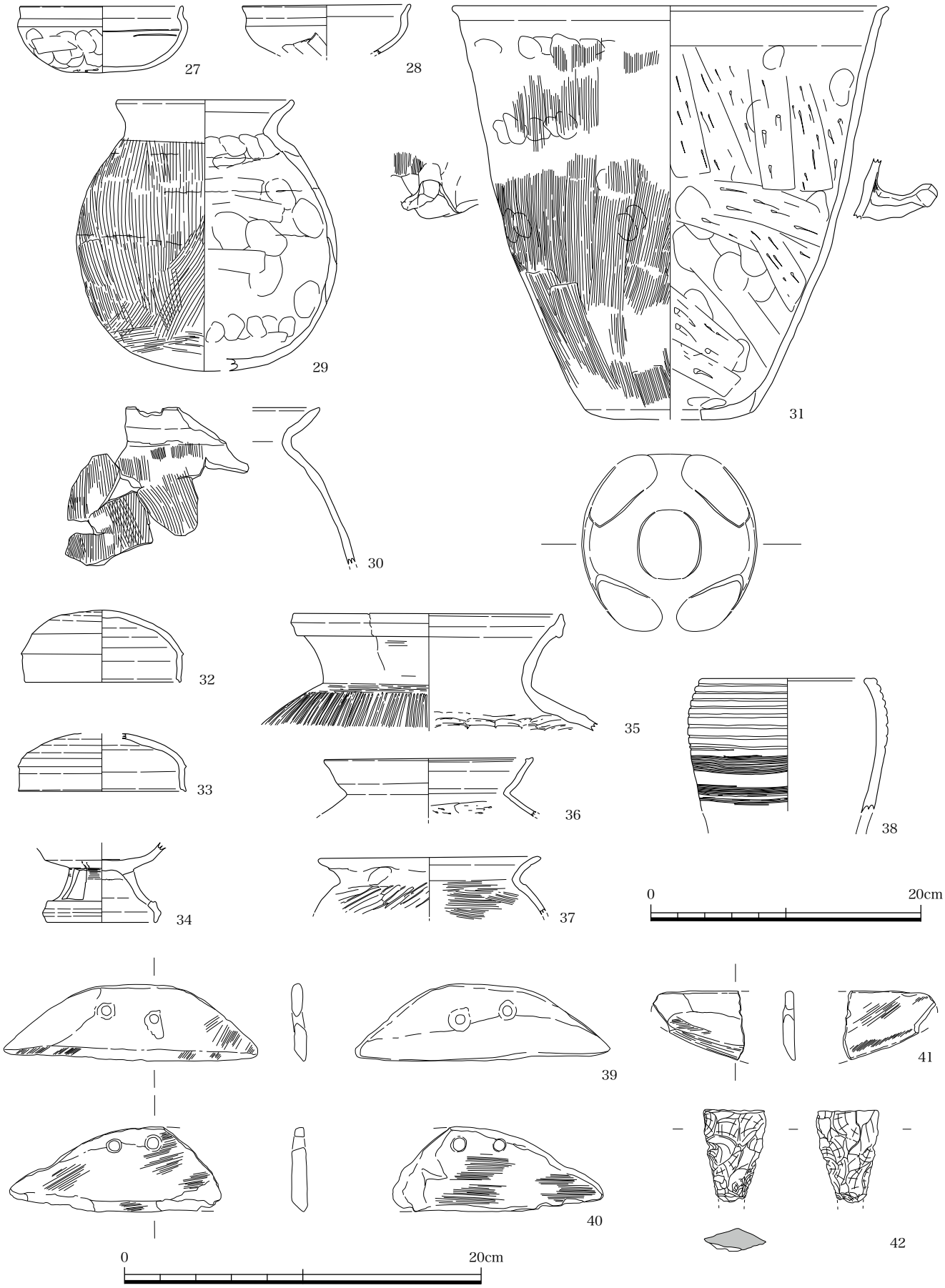


1	7.5Y 4 / 2	灰白色粘質土（細砂や小石が少し混じる）（遺物包含層）
2	2.5Y 4 / 1	黄灰色シルト（旧河川）
3	2.5Y 7 /2	灰黄色細砂（窪地堆積土）
4	2.5Y 7 /2	灰黄色細砂（窪地堆積土）
5	2.5Y 7 /2	灰黄色細砂（旧河川）
6	2.5Y 7 /2	灰黄色細砂（旧河川）
7	5Y 3 / 1	オリーブ黒色シルト（有機物多く含む）（旧河川）
8	5Y 6 / 1	灰色小礫（旧河川）
9	N 5 /	灰色大礫（旧河川）
10	5Y 7 /2	灰白色 細砂を多く含む粘質土（旧河川）
11	5Y 2 / 1	黒色シルト（粘性やや強い）（旧河川）
12	7.5Y 6 / 1	灰色砂礫（旧河川）
13	7.5Y 5 / 1	灰色粘土（鉄分沈着あり）（地山）

旧河川掘り下げ箇所の土層堆積図（1/80）



弥生土器（1/4）



土師器・須恵器（1/4）　石器（1/3）

た。４は直口壷の口縁部である。口縁端部に刻目、口縁部やや下には断面三角形の粘土紐突帯を巡らし、刻目を施す。5・6は広口壷で、5の頸部には粘土紐を貼り付け、櫛状工具（12歯）にて刻目を施す。７は細頸壷の体部である。胴部下半は縦位ミガキ、屈曲部に横位ミガキ。胴部上半には廉状文が３帯分と櫛描き波状文（７条一単位）が２帯施される。８の外面には棒状浮文が貼り付けられる。生駒山西麓地域からの搬入品と考えられる。９～12は甕である。10は口縁部を外反させ、端部を上方につまみ出す。体部内面には右上がりのハケ、体部外面には粗めの横位タタキの後、上半部に縦位ハケ、下半部にケズリを施す。11の口縁部内面には横位ハケ、端部に刻目を施し、体部外面には縦位ハケを施す。大和型甕である。12は小型品である。体部外面には縦位ケズリが施される。13は甕の蓋、14は直口鉢である。胴部外面に縦位ハケを施したのち、上半部には４帯の廉状文（７条一単位）、下半部には縦位ミガキを施す。廉状文の重複関係から右回りで施文されたことがわかる。15は台付鉢の鉢部である。口縁端部を肥厚させ、外面に２条の凹線を施す。鉢部の屈曲部にも３条のヘラ描き直線文を施し、外面上半には２帯の廉状文（13条一単位）と櫛工具（12歯）で右上がりの刺突文が施される。16・17は台付鉢の脚台部である。ともに鉢部と脚台の境に４～５条のヘラ描き直線文が、脚台部中央付近には透穴が施される。脚台部内面の調整はケズリである。鉢部との接合痕から円盤充填技法であることがわかる。18は水平縁高杯の杯部である。19～26は高杯の脚部である。22・23の脚柱部には、２帯（４条一単位×３周と９条一単位×２周）ないし３帯（８条一単位）の櫛描文、裾部中央に透穴が施される。24・25の裾部内面にはしっかりとしたケズリが施される。外面には２列ないしは３列の爪型状の刺突文が上下に各１帯施され、裾部中央には透穴がある。26の裾端部付近にも透穴が施される。

このように、一部大和Ⅴ様式のもの(26)も含まれるが、大和第Ⅲ様式（４・６・９・11・14・15・17・21）や大和第Ⅳ様式（２～７・12・18～20・22～25）に相当するものが大半を占めている。やや時期幅はあるものの、概ね、弥生時代中期後半のものと考えられる。

旧河川出土土器（27～38）　発掘区西側に広がる大きな旧河道であるが、まとまった遺物（27～35）を確認したのは最終埋没土である最上層からである。この他、上層（36）、下層（37・38）からも数点出土した。

27～31は土師器、32～35は須恵器である。27・28は杯である。27の肩部はやや張り出し、底部にはケズリにより平坦面がつくられる。口縁部はナデにより上方に引き上げられる。28の口縁部は緩やかに立ち上がり、端部を外側に引き上げ、端部内面に面をもたせる。29・30は甕で、31は甑、32・33は杯蓋である。32は天井部がやや丸みを帯び、口縁端部も直線的につくられる。33は天井部がやや平たく、口縁端部が外反する。34は高杯の脚である。脚部には長台形の３方透かしが施される。35は甕である。須恵器は、形態的特徴から田辺編年ＴＫ47～ＭＴ15型式に相当すると思われ、５世紀末～６世紀初頭頃に位置づけられる。土師器も同様の時期であると考える。

36は布留式甕である。器壁は0.2～0.3cmと薄く仕上げられ、口縁端部上面には面をもたせる。37・38は弥生土器である。37は甕で、体部内面にはハケ、外面には右上がりのタタキを施す。弥生時代後期に位置づけられる。38は大型の細頸壷の口縁部である。口縁部上半に９条のヘラ描直線文、下半に櫛描直線文を２帯以上施す。大和第Ⅳ様式に相当すると考える。

その他　このほか、包含層から緑泥片岩製石包丁３点（39～41）、ＳＤ203から石槍状石製品１点（42）が出土している。

Ⅴ　調査所見

今回の調査では、弥生時代から平安時代までの土地の利用状況を把握することができた。

南東から北西に流れる旧河川が、概ね埋没した弥生時代中期以降になると、微高地縁辺部では溝や土坑が形成され、その後、この上に奈良時代の遺物を含む黒色粘質土が堆積し、その直上で奈良時代から平安時代の宅地が営まれていたことがわかった。奈良時代から平安時代の宅地の基盤となっている黒色粘質土は、宅地化に伴って、地盤が軟弱な部分を埋め立てた整地土であると考えられる。

弥生時代に関しては、これまで確認されていなかった中期の遺構を検出することができ、周辺調査で明らかにされていた弥生時代後期以前にも土地の利用があったことが明らかになった。

また、これらの遺構を微高地縁辺部で確認していることから、微高地上に同時期の遺構がさらに広がっている可能性が高いと考えられる。（奥井智子）

参考文献

田辺昭三　1981「須恵器大成」
奈良国立文化財研究所　1976「平城京左京八条三坊発掘調査概報　東市周辺東北地域の調査」
奈良県立橿原考古学研究所　2003「奈良県の弥生土器集成」橿原考古学研究所研究成果第６冊
中野咲　2010「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論考33』

発掘区全景（東から）

ＳＤ 203 堆積土層（南から）

旧河川最上層土器出土状態（北東から）

ＳＤ 203（南から）

ＳＫ 201（西から）

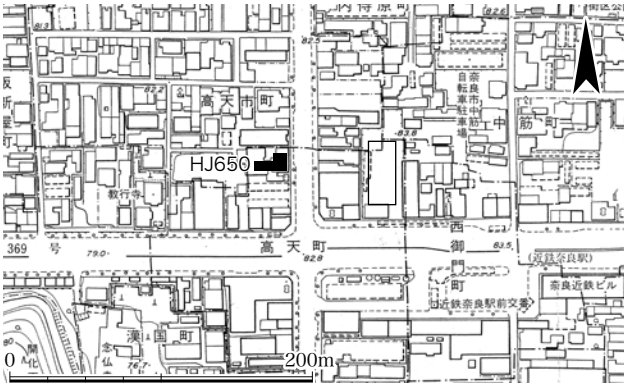
8．平城京跡（左京三条六坊七坪）・奈良町遺跡の調査　第 650 次

事 業 名　共同住宅新築	調 査 期 間　平成 23 年 7 月 21 日～ 9 月 1 日
届出者名　個人	調 査 面 積　158㎡
調 査 地　奈良市高天町 14	調査担当者　奥井智子

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京三条六坊七坪の南東部分に相当し、また中世以降は興福寺を中心に発展した奈良町遺跡の中央部分にあたる。地形的には春日断層崖西側に形成された段丘上の西縁部にあたり、東から西に向かって緩やかに傾斜する。

調査地周辺ではいくつかの調査が実施されている。本調査地から南西約 20 mのところで昭和 60 年度に県教育委員会が実施した調査では、奈良時代の溝、平安～鎌倉時代の建物・井戸、江戸時代の町屋跡などが検出されている。また南東約 250 mに位置する平成 18 年に本市教育委員会が実施した HJ 第 559 次調査は同じ高天町内にあたり、奈良時代の建物・埋納遺構、平安～江戸時代の井戸・土坑・溝など多数の遺構が検出された。さらに北へ約 260 mの北小路町内で昭和 62 年に奈良女子大学が行った調査では、奈良時代の建物・井戸・土坑・溝、鎌倉～室町時代の建物・井戸・土坑、江戸時代や近代初頭の土坑・溝などが検出されている。このようにいずれの調査でも、奈良時代から近代にいたるまで、各時期の遺構・遺物が多く確認され、特に中近世の遺構密度が高い地域であることが明らかとなっている。

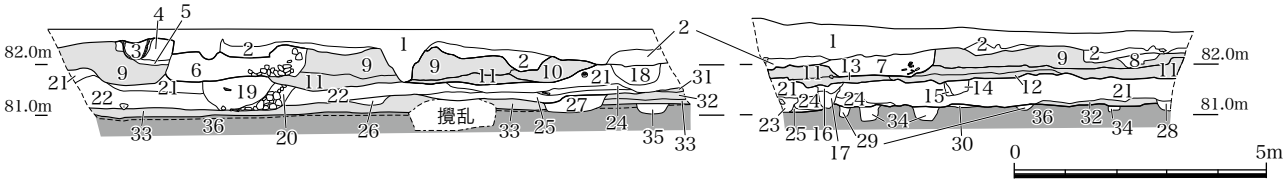


発掘区位置図（1/5,000）

今回の調査は、平城京左京三条六坊七坪内と奈良町遺跡の土地利用の様相確認を主な目的として、建物予定地内に発掘区を設定し実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、奈良時代以降の各時期の遺構や整地土などが重なり合い一様ではないが、おおよそ上から近代の造成土（厚さ 0.4 ～ 0.7 m）、江戸時代後半以降の遺物を含む暗灰黄色粘質土（Ⅰ層、0.3 ～ 0.4 m）、多量の土器や焼土塊、炭化物を含むにぶい黄褐色粘質土



1　10YR3/3 暗褐色粘質土（盛土）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（盛土）
3　10YR2/1 黒褐色粘質土（黄灰色石灰が帯状に堆積）
4　7.5YR7/6 橙色砂質土
5　10YR6/6 明黄褐色粘質土
6　10YR3/4 暗褐色粘質土（SX12）
7　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（土坑）
8　10YR5/2 灰黄褐色粘質土
9　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
10　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土（微砂少量含む）
11　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
（焼土層：焼土塊、炭化物、土器片を多く含む）
12　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
（焼土層：炭化物、土器片を含む）
13　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
（焼土層：炭化物、微砂含む）
14　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（柱穴）
15　10YR3/4 暗褐色粘質土（柱穴）
16　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（柱穴）
17　10YR3/2 黒褐色粘質土（土器片多く含む）（柱穴）
18　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土（土坑）
19　10YR3/3 暗褐色粘質土（SX12B）
20　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（SX12B 裏込め）
21　10YR3/2 黒褐色粘質土
22　10YR3/2 黒褐色粘質土（土器片を多く含む）
23　10YR3/1 黒褐色粘質土（明黄灰色粘質土が入る）
24　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（少量の地山が混じる）
25　2.5Y7/3 浅黄色粘質土（拳大の礫入る）
26　10YR3/2 黒褐色粘質土（土坑）
27　10YR3/2 黒褐色粘質土（SD118）
28　10YR3/3 黒褐色粘質土（少量の土器片と炭化物を含む）
29　10YR3/2 黒褐色粘質土
30　10YR3/2 黒褐色粘質土（土器片多く含む）（SD142）
31　2.5Y5/3 黄褐色粘質土
32　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（土器片多く含む）
33　2.5Y5/3 黄褐色粘質土（土器片多く含む）
34　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（柱穴）
35　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（奈良時代の建物西辺の柱穴）
36　10YR7/6 明黄褐色粘質土（礫を多く含む）（地山）

Ⅰ層：1・2 層　Ⅱ層：9 ～ 13 層　Ⅲ層：21 ～ 25 層
Ⅳ層：31 ～ 33 層　Ⅴ層：36 層

発掘区北壁土層図（1/150）

（Ⅱ層、厚さ 0.2 m）、黒褐色粘質土（Ⅲ層、厚さ 0.5 m）、黄褐色粘質土（Ⅳ層、厚さ 0.3 m）と続き、地山の浅黄橙色粘質土（Ⅴ層）に至る。Ⅱ層上面（標高 82.0 m）で江戸時代前半～後半、Ⅲ層上面（標高 81.8 m）で室町時代後半、Ⅳ層上面（標高 81.3 m）で平安時代後半、Ⅴ層上面（標高 81.0 m）で奈良時代後半の遺構をそれぞれ確認した。なお北壁中央部付近の一画で、Ⅲ層中に遺構面があることを確認したが、発掘区全面に及ぶものでなかった。

Ⅲ　検出遺構（図３）

検出した遺構は、奈良時代から江戸時代までの各時代の遺構、約 190 基である。調査の工程上、Ⅱ層上面の遺構をⅢ層上面（第１面）でほぼ同時に行い、その後、Ⅳ層上面（第２面）、Ⅴ層上面（第３面）の計３面の調査を行った。以下、時代ごとに遺構の概要を述べる。

奈良時代後半（第３面）　掘立柱建物１棟（ＳＢ 301）や多数の柱穴の他、土坑１基（ＳＫ 317）を確認した。

ＳＢ 301　発掘区中央部にある東西２間、南北２間の掘立柱建物である。柱間は 1.5 mでやや東に振れる。柱穴の規模は一辺 0.5 ～ 0.6 mの隅丸方形で、いずれにも柱痕が認められた。このうちの２基の柱穴（ＳＰ 312・316）では根固め石も確認した。

この他の柱穴はいずれも壁際で確認しているため、面的な広がりは不明である。概ね一辺 0.5 ～ 0.6 mの隅丸方形であり、柱穴間が 1.2 mか 1.8 mに収まることから、発掘区外に展開する可能性が高い。

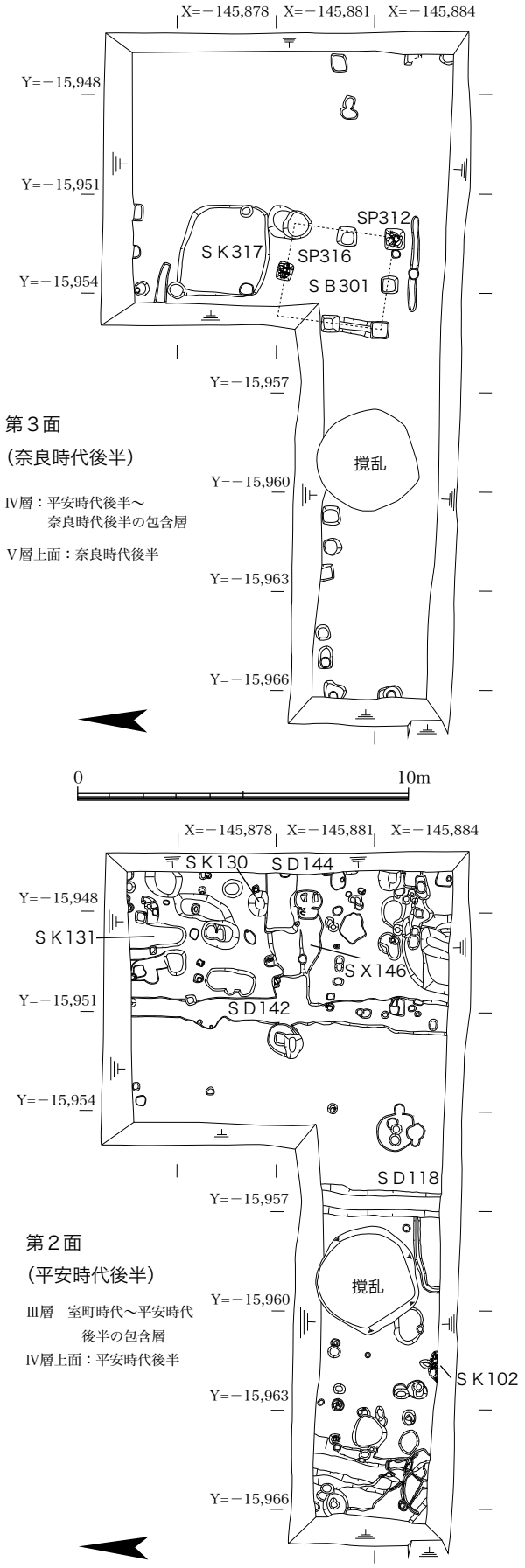
ＳＫ 317　一辺約 2.5 m、深さ 0.1 mの隅丸方形の土坑で、埋土から８世紀後半の土師器や須恵器が出土した。

平安時代後半（第２面）　柱穴、溝（ＳＤ 118・142・144）、土坑（ＳＫ 102・131）など多数確認した。

特に発掘区北東側にあるＳＫ 131 や南壁の西側寄りにある SK102 からは 11 世紀末から 12 世紀前半頃の土器がまとまって出土している。また発掘区中央で検出した並行する南北溝（ＳＤ 118・ＳＤ 142）からも同時期の土器が出土した。ＳＤ 118 と 142 に挟まれた東西約６mの空間と、これ以外の空間では遺構分布に大きな偏りが認められる。ＳＫ 130 やＳＸ 146 などがＳＤ 142 に直交して取りつく東西溝ＳＤ 144 により破壊されていることから、当初ＳＤ 142 によって東西に区画されていたが、後にＳＤ 144 を付け加えてＳＤ 142 以東を南北に分割し、土地の利用が行われたと考えられる。

室町時代後半（第１面）　土坑（ＳＸ 12B、ＳＫ 46・49）や溝などを多数確認した。

ＳＸ 12 Ｂ　発掘区西側の北壁沿いにある東西 3.5 m、



第３・２面発掘区遺構平面図（1/200）

南北3.1 m以上、深さ0.6 m以上の方形の石組土坑で、掘形の側面に沿って石組が1段分、残存する。この石組は、人頭大から一辺0.9 m大の石の面を揃えて据えつけられており、内法は東西2.0 m、南北2.4 m以上である。埋土からは16世紀後半の遺物が出土している。

ＳＫ49　調査区中央にある東西約6 m、南北約5 mの不定形の土坑である。出土遺物には時期差は認められないが、底部の形状から、いくつもの土坑が重複していたものと考えられる。またこの面を覆う焼土塊や炭化物を多く含むⅡ層には、唐津焼が認められないことから、16世紀後半から17世紀前半に形成されたものと考えられる。

江戸時代（第１面）　炉跡２基（ＳＸ02-1・02-2）、埋甕２基（ＳＸ03・18）、土坑（ＳＸ11・12）などを多数確認した。

ＳＸ02-1・02-2　発掘区北東部にある炉跡である。重複関係からＳＸ02-2が先行する。ＳＸ02-1の炉部分は直径0.8 m、掻き出し部分は北側に0.8 mのびる。ＳＸ02-2の炉部分は直径1.0 m、掻き出し部分は南側に0.9 mのびる。ともに炉部には焼成による硬化面が認められた。

第１面発掘区遺構平面図（1/200）

ＳＸ03・18　ともに瓦質土器を用いた埋甕である。特にＳＸ03は外側の容器より、一回り小さいものを中に据え入れており、入れ子状になっていた。

ＳＸ11　発掘区南西隅で検出した東西4 m以上、南北2.5 m以上、深さ0.5 mの不定形の土坑である。土器の他、魚や鹿の骨、釣り針なども多く含まれ、塵芥を処理するためのものと考えられる。埋土からは18世紀前半の遺物が出土している。

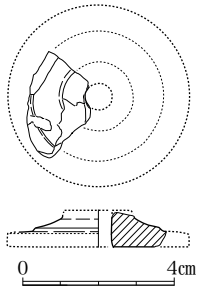
ＳＸ12　先述したＳＸ12Bの上面に形成されている石組土坑である。東西2.8 m、南北2.0 m以上、深さ0.6 m以上の方形の石組土坑で、掘方の壁面に沿って石組が約２段分、残存する。この石組は、ＳＸ12Bに比べるとやや小ぶりで、拳や人頭大の自然石を無造作に据える。内法は東西1.6 m、南北2.0 m以上である。埋土からは18世紀前半の遺物が出土している。

Ⅳ　出土遺物

今回の調査では、奈良時代から江戸時代までの各時期の遺物が、遺物整理箱78箱分出土した。奈良時代の土師器や須恵器の他、土師器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、国産磁器、輸入陶磁器、丸瓦、平瓦、桟瓦、石製品（紡錘車形・五輪塔の地輪）などがあり、ここでは主要なものを記す。

ＳＫ317からは、８世紀中頃〜後半の土師器杯、皿、甕、須恵器杯、杯蓋、壺、甕などが出土した。ＳＫ102からは瓦器椀（川越Ⅰ－Ｄ）、土師器皿、白磁碗、ＳＫ131からは瓦器椀（川越Ⅱ－Ａ）、土師器皿、土師器羽釜が出土し、他の遺構からも概ね同時期の11世紀末〜12世紀前半頃の土器が出土した。ＳＸ12Bからは土師皿、土師器羽釜、瓦質土器擂鉢、青磁碗、鞴の羽口などが出土した。ＳＸ11からは、土師皿、焙烙、瓦質土器擂鉢、瓦質土器火鉢、信楽焼擂鉢などの他、焼塩壺（「御壷塩師堺湊伊織」の刻印あり）や貝、骨（魚・鹿など）、釣針などが出土した。

ＳＫ49からは紡錘車形石製品が１点出土した。長さ2.8㎝・高さ0.9㎝の小片で、中央に復原径0.7㎝の穿孔がある。周縁と上面が残存しないため、正確な大きさは不明。底面は平坦である。同心円状に２つの段をめぐらせている。石材は軟質の緑色凝灰岩で、淡緑灰色を呈する。



紡錘車形石製品（1/2）

Ⅴ　調査所見

調査地内は、奈良時代後半、平安時代後半、室町時代後半から江戸時代後半に至るまで整地作業を繰り返しな

がら、宅地として利用されてきたことがわかり、平城京から奈良町遺跡への土地利用の変遷の一端を知ることができた。特に、中世の土地区画の様相を確認できたことは大きな成果である。今回の調査では 11 世紀末～12 世紀前半に遺構が急増していることから、土地利用の画期がこの時期にあることがわかった。また遺構の重複関係から少なくとも２時期の変遷が認められ、土地利用の推移を知ることができる。周辺の調査でも同時期の遺構が多数確認されており、平安時代後半から鎌倉時代にかけて、遺構が増加する傾向が認められる。従来、中世奈良の形成は治承４（1180）年の南都焼き討ちを契機とすることがいわれてきたが、この事象よりも早い段階から土地区画を伴う宅地として利用されていた可能性が高く、中世前半期における奈良の町割りを検討するうえでも良好な資料といえよう。ただし調査地を含む左京六坊の条坊想定位置については、いくつかの説（井上 2004、鐘方 2009）があるものの明らかではない。このため、六坊内の坪の大きさについては、本調査地を含む五～八坪、もしくは十三～十六坪の大きさが変則的になる可能性があり、中世奈良の町割りの基礎となった平城京の条坊との関係については検討が必要である。

（奥井智子）

参考文献

井上和人　2004「古代都城制地割再考」『古代都城制条里制の実証的研究』
鐘方正樹　2009「率川古墳と外京条坊および出土埴輪」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 18（2006）年度』

発掘区（第２面）全景（北西から）

発掘区（第１面）全景（北から）

ＳＢ 301（南から）

ＳＸ 12（南西から）

9．平城京跡（左京四条六坊一坪）・奈良町遺跡の調査　第 651 次

事 業 名　共同住宅新築	調 査 期 間　平成 23 年 8 月 18 日～ 10 月 26 日
届出者名　大和ハウス工業株式会社	調 査 面 積　410.5㎡
調 査 地　奈良市下三条町８－１	調査担当者　中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条六坊一坪の北半部にあたり、さらに中近世の遺跡である奈良町遺跡内にある。下三条町は、江戸時代には町方と百姓方が混在する地域で、奈良町内では周辺部にあたる。

周辺の発掘調査では、三条通り沿いの調査地で平安時代後期から江戸時代までの各時期の遺構が高密度で検出される一方、調査地の南側の市ＨＪ第 251 次調査では、平安時代前半に埋没する斜行する浅い流路と、小柱穴を数個検出したのみで、遺構密度は希薄である。

調査地は三条通りの南に面した南北に細長い土地で、東西２筆に分かれ、東側が８番地、西側が９番地となる。９番地は、昭和 20 年まで旅館で、戦後すぐに映画館の友楽座が８・９番地に建てられ、昭和 44 年に映画館が焼失した後、銀行となったことがわかっている。

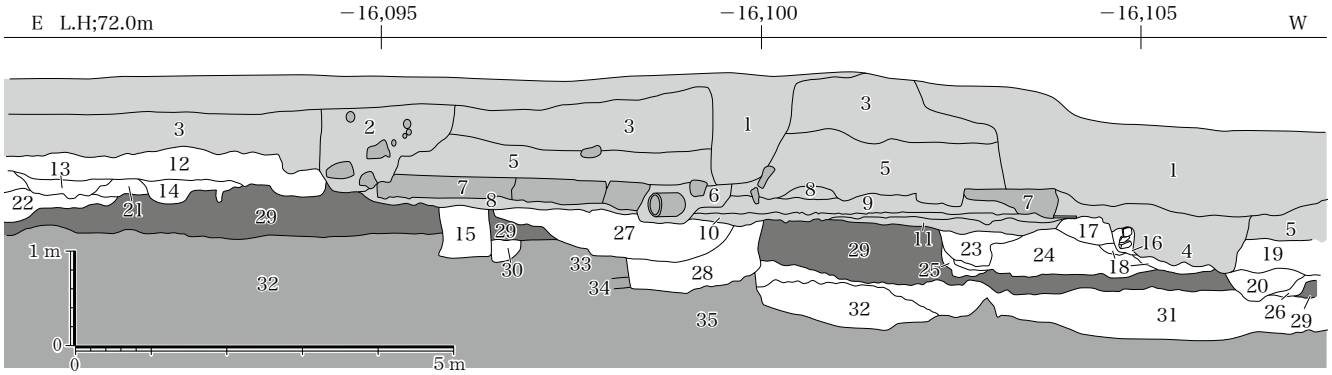
調査地の東半には鉄筋コンクリートの建物が２棟南北に建っていて、建物解体時の立会調査では、建物基礎が地山面まで達していることが確認できたが、建物の外側部分では各時期の遺構面が残存していることが判明した。このため、既存建物部分を避けて南北に長いＬ字形の発掘区を設定し、奈良時代以降の土地利用の解明を目的として調査を行った。

発掘区位置図（1/5,000）

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、上から近現代の建物解体後の造成土、江戸時代の整地土、室町時代の整地土、平安～鎌倉時代の整地土となり地山となる。地山上面は北東側から南西側に向かって低くなる。発掘区南半の北東隅が最も高く標高 71.4 ｍで、南西隅が最も低く標高 70.2 ｍである。地山は橙色系の砂礫層が主体で、南西部分にのみ明青灰白色粘土層がひろがる。

発掘区内各所では削平と整地が複雑に行われており、各時期の整地土のあり方は各所で様々である。また南半部では、敷地中央の８・９番地の境界より西側が近代に削平されている。このため南西部では、近代の造成土直



1　解体時盛土
2　淡茶灰色土(埋設管掘形)
3　真砂土
4　暗灰褐色土(煉瓦･瓦含む)
5　解体時盛土(友楽座解体時)
6　暗灰褐色土(土管掘形)
7　コンクリート基礎(友楽座?)
8　茶灰色土
9　灰褐色土(基礎掘形)
10　明灰色砂(基礎掘形)
11　暗灰褐色土(基礎掘形)
12　暗灰褐色土
13　灰褐色土(土坑埋土)
14　灰褐色土(土坑埋土)
15　暗灰褐色土(ＳＫ36埋土)
16　灰褐色土(ＳＸ37掘形)
17　暗オリーブ褐色土
18　淡茶灰色砂質土
19　暗灰褐色粘質土(ＳＸ37埋土)
20　黒褐色粘質土(ＳＸ37埋土)
21　茶褐色土(室町時代整地層)
22　青灰色土(黄褐色土多く含む)
23　暗茶褐色粘質土(土器多く含む)
24　淡青灰色粘質土(ＳＫ21埋土)
25　暗灰色粘質土(ＳＫ21埋土)
26　淡青灰色粘質土(ＳＫ21埋土)
27　暗灰色土
(青灰白色粘土ブロック含む、ＳＫ16埋土)
28　暗灰白色粘土
(灰褐色土多く含む、ＳＫ15埋土)
29　暗青灰白色土(平安時代整地層)
30　暗オリーブ灰色土(ＳＢ01柱穴)
31　青灰白色粘土(ＳＸ03埋土)
32　暗褐色土(ＳＸ03埋土)
33　明黄橙色粘土
34　淡灰褐色砂礫
35　明青灰白色粘土

発掘区南壁土層図（横 1/100・縦 1/80）

下で鎌倉時代の遺構面となる。

遺構検出は、室町時代の整地土上面（上層）と地山上面（下層）で行ったが、室町時代の遺構は上層での検出が困難であったため、多くが下層で検出している。

Ⅲ　検出遺構

検出遺構には、土坑、溝、柱穴が約 420 基あり、奈良～大正時代までの各時期のものがある。主要遺構の詳細は一覧表にし、各時代ごとに概要を記す。

奈良～平安時代前半の遺構

掘立柱建物１棟（ＳＢ 01）、土坑２基（ＳＫ 02・07）粘土採掘土坑群（ＳＸ 03、ＳＫ 04 ～ 06）がある。

ＳＢ 01 は桁行き４間（7.5 m）以上、梁間２間（2.1 m）以上の東西棟建物の北西部分と考えられ、発掘区外東と南につづく。柱間寸法は、2.5 m等間である。柱穴の規模と形態から、中規模の建物と推定できる。出土遺物は少ないが、柱穴の形態から奈良～平安時代前半のものと考えられる。

ＳＫ 02 は後述する江戸時代の土坑ＳＫ 24 の底で検出した土坑である。上半が削平されており、残存部分は深さ約 0.2 mだが、奈良時代の遺構面上からでは、深さ約 0.8 mとなる。

粘土採掘土坑群は、発掘区南西部に分布する明青灰白色粘土を採掘したと考えられる土坑群である。ＳＸ 03 は複数の土坑が重複しており、個々の形態や規模は不明。８世紀後半～末の土器が出土した。ＳＫ 04 ～ 06 はいずれも平面隅丸長方形で、出土土器は少量であるが、ＳＸ 03 と同時期のものと考えられる。

平安時代後半～鎌倉時代の遺構

遺構一覧表１（下層）

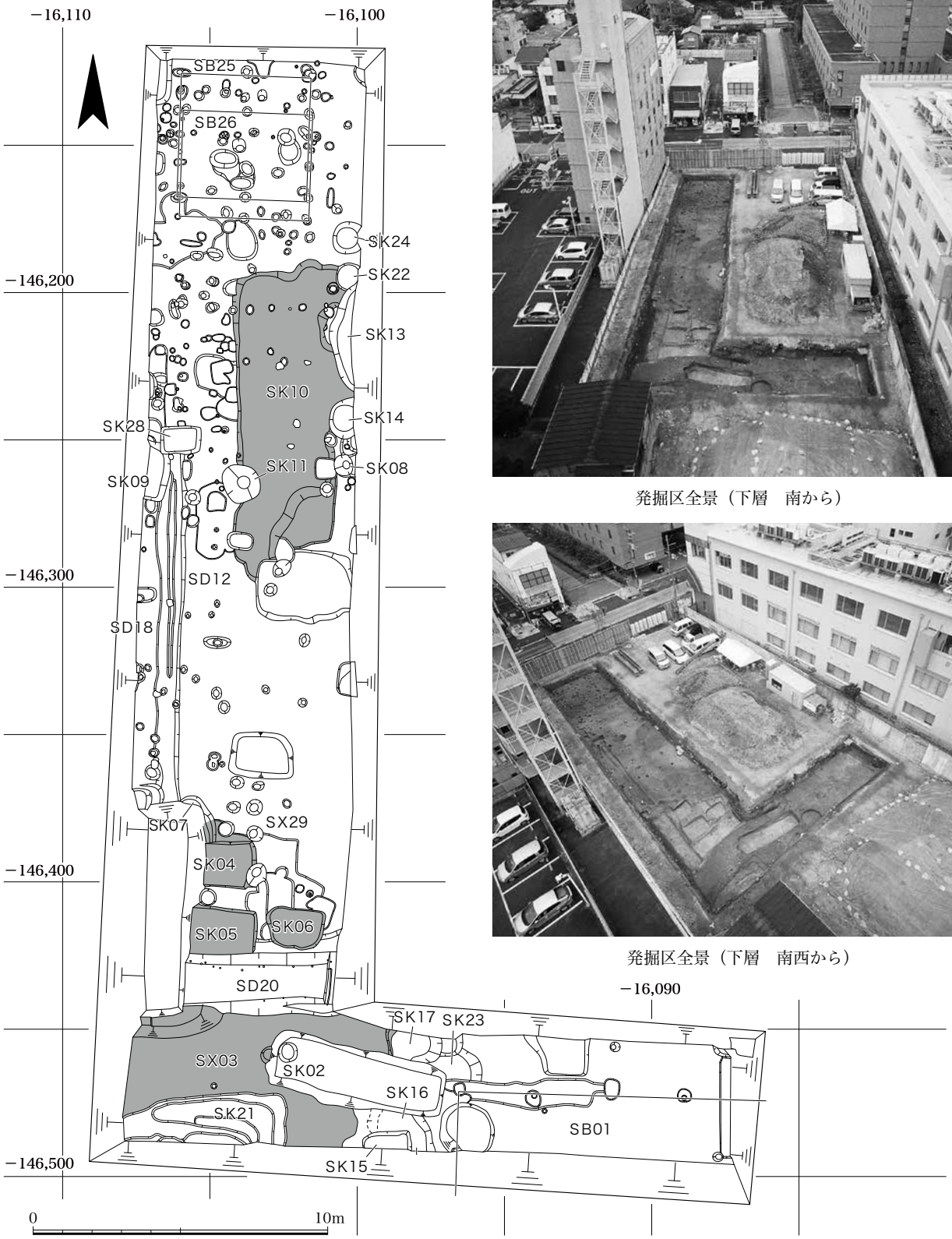
遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SK02	円形	径約 0.6	約 0.8	８世紀後半～末	土師器椀・皿・壷・甕、須恵器杯・甕	
SX03	不整形	東西 9.2 以上×南北 4.6 以上	約 0.5 ～ 0.6	８世紀後半～末	土師器椀・杯・皿・壷・甕・竈、須恵器杯・蓋・盤・壷・甕・ミニチュア壷、製塩土器、丸瓦、平瓦、砥石１	
SK04	隅丸長方形	東西 1.6 以上×南北約 2.2	約 0.5	８世紀後半～末	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	
SK05	隅丸長方形	東西 2.3 以上×南北 1.6 以上	約 0.4	８世紀後半～末	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	
SK06	楕円形	東西約 2.0×南北約 1.4	約 0.4	８世紀後半～末	土師器椀・甕	
SK07	楕円形？	東西約 0.7×南北 0.4 以上	約 0.15	10 世紀前半	土師器皿、丸瓦、	
SK08	楕円形	東西約 0.6×南北約 0.7	約 0.5	11 世紀中～後	土師器皿、黒色土器Ｂ類小椀、灰釉陶器鉢	
SK09	不整長方形？	東西 0.9 以上×南北約 2.0	約 0.5	12 ～ 13 世紀	土師器皿、瓦器椀、須恵器甕、輸入陶磁器（白磁碗）	
SK10	不整長方形	東西約 3.3×南北約 10.5	約 0.2	12 世紀前半	土師器皿・羽釜・高台付皿、瓦器椀・皿、黒色土器Ｂ類椀、白色土器皿、輸入陶磁器（白磁碗）、軒丸瓦１、丸瓦、平瓦、鉄滓、	
SK11	円形	径約 1.3	約 1.0	12 世紀中頃	土師器皿、ロクロ土師器皿、瓦器椀・皿、須恵器（東播産鉢）、丸瓦、平瓦、	
SD12	南北溝	幅約 0.3	約 0.1	12 世紀中以降	土師器皿・羽釜、須恵器（東播産鉢）	
SK13	楕円形	東西 0.8 以上×南北約 3.7	約 0.4	13 世紀	丸瓦、平瓦、砥石１点、	
SK14	楕円形	東西 0.9 以上×南北約 1.3	約 0.4	13 世紀頃	土師器皿、瓦器椀、輸入陶磁器（白磁碗）	
SK15	隅丸方形？	東西約 1.65×南北 0.7 以上	約 0.8	13 世紀前半頃	土師器皿	
SK16	不整楕円形？	東西約 2.1×南北 1.5 以上	約 0.5	13 世紀末	土師器皿・高台付皿・羽釜、瓦質土器鉢類、国産陶器（東海産鉢、常滑産甕）、輸入陶磁器（青磁碗、黄釉陶器盤）、丸瓦、平瓦、砥石２点、鞴羽口、	上層で検出
SK17	不整楕円形	東西約 1.8×南北 1.0 以上	約 0.7	13 世紀末	土師器皿、瓦器椀、国産陶器（産地不明）、輸入陶磁器（白磁皿）、平瓦	
SD18	南北溝	幅約 0.4	約 0.1	13 世紀末	土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、輸入陶磁器（白磁碗、青磁皿）、鉄釘、不明銅製品	
SK19	不整楕円形	東西約 0.8×南北約 0.35	約 0.15	13 世紀末	土師器皿・羽釜、国産陶器（常滑産甕）、平瓦	上層で検出
SD20	東西溝	幅 2.2×長さ 8.0 以上	約 0.7	14 世紀後半	土師器皿・高台付皿・羽釜・鍋、瓦器椀・皿、瓦質土器浅鉢、須恵器（東播産鉢・甕）、国産陶器（東海産鉢、常滑産甕）、輸入陶磁器（白磁碗、青磁碗、黄釉盤）、丸瓦、平瓦、砥石１、漆椀？、箸、桃種、	13 世紀頃の土器も多く出土
SK21	不整長方形？	東西 5.5 以上×南北 1.7 以上	約 0.4	14 世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器浅鉢、須恵器（東播産鉢）、東海産陶器鉢、軒丸瓦１（巴紋）、丸瓦、平瓦、砥石１、鉄滓、	
SK22	整楕円形	東西 0.8 以上×南北 0.9 以上	約 0.2	14 世紀後半	土師器皿・羽釜、国産陶器（東海産鉢、瀬戸産花瓶）、輸入陶磁器（青磁碗）、丸瓦、平瓦	
SK23	不整楕円形	東西約 2.1×南北 1.5 以上	約 0.5	15 世紀前半	土師器皿・羽釜、国産陶器（常滑産甕）、丸瓦、平瓦	
SK24	円形	径約 1.1	約 0.4	15 世紀前半	土師器皿、瓦器椀（混入）、白磁碗	
SD27	Ｌ字形溝	幅 0.25 ～ 0.3×長さ 4.8 以上	約 0.15	16 世紀中～後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢類・土管、国産陶器（瀬戸美濃産皿、常滑産甕）、輸入陶磁器（白磁皿）、丸瓦、平瓦、鉄釘、砥石１点、鞴羽口、鉄滓	上層で検出
SK28	隅丸方形	東西約 1.3×南北約 0.9	約 0.5	16 世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・深鉢、備前産陶器甕、輸入陶磁器（青花碗）、丸瓦、平瓦、砥石２、漆椀？桃種	

南北溝２条（ＳＤ12・18)、土坑（ＳＫ08～11・13～17・19～23)、小柱穴多数がある。

南北溝ＳＤ12・18は発掘区北半で途切れているものの、区画溝と考えると溝を境に東西２つの区画が想定

発掘区全景（下層　南から）

発掘区全景（下層　南西から）



発掘区遺構平面図（下層　1/200）

できる。また土坑ＳＫ 10 は、その西肩が溝と平行することからも、この区画内に収めて掘られているように見える。遺構の年代は 12 世紀前半～ 13 世紀末で、この時期には東西に並ぶ２つの長細い区画が発掘区内に存在したことが想定できよう。小柱穴が発掘区北側に集中することから、現在の三条通り沿いに面した南北に細長い宅地があり、掘立柱建物が道路側に配置されていたことがわかる。しかし、現在の三条通りは道路を拡幅しており、当時の建物と道路の関係は不明で、近世の町屋のような景観が中世にさかのぼるものかはわからない。

室町時代の遺構

掘立柱建物２棟（ＳＢ 25・26)、溝２条（ＳＤ 20・27)、土坑（ＳＫ 21 ～ 24・28)、埋甕遺構１（ＳＸ 29)、小柱穴多数がある。

ＳＢ 25 は､東西２間以上（4.4 m)､南北２間（4.2 m）で、柱間寸法は、桁行が 2.2 m等間、梁行が 2.1 m等間である。ＳＢ 26 は東西棟建物と考えられ､東西２間(4.4 m)､南北２間（3.6 m）である。柱間寸法は、桁行が 2.2 m等間、梁行が 1.8 m等間である。いずれも柱穴底には礎石を据えており、他の柱穴との識別は容易である。

ＳＤ 20 は断面逆台形の東西方向の溝で、西側を江戸時代の土坑で壊され、東側は発掘区外に続く。底には北岸に沿って杭跡があり、北岸を護岸していたと考えられる。この溝以南には小柱穴がほとんど存在しないことから､三条通りに面した宅地の南端を示す溝と考えられる。

ＳＤ 27 は焼土で埋まるＬ字形の溝で、溝の西側には石組みが１段分ある。上層で確認した。

ＳＸ 29 は、径 0.4 ～ 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mの平面円形の土坑が、東西２列、南北４列にならぶ土坑群で、形態から埋甕遺構と考えられる。12・13 世紀の土器が少量出土するのみで詳細な時期は不明だが、層位関係から室町時代以前のものである。

江戸時代の遺構

土坑９基（ＳＫ 30 ～ 36・38)、埋甕遺構１基（ＳＸ 39)、石組遺構１基（ＳＸ 37）がある。

発掘区北半のＳＫ 31 ～ 35 は焼土で埋まる平面円形土坑で、ＳＫ 31 以外は鉄滓の他に出土遺物が少なく、詳細な時期は不明。ＳＫ 31 からは 17 世紀後半の土器がまとまって出土しており、その他の土坑もおおよそ江戸時代前半のものと想定される。

ＳＫ 30・36・38 は、宅地奥に掘られた塵芥処理用の土坑と考えられ、多量の土器と瓦が出土した。

ＳＫ 30 は 17 世紀中頃のもので、ほぼ垂直に掘り込まれ、底には木屑を多く含む暗灰色粘質土が堆積する。

遺構一覧表２（上層）

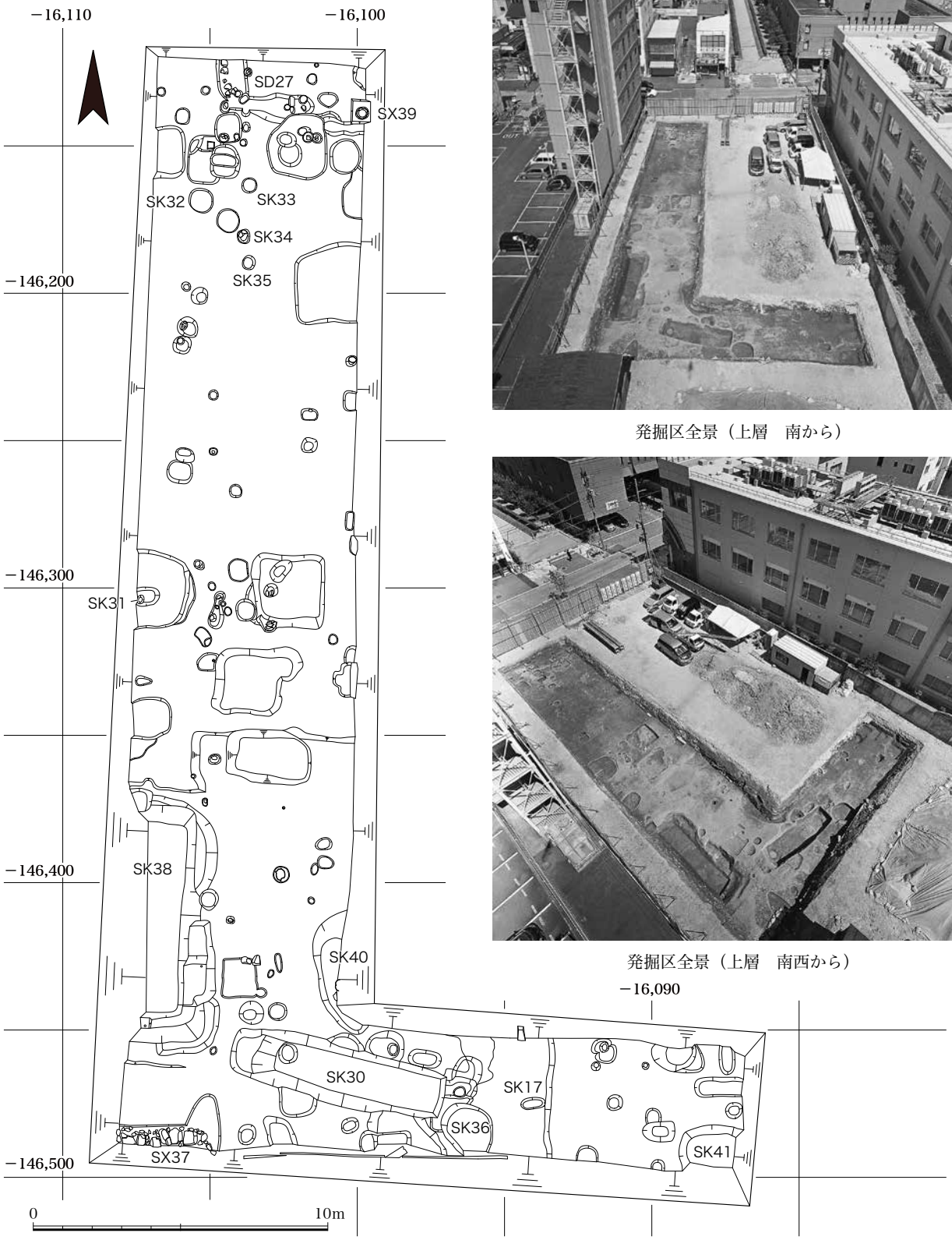
遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SK30	長方形	東西約 7.4× 南北約 2.0	約 1.0	17 世紀中頃	土師器皿・高台付皿・羽釜・鍋・浅鉢（和泉産？)、瓦質土器深鉢、浅鉢・擂鉢・壷・土管、国産陶器（信楽産擂鉢・壷、肥前産椀・小椀・皿・片口、瀬戸美濃産椀、備前産壷・瓶、丹波産擂鉢)、国産磁器（肥前産碗・皿・小杯)、輸入陶磁器（白磁皿、青磁碗、青花碗･皿)、焼塩壷、円盤形土製品、軒丸瓦６（巴紋)、軒平瓦１、丸瓦、平瓦、砥石５点、煙管？、鉄釘、鞴羽口、炉壁、鉄滓、木簡、木製品（漆椀、漆塗匙、箸、曲物、下駄、扇子)、檜皮、紐、桃種、梅種、貝殻、獣骨、鱗	
SK31	楕円形	東西 0.8 以上 × 南北約 0.6	約 0.2	17 世紀後半	土師器皿・羽釜・炮烙、瓦質土器深鉢・火消壷・土管、国産陶器（瀬戸美濃産椀、肥前産椀・皿、信楽産擂鉢・壷)、国産磁器（肥前産碗・皿)、丸瓦、平瓦、砥石１点、鉄滓	埋土は焼土
SK32	円形	径約 0.8	約 0.2	17 世紀頃？	土師器皿、瓦質土器浅鉢、輸入陶磁器（青磁碗)、平瓦、砥石６点、鞴羽口、鉄滓	埋土は焼土
SK33	円形	径約 0.5	約 0.2	17 世紀頃？	土師器皿、鉄滓	埋土は焼土
SK34	円形	径約 0.4	約 0.1	17 世紀頃？	土師器皿、鉄滓	埋土は焼土
SK35	円形	径約 0.4	約 0.1	17 世紀頃？	土師器皿	埋土は焼土
SK36	円形	径約 1.7	約 0.6	18 世紀中頃	土師器皿・炮烙、瓦質土器浅鉢・深鉢・土管、軟質施釉陶器ひょうそく、国産陶器（信楽産擂鉢･壷、肥前産火入、瀬戸美濃産香炉)、国産磁器（肥前産碗･皿･鉢)、青花鉢、土人形、軒丸瓦２（巴紋)、丸瓦、平瓦、桟瓦、ガラス管、金網、鋼線、不明鉄製・銅製品、鉄滓	
SX37	東西方向石組	東西 3.4 以上 × 南北 0.8 以上	約 0.4	18 世紀以降	土師器皿、瓦質土器鉢類・羽釜、国産陶器（信楽産鉢)、国産磁器（肥前産碗)、丸瓦、平瓦	
SK38	長方形	東西 2.4 以上 × 南北約 8.4	約 1.3	19 世紀中頃	土師器皿･炮烙、瓦質土器鉢類･焜炉･土管、国産陶器（信楽産擂鉢･椀･皿･灯明皿･灯明受・蓋・鉢・鍋・花瓶・壷・甕、瀬戸美濃産椀・皿、堺産擂鉢)、国産磁器（肥前産碗・皿・小碗・香炉・瓶、産地不明碗)、煉瓦、土人形、円盤形土製品、軒丸瓦４（巴紋)、軒片瓦４（橘紋)、丸瓦、平瓦、桟瓦、砥石３点、石材（凝灰岩）２点、ガラス製簪、銅鋲、銅線、不明銅製品、鞴羽口、木製品（漆椀、曲物)、桃種、貝殻	明治時代に埋没か？　18 世紀後半の土器類も多く出土
SX39	円形	径約 0.45	約 0.4	19 世紀中頃？	国産陶器（信楽産甕)、平瓦、桟瓦、ガラス瓶	径約 0.36m、高さ 0.4m 以上の信楽産陶器甕を埋設
SK40	楕円形	東西 2.0 以上 × 南北約 4.0	約 0.9	20 世紀初頭	瓦質土器鉢、国産陶器（信楽産鍋・蓋・擂鉢・甕、堺産擂鉢、珉平産皿、赤膚産？椀・徳利、産地不明鉢・急須・御神酒徳利)、国産磁器（肥前産碗、産地不明碗・皿・蓋・急須・段重)、煉瓦、土人形、丸瓦、平瓦、桟瓦、ガラス瓶、鉄釘、銅鋲、金属製スプーン、木製品（下駄）	
SK41	楕円形	東西約 2.2× 南北約 1.7	約 0.9	20 世紀初頭	国産磁器（産地不明碗･蓋･蓋物･急須)、国産陶器（産地不明椀･鉢･壷)、軒桟瓦１、丸瓦、平瓦、ガラス瓶、鉄釘、不明鉄製品	

大量の土器類と瓦類が出土した。中国産磁器や泉州堺産の焼塩壷が複数出土し、遺物の質の高さがうかがえる。

ＳＫ 36 は、18 世紀中頃のもので垂直に掘り込まれる。土器類が遺物整理箱２箱分出土したが、完形で出土する

発掘区全景（上層　南から）

発掘区全景（上層　南西から）



発掘区遺構平面図（上層　1/200）

土師器皿が多い。

ＳＫ 38 は 19 世紀中頃のもので、断面台形に掘りこまれる。底から約 0.6 m分が細砂を含んだ暗灰色粘土で埋まり、当初開口していたと考えられる。その上は暗灰褐色土で一度に埋まる。

ＳＸ 37 は発掘区南西隅の石組遺構である。南側に面を揃えており、発掘区側は裏込め部分と考えられる。東西約 1.2 m分を検出し、発掘区西側に続く。石は１段分を検出したが、掘方の深さから２段以上はあったと想定される。敷地南端を画する遺構と考えられる。19 世紀頃のものと考えられる。

明治時代以降の遺構

土坑２基（ＳＫ 40・41）がある。いずれも 20 世紀初頭のものと考えられる。ＳＫ 41 からは、ガラス瓶が多量に出土した。ガラス瓶には、「嘉納合名會社　灘御影」と打ち出したものが１点ある。現在の白鶴酒造が、明治 30 年代から昭和 22 年まで使用していた会社名であり、遺構の年代がわかる。ＳＫ 40 からは、国産陶器（産地不明）の朱泥の急須が５個体以上まとまって出土した。重複関係から友楽座映画館の基礎より古く、それ以前の旅館関係の遺物と推定される。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物には、古墳・奈良～大正時代までの各時期のものがある。土器類が遺物整理箱 80 箱、瓦類が 30 箱、木製品が１箱、金属製品その他と石製品・ガラス製品が２箱ある。12 世紀以降の土器類が多い。各遺構出土のものは一覧表に記し、ＳＫ 30 出土遺物を報告する。

ＳＫ 30 からは遺物整理箱５箱分の土器類と、７箱分の瓦類の他、遺構一覧表に記した木製品、金属製品、石製品他が出土した。

木簡は３点出土し、羽子板状のもの１点（１）、長方形の材の一端を尖らしたもの２点（２・３）がある。前者は長さ 99㎜ × 幅 23㎜ × 厚さ３㎜で「白□□」、後者は 149㎜ ×19㎜ × １㎝で「大白」、139㎜ ×20㎜ × ２㎜で「　□尾」と記す。

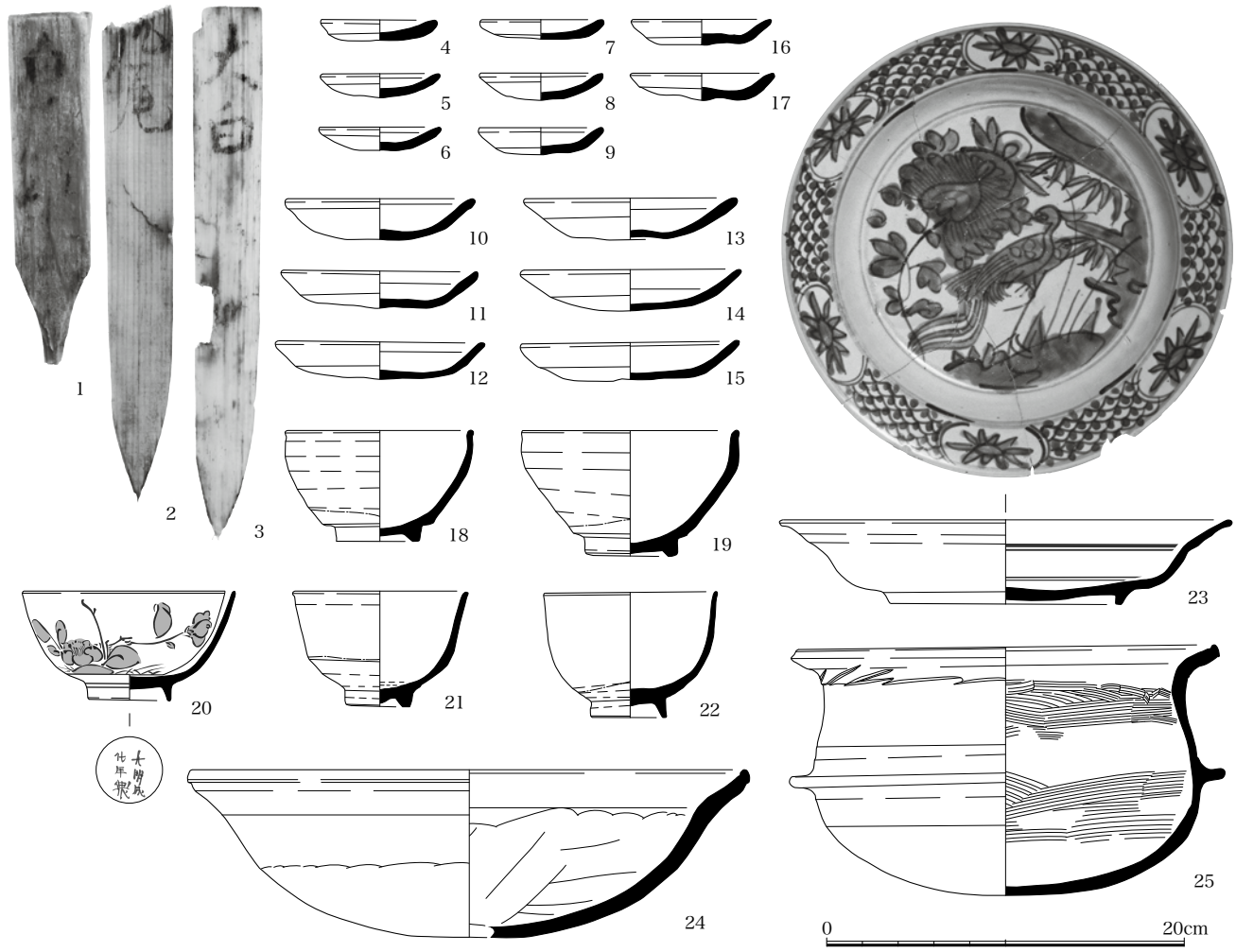
土器は破片点数で 1,580 点あり、内訳は表に記した。土師器が約半数を占め、その内約９割が皿である。土師器皿は胎土・調整手法から大きく２群に分かれる。a 群（16・17）は、平たい底部から屈曲して口縁部となる器形で、口縁部はヨコナデ調整する。口径は約８㎝の１種類だけである。胎土には砂が含まれ、ややザラッとした器表面である。皿に占める率は少ない。

b 群（４～９・10 ～ 22）は、やや丸みがある底部で、底部と口縁部の屈曲は少ない。口縁部のヨコナデ調整を施す範囲がせまく、口縁端部に限られるものが多い。胎土は精良で砂をほとんど含まないが、層状に剥離するものが多い。口径は６～ 13㎝台まで各種あり、７㎝台と 11㎝台前後が多い。また灯明痕の煤が口縁部全周に付着するものも多い。

土師器羽釜（25）は大和Ⅰ型の最終末の型式である。

SK30 出土土器点数表

種類	産地等	器種	点数	出土比率
土師器	褐色系 (a) 群	皿	10	0.63%
	黄色系 (b) 群	皿	703	44.49%
	黄色系 (b) 群	他皿	1	0.06%
	褐色系 (a) 群	高台付皿	2	0.13%
		焼塩壺・蓋	6	0.38%
		浅鉢（和泉）	20	1.27%
		羽釜・鍋	80	5.06%
		（羽釜）	36	2.28%
		（鍋）	13	0.82%
小計			822	52.03%
瓦質土器		擂鉢	20	1.27%
		捏鉢	9	0.57%
		浅鉢	3	0.19%
		深鉢	38	2.41%
		方形浅鉢	8	0.51%
		鉢類	134	8.48%
		壷	7	0.44%
		羽釜	1	0.06%
		不明	12	0.76%
小計			232	14.68%
国産陶器	常滑	甕	23	1.46%
	瀬戸・美濃	椀	52	3.29%
		小椀	3	0.19%
		皿	1	0.06%
		他	3	0.19%
	小計		59	3.73%
	備前	壷・甕	24	1.52%
		瓶	2	0.13%
	小計		26	1.65%
	信楽	擂鉢	49	3.10%
		壷・甕	6	0.38%
		他	2	0.13%
	小計		57	3.61%
	丹波	擂鉢	6	0.38%
	肥前	椀	54	3.42%
		皿	6	0.38%
		鉢	3	0.19%
		他	3	0.19%
	小計		66	4.18%
	産地不明	椀・皿	2	0.13%
		壷・甕	2	0.13%
	小計		4	0.25%
小計			241	15.25%
国産磁器	肥前	碗	209	13.23%
		皿	8	0.51%
		他	15	0.95%
小計			232	14.68%
輸入陶磁器	青磁	碗	4	0.25%
		皿	4	0.25%
	小計		8	0.51%
	白磁	皿	5	0.32%
	青白磁	皿	1	0.06%
	青花	碗	12	0.76%
		皿	27	1.71%
	小計		39	2.47%
小計			53	3.35%
合計			1580	100.00%



ＳＫ24出土遺物（1～3　1/2、4～25　1/4）

土師器鍋（24）は器壁が厚く、この時期のものは珍しい。

土師器の浅鉢は、口縁部が内側に屈曲し、端部外面にはタタキ板による格子目の文様が4箇所に施される。タタキによって、口縁部はこの部分で内側にゆがみ端部が波打つ。底には台形の三足が付き、外底面には板状の圧痕がある。体部外面はヘラケズリ調整である。大阪南部産のものと考えられ、奈良町遺跡での出土は珍しい。

国産陶器は、肥前産（21・22）と瀬戸・美濃産（18・19）の椀、信楽産の擂鉢が多い。国産磁器はすべて肥前産（20）で、碗が主体で青磁染付も多い。

輸入陶磁器には、漳州窯系の青花の碗と皿の他大皿（23）が1点ほぼ完形で出土している。

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査では、奈良時代以降の各時期の遺構・遺物を検出し、調査地の土地利用の変遷が判明した。

調査地では、奈良～平安時代前半には、敷地奥側に掘立柱建物が建ち居住域として利用されているが、確認出来る建物は1棟のみで密度は低い。

平安時代後半の12世紀末から遺構の数は徐々に増加して行き、13世紀中頃には遺構・遺物の量がピークを迎える。14・15世紀にも一定量の遺構・遺物がある。この時期の東西溝ＳＤ20は遺構の分布から、宅地南端を示す溝と考えられ、三条通りに面した南北約40ｍの宅地が復原できる。また、小柱穴が道路側で高密度に分布し、奥に行くにしたがい希薄になることから、道路側が居住の中心であることがわかる。東西溝ＳＤ20の出現の契機は不明ながら、当時の宅地の奥行きと宅地内の利用状況が判明し、奈良町遺跡の町屋の成立を考える上で貴重な例である。

一方、東側の上三条町・林小路町等の発掘調査成果と比較すると、遺構・遺物の密度が低い点が指摘できる。これらは、各調査地内の土地利用の頻度を示しており、奈良町遺跡内での各地の利用の差がわかる。

江戸時代には、宅地の奥に塵芥処理用の土坑が掘られ、三条通り沿いの居住場所と、宅地裏の空閑地という関係がうかがえる。また江戸時代前半の土坑ＳＫ30が、8・9番地の境界を越えておらず、宅地の分筆の時期を考える上で貴重な資料である。　（中島和彦）

10. 平城京跡（四条条間路）の調査　第 652 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 23 年 10 月 5 日～ 10 月 19 日
届出者名　有限会社　石橋建築総合設計事務所	調 査 面 積　122㎡
調 査 地　奈良市四条大路四丁目 1047 番 1	調査担当者　原田香織

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると右京四条一坊二坪の南東部から同三坪の北東部に相当し、敷設予定の東西道路付近には四条条間路が想定される。

過去に二坪内で実施した調査には、今回の調査地から北へ 70 m離れたＨＪ第 594 次調査(平成 19 年度)があり、奈良時代の掘立柱建物・塀、溝、井戸、土坑と、弥生時代後期～古墳時代の掘立柱列、溝、土坑を検出した。

今回の調査は四条条間路の確認及び、古墳時代以前の遺構の分布と様相の把握を目的として、道路敷設予定箇所に東西 22 m、南北 5 mの発掘区と発掘区西端南側に東西 1.5 m、南北 7 mの拡張区を設定して実施した。

Ⅱ　基本層序

上から、耕土(厚さ 0.2 m)、床土(厚さ 0.02 ～ 0.04 m)と続き、その直下で淡黄灰色粘土～粘質シルトなどの地山となる。地山上面で奈良時代の遺構を検出した。標高は概ね 61.3 mである。

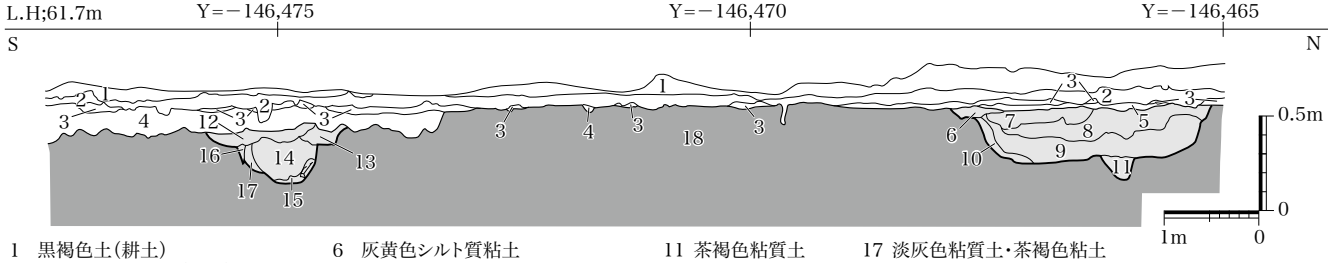
Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は、奈良時代の東西方向の素掘り溝２条（ＳＤ 02・03)、道路遺構（ＳＦ 01)、ＳＤ 02 に架かる橋（ＳＸ 04）である。以下、これらについて記す。

溝ＳＤ 02・03 は、周辺の調査成果と比較して、その座標位置から四条条間路の北・南側溝とみられる。よってＳＤ 02 と 03 に挟まれた空間地である道路ＳＦ 01 は、四条条間路と考えられる。路面上は後世の削平のためか、道路使用時の痕跡や整地などは残っていなかった。なお、ＳＦ 01 の路面幅及び路心の座標、ＳＤ 02・03 の規模及び溝心の座標は周辺での調査成果とともに表に示した。

発掘区位置図（1/5,000）

四条条間路北側溝ＳＤ 02 の底は平坦で広く、深さは西端で 0.3 m、東端で 0.35 m。さらに溝底中央付近は底面からの深さ 0.1 ～ 0.15 m、幅約 0.5 mの細い溝状に窪む。溝底は東に向かって低くなる。発掘区の西寄りには、路面側に広がる浅い皿状の窪みがあり、これは溝底の細い溝が埋まった後、その上から掘削される。さらに淡灰色粘質シルトで埋められてから、改めて北側溝が掘り直されている。溝底からの深さは 0.15 m。淡灰色粘質シルトは比較的破片の大きな８世紀後半の土器類や燃えさし・木炭の破片などを多く含んでいるが、使用中の道路側溝にゴミ捨て穴を掘るとは考えにくい。この付近の道路側に当たる溝の南肩は砂地であるので、溝肩が崩れた際に排土で埋め立てて溝を補修した痕跡と考える。淡灰色粘質シルトの上に堆積する溝の埋土は、主に茶灰色粘砂土などで８世紀後半～末の土器類が出土したが、いずれも小片で全体に磨滅しており量も少ない。後述する橋ＳＸ 04 の西側では遺物が比較的多く集中して出土し、橋によって流れがやや滞っていた様子がうかがえる。

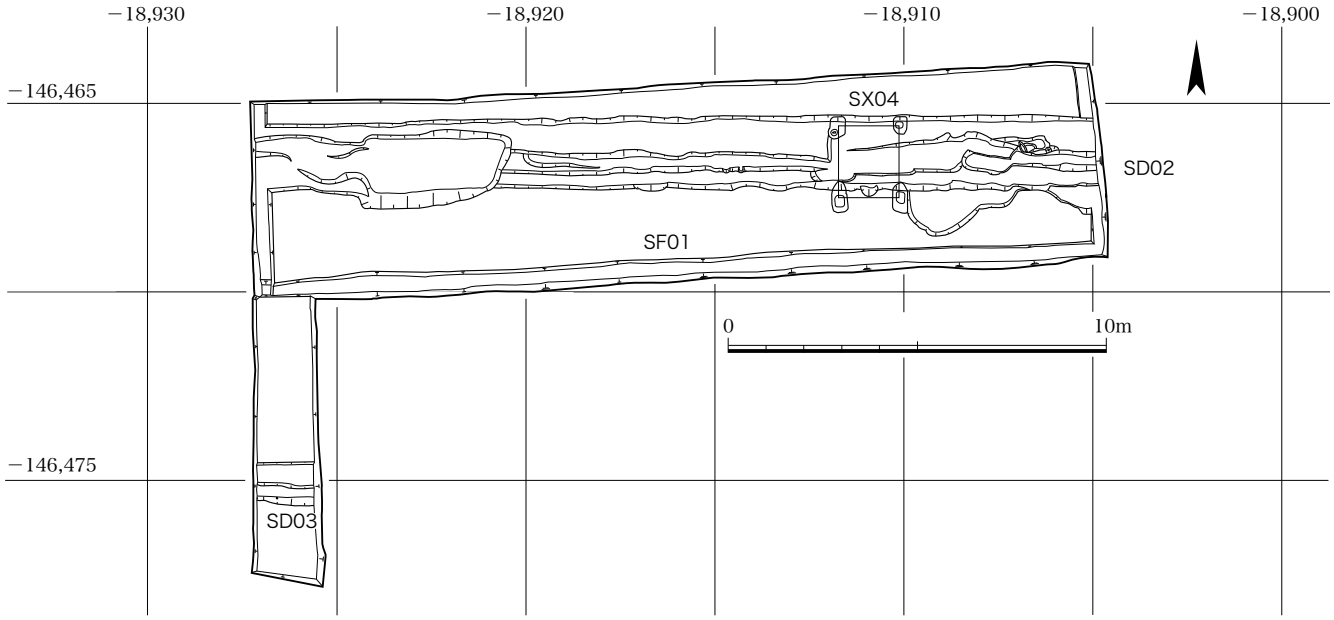


1　黒褐色土(耕土)
2　黒灰色シルト質土(耕土)
3　淡灰色砂質土(床土)
4　淡灰色砂質土
　・黄灰色粘質土粒混合(耕作溝)
5　黄灰色粘質土
6　灰黄色シルト質粘土
7　灰茶色粘質土
8　明茶黄灰色粘質土
9　茶灰色粘砂土
10　灰黄色砂質シルト
　・茶褐色粘質土ブロック少量混合
11　茶褐色粘質土
12　灰茶色粘質土
13　灰茶色粘土
14　茶褐灰色粘土
15　14・地山混合
16　淡灰色粘質土(杭跡)
17　淡灰色粘質土・茶褐色粘土ブロック・地山ブロック混合
18　淡黄灰色粘土～粘質シルト(地山)

※ 6～11:四条条間路北側溝ＳＤ02
12～17:四条条間路南側溝ＳＤ03

西壁土層図（縦 1/40　横 1/80）

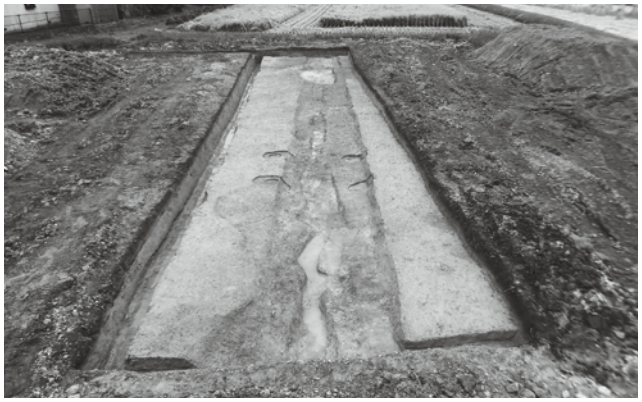
同南側溝ＳＤ 03 の埋土は大きく上下に分かれる。下位の埋土は茶褐灰色粘土であるが、南肩は地山ブロックを含む土で埋め戻され、この部分には南肩に沿って打ち込まれた杭の痕跡が数カ所残る。護岸のためのものと思われるが深さ約 0.1 ｍと浅く、地山まで杭の先端が達しているものは２カ所しかない。埋土から８世紀の土器類が出土したが少量で小片のため詳細な時期は不明。上位層については発掘区壁面の土層観察によって確認し、幅は 1.5 ｍになる。杭の痕跡が上位層にまで続かないことから、ＳＤ 03 は下位の溝の埋没後に幅広く掘り直された可能性がある。なお、表に示した値は下位の溝のものである。



発掘区遺構平面図（1/200）

発掘区全景（西北西から）

発掘区全景（南西から）



四条条間路北側溝（東から）

橋ＳＸ 04（南から）

橋ＳＸ 04 は、ＳＤ 02 の南北両肩でそれぞれ柱穴を２つずつ検出し、ＳＤ 02 に架かる橋と考えられる。柱間は南北１間（東側 1.9 m・西側 1.8 m）、東西１間（北側 1.7 m・南側 1.6 m）。柱穴の深さは 0.45 ～ 0.55 m。柱材は北側の２つが腐朽してほとんど残っておらず、南側の２つは抜き取られたものとみられる。埋土から８世紀の土器類が出土したが、小片のため詳細な時期は不明。二坪の四周の条坊道路側溝の内側で坪内を東西に分割した場合の東から 1/3 付近に位置する。

Ⅳ　出土遺物

奈良時代後半～末の土器・瓦類などが遺物整理箱５箱分ある。土器類は四条条間路南側溝ＳＤ 02 底部の皿状の窪みと橋ＳＸ 04 西側のＳＤ 02 埋土から出土したものを除くと小片ばかりである。各遺構の出土遺物の内訳は下記のとおり。

四条条間路北側溝ＳＤ 02 の皿状の窪み（淡灰色粘質シルト）から８世紀後半の土師器皿Ａ・杯か皿Ｂ・杯か皿・椀Ｃ・甕、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｅか椀Ｃ・杯蓋・壷・甕、平瓦、流紋岩製砥石、燃えさし、木炭の破片が出土した。燃えさしは、幅約 0.3 ～ 0.5㎝、長さ約 5.0 ～ 10.0㎝の細棒状に割り裂いた木片で、一端が炭化しており、20 点以上出土した。ＳＤ 02 の茶灰色粘砂土などからは８世紀後半～末の土師器杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・高杯・甕・カマド、須恵器杯Ａ・杯Ｂ（転用硯１点あり）・杯Ｅ・杯か皿Ａ・杯か皿Ｂ・杯か皿（墨書底部外面「古」・底部内面「□」各１点あり）・皿Ｃ・杯蓋・椀Ａか壷・壷Ａ・壷Ｍ・壷・壷蓋・甕・鉢か盤、製塩土器、軒丸瓦（型式不明１点）・丸瓦・平瓦の破片が出土した。

同南側溝ＳＤ 03 埋土から８世紀の土師器杯か皿・甕、須恵器杯か皿・甕、丸瓦・平瓦の小片が少量出土した。橋ＳＸ 04 の柱穴埋土から８世紀の土師器杯か皿Ａ・甕、須恵器甕の小片が出土した。

Ⅴ　調査所見

今回は四条条間路ＳＦ 01 とその北側溝ＳＤ 02・南側溝ＳＤ 03 を検出した。

北側溝ＳＤ 02 では、宅地側となる北肩に比べ、道路側となる南肩には崩れたり水が溢れたりした痕跡がある。このことから、宅地側には護岸のために何らかの施設が存在していたか、宅地側の北肩より道路側の南肩が低いなど、路面が浸食されやすい状況であったと考えられる。

同様のことは南側溝ＳＤ 03 にもあてはめて考えられ、三坪の宅地側の南肩に沿って杭を打ち込み護岸した痕跡を検出したが、宅地保護のために計画的に施工されたものであるのか、部分的な補修に留まるものであるのかは明確ではない。

周辺の市ＨＪ第 328・344 次調査の成果と比較すると、路面幅と側溝幅が調査ごとに異なるものの、側溝心々間距離は大きく変わることがないことがわかる。これは調査地ごとに、他の溝との合流点からの距離や合流する溝の大きさなどによる影響の他、改修などにより規模が異なっていても、側溝の中心の位置はほぼ踏襲されていることを反映するものと考えられる。道路側溝心々間から求めた道路心の座標上の傾きは、当調査地とＨＪ第 328 次調査地とでは東に向かって北に 0°10′30″、ＨＪ第 344 次調査地とでは東に向かって北に 0°9′3″ 傾いている。

また、北側溝ＳＤ 02 には、坪内の東から 1/3 付近に橋ＳＸ 04 が架けられており、今回の調査では検出できなかったものの、橋の北側には二坪から四条条間路に開く門があったと想定できる。二坪の北西部で実施したＨＪ第 594 次調査では、坪内を南北 1/4 に区画する溝や掘立柱塀が検出されており、坪内を南北に分割して宅地利用していたことが判明している。このほかに西から 1/6 に位置する掘立柱塀、西から 1/8・3/8 に位置する溝が検出されており、今回の橋ＳＸ 04 の位置から東西方向にも坪内を分割して宅地利用していた可能性が高まった。なお、当初想定していた古墳時代以前の遺構はなかった。

（原田香織）

市ＨＪ第 652 次調査地周辺で検出された四条条間路の概要

調査地	部位	規模（m）		側溝心・路心の座標値（m）		側溝心々間	備考
		幅	深さ	X	Y	(m)	
市 HJ 第 652 次（右京四条一坊）	北側溝ＳＤ 02	1.8 ～ 2.0	0.4 ～ 0.5	−146,466.45	−18,927.00	8.57	朱雀大路西側溝との合流点より約 45 m西
	路面ＳＦ 01	7.1		−146,470.735	−18,927.00		
	南側溝ＳＤ 03	0.9	0.4	−146,475.02	−18,927.00		
市 HJ 第 328 次（左京四条一坊）	北側溝	3.0	0.6	−146,466.18　※	−18,804.30 ※	8.36	朱雀大路東側溝との合流点付近
	路面	5.5		−146,470.36　※	−18,804.30 ※		
	南側溝	2.6	0.8	−146,474.54　※	−18,804.30 ※		
市 HJ 第 344 次（左京四条一坊）	北側溝	0.9	0.3	−146,465.45　※	−18,562.30 ※	8.65	東一坊坊間路東側溝との合流点付近
	路面	7.9		−146,469.775 ※	−18,562.30 ※		
	南側溝	0.6	0.1	−146,474.10　※	−18,562.30 ※		

※測量法改正（2002 年４月）にともない換算した数値を表示

11．平城京跡（左京六条三坊九・十坪）の調査　第 653 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 23 年 11 月 17 日～ 12 月 7 日
届出者名　株式会社　八州エイジェント	調 査 面 積　154㎡
調 査 地　奈良市大安寺三丁目 77-1　他 12 筆	調査担当者　安井宣也

Ⅰ　はじめに

調査地は能登川扇状地の扇端に位置し、平城京の条坊復原では左京六条三坊九坪の南西部、十坪の北西部および六条条間北小路にあたる。周辺では条坊の遺存地割が道路や水田の畦畔等で認められ、六条条間北小路の遺存地割は水路となっている。

九坪内では、過去に本市教委が実施した試掘 91 － 26 次調査（平成 3 年度）で坪内の中央を南北に貫流する奈良時代の東堀河の一部が検出されているのみである。

十坪内では、東半部で過去に本市教委が市ＨＪ第 52 次（昭和 58 年度）・第 284 次（平成 5 年度）の 2 件の発掘調査を実施している。ともに坪内の中央を南北に貫流する奈良時代の東堀河と掘立柱建物が検出され、東堀河の東肩から 4 ～ 8 mの空閑地を隔てて建物が建てられていたことを確認した。東堀河の底部に堆積した砂層からは 8 世紀後半を主とする多量の土器や木製品、金属製品が出土した。なお、市ＨＪ第 284 次調査地では古墳時代以前の土坑も検出されている。

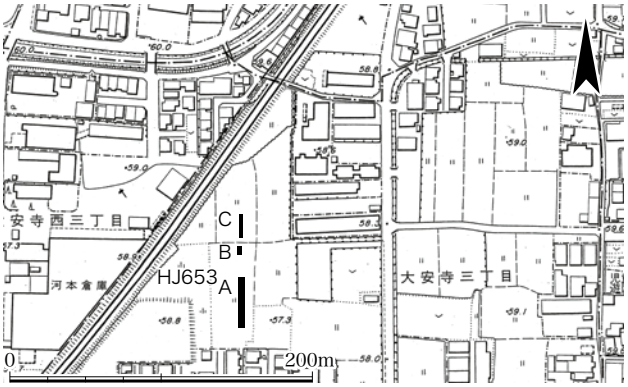
六条条間北小路については、調査地の西約 220 mの市ＨＪ第 45 次調査地（昭和 58 年度）で路面と南北両側溝が検出されている。

今回の調査は、開発区域の西辺にＡ～Ｃの 3 箇所の発掘区を設定して実施した。Ａ・Ｂ発掘区は十坪北西部の土地利用、遺存地割の水路を挟んで北側のＣ発掘区は九坪南西部の土地利用及び六条条間北小路の路面・側溝の様相の把握を目的とした。

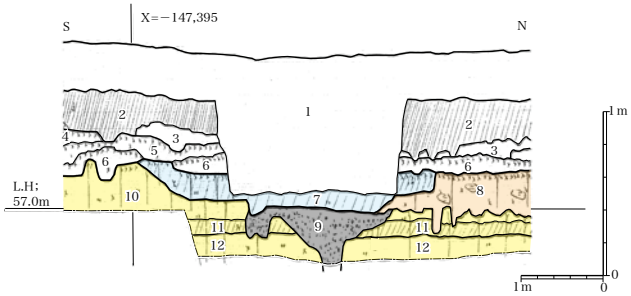
Ⅱ　基本層序

Ａ発掘区　発掘区の北寄りでは、造成土（盛土、厚さ 0.1 m）、黒褐色シルト質砂の水田耕土（厚さ 0.1 m）、暗灰黄色や灰色のシルト質砂の水田床土（2 層あり、厚さ 0.2 m）の下で、灰黄色砂質粘土混じりシルトの沖積層（以下、「地山」）となる。同中央部では、造成土（盛土及び改良土、厚さ 0.5 m）、黄灰色シルト質砂の水田床土（厚さ 0.1 m）の下で地山上面となり、同南寄りでは水田床土と地山の間に暗灰黄色砂質シルトの遺物包含層（8 世紀の土器片等を含む、厚さ 0.1 m）をはさむ。

奈良時代の遺構面は地山上面（標高 57.0 ～ 57.2 m）で、北から南に向かってわずかに下る。



発掘区位置図（1/5,000）



1　造成土(盛土･改良土)
2　5Y3/1(オリーブ褐)　シルト質砂
3　5Y4/1(灰)　シルト質砂
4　2.5Y5/1(黄灰)　シルト質砂
5　2.5Y4/2(暗灰黄)シルト質砂
6　2.5Y5/2(暗灰黄)砂質シルト
7　2.5Y4/2(暗灰黄)砂質シルト
8　2.5Y5/2(暗灰黄)シルト質砂
9　10･11のブロック､基質:2.5Y4/2(暗灰黄)砂質シルト
10　2.5Y5/4(黄褐)　砂質シルト
11　2.5Y4/2(暗灰黄)砂混じり粘土質シルト
12　2.5Y6/2(灰黄)　粘土

●2～12層の性格
2:水田耕土　　3～6:水田床土
7:六条条間北小路北側溝SD16　埋土
8:奈良時代の整地層
9:旧流路　埋土
10～12:沖積層(地山)

Ｃ発掘区西壁土層図（縦：1/30、横：1/60）

Ｂ発掘区　造成土（盛土及び改良土、厚さ 0.5 m）直下で灰色砂質シルトの地山となる。

奈良時代の遺構面は地山上面（標高 57.2 m）である。

Ｃ発掘区（図４）　発掘区の南寄りでは､造成土（盛土、厚さ 0.2 m）、黄灰色や暗灰黄色の砂質シルトあるいはシルト質砂の水田床土(2 ～ 3 層あり､厚さ 0.1 ～ 0.2 m）の下で黄褐色砂質シルトの地山となる。それより北では地山上面が 0.2 m程度低くなり、水田床土との間に地山のブロック土層をはさむ。

奈良時代の遺構面は、水田床土直下の地山及び地山のブロック土層の上面（標高 57.2 m）である。なお、地山のブロック土層は、層相や遺構、地形との関係からみて、凹地か緩斜面上の整地層と判断される。

Ⅲ　検出遺構

１．Ａ発掘区

遺構検出は地山上面で行った。主な検出遺構は、飛鳥時代以前のものとみられる溝３条（ＳＤ 01 ～ 03)、奈良時代の掘立柱塀１条（ＳＡ 04)、掘立柱建物４棟（ＳＢ 05 ～ 08)、柱穴、溝１条（ＳＤ 09)、井戸２基（ＳＥ 10・11)、土坑（ＳＫ 12 ～ 14）である。

これらの遺構の規模・形状、出土遺物等は、一覧表に示すとおりである。奈良時代の遺構は、重複関係から３時期以上の変遷が認められる。

ＳＤ 01 ～ 03　いずれも出土遺物はないが、重複関係から奈良時代の遺構よりも古いことがわかり、ＳＤ 01・03 は斜行し、ＳＤ 02 は埋土がＳＤ 03 と同じことから、飛鳥時代以前ものと判断した。

ＳＡ 04・ＳＢ 05 ～ 08・柱穴　ＳＡ 04 は、柱間が 1.2 ｍで建物よりも狭いことから、小規模な塀と判断した。ＳＢ 06 は、南北に並ぶ３基の柱穴の大きさと柱間寸法から、東西棟建物の妻柱列と判断した。またＳＢ 07・08 は、南北に並ぶ２基の柱穴の大きさと柱間寸法から、東西棟建物の側柱の一部と判断した。

これらの建物・塀及び柱穴は、発掘区北端から 12 ｍ以南でみられる。柱穴の重複関係から、ＳＢ 06 はＳＢ 07 より新しい。ＳＡ 04 とＳＢ 05、ＳＢ 06・08 は位置が重複するため、同時併存はあり得ない。ＳＢ 06 ～ 08 の柱穴や、建物・塀としてまとまらない他の柱穴からも８世紀の土器片が出土した。

ＳＤ 09　東西方向の溝で、建物・塀及び柱穴がみられる北限に位置することから、九坪内を区画する溝の可能性が高い。埋土から８世紀の土器片が出土した。

ＳＥ 10・11　ＳＥ 10 の掘方内には井戸枠内でみられる黒灰色の泥の丸い広がりが認められたことから、平面円形で内径 0.9 ｍ程度の井戸枠があったと想定される。

ＳＥ 11 は、重複関係からＳＥ 10 を掘り直したものと考えられる。方形横板組の井戸枠材は、長さ 96cm、厚さ３cm で､幅は 24cm･27cm･30cm の３種類がある。仕口はＬ形の相欠きで、太枘や釘は使われていない。

ともに掘方内や井戸枠内の埋土から８世紀の土器片が出土した。また、ＳＥ 10 の掘方内から掛矢が出土した。

土坑　発掘区の北寄りと南寄りでみられる。ＳＫ 12 ～ 14 の埋土から８世紀の土器片が出土した

２．Ｂ発掘区

遺構検出は地山上面で行った。主な検出遺構は柱穴と土坑で、北寄りでみられる。出土遺物はないが、形状から奈良時代のものと判断した。

３．Ｃ発掘区

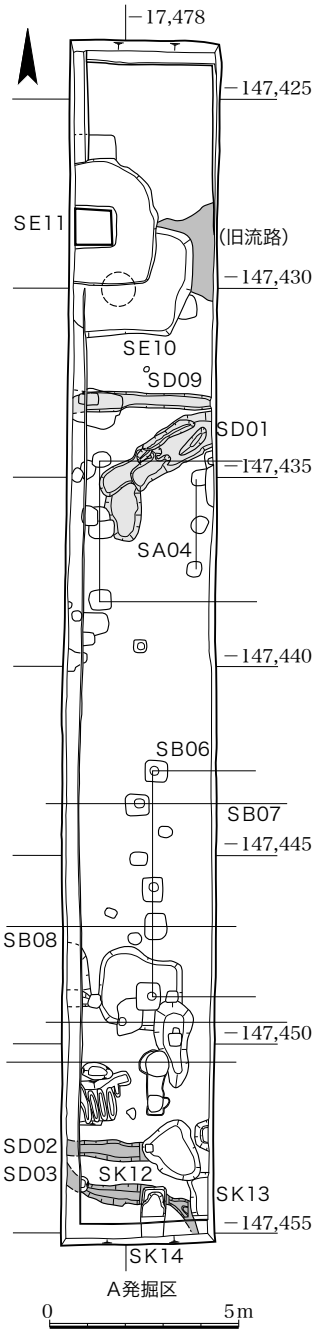
奈良時代の遺構面は地山及び整地層上面であるが、遺構検出は地山上面で行った。主な検出遺構は、奈良時代の六条条間北小路（ＳＦ 15）と同北側溝（ＳＤ 16)､柱穴、土坑（ＳＫ 17）である。ＳＦ 15・ＳＤ 16・ＳＫ 17 の規模・形状等は、一覧表に示すとおりである。

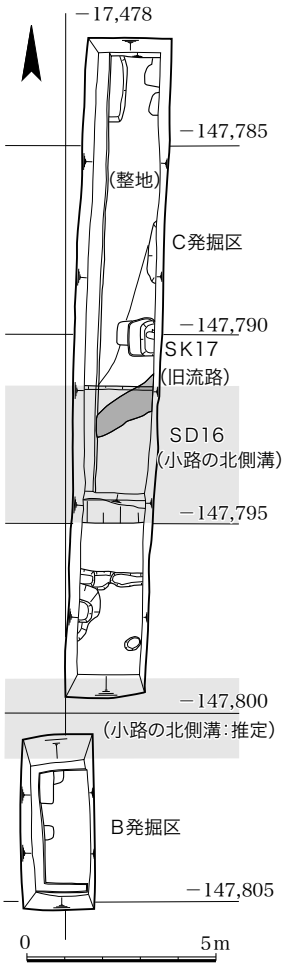
ＳＦ 15・ＳＤ 16　六条条間北小路ＳＦ 15 の本来の路面は後世に削平されている。同北側溝ＳＤ 16 は、西壁の土層断面で整地層上面から掘削されていることが確認できた。幅は西方の市第 45 次調査地より約１ｍ広い。溝心の座標は表２のとおりで、市第 45 次調査地との間の溝心の方位に対する振れは、Ｅ 0°13′22″ Ｎである。

ＳＫ 17　六条条間北小路北側溝ＳＤ 16 に近接して掘削されている。埋土から、８世紀のほぼ完形の須恵器横瓶と杯Ｂの小片が出土した。

Ａ発掘区全景（南から）

井戸ＳＥ 10・11（東から）





発掘区平面図（1/200）

B発掘区全景（北から）

C 発掘区全景（北から）

C 発掘区南端部（北東から）

掘立柱建物・塀　一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
S A 04	南北	2	2.4	−	1.2 等間	−	柱間寸法が狭いことから塀と判断。 柱穴は一辺 0.4 m、深さ 0.2 m。
S B 05	東西	2× 1 以上	3.6	3.0 以上	1.8 等間	3.0	柱穴は一辺 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.1 m。S A 04 と位置が重複。
S B 06	東西	桁行 2 間	−	6.0	−	3.0 等間	柱穴の形状・大きさと位置関係から妻柱列と判断。 柱穴は一辺 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m。柱痕跡が残る。掘方埋土に 8 C の土器片を含む。S B 07 より新しく、S B 08 と位置が重複。
S B 07	東西	−	−	5.7	−	−	柱穴の形状・大きさと位置関係から側柱列の一部と判断。 柱穴は一辺 0.7 m前後、深さ 0.3 m。柱痕跡が残る。
S B 08	東西	−	−	3.6	−	−	柱穴の形状・大きさと位置関係から側柱列の一部と判断。 柱穴は一辺 0.7 m、深さ 0.2 m。掘方埋土に 8 C の土器片含む。

溝・土坑一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備考
ＳＤ 01	北東方向	長さ 4.0 以上、幅 0.5	0.1	なし	飛鳥時代以前の可能性。ＳＢ 05･ＳＤ 09 より古い。 埋土：2.5 Ｙ 4/2（暗黄灰）　砂質シルト・粘土
ＳＤ 02	東西方向	長さ 1.6 以上、幅 0.5	0.1	なし	飛鳥時代以前の可能性。ＳＫ 12 より古い。 埋土：10 ＹＲ 4/2（灰黄褐）　砂質シルト・粘土
ＳＤ 03	北西方向	長さ 3.0 以上、幅 0.2 ～ 0.6	0.1	なし	飛鳥時代以前の可能性。ＳＫ 13・14 より古い。 埋土：10 ＹＲ 4/2（灰黄褐）　砂質シルト・粘土
ＳＤ 09	東西方向	長さ 3.6 以上、幅 0.4	0.1 ～ 0.2	８Ｃ：土師器甕	十坪内。 埋土：2.5 Ｙ 5/1（黄灰）　シルト質砂
ＳＫ 12	不整形	東西 1.3× 南北 1.6	0.2	８Ｃ：土師器杯Ａ・杯Ｃ、平瓦	十坪内。 埋土：2.5 Ｙ 4/2（暗灰黄）　砂質シルト
ＳＫ 13	隅丸方形	東西 0.4 以上 × 南北 1.6 以上	0.2	８Ｃ：土師器杯、須恵器壷蓋	十坪内。ＳＫ 12 より古い。 埋土：2.5 Ｙ 4/3（オリーブ褐）　砂質シルト
ＳＫ 14	隅丸方形	東西 0.6× 南北 1.8 以上	0.3	８Ｃ：土師器杯蓋、須恵器杯蓋	十坪内。 埋土：2.5 Ｙ 4/3（オリーブ褐）　砂質シルト
ＳＦ 15	東西道路	長さ 1.7 以上、幅 4.0 程度	－	なし	六条条間北小路。本来の路面は残っていない。
ＳＤ 16	東西方向	長さ 1．7 以上、幅 3.6	0.3	なし	六条条間北小路の北側溝。 (北側溝心；X=−147,393.10　Y=−17,477.80)
ＳＫ 17	隅丸方形	東西 0.7 以上 × 南北 1.0	0.8	８Ｃ：須恵器横瓶・杯Ｂ	九坪内。 埋土：主に 2.5 Ｙ 4/1（黄灰）　砂質シルト

井戸一覧表

遺構番号	掘方等			井戸枠			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	平面形	構造	内法（m）		
ＳＥ 10	隅丸方形	東西 2.9 以上 × 南北 2.8 以上	1.4 以上	円形？	不明	0.9 程度	８Ｃ：土師器：甕・高杯、 須恵器：甕・壷・杯Ａ・杯Ｂ、木製品：掛矢・棒	ＳＥ 11 より古い。枠の平面形は黒灰色の泥の範囲から推定。
ＳＥ 11	隅丸方形	東西 2.2 以上 × 南北 3.4	1.9 以上	方形	横板組	0.9	【掘形】　８Ｃ：須恵器甕・壷・杯Ｂ・杯蓋、軒丸瓦（6228A）・軒平瓦（型式不明） 【枠内】　８Ｃ：須恵器甕・壷・杯Ｂ・杯蓋、黒色土器Ａ類椀、丸瓦	井戸枠は６段以上で、仕口は相欠き。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱 10 箱分があり、主な遺物に８世紀の土器（土師器甕・杯Ａ・杯Ｃ・杯蓋・高杯、黒色土器Ａ類椀、須恵器甕・横瓶・壷・壷蓋・杯Ａ・杯Ｂ・杯蓋）・瓦（軒丸瓦 6228 Ａ型式・軒平瓦型式不明・丸瓦・平瓦）・木製品（掛矢・棒）がある。土器は、柱穴・井戸・溝・土坑の埋土と遺物包含層から出土している。

掛矢は井戸ＳＥ 10 から出土した。全長 55㎝で、頭の側面に方形孔を貫通させて柄を挿入する。頭は片側を大きくつくり、断面形は隅丸方形である。頭の長さ 35cm・幅 11.5㎝～ 14㎝。柄は全長 55cm・幅 3.2㎝・厚さ 2㎝で、頭の上に 3㎝ほど飛び出ている。断面は隅丸方形で下端の四隅を斜めに削っている。樹種は広葉樹で、頭がバラ科、柄がアカガシ亜属である。

ＳＥ 10 出土の掛矢

Ⅴ　調査所見

六条条間北小路　南側溝は今回の調査で確認できなかったが、Ｂ発掘区の遺構の検出状態も踏まえれば、位置はＢ・Ｃ発掘区間で幅が２ｍ以下であると想定される。路面幅は４～ 4.5 ｍ程度、側溝心々間の距離は７ｍ程度で、ともに西方の市ＨＪ第 45 次調査地と同様と考えられる。遺存地割の水路は南側溝の位置を踏襲している。

九坪南西部　Ｃ発掘区で柱穴と土坑を検出したことから、宅地として利用されていたと考えられる。土坑ＳＫ 17 がＳＤ 16 に近接して掘削されていることを踏まえれば、九坪南辺の区画施設は塀の可能性がある。

十坪北西部　宅地として利用されており、重複関係から少なくとも３時期の変遷があることがわかった。

十坪北辺の区画施設は、Ｂ発掘区の遺構の検出状態を踏まえれば塀の可能性がある。Ａ発掘区の建物・塀、柱穴がみられる北限及び区画溝ＳＤ 09 の位置は、前述の六条条間北小路南側溝の想定位置から南に約 33 ｍにあたることから、十坪西半部は南北に四分割されて使用されていたことがうかがえる。井戸ＳＥ 11 の枠内埋土から黒色土器Ａ類の椀の小片が出土したことを踏まえれば、８世紀後半が宅地利用の中心になると推定される。

（安井宣也）

12. 平城京跡（右京二条四坊四坪）の調査　HJ 第 654 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 23 年 11 月 21 日～ 12 月 2 日
届出者名　株式会社　フォレストホーム	調 査 面 積　157㎡
調 査 地　奈良市菅原町 383 番 1	調査担当者　中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京二条四坊四坪の西端にあたり、西四坊坊間東小路が調査地西側に推定される。また西から東へ張り出す丘陵の先端部分にあたる。

周辺の過去の発掘調査では、遺構が削平されて残存しない例が多く、事前に遺構の有無を確認するため試掘調査 (市 11-06 次調査) を行った。東西に長い調査地の西側・中央・東側の３か所に発掘区を設定し、中央と東側の発掘区では奈良時代の柱穴が検出できた。そこでこの両発掘区を含む形で新たに発掘区を設定し、発掘調査を行った。

発掘区位置図 (1/5,000)

Ⅱ　基本層序

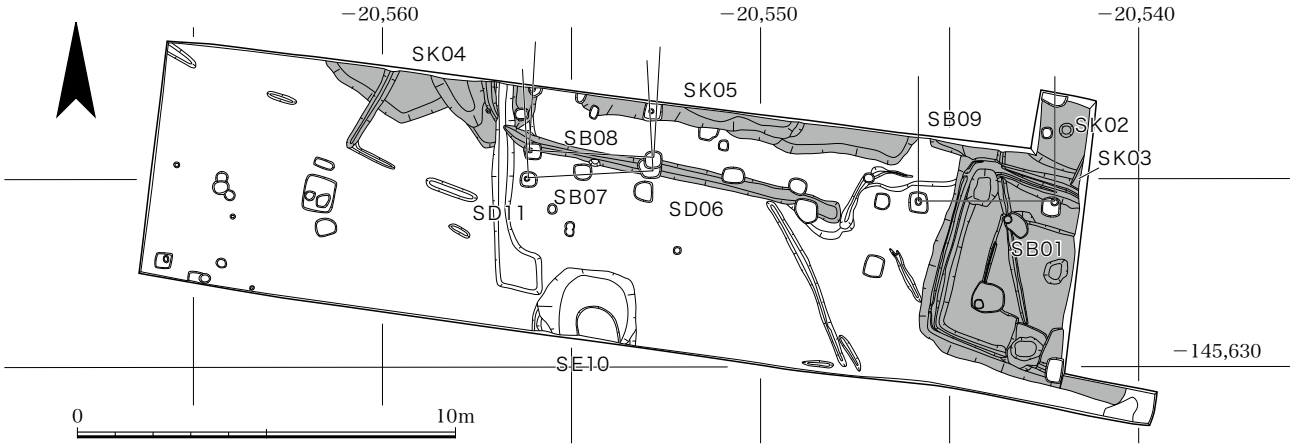
発掘区内の層序は、上から耕作土（土層図１、以下同じ)、淡茶褐色土（３）で、地表下 0.25 ～ 0.4 mで明黄橙色粘土の地山となる。遺構面の標高は 81.2 ～ 81.25 mで、やや西が高い。遺構検出は地山上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

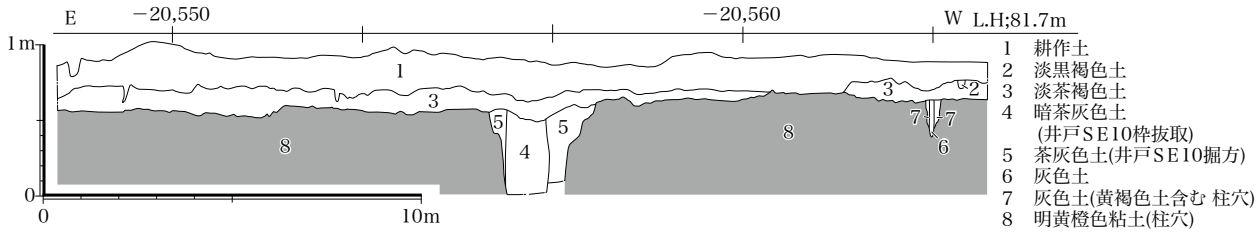
古墳時代の竪穴建物１棟（ＳＢ 01)、土坑４基（ＳＫ 02 ～ 05)、溝１条（ＳＤ 06)、奈良時代の掘立柱建物３棟（ＳＢ 07 ～ 09)、井戸１基（ＳＥ 10)、溝１条（ＳＤ 11）がある。各遺構の詳細は遺構一覧表に記す。

古墳時代の遺構　いずれも古墳時代前期のもので、遺構の重複関係から３時期以上あることがわかる。

竪穴建物ＳＢ 01　平面隅丸方形で、発掘区外東側につづき建物西側の半分余りを調査した。建物内では柱穴・周壁溝・ベッド状遺構・貯蔵穴・炉を検出し、残存状況



発掘区遺構平面図　(1/200　網掛け部分は古墳時代の遺構)



発掘区南壁土層図　(横 1/200　縦 1/50)

検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	出土遺物	備考
SB01	隅丸方形	東西約 5.8× 南北約 5.4	0.5	古墳時代前期	土師器高杯･小型器台･小型丸底鉢･壷･甕、砥石２点、不明石製品２点、鉄滓	竪穴建物。主柱穴は４本。ベッド状遺構・炉・貯蔵穴あり。１回の造り替えがある。SK02・03 より新
SK02	不明	東西 4.0 以上 × 南北 2.0 以上	0.7	古墳時代前期	土師器高杯・小型丸底鉢・壷・甕	SB01、SK03 より古
SK03	不明	東西不明 × 南北 1.0 以上	0.7	古墳時代前期		東壁面で確認。SK02 より新、SB01 より古
SK04	不整形	東西約 5.5× 南北 1.6 以上	0.3	古墳時代前期	土師器高杯・壷・甕	SD06 より古
SK05	隅丸方形？	東西約 6.2× 南北 0.5 以上	0.8	古墳時代前期	土師器高杯・小型器台・小型丸底鉢・壷・甕	
SD06	L 字状で、 東西と南北 方向	幅約 0.4× 長さ 10.5 以上	0.1 ～ 0.3	古墳時代前期か？	土師器高杯･甕、須恵器甕（混入品か）	SK05 の南と西の外側 1.0 ～ 2.0 mにあり、土坑をＬ字状に取り巻く溝。SK04 より新
SE10	楕円形	東西約 2.7× 南北 1.9 以上	0.6 以上	８世紀後半～末	土師器杯・皿・椀・高杯・盤・壷・甕、須恵器杯・壷・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦	中央に径約 1.1 mの枠抜取痕跡がある
SD11	南北方向	幅約 0.4× 長さ 5.5 以上	0.1 ～ 0.2	８世紀後半～末？	土師器甕、須恵器壷	SK04、SD06 より新

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法		柱穴の深さ	備考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行		
SB07	南北	２以上 × ２	1.65 以上	3.3	1.65	1.65 等間	0.5	SB08 より古
SB08	南北	２以上 × ２	1.65 以上	3.3	1.65	1.65 等間	0.5 ～ 0.65	SB07 より新
SB09	南北	１以上 × １	2.7 以上	3.6	2.7	3.6	0.4	

は良好である。また建物は柱穴・周壁溝等の状況から造り替えが確認でき、新旧のそれをＳＢ 01 新とＳＢ 01 古とする。ＳＢ 01 新の周壁溝がＳＢ 01 古の周壁溝より外側に位置し､やや規模を広げて造り替えをしている。なお建物底を南北にはしる溝は、ＳＢ 01 とＳＫ 02 に伴うものではなく、形態・重複関係等から地山と遺構埋土の境目にのびた樹木の根の痕跡と考えられる。

ＳＢ 01 古　主柱穴は４本と考えられ、西側の２本を検出した。掘方は径約 0.4 ～ 0.7 mの不整楕円形で、深さ約 0.6 m、柱痕は径約 0.2 mの平面円形である。南北の柱間は約 2.3 mある。また発掘区外にある東側の柱が周壁からの距離が西側と同じとすると東西の柱間は約 2.7 mとなる。

建物の床面にはいわゆるベッド状遺構がある。主柱穴間を結んだ線の内側を掘り窪めて、周壁に沿って幅 0.6 ～ 1.2 m、高さ 0.1 ～ 0.2 mの高まりを築く。南側中央の土坑部分を残し全周すると考えられる。

周壁溝は幅 0.25 ～ 0.4 m、深さ約 0.2 mで、断面Ｕ字形である。南中央を除き全周すると考えられる。

炉は建物中央やや東寄りにあり､床面を浅く掘り窪め、上に焼土と炭が薄く堆積する｡窪みは歪な平面楕円形で、東西約 0.6 m、南北約 0.7 m、深さ約 0.05 mある。

南側中央には一辺約 1.0 m、深さ約 0.25 mの平面方形の土坑がある。南壁に接しており、この部分では周壁溝が途切れる。粘土・粘質土で埋まり、その他の建物埋土とはやや異なった様相をする。性格は不明。

ＳＢ 01 新　ＳＢ 01 古をやや掘り広げてつくられ、周壁溝がＳＢ 01 古に比べ外側にある。新たな主柱穴は確認しておらず、ＳＢ 01 古のものをそのまま利用したと考えられる。南西側の主柱穴は後述するベッド状遺構の盛土上で柱痕のみを検出したが、柱掘方は盛土下で検出していることから、建物の柱を残しながら造り替えたと考えられる。

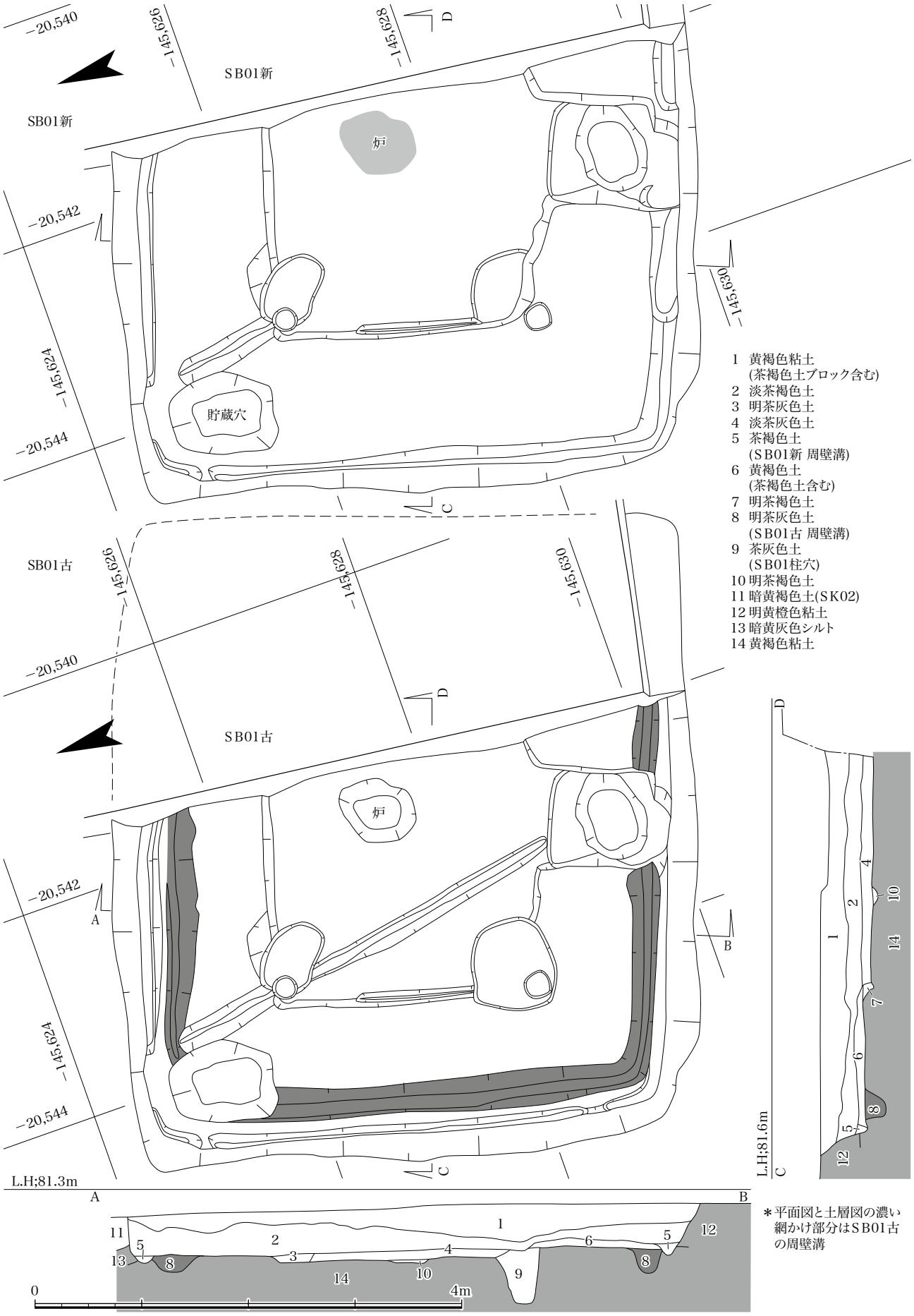
ベット状遺構は南半部分のみ厚さ約 0.05 mの盛土(竪穴建物土層図６)をする。中央部の窪みはやや埋まり、土層図４層上で炉を確認した。炉はＳＢ 01 古とほぼ同位置で、径約 0.9 mほどの範囲に焼土と炭が広がる。

周壁溝は幅 0.1 ～ 0.15 m、深さ約 0.1 mで、断面形はＶ字状である。南中央を除き全周すると考えられる。

貯蔵穴は建物の北西隅にあり、ＳＢ 01 古の周壁溝上に掘られる。平面楕円形で､東西約 0.9 m､南北約 1.1 m、深さ約 0.5 mあり、土師器が少量出土した。貯蔵穴の東側では北壁に沿って土師器がまとまって出土した。

土坑　いずれも発掘区北端で検出しており、全容は不明である。ＳＫ 02 と 03 は深さ約 0.7 mの土坑で、重複関係からＳＫ 02 →ＳＫ 03 →ＳＢ 01 の順である。ＳＫ 05 は西端から６m分が急勾配で下がっており、竪穴建物の南端部分とも考えられる。

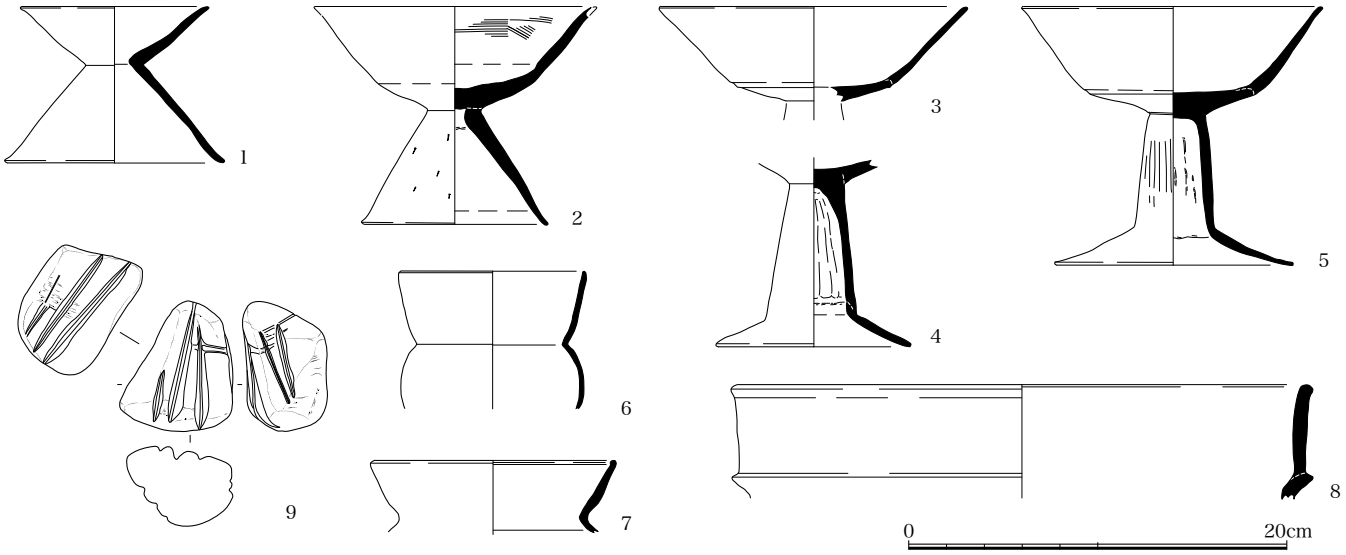
溝　ＳＤ 06 は、土坑ＳＫ 05 の外側 1.0 ～ 2.0 mの所を、その輪郭に沿って南と西側にめぐる溝である。



竪穴建物ＳＢ 01 平面・土層図 (1/50　上が新、下が古)

発掘区全景 (東から)

竪穴建物ＳＢ 01 古全景 (西から)



竪穴建物ＳＢ 01 出土遺物 (1/4)

奈良時代の遺構　発掘区外に続く遺構が多く全容が判明するものは少ない。

掘立柱建物　３棟検出しており、いずれも柱穴規模等から中小規模のものである。重複関係から２時期ある。

井戸　ＳＥ 10 は平面惰円形の掘方で、深さ約 0.6 m まで掘削したが井戸枠は確認できなかった。掘形中央の南寄りに枠または抜取り痕跡がある。８世紀後半～末の土器が少量出土した。

溝　ＳＤ 11 は南北方向の溝である。断面形はＵ字形で、溝底は北へ向かい低くなる。溝の南端は一辺約１m の不整方形の土坑状に広がる。奈良時代の遺構が重複せず溝の東側に分布することから、坪内の区画を示す溝とも考えられる。　（中島和彦）

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は、遺物整理箱３箱分の土器類と瓦類、石器等で多くは土器類である。土器類には古墳時代前期の土師器、奈良時代の土師器・須恵器がある。瓦類は古代の瓦が 14 点（0.75kg）出土したのみである。以下古墳時代前期の竪穴建物ＳＢ 01 出土遺物について記す。

ＳＢ 01 からは、土師器が遺物整理箱２箱分、砥石２点、不明石製品２点、鉄滓１点（10 ｇ）が出土した。土師器には高杯、小型器台、小型丸底鉢、壷、甕があるが残存状態が悪く、細片化したものが大半で調整がわかるものも少ない。総破片点数 1,070 点中の約半数が器種不明である。このうち器種がわかる分では、高杯・器台類が 35%、壷甕類が 65%となる。主要なものを図示する。

小形器台１は受け部と脚部が貫通する器形で、赤褐色の胎土である。高杯２は脚部が直線的に広がる円錐状で、杯部は口縁部と底部の境が緩やかに屈曲する。杯部底に脚部上面を接合する。脚部外面を下から上方向へヘラケズリ調整する。器壁は厚手で、やや黄味ががった橙色の胎土である。高杯３～５は脚部が屈曲して外側に広がる形態で、杯部は口縁部と底部の境が明瞭に屈曲する。３と４は脚部上面を杯部底とし、それに杯部を接合する。器壁は薄手で、赤味の強い橙色の胎土である。小形丸底壷６は口縁部が径・高さとも体部のそれとほぼ同じで、橙色の胎土である。甕７の口縁端部は内側に肥厚させ小さく丸く収める。胎土の色調は明赤褐色である。甕８は二重口縁で、胎土の色調は橙色である。９は砥石と考えられるが、対象物は不明である。亜角礫の三面に各２～３本の条痕が残る。条痕の断面はＶ字状であるが、底部は丸みをもっている。深い条痕に直交する傷状の浅い条痕も認められる。砂岩製で重量は 182 ｇである。

８のみＳＢ 01 新のベッド状遺構の盛土から、他はＳＢ 01 新の北端の床面上で出土した。

これらの出土土器は、甕と高杯・小形器台の形態から布留２式頃と考えられる。　（中島和彦　松浦五輪美）

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査で奈良時代の遺構を確認し、調査地周辺の丘陵上が宅地利用されていたことが判明した。平城京の右京域は丘陵と谷が入り組み、調査地と同様に丘陵上に奈良時代の掘立柱建物群が検出される例が多い。しかし周辺はすでに宅地造成が大きく進んでおり、遺構が残存する部分は限定されよう。

また古墳時代前期の遺構を新たに確認した。調査地の東約 600 m の菅原東遺跡では、古墳時代前期の環濠居館と竪穴建物が 10 棟以上確認され、この時期の中心集落を形成している。距離的に両者が一体の遺跡とは考えられないが、調査地は眼下に菅原東遺跡が見渡せる位置にあり、両遺跡の関係に興味深いものがある。（中島和彦）

13. 平城京跡（左京三条二坊十一坪）の調査　第 655 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 24 年 1 月 11 日～ 1 月 24 日
届出者名　大和ハウス工業株式会社	調 査 面 積　108㎡
調 査 地　三条大路一丁目 645 － 2 の一部　他	調査担当者　原田香織　安井宣也

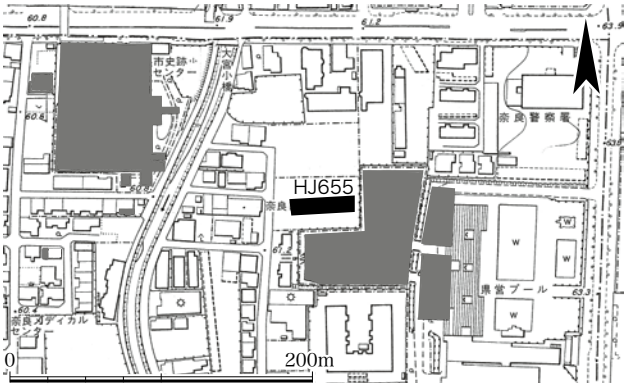
Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京三条二坊十一坪の南辺部中央付近にあたる。地形的には佐保川の氾濫平野に位置し、西方に佐保川支流の菰川が南流する。

左京三条二坊では、これまで主に北西部・北東部と南西部で発掘調査が行われ、概して一坪以上を占める大規模な宅地に利用されていたことが確認されている。

北西部の一・二・七・八坪では、奈良時代前期に四坪利用の長屋王邸となり、中期に一坪利用の宅地に分割され、後期に再び四坪利用の宅地、末期に一坪利用の宅地に分割されるという変遷が明らかになっている[1)]。西に隣接する六坪では苑池（宮跡庭園）が確認されている[2)]。北東部の十五坪では奈良時代前期から平安時代初頭にかけて宅地利用され、奈良時代中期まで一坪利用であったことがわかっている[3)]。南西部では、三坪で奈良時代前半～中頃、四・九坪で奈良時代後半に一坪利用であったことが確認されている[4)]。

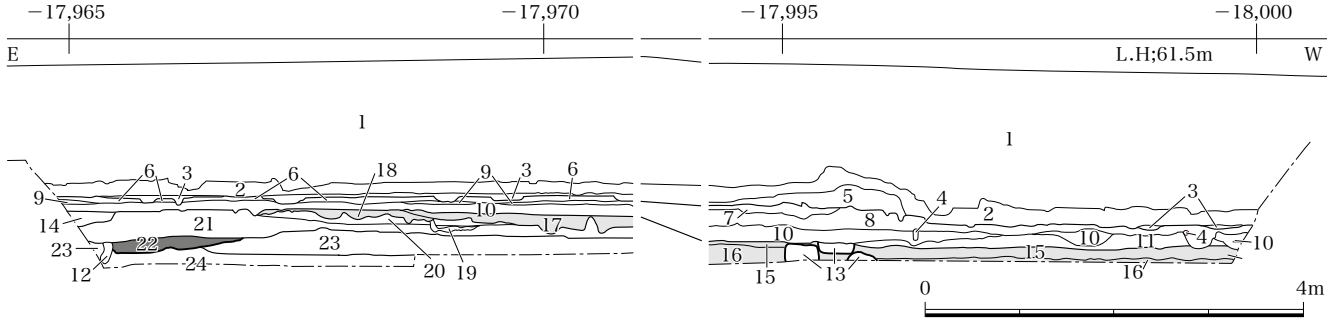
調査地のある南東部ではこれまで発掘調査が進んでおらず、宅地利用の様相もよくわかっていなかったが、平成 23 年度に調査地の東・南隣接地で奈良県立橿原考古学研究所が十一坪南東部・十二坪北東部・十三坪北西部・十四坪南西部にわたる範囲の発掘調査を実施し、三条条



発掘区位置図（1/5,000）

間南小路、東二坊坊間東小路と掘立柱建物・塀、多数の柱穴、井戸、土坑などを検出した。建物が小規模で、道路側溝や井戸から奈良時代後半～平安時代前期の土器が多数出土したことから、奈良時代後半～平安時代にかけて坪内を細分し塀で区画する小規模な宅地として利用したと推察されている[5)]。

なお、調査地周辺の発掘調査では弥生～古墳時代以前の遺構も確認されている。調査地の東約 250 m の市ＨＪ第 375 次調査地（平成 9 年度）では奈良時代の遺構面の 0.5 m下で弥生時代中期末～後期初頭の旧河川と井堰、北東約 200 m の国第 86 次調査地（昭和 48 年度）では奈良時代の遺構面と同じ沖積層上面で古墳時代中期



1　造成土
2　暗灰色砂質シルト〈水田耕土〉
3　淡灰色砂質シルト〈水田鋤床〉
4　暗灰色砂質シルト〈杭穴〉
5　灰色砂質シルト　〈畦畔の心土〉
6　淡灰黄色砂質シルト〈水田床土〉
7　淡灰黄色砂質シルト〈水田床土〉
8　淡灰黄色砂質粘土混じりシルト（土器細片・炭粒含む）〈水田床土〉
9　灰黄色砂質粘土混じりシルト（土器細片含む）〈水田床土〉
10　灰オリーブ色砂質シルト（斑鉄多し、土器片含む）〈水田床土〉
11　灰茶色砂質粘土混じりシルト〈水田床土〉
12　灰褐色シルト質粘土〈木根跡〉
13　灰茶色シルト質粘土ブロック・灰色シルト質砂混合〈柱穴〉
14　黄茶灰色砂混じり粘質土〈整地土〉
15　灰緑色粘土質シルトブロック混じり淡灰色シルト質砂　〈流路内埋土〉
16　淡灰色シルト質砂〈流路内埋土〉
17　淡灰色シルト質砂〈流路の氾濫堆積層〉
18　淡灰色シルト質砂・20混合〈流路の氾濫堆積層〉
19　灰白色粘土〈木根跡〉
20　茶褐灰色砂質シルト〈沖積層〉
21　オリーブ褐灰～灰褐色砂混じりシルト質粘土〈沖積層〉
22　黄灰色粘土・23・24各ブロック混合〈ＳＸ10埋土〉
23　茶灰色砂質～シルト質粘土〈沖積層〉
24　黒褐色粘土〈沖積層〉

発掘区南壁土層図 (1/80)

の溝、北西約250 mの国第193次調査（昭和63年度）では奈良時代の遺構面と同じ沖積層上面で古墳時代中期後半の居館とみられる方形区画が検出されている。

今回の調査は十一坪南辺部中央における宅地利用の様相と古墳時代以前の遺構の有無の確認を目的とし、宅地内道路建設予定箇所に発掘区を設定して実施した。

Ⅱ　基本層序

現ＧＬ－2.1 m（標高59.2 m）まで確認した。

基本的にアスファルト、造成土（厚さ1.2～1.4 m）の下に耕土･鋤床である暗灰色や淡灰色の砂質シルト（厚さ0.15 m）、床土である淡灰黄色や灰オリーブ色の砂質シルト（厚さ0.15～0.4 m）がみられるが、その下層は発掘区の西寄り約８ｍとその東側で様相が異なる。

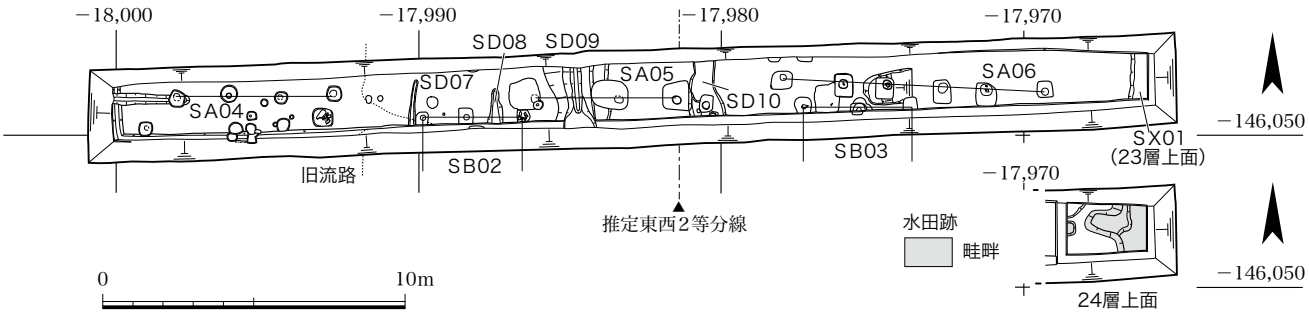
発掘区の西寄り約８ｍでは流路内の埋土である灰緑色粘土質シルトブロック混じりの淡灰色シルト質砂（厚さ0.1 m）、淡灰色シルト質砂（厚さ0.4 m以上）となる。その東側では流路の氾濫で堆積した淡灰色シルト質砂（厚さ0.1 m）の下に沖積層のオリーブ褐灰～灰褐色砂混じりシルト質粘土（厚さ0.25 m）、茶灰色砂質～シルト質粘土（厚さ0.25 m）、黒褐色粘土（厚さ0.2 m以上）が続く。なお、淡灰色シルト質砂は発掘区の東端ではみられない。

灰オリーブ色砂質シルトには少量の瓦器の破片とともに８世紀の土師器・須恵器の破片が多く含まれる。

床土直下の灰緑色粘土質シルトブロック混じりの灰色シルト質砂層、淡灰色シルト質砂層やオリーブ褐灰～灰褐色砂混じりシルト質粘土層の上面で奈良時代の遺構を検出した。遺構面は東から西に緩やかに下っており、その標高は59.3～59.7 mである。

発掘区全景（西北西から）

発掘区全景（東から）



発掘区遺構平面図 (1/250)

なお、発掘区南壁や遺構の断割部分の土層断面において、沖積層の黒褐色粘土層の上面に 0.05 ～ 0.1 mの段差と平坦面が連続する状態が観察できた。また、その上層の茶灰色砂質～シルト質粘土層の上面にもやや不明瞭であるが同様の状態が観察できた。これは弥生～古墳時代の小区画水田に特徴的な様相と考えられたため、発掘区の東端において、沖積層の茶灰色砂質～シルト質粘土層及び黒褐色粘土層上面で、古墳時代以前の遺構の有無確認を行うための補足調査を行った。黒褐色粘土層上面の標高は 59.2 ～ 59.3 mである。

Ⅲ　検出遺構

古墳時代以前の遺構

茶灰色砂質～シルト質粘土層上面で溝状遺構ＳＸ01、黒褐色粘土層上面で水田跡を検出した。

ＳＸ01 は南北方向の溝状の窪み。幅 1.4 m、深さ 0.14 mで、底面の標高は 59.2 ～ 59.3 mで南に向けて低くなる。埋土は茶灰色シルト質粘土・黒褐色粘土のブロック土で、人為的に埋め戻されたものとみられる。出土遺物はない。

黒褐色粘土層上面で東西に２つの高まりを検出した。東側は高さ 0.1 m、長さ 1.0 m、幅 0.8 mで西に突出する部分がある。西側は幅 0.5 m、高さ 0.05 mで、帯状に西に延びるようである。ともに上面には一段低い周囲の平坦な面よりも乾裂痕と酸化鉄の沈着が顕著に認められ、より乾燥した形跡を示す。

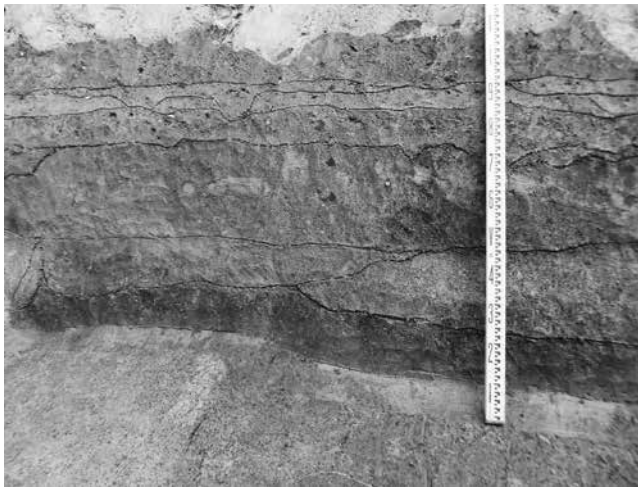
前述した層相も勘案すれば、黒褐色粘土層の上面は水田跡で、東西の高まりはその畦畔とみることができる。高まり間の幅 0.55 mの窪みは灌漑用水を流すための水口とみられる。

出土遺物は補足調査区外の茶灰色砂質～シルト質粘土層から出土した弥生時代前期のものとみられる流紋岩製の石包丁の破片１点のみである。

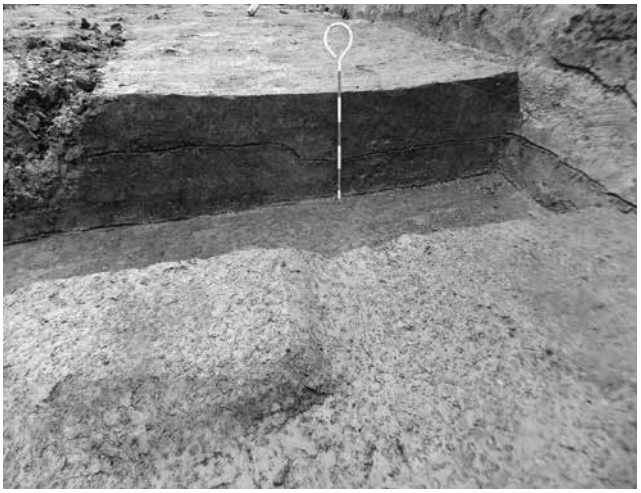
資料が少ないため遺構の時期を確定できないが、水田跡は弥生時代前期のものである可能性があり、ＳＸ01 は弥生時代～古墳時代の遺構と考える。

奈良時代の遺構

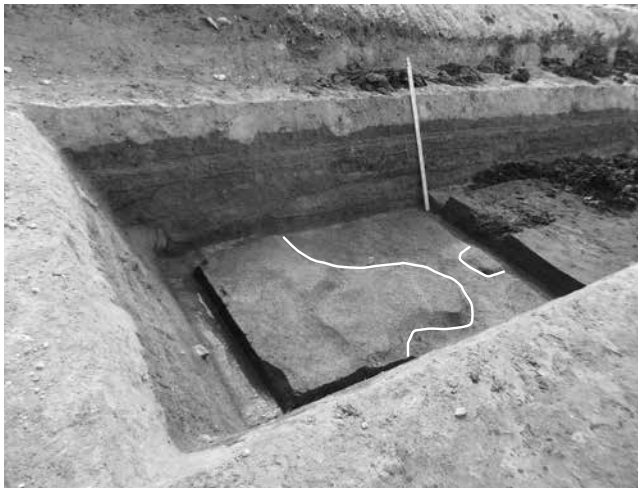
掘立柱建物２棟（ＳＢ02・03）、掘立柱列３条（Ｓ



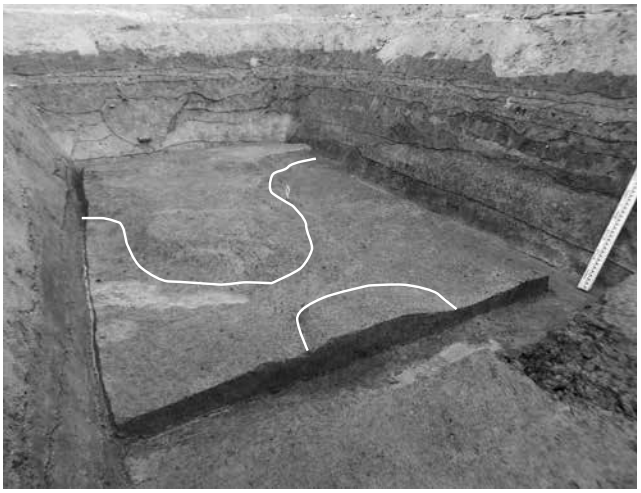
下層南壁断面（北から）



下層西壁断面（東から）



下層遺構検出状況（北東から）



下層遺構検出状況（西北西から）

検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		廂の出	柱穴の深さ	備考
		桁行×梁行	（m）	（m）	桁行	梁行	（m）	（m）	
ＳＢ02	南北	梁行２		3.3		西から 1.6-1.7		0.2～0.4	柱穴：一辺0.4～0.5ｍ、ＳＡ05より古い ＳＢ03と柱筋が揃う
ＳＢ03	南北	梁行２		3.6		1.8等間		0.15～0.3	柱穴：一辺0.5ｍ、ＳＢ02と柱筋が揃う ＳＡ06とは併存しない
ＳＡ04	東西	3	5.1		1.7等間			0.2～0.3	柱穴：一辺0.4～0.5ｍ、ＳＡ05と柱筋が揃う
ＳＡ05	東西	2	4.7		西から 2.7-2.0			0.5～0.6	柱穴：一辺1.0～1.2ｍ、ＳＢ02・ＳＤ09より新しく、ＳＤ10より古い。ＳＡ04と柱筋が揃う
ＳＡ06	東西	5	8.5		西から 1.9-1.5-1.8-1.5-1.8			0.3～0.4	柱穴:一辺0.5～0.8ｍ､北方向でやや東に振れる。両面廂付建物の可能性

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
ＳＤ07	南北溝	長さ2.1以上×幅0.5	0.05～0.25	８世紀	土師器杯か皿	
ＳＤ08	南北溝	長さ2.1以上×幅0.5	0.05～0.3	８世紀後半	土師器杯Ａ（８世紀後半)･杯か皿･杯蓋･高杯か盤･甕、須恵器皿Ｃ･甕	
ＳＤ09	南北溝	長さ2.1以上×幅約2.0	0.2～0.25	８世紀後半～末	土師器杯か皿Ｂ・杯か皿・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ（８世紀末）高坏・甕、須恵器皿Ｃ・杯蓋（転用硯あり)・壷（内面漆付着あり)・甕、平瓦	ＳＡ05より古い
ＳＤ10	南北溝	長さ2.1以上×幅約1.35	0.1～0.2	８世紀	土師器杯か皿・甕、須恵器杯Ａ・杯ＡかＢ・杯か皿・杯蓋・壷	ＳＡ05より新しい 東西1/2付近

Ａ04～06)、溝３条（ＳＤ07～10）がある。各遺構の概要は表のとおりである。

掘立柱建物ＳＢ02・03はいずれも東西方向の掘立柱列であるが、規模から南北棟建物の妻柱列と考える。掘立柱列ＳＡ04～06もそれぞれ掘立柱建物の一部である可能性があり、ＳＡ06は中央の４つの柱穴よりも両端の柱穴がやや小さいことから、両面廂付建物の可能性がある。

ＳＢ02の柱穴埋土から８世紀後半以降のものを含む土師器（皿Ｃ・杯か皿・高杯・壷Ｂ・甕）・須恵器（杯ＡかＢ・杯蓋)・丸瓦・平瓦が出土した。ＳＡ05は柱掘方の平面が一辺１ｍ前後と大きく、埋土から８世紀末～９世紀初頭のものを含む土師器（杯Ａ･皿Ａ･杯か皿Ｂ･蓋･甕･竈)･黒色土器Ａ類（杯か皿)･須恵器（杯Ａ･杯Ｂ（転用硯２点あり)・杯Ｅ・皿Ｃ・杯蓋・壷Ａ・鉢Ａ・甕Ｃ)・製塩土器・丸瓦・平瓦が出土した。ＳＢ03・ＳＡ04・06の柱穴埋土からも８世紀の土師器・須恵器の破片が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。器種が判明したのは以下のとおり。ＳＢ03は土師器杯か皿、須恵器杯Ａ・杯ＡかＢ・杯か皿・壷、ＳＡ04は土師器甕、ＳＡ06は土師器杯か皿･甕、須恵器杯ＡかＢ･皿ＡかＢ･鉢･甕である。この他にＳＡ06から丸瓦･平瓦が出土した。

なお、これらの掘立柱列は、三条条間南小路北側溝の北肩の約15ｍ北[6]に位置する。また、ＳＡ05の東端の柱穴の位置は、東二坊坊間東小路の道路心から推定される十一坪の東西２等分線[7]上に位置する。

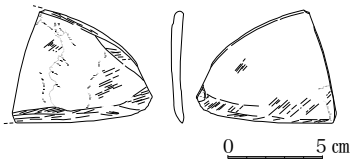
ＳＤ07の埋土は上位が茶灰色シルト質粘土・黒褐色粘土のブロック土、下位がオリーブ灰色シルト質粘土。ＳＤ08の埋土は茶灰色シルト質粘土のブロック土。ＳＤ09の埋土は茶灰色シルト質粘土･黒褐色粘土のブロック土。ＳＤ10の埋土は灰色砂質シルトと茶灰色シルト質粘土・黒褐色粘土のブロックの混合土。溝の底面はＳＤ09を除いて北から南に向かって低くなる。

なお、ＳＤ10は西肩の位置が十一坪の東西推定２等分線の位置とほぼ一致し、ＳＤ09も近接する。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱５箱分があり、大半が奈良時代の遺構や床土の灰オリーブ色砂質シルト層などから出土した８世紀の土師器・須恵器と瓦（丸瓦・平瓦）である。土器類には８世紀後半や少量の８世紀末～９世紀初頭のものが含まれるが、８世紀前半と判明するものは出土していない。また、わずかであるが瓦器・国産陶磁器の破片が床土から出土した。このほかに茶灰色砂質～シルト質粘土層の上部から出土した弥生時代前期の石包丁が１点ある。

石包丁は端部の破片で、長さ7.4cm、幅6.0cm、厚さ0.5cm、重さ31ｇ。やや肌色を帯びた白色の流紋岩製で、表裏に剥離面が残る。刃部はやや外湾するものの、背がより大きく外湾しており直線刃とみられる。表裏両面から研磨されているが基本的に片刃である。穿孔は認められない。石包丁は、茶灰色砂質～シルト質粘土層にほぼ垂直に刺さった状態で出土した。



出土石包丁（1/4）

Ⅴ　調査所見

今回の調査の結果、調査地内には奈良時代の宅地に関連する建物・溝や、弥生～古墳時代の水田跡や溝状遺構ＳＸ01が残っていることがわかった。

奈良時代の建物配置については、

1)　併存の可能性がある柱筋を揃えるものを含む複数の掘立柱建物・柱列が三条条間南小路北側溝の北肩の約

15 m北に位置する

2)　大きな柱掘方を持つＳＡ 05 の東端の柱穴の位置が東二坊坊間東小路の道路心から推定される十一坪の東西２等分線上に位置する

の２点から、かなり計画的であったことが推察できる。

また、宅地利用については、2）と、

3)　柱筋が揃う建物ＳＢ 02・ＳＢ 03 が、十一坪の東西２推定等分線をはさんで建てられている

4)　十一坪の東西推定２等分線付近に南北方向の溝ＳＤ 09・10 が掘削されている

の３点から、坪内を東西に分割する時期と分割せずに利用する時期があったことがうかがえる。柱筋が揃う建物を同時併存とみなし、建物・溝の重複関係と考え合わせて読み取れる宅地利用の変遷は表のとおりで、４時期の変遷が追える。その時期は掘立柱列ＳＡ 05 の柱掘形や溝ＳＤ 09 から出土した土器から、奈良時代後半から平安時代初頭頃と想定できる。

今回の調査結果と左京三条二坊の北西部・北東部・南西部の調査成果を踏まえると、今年度に東隣接地で奈良県立橿原考古学研究所が実施した発掘調査で検出した十一坪の南東部の奈良時代後半から平安時代にかけての宅地関連の遺構（小規模な掘立柱建物、掘立柱塀、井戸）については、小区画の宅地利用ではなく、雑舎のある一坪利用や 1/2 坪利用の宅地の縁辺部の利用状態を示す可能性もあり得る。十一坪内の宅地利用の様相や建物群の性格の究明については、今後慎重に行う必要がある。

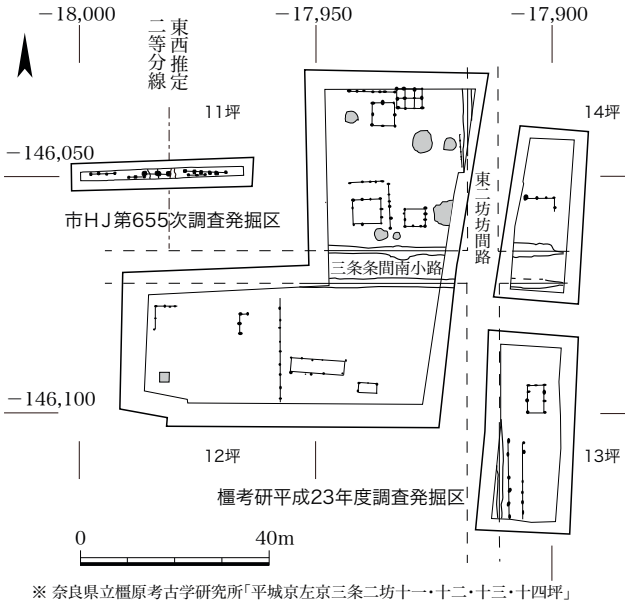
弥生～古墳時代の水田跡については、今回の調査地のように 0.2 ～ 0.3 m程度のシルト・粘土層が累重しているケースでは、水田面が機能時以後の地表付近のさまざまな物理・化学的作用（加圧による変形、土壌化や乾湿の繰り返しによる変形・変質、水との化学反応よるグライ化）の影響を受けやすいため、検出が困難なことが多い。しかし今回の調査地の場合、黒褐色粘土層の上面の形状が断面観察で把握し易かったことから水田跡を検出することができた。畦畔に乾裂痕や斑鉄が顕著で水口がみられることから、乾湿が繰り返す低地に営まれた乾田とみることができる。また、直上に堆積する茶灰色砂質～シルト質粘土層の上面についても、形状からみて水田跡が残っていると判断する。

付近一帯の旧地形や、調査地の東約 250 mの市ＨＪ第 375 次調査地で弥生時代中期末～後期初頭の旧河川と井堰、北東約 200 mの国第 86 次調査地で古墳時代中期の溝、北西約 250 mの国第 193 次調査で古墳時代中期後半の居館とみられる方形区画が検出されていることを踏まえれば、調査地周辺に弥生～古墳時代の水田跡が広く残っている可能性がある。当時の地域社会・経済の動向を把握する手掛かりとなる遺構であるが、不明な点も多いため、周辺地域において今後調査を実施する際にはその有無を確認する必要がある。　（安井宣也･原田香織）

遺構・宅地利用変遷表

古	ＳＤ 09			（東西に分割）
↓	↓			↓
	ＳＢ 02	＝	ＳＢ 03	（分割せず）
	↓			↓
	ＳＡ 04	＝	ＳＡ 05	（分割せず）
新	↓			↓
	ＳＤ 10			（東西に分割）

※　↓：先後関係　　＝：併存



※ 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京三条二坊十一・十二・十三・十四坪」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）』2011をトレース・加筆

遺構配置図 (1/1,600)

［註］

1)　奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995

2)　奈良市教育委員会『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986

3)　奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』1975

4)　主な発掘調査と報告は以下の通り

三坪・国 151-32 次調査　奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』1984

四坪・国 174-10 次調査　奈良国立文化財研究所「左京三条二坊三・四坪の調査　第 174-10 次」『昭和 61 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1987

・市ＨＪ第 280 次調査　奈良市教育委員会「平城京左京三条二坊四坪の調査　第 280 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成５年度　1994

九坪・市ＨＪ第 002 次調査　奈良市教育委員会「平城京左京三条二坊九坪発掘調査概要報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和 54 年度　1979

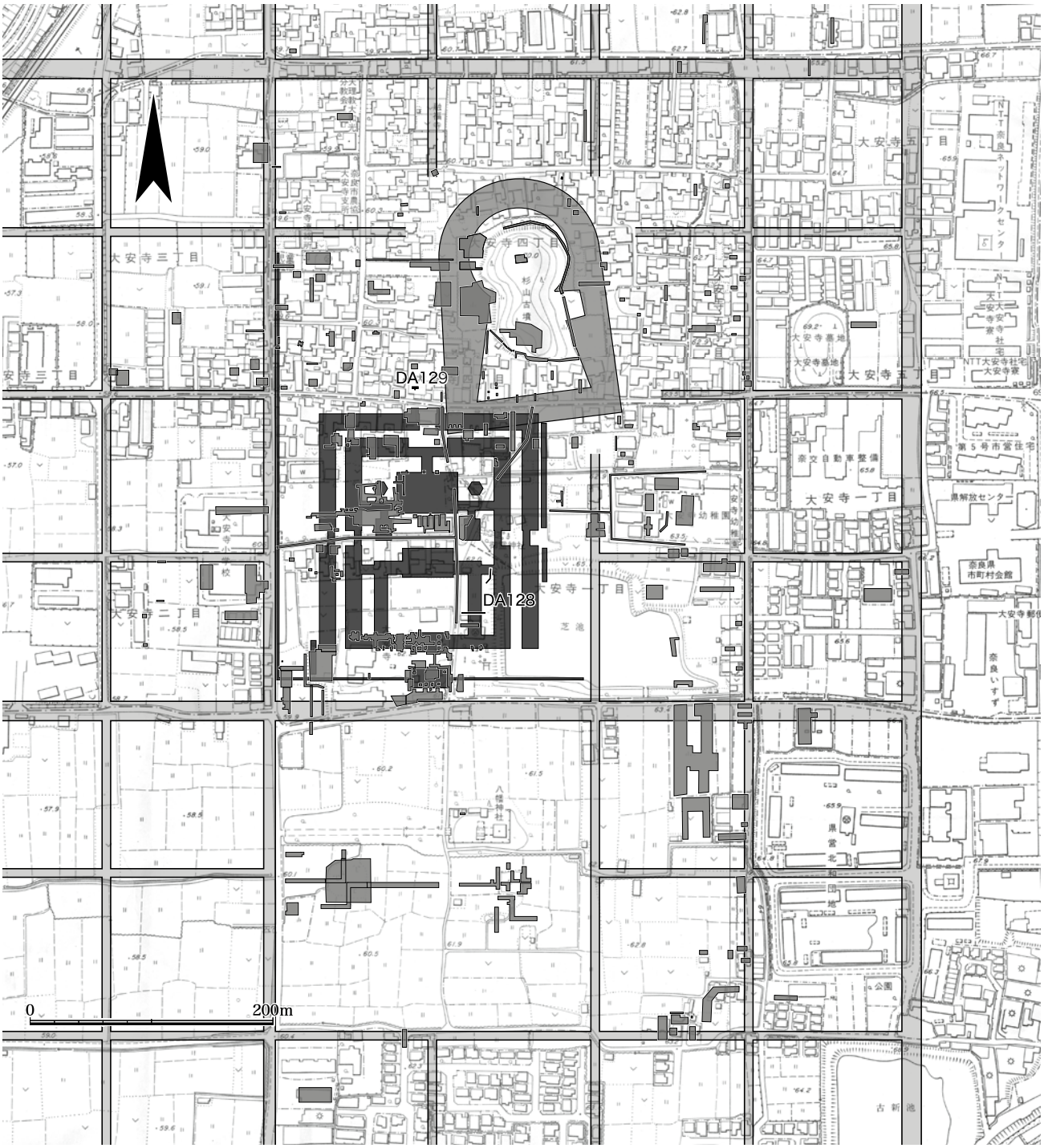
5)　奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京三条二坊十一・十二・十三・十四坪」『奈良県遺跡調査概報 2011 年（第二分冊）』2011

6)・7)　奈良県立橿原考古学研究所北山峰生氏からの提供資料（1：100 平面図）に基づいて位置を把握した。資料提供について、記して感謝します。

14．史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 23 年度に史跡大安寺旧境内において計 2 件の調査を実施した。第 128 次調査は、東面回廊の範囲確認調査で、基壇外装西辺の位置を示す延石を検出し、東面回廊の基壇幅を 10.8 m（36 尺）に復原できることが判明した。第 129 次調査は住宅建築に伴う調査で、食堂并大衆院推定地で実施した。

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA 第 128 次調査	重要遺跡範囲確認調査	大安寺一丁目 1290-1 の一部	H23.7．11 ～ 8.4	34㎡	原田香
DA 第 129 次調査	一戸建て住宅の建築	大安寺四丁目 1058-1 他	H23.8．22 ～ 9.16	44㎡	三好



史跡大安寺旧境内　発掘区位置図（1/5,000）

（1）東面回廊推定地の調査　第 128 次

Ⅰ　はじめに

調査地は芝池の土手の西側に接する休耕田で、東面回廊の推定地にあたる。東面回廊は梁行２間（13 尺等間）の複廊と考えられている。調査地の南隣接地で平成９年度に実施したＤＡ第 76 次調査では、東面回廊基壇築成土とその東辺基壇外装の凝灰岩切石列（延石・地覆石）、西辺基壇外装抜取痕を検出し、西辺は伽藍復原とほぼ一致したが、東辺は復原と異なり東へ大きく張り出した位置で見つかった。また、検出できるはずの礎石や礎石据付穴もなく、この成果が東面回廊全体に及ぶものなのか、この地点だけのものなのかは明らかにできなかった。

このことを受けて、今回の調査は東面回廊の残存状況や位置、規模の確認と、伽藍復原にある東面回廊と東太房南列をつなぐ廡廊の有無の確認を目的に、東面回廊を東西に横断する位置に南発掘区（東西 20 m × 幅 1 m）を、廡廊を南北に横断する位置に北発掘区（南北 14 m × 幅 1 m）を設定して実施した。

Ⅱ　基本層序

南発掘区では、上から腐植土、耕土と続き、回廊基壇推定位置では地表下 0.25 ～ 0.3 mで灰青色シルト質粘土の地山となる。標高は 61.2 ～ 61.3 m。発掘区西端では地山との間に灰色砂質シルトが堆積する。地山上面の標高は約 61.1 m。発掘区東端ではさらに灰黄色砂質土、灰黄色粘質土、灰色粘質土が堆積し、地表下約 0.6 mで灰色シルト質粘土の地山となる。標高は約 61.0 m。

北発掘区では、東辺が芝池の土手にかかっており、上から腐植土、灰黄色砂質土・灰色砂と黄灰色シルトブロックの混合土、暗灰色砂質土・灰茶色砂質土と続き、淡灰色砂などの地山となる。西辺南半の耕土上面からは深さ 0.3 mである。地山上面が遺構検出面で、標高は北端で 61.25 m、南端で 61.5 mである。

Ⅲ　検出遺構

南発掘区　伽藍復原によれば、東面回廊の南から８間目にあたる。検出遺構には、東面回廊西辺基壇外装の凝灰岩切石、平安時代以前の土坑３基（ＳＫ 01・02・03）、平安時代の土坑１基（ＳＫ 04）、平安時代以降の土坑１基（ＳＫ 05）、鎌倉時代以降の土坑２基（ＳＫ 06・07）、時期不明の小穴１基（Ｐ 08）・溝１条（ＳＤ 09）・溝状遺構１条（ＳＸ 10）がある。

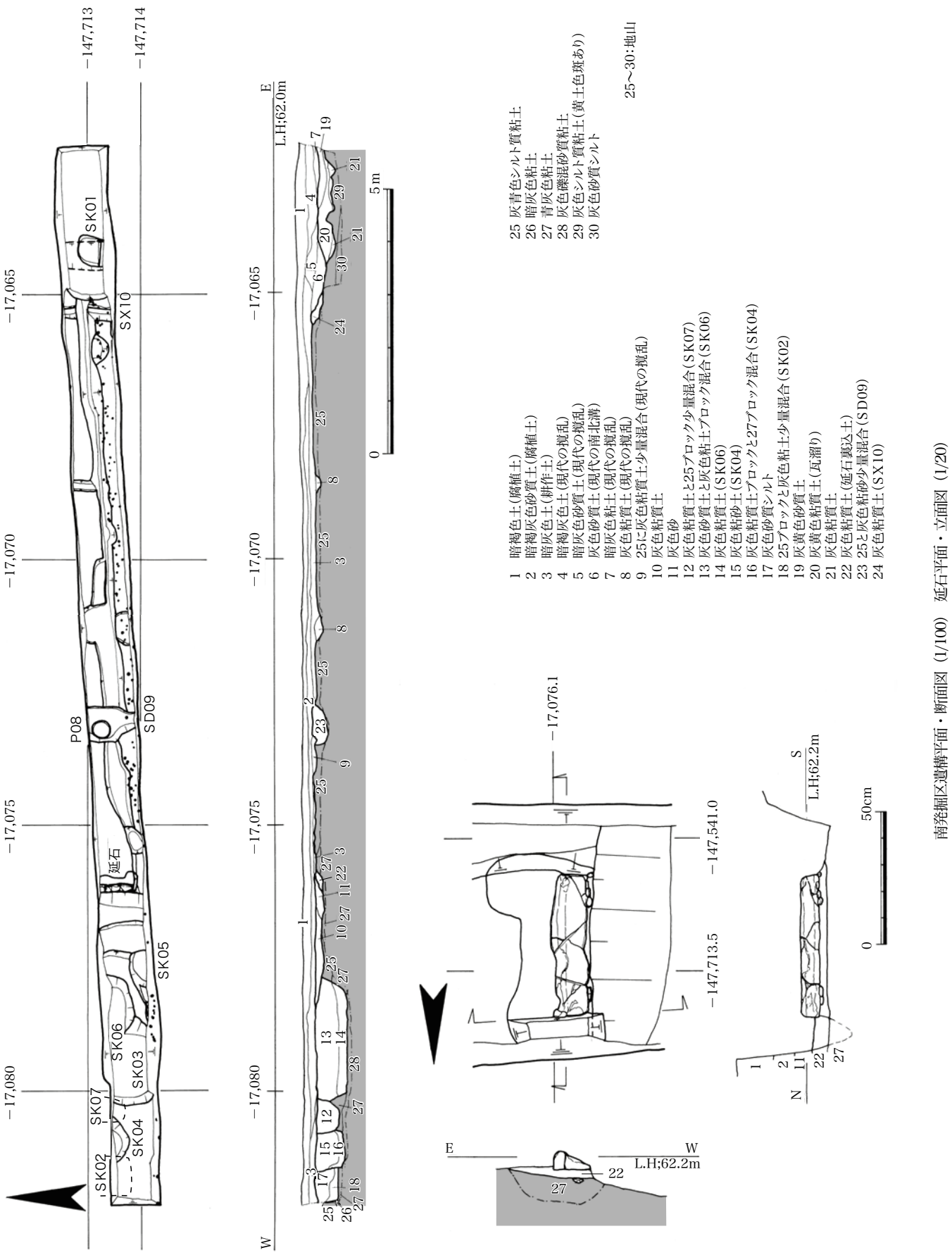
基壇外装　発掘区西側で凝灰岩切石１石を検出した。その南北両隣の石は抜き取られている。南北に長く、長さ 54cm、幅 13cm、厚さ７cm。全体の残りは悪く、ひびが全面に入っているが、西側以外の各側面には成形時の平坦面が残る。上面には東端から３cm ほどのところに幅約２cm の平坦面が残り、そこから西側にかけての摩耗が著しい。北側を断ち割ったところ、裏込め土が東側から底面にかけて堆積する。上面東寄りの平坦部は、ここに地覆石が掛かっていたため後世の削平からある程度免れて残ったものと考え、この凝灰岩は延石であると判断する。延石上面の標高は 61.225 m。

土坑　ＳＫ 01 は発掘区東端で、ＳＫ 02 ～ 07（ＳＫ 02・07 は北壁で検出）は延石より西側の発掘区西端付近で検出した。いずれも一部を検出したのみで全形は不明である。ＳＫ 01 は深さ 0.2 mで、埋土は暗灰色粘質土である。出土遺物は時期不明の土師器甕の破片のみであるが、直上層の灰黄色砂質土・粘質土から 10 世紀の土師器杯か皿と黒色土器Ａ類椀Ｂ・甕の破片が出土したので 10 世紀以前の遺構と考える。ＳＫ 02・03 は灰色砂質シルト層の下から、ＳＫ 04 ～ 07 は耕土直下から掘削されていた。灰色砂質シルトからは 10 世紀の土師器杯が出土した。ＳＫ 03 ～ 07 の埋土は灰色粘質土や粘砂土が主体で深さは 0.4 ～ 0.6 mである。ＳＫ 02・03 からは時期を判断できる遺物が出土しなかったが、直上層の灰色砂質シルト層の遺物から 10 世紀以前の遺構と考える。ＳＫ 04 からは 10 世紀後半の土師器皿Ａが、ＳＫ 05 から平安時代以降の軒丸瓦が、ＳＫ 06 から 12 ～ 13 世紀の土師器皿が出土した。ＳＫ 02 ～ 07 の重複関係はＳＫ 02・03 が一番古く、次にＳＫ 04・05・06、ついでＳＫ 07 の順となる。ＳＫ 02・03 とＳＫ 04・05・06 のそれぞれの重複関係は不明である。

小穴・溝　Ｐ 08 とＳＤ 09 は発掘区中央付近で検出した。Ｐ 08 の深さは、ＳＤ 09 底面から 0.1 mまでを確認し、さらに深くなる。出土遺物はない。ＳＤ 09 は深さ 0.22 mで、８世紀の瓦・土師器・須恵器の小片がわずかに出土した。遺構の時期は判然としないが、埋土の状態からどちらも近世以降の比較的新しいものと考える。重複関係はＳＤ 09 が新しい。

溝状遺構ＳＸ 10 は灰黄色粘質土が堆積する部分の西側で検出した。西肩は二段になり、東肩は現代の南北溝に壊される。幅 0.6 m以上、深さ 0.15 m。埋土は灰色粘質土で上部に凝灰岩粉末が部分的に集中する。８世紀の土師器と瓦類の小片がわずかに出土したのみで、時期は不明である。

北発掘区　伽藍復原で廡廊が想定されている箇所で



南発掘区遺構平面・断面図（1/100）　延石平面・立面図（1/20）

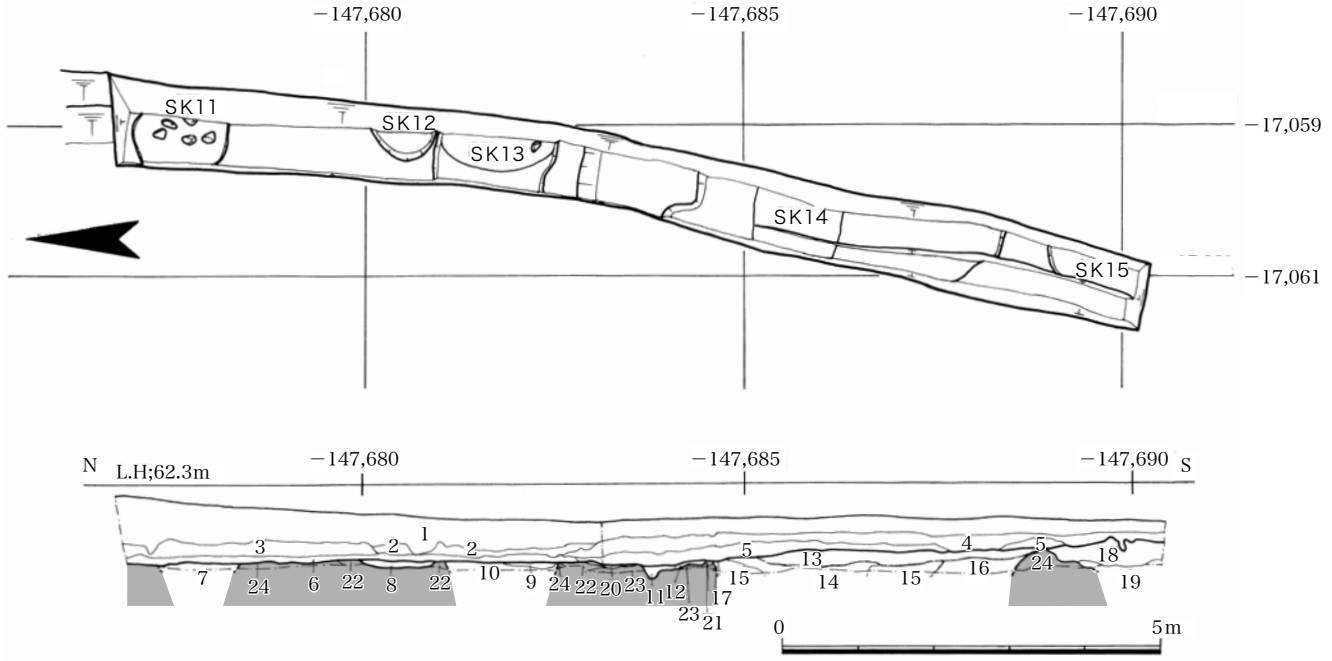
ある。検出遺構は平安時代の土坑３基（ＳＫ 11・14・15)、時期不明の土坑２基（ＳＫ 12・13）である。どれも一部のみを検出し、全形は不明である。また、ごく浅かったＳＫ 12 を除けば、底まで掘削していないため、出土遺物は限られる。ＳＫ 11 からは９世紀以降の土師器杯か皿・黒色土器Ａ類の小片が出土した。ＳＫ 14 は掘形が２重で井戸の可能性がある。外側の掘方から９世紀後半～ 10 世紀初頭の土師器杯・椀、10 世紀の土師器皿が出土し、内側の掘方から 10 世紀後半～ 11 世紀の土師器杯が出土した。なお、北発掘区ではＳＫ 12 以外の各層および各遺構埋土に凝灰岩の小片が含まれる。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱 71 箱分があり、各遺構や包含層から出土した８世紀の瓦類が大半を占める。

土器類は、奈良時代の土師器（８世紀：杯Ｂ・皿Ａ・高杯・甕・製塩土器、８世紀後半：杯Ａ、８世紀末～９世紀初頭：皿Ａ・杯Ａ・椀Ａ)・須恵器（８世紀以降：杯Ａ・杯Ｂ・皿Ｃ・杯蓋・壷Ａ・壷Ｍ・壷ＫかＬ・水か浄瓶・鉢Ａ・甕)、平安時代の土師器（９世紀：皿Ｃ・甕、９世紀前半：杯Ａ・皿Ａ・椀Ａ、９世紀半ば：杯か皿・椀Ａ、９世紀後半～ 10 世紀初頭：杯・椀、10 世紀：甕、10 世紀前半：皿・椀Ａ、10 世紀後半～ 11 世紀：杯・皿Ａ、11 世紀：椀Ａ、12 世紀：杯か皿・皿)・黒色土器Ａ類（９世紀以降：椀Ｂ・甕、９世紀末～ 10 世紀初頭：椀)・須恵器（９世紀：杯蓋)・緑釉陶器（９世紀中頃～後半：椀)・灰釉陶器（９世紀：段皿、９世紀後半：椀)、鎌倉時代の土師器（12 ～ 13 世紀:杯か皿)・瓦器椀・瓦質土器、室町時代の瓦質土器（15 世紀：浅鉢)、江戸時代の土師器・瓦質土器（18 世紀風炉・浅鉢)・国産陶器（19 世紀以降：鉢)、近代の陶磁器が各遺構や包含層から出土した。このうち灰黄色粘質土から出土した土師器杯か皿の底部外面に格子状の線刻や判読不能な墨書があるものが各１点あった。須恵器杯蓋の破片のほとんどは硯に転用されたもので、鉢Ａの破片を転用した例もあった。また、各時代の土師器・須恵器の杯・皿には、灯明皿として使用された痕跡が比較的多くみられた。これらは寺院遺跡の特徴といえるかもしれない。

瓦類には、７世紀～８世紀前半の平瓦、８世紀の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・熨斗瓦・塼・三彩垂木先瓦の可能性がある小片１点のほか、平安時代・中・近世の瓦がある。軒瓦の内訳は、軒丸瓦が 6137 Ａ２点・6138 Ｃｂ１点・6138 Ｅ４点・6138 Ｊ１点・6138 種別不明１点・6304 Ｄ１点・型式不明 10 点・平安時代以降のもの２点、軒平瓦が 6661 Ｂ２点・6712 Ａ７点・



1　暗褐色土(腐植土)
2　灰茶色砂
3　灰黄色砂質土
4　灰色砂と黄灰色シルトブロック混合
5　暗灰色砂質土
6　灰茶色砂質土
7　灰黄色土(SK11)
8　暗紫灰色土と22混合(SK12)
9　暗灰色粘質砂
10 灰黄色土と会食砂混合(SK13)
11 灰色砂
12 灰色砂質シルト
13 灰黄色砂質土(SK14)
14 淡灰色粘土(瓦溜り・SK14)
15 灰色砂質土と黄灰色シルトブロック少量混合(SK14)
16 灰黄色砂質土(SK14)
17 灰色砂質粘土(SK14)
18 淡灰黄色砂質シルト(SK15)
19 灰黄茶色粘砂土(SK15)
20 灰黄色粘質土
21 灰黄色シルト質細砂
22 灰黄色シルト質砂
23 黄茶灰色粘質シルト
24 淡灰色砂
20～24:地山

北発掘区遺構平面・断面図（1/100）

南発掘区全景（西から）

延石検出状況（西から）

6716 C 1点・6716 D 1点・6717 A 2点・6690 1点・型式不明5点・大安寺248 A 1点・平安時代以降のもの1点の合計43点である。

この他に桃種・梅種が出土している。

V　調査所見

東面回廊の遺構としては、西辺基壇外装の延石1石を検出したのみである。基壇築成土を検出したＤＡ76次調査の検出面よりも約0.5 m低く、基壇築成土や東辺基壇外装などは後世の削平のため残っていないと判断できる。検出した延石を西端として、そこから東側に地山が高く残る部分があり、その幅は約10.6 mである。昭和29年の調査の南面回廊と中門の取付き部の成果から、東面回廊基壇の幅を梁間の東西外側に5尺ずつ広いものとして復原すると10.8 m（36尺）となる。これにより地山が高く残る部分が、基壇の規模をほぼ反映している

北発掘区全景（南から）

とみられる。また、延石上面の痕跡から地覆石西側面の位置を割り出し、ここから10.8 m東へいくと溝状遺構ＳＸ10があるので、ＳＸ10が東辺基壇外装の抜取痕である可能性が考えられる。

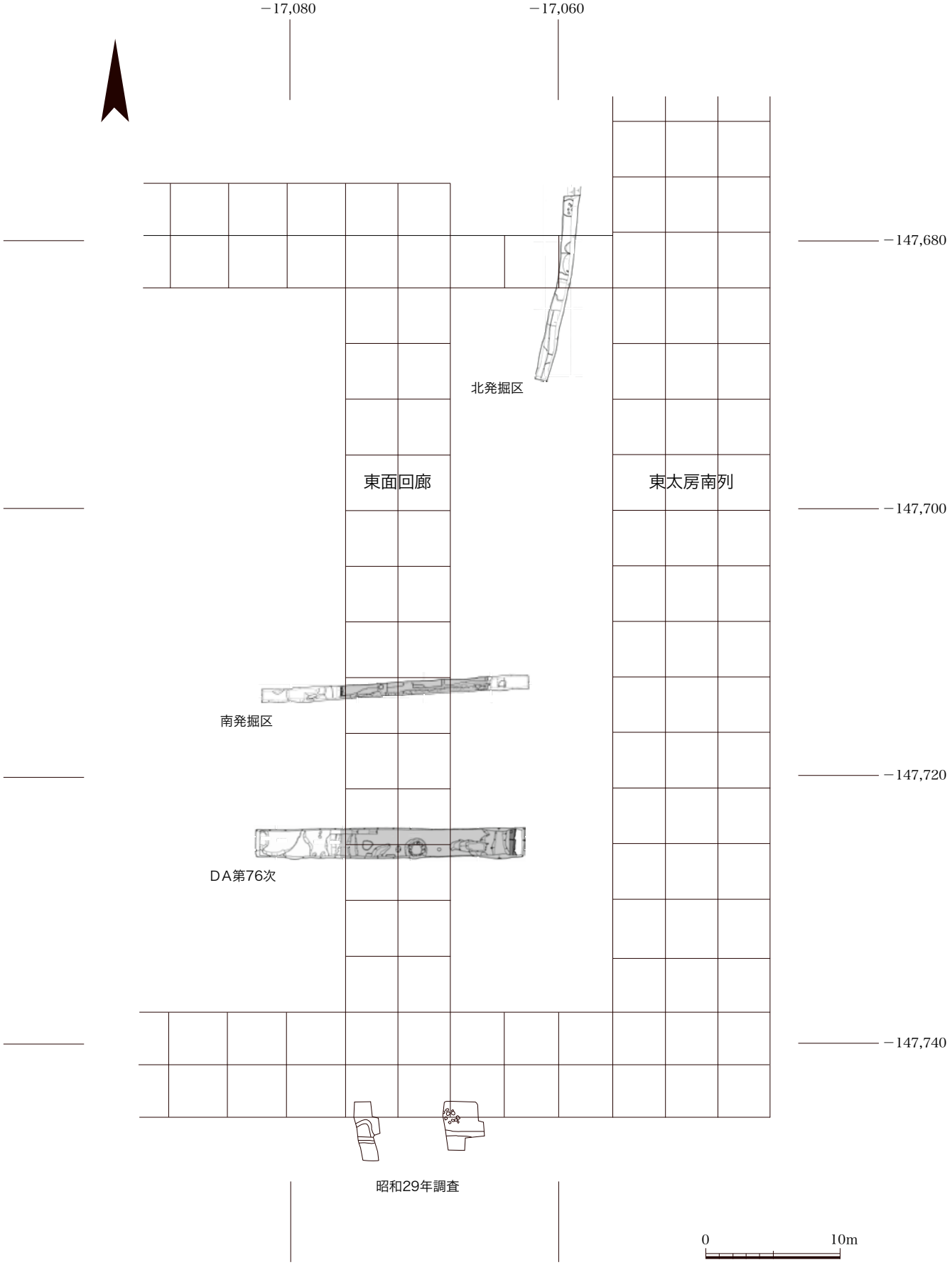
ＤＡ第76次調査では東辺基壇外装から西辺基壇外装抜取痕までの幅が約13.3 m（約45尺）で、従来の復原位置よりも東へ張り出すという結果であった。調査担当者は、東辺基壇外装の地覆石上面に残る枘穴の形状が登葛石を受けるものと同じであるとし、東へ張り出すのは、この部分に回廊東側にとり付く階段があったためかもしれないとの見解を後に述べている[1)]。今回検出した延石の位置をＤＡ第76次調査地に当てはめると、基壇の幅は12.6 m（42尺）となり、今回の想定幅よりも1.8 m（6尺）広いことがわかる。よって東面回廊南寄りの東側に基壇から1.8 m突出する階段がとり付くと考えられる。

一方、東面回廊と東太房南列をつなぐ廡廊については確認できなかった。南発掘区と同様に、後世に遺構面が大きく削平されて残っていない可能性が高いため、当初から造られていなかったかどうかは、今回の調査だけでは判断できない。

調査地は、一枚の水田として全体的に遺構面が大きく削平されており、東面回廊の残存状態はあまり良好でないことが判明した。

［註］

1）原田憲二郎 2011「大安寺の発掘調査成果から」奈良教育大学『地域と伝統文化』大学院特別講義（公開講義）《新薬師寺造営の時代》



周辺調査遺構配置図　1/400

（2）食堂并大衆院推定地の調査　第129次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市大安寺四丁目1058-1、1129、1130-2における一戸建て住宅の建築工事のための現状変更許可申請に関わる調査である。当該地は、大安寺の伽藍復原では食堂并太衆院にあたるが、これまで食堂関連の遺構は検出されていない。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、盛土（厚さ0.3～0.5 m）の下に、暗灰色砂（黄褐色粘土ブロック含む、厚さ0.1～0.15 m）が堆積し、表土から約0.4～0.65 mで黄褐色粘土の地山に至る。地山の標高は、発掘区東端で約61.5 m、西端で約61.2 mとなり、西へ下り勾配となっている。遺構は地山上面で検出した。

Ⅲ　検出遺構

発掘区北半部では、現代の池跡と考えられる撹乱坑と井戸1基が掘られ、調査面積の約1/4の遺構面が壊されていたが、素掘り溝2条（ＳＤ01･02)、土坑5基（ＳＫ01～05)、柱列（ＳＡ01)、小穴を検出することができた。

ＳＤ01は、発掘区中央で検出した南北方向の素掘り溝で、幅約0.6～1.1 m、南北4.4 m以上、検出面からの深さは北端で約0.3 m、中央付近は約0.6 mと深い。発掘区を南に拡張してＳＤ01がさらに南に続くことを確認したが、掘下げることはできなかった。埋土は大きく3層に分かれ、上層は暗褐色砂（黄褐色粘土ブロック混じる)、中層は灰色粘土、下層は黄褐色粘土と灰色粘土の互層である。上層と中層から、8世紀代の丸瓦・平瓦・軒丸瓦、9世紀後半の土師器・灰釉陶器片、11世紀末～12世紀初頭の瓦器椀片・土師器皿片が遺物整理箱で4箱分出土。

ＳＤ02は、ＳＤ01の東側で検出したＬ字状の溝である。幅0.9～1.2 m、南北2.3 m以上、東西1.4 m以上、検出面からの深さ約0.2 m。ＳＤ01との溝心々間距離は約2.6 mである。溝内の埋土は3層に大別でき、上層は暗褐色砂、中層は暗褐色砂と明褐色砂の互層、下層は褐色粘土と茶褐色砂の互層である。埋土から8世紀代の土師器杯・皿、須恵器、奈良三彩、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、9世紀後半の土師器杯・皿、須恵器壷、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、11世紀末～12世紀初頭頃の瓦器椀・皿などが遺物整理箱で9箱分出土した。

ＳＫ01は発掘区西半で検出した東西2.5 m、南北1.4 m、深さ0.6 mの平面長方形の土坑。ＳＫ02は東西1.0 m以上、南北2.0 m、深さ約0.3 mで、重複関係からＳＫ01よりも新しいことがわかる。ＳＫ03は東西1.4 m以上、南北0.2 m以上、深さ約0.3 m。ＳＫ04は東西1.6 m、南北0.9 m以上、深さ約0.5 m。ＳＫ05は東西3.0 m、南北1.1 m、深さ0.4 mで、重複関係からＳＸ01・ＳＫ04よりも古い。これらの土坑埋土はいずれも暗褐色砂で、13世紀代の瓦器椀、8世紀以降の丸瓦・平瓦が少量出土した。

この他、建物としてまとまるものはないが、柱列になると考えられるものが1条ある。

ＳＡ01は、柱間が約2.2 mの1間以上の東西柱列で、主軸が国土方眼方位東で北に振れる。柱穴掘方から8世紀以降の瓦、9世紀代の灰釉陶器が数点出土した。重複関係からＳＤ02よりも新しいことがわかる。

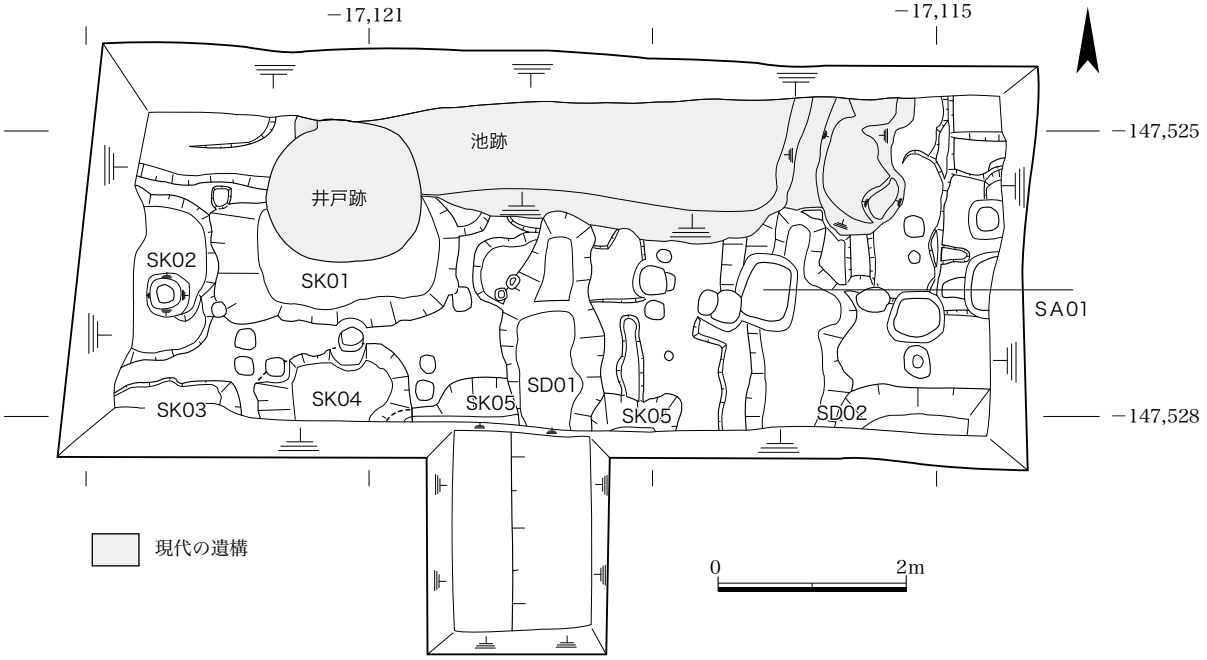
Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で33箱分の土器、瓦が出土したが、いずれも細片が多い。このうちの約4割がＳＤ01・02からの出土品である。

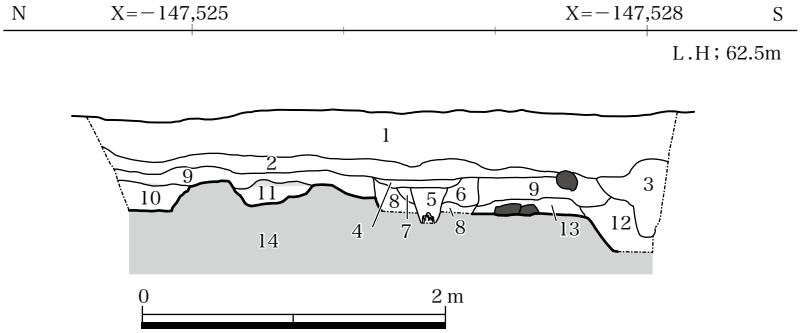
土器には、8世紀代の土師器・須恵器・奈良三彩、9世紀後半の土師器・灰釉陶器、11世紀末～12世紀初頭の土師器・瓦器、13世紀代の瓦器、15世紀前半の土師器、「赤ハタ」の刻印がある明治時代の陶器皿（写真）などがある。奈良三彩は、形状からみて陶枕になると考えられ、ＳＤ02から出土した。施釉陶器は全部で29点出土している。出土地点の内訳は、灰釉陶器がＳＤ01・02、ＳＡ01柱穴掘方、包含層から合計21点、緑釉陶器がＳＤ02、ＳＫ01から4点、奈良三彩がＳＤ01・02から4点である。灰釉陶器・緑釉陶器はいずれも9世紀代の製品と考えられる。

瓦は、大半が8世紀以降の丸瓦・平瓦である。軒瓦は8点あり、ＳＤ01から軒丸瓦6138 C (1点)･6304 D (1点)、ＳＫ02から軒丸瓦6231 A（1点)、軒平瓦6661 B（1点)、池跡と考えられる撹乱坑から軒丸瓦6304 D（1点)・6138 J（1点)、重弧文軒平瓦（1点)、軒

国産陶器皿（赤膚焼）　底部外面、「赤ハタ」刻印



発掘区遺構平面図（1/80）



1　暗褐色土＋灰色砂＋黄褐色粘土（表土）
2　明茶褐色粘土（造成土）
3　茶褐色粘土（撹乱）
4　褐色砂
5　灰色粘土
6　黄褐色粘土
7　灰色砂質粘土
8　茶褐色砂　※５～８：SA01 柱穴埋土
9　暗灰色砂（黄褐色粘土ブロック含む）
10　灰色砂＋黄褐色粘土
11　灰色砂＋黄褐色粘土
12　明褐色砂
13　暗褐色砂
14　黄褐色粘土（地山）

発掘区東壁土層図（1/50）

平瓦 6712 A（1 点）が出土した。この他に、ＳＫ 01・03 から鉄釘、砥石、壁土、鉄滓片が少量出土している。

Ⅴ　調査所見

今回の調査でも奈良時代の遺構や食堂に関わる遺構を検出することはできなかったが、13 世紀代の遺物を含む土坑５基と 13 世紀以降の溝２条を検出した。土坑からの出土遺物は少なく、ゴミ捨て穴とは考えにくい。土坑は、密集して分布している状況からみて、粘土を採った穴の可能性が考えられる。ＳＤ 01 とＳＤ 02 は、それぞれの溝の北端がほぼ揃うことから同時期の遺構と考えられ、ＳＫ 05 との重複関係から 13 世紀以降に掘られたものであることがわかる。どのような性格の遺構か明らかではないが、東西方向の掘立柱列ＳＡ 01 も含めて、鎌倉時代以降の大安寺旧境内地の利用状況を知るための手掛かりになるだろう。　（三好美穂）

南拡張区ＳＤ 01 検出状態（北から）

発掘区全景（西から）

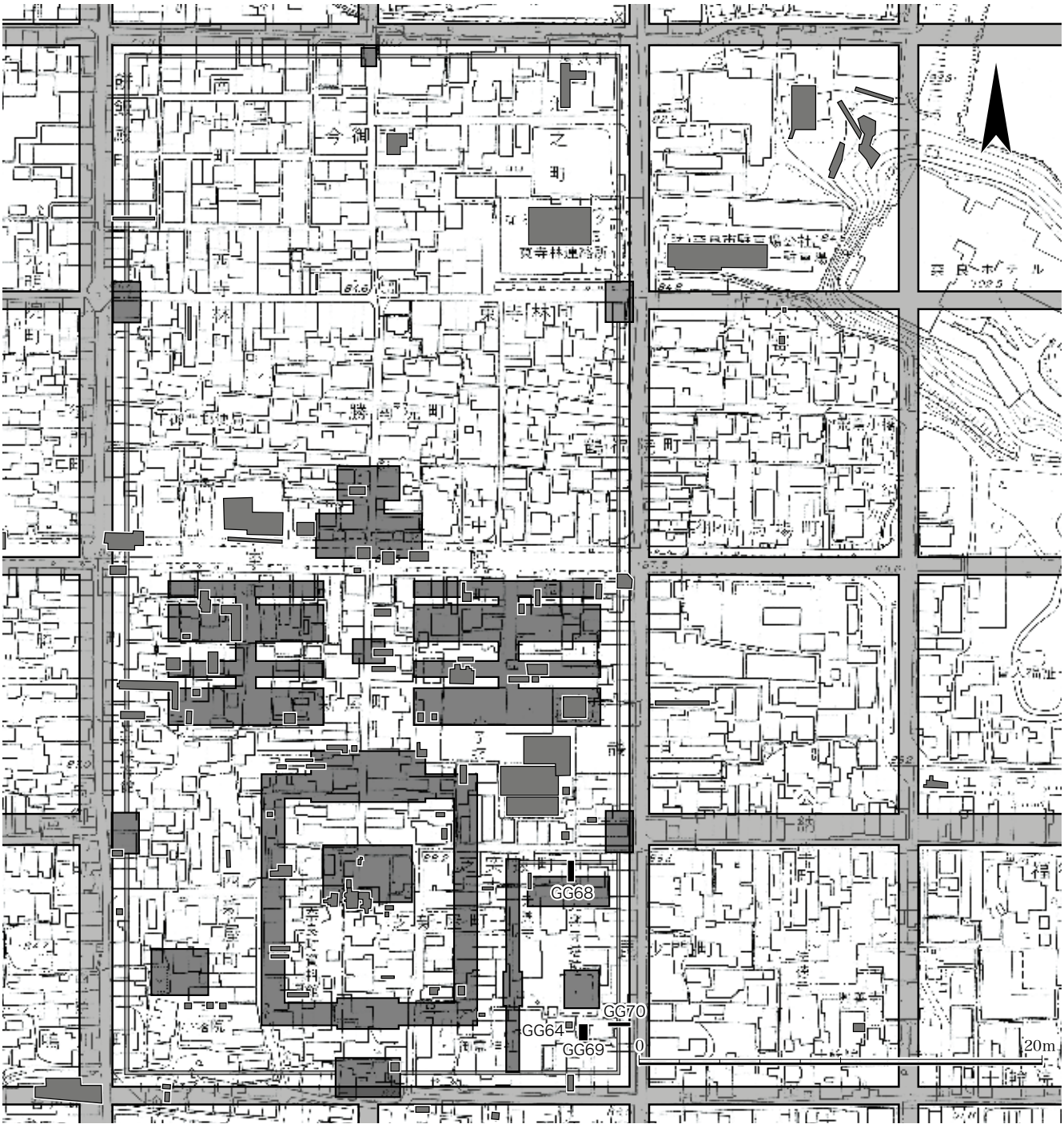
発掘区東半部（北西から）

15. 元興寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 23 年度に元興寺旧境内において 3 件の調査を実施した。いずれも住宅建設に係る調査で、東塔院地区に相当する。第 68 次調査は東塔院の北限築地、第 69・70 次調査は東塔周辺施設の確認を目的として行ったが、奈良時代の元興寺の遺構は確認できず中近世の遺構を確認したのみである。

平成 23 年度　元興寺旧境内　発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積（㎡）	調査担当者
GG 第 68 次	個人住宅新築	芝突抜町 1	H23.9.5 ～ H23.9.26	30	原田香
GG 第 69 次	個人住宅新築	毘沙門町 14 番 3	H24.2.13 ～ H24.2.21	20	中島
GG 第 70 次	個人住宅新築	毘沙門町 14 番 1 の一部	H24.2.13 ～ H24.2.21	10	中島



元興寺旧境内　発掘区位置図（1/3,000）

（1）東塔院推定地・奈良町遺跡の調査　第68次

Ⅰ　はじめに

調査地は、元興寺旧境内の伽藍復原によると東塔院を区画する北側の築地に当たる。過去にこの付近で実施した調査には、北面道路を隔てた向かい側のＧＧ第１次調査、20 m西のＧＧ第 42 次調査、約 20 m北東のＧＧ第 46 次調査、約 40 m西のＧＧ第８次調査などがあり、奈良町遺跡に伴う中世～近世の遺構を検出した。しかし、奈良時代の遺構はＧＧ第 42 次調査で検出した土坑１つのみである。そこで今回は、奈良時代の遺構の残存状況を確認し伽藍配置を復原する資料を得ることと、奈良町遺跡の様相確認を目的として調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

上から真砂土･建物解体に伴う撹乱土(厚さ 0.15 ～ 1.1 m）があり、発掘区北部は黒灰色土・焼土・黄灰色土・黄褐色土・黒色土が 0.01 ～ 0.15 mの層状に堆積する層(厚さ約 3.0 m)、茶灰色土・茶黄色土・暗茶灰色土の造成土(厚さ 0.7 ～ 1.1 m)､南部は､暗灰色粘砂土(厚さ 0.15 ～ 0.4 m）と続き、地表下約 1.2 mで黄灰～青灰色礫混砂質粘土の地山に至る。地山上面の標高は約 87.9 m。遺構検出は地山上面で実施したが、土坑ＳＫ 05 は暗灰色粘砂土上面、ＳＫ 06 は現代の撹乱土直下から掘り込まれている。なお、暗灰色粘砂土からは 17 世紀の土器類が、暗茶灰色土から 19 世紀の土器類が出土した。

Ⅲ　検出遺構

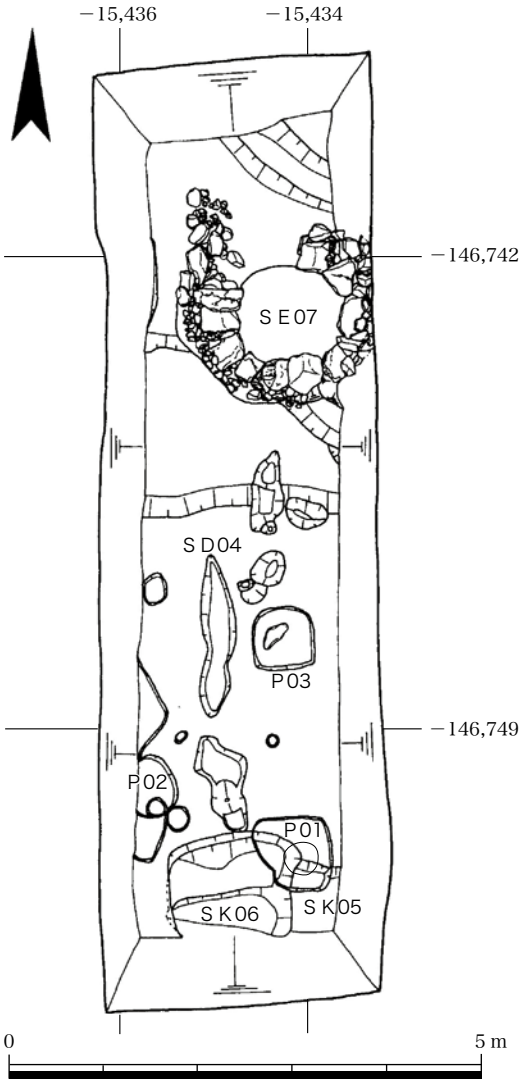
主な遺構は奈良時代の柱穴１基（Ｐ 01)、鎌倉～室町時代の柱穴２基（Ｐ 02・03)・溝１条（ＳＤ 04)、江戸時代の土坑２基（ＳＫ 05・06)・井戸１基（ＳＥ 07）である。各遺構の概要は表にまとめた。

奈良時代の遺構

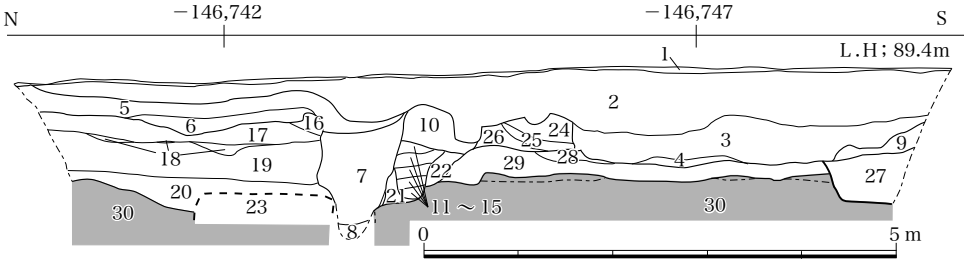
柱穴Ｐ 01 の掘形の埋土は地山由来の黄色粘質土・青灰色粘砂土と、灰黄色粘質土の混合土、柱抜取穴の埋土は灰黄色粘質土で、８世紀の土器・瓦類が出土した。土器は小片で詳細な時期は不明である。

鎌倉～室町時代の遺構

柱穴Ｐ 02 の埋土は暗灰色粘質土で、13 世紀前半～



発掘区遺構平面図（1/80）



1　真砂土
2　暗灰色土（解体時撹乱）
3　瓦溜り（解体時撹乱）
4　暗灰色土（解体時撹乱）
5　黒灰色土・黄灰色土・焼土・黄褐色土の互層
6　黒色土・黒灰色土の互層（焼土粒混り）
7　黒灰茶色土（木炭混り・土坑埋土）
8　暗褐色土（焼土・炭混り・土坑埋土）
9　暗灰茶色粘質土
10 灰茶色土・淡黄灰色粘土小ブロック混合
11・13・15 黄灰色粘質土
12 黄灰色粘質土・茶灰色土・小礫混合
14 黄橙色粘土
15 黄灰色粘質土
16 黄灰色粘土・白灰色粘質土・茶灰色土の互層 (造成土)
17 茶灰色土（炭少量混り・造成土）
18 黄灰色砂質土（造成土）
19 茶黄灰色土（炭少量混り・造成土）
20 暗茶灰色土（炭混り・造成土）
21 茶灰色粘質土
22 灰茶色土（黄色粒混り）
23 礫（ＳＥ07 枠裏込め）
24 灰黄茶色土（炭混り）
25 灰茶色粘質土（炭混り）
26 暗灰茶色粘質土
27 灰色粘砂土（炭少量混り、ＳＫ05 埋土）
28 青灰色粘土小ブロック・灰色粘質砂混合
29 暗灰色粘砂土（炭少量混り）
30 黄灰～青灰色砂質粘土（礫多量含む、地山）

発掘区東壁土層図（1/80）

中頃の土師器皿が出土した。柱穴Ｐ 03 の埋土は、暗灰色粘質土に地山由来の黄灰色粘砂土と礫が少量混ざる。中央付近の扁平な石は礎板の可能性がある。14 世紀の瓦質土器擂鉢が出土した。溝ＳＤ 04 の埋土は暗灰色粘質土で、14 世紀の土師器皿が出土した。Ｐ 02・03・ＳＤ 04 はいずれも深さ 0.1 m前後の浅いものである。

江戸時代の遺構

土坑ＳＫ 05 の埋土は灰色粘砂土で 17 世紀後半の土器類が出土した。土坑ＳＫ 06 の埋土は２層に大別でき、下層は暗灰色系粘砂土、上層は灰茶色系粘質土である。遺物のほとんどが上層から出土し、18 世紀後半の土器類がある。井戸ＳＥ 07 の掘方は２段に掘り込まれている。上段は石組が１段分残っており、その裏込めには小礫が詰められている。深さは約 0.15 m。下段は素掘りである。深さは 0.5 mまで確認したが、さらに続く。地山部分が堅固であったため井戸枠は不要だったとみられる。枠内埋土は暗茶灰色土で多数の焼土塊や炭が混ざる。19 世紀前半～中頃の土器類が出土した。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で 12 箱分あり、江戸時代の各遺構や遺物包含層から出土した瓦類が大半を占める。奈良・鎌倉時代の土器類はごくわずかで破片も小さい。各遺構の主な出土遺物の内訳は表のとおりである。18 世紀後半の土坑ＳＫ 06 から出土した 17 世紀の国産陶器の大皿は破片が大きく伝世品とみられる。この他に茶灰色土上面から江戸時代以前の古銭１点が出土した。中央に角孔が確認できるが、腐食が進んでいるため銭文が不鮮明で判読できない。

発掘区全景（北から）

Ⅴ　調査所見

今回の調査では奈良時代の柱穴を検出することができた。建物の規模や東塔院との関わりについては明かにすることができなかったが、隣接地に奈良時代の遺構が残存している可能性が高まった。また、井戸ＳＥ 07 の埋土には 19 世紀前半～中頃の土器類とともに焼土塊や炭が多く含まれていた。当地周辺では安政６（1859）年に東塔院の中心建物である五重塔が焼失した大火があり、井戸ＳＥ 07 はこの火災による塵芥処理のために埋められた可能性が高いと考える。さらにＳＥ 07 を覆う茶灰色土以下の造成土上面には炭や焼土が混じる層が堆積しており、再び火災があったとみられる。（原田香織）

検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
Ｐ 01	隅丸方形	東西 0.8×南北 0.75	0.5	8 世紀	須恵器杯か皿、丸瓦・平瓦	ＳＫ 05・06 より古い
Ｐ 02	円形	東西 0.4 以上 × 南北 0.65	0.1	13 世紀前半～中頃	土師器皿、平瓦	
Ｐ 03	隅丸方形	東西 0.65× 南北 0.65	0.15	14 世紀～	土師器、瓦質土器擂鉢、平瓦	
ＳＤ 04	南北溝	長さ 2.9× 幅約 0.35	0.05	14 世紀	土師器皿、国産陶器	
ＳＫ 05	不明	東西 0.5 以上 × 南北 0.7 以上	0.3	17 世紀後半	11 ～ 14 世紀：瓦器椀、17 世紀後半：国産磁器椀・国産陶器皿・椀・擂鉢、土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢、軒丸瓦（時期不明の巴紋）・丸瓦・平瓦、鉄釘	ＳＫ 06 より古い
ＳＫ 06	隅丸方形	長さ 2.1 以上 × 幅約 1.39	0.65	18 世紀後半	17 世紀：国産陶器大皿、18 世紀後半：国産磁器小皿・椀・小椀・猪口・鉢・瓶・香炉・灯明皿受、国産陶器皿・椀・天目茶碗・急須・蓋・鍋・鉢・擂鉢（信楽産）・壷、土師器皿・炮烙、瓦質土器深鉢・方形鉢・炮烙、土人形、軒丸瓦（江戸時代）・丸瓦・平瓦・桟瓦	ＳＫ 05 より新しい

遺構番号	掘　形			枠			時期	主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)	濾過装置等			
ＳＥ 07	円形	東西 2.0 以上 × 南北 1.8	0.65 以上	上段：円形石組	直径約 1.0		廃絶：19 世紀前半～中頃	（掘形）16 世紀前半：瓦質土器擂鉢、17 ～ 18 世紀：土師器皿、19 世紀前半～中頃：土師器皿、（枠内）19 世紀前半～中頃：国産磁器皿・椀・蓋・猪口・小杯・灯明皿受、国産陶器皿・椀・蓋・鍋・鉢・水指・壷、土師器皿、瓦質土器方形鉢・浅鉢、土製品（外型）、軒丸瓦（巴紋）・雁振瓦・桟瓦・丸瓦・平瓦、砥石	枠内埋土には焼土・炭が多く含まれる
				下段：円形素掘り	東西 1.2× 南北 1.0				

（２）東塔院推定地・奈良町遺跡の調査　第 69 次

Ⅰ　はじめに

調査地は、元興寺旧境内の東塔院地区にあり、東塔基壇の南側に隣接する。西隣接地の発掘調査（ＧＧ第 64 次調査）では､室町時代の溝と江戸時代の土坑を検出し、境内地から町屋への変遷の一部が明らかになっている。

今回の調査は、東塔周辺の施設の有無の確認と、境内地から町屋への変遷過程の解明を目的として行った。

Ⅱ　基本層序

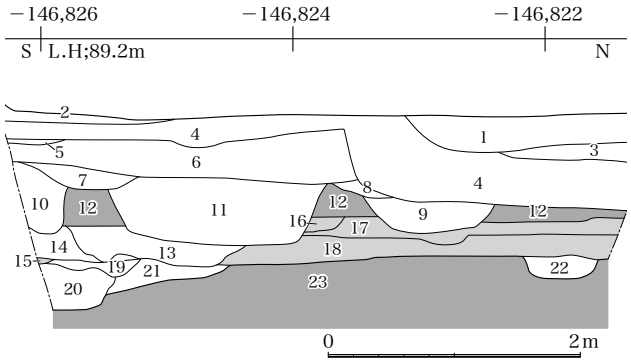
発掘区内の層序は、上から建物解体時の盛土、近現代の表土および盛土層、整地層１(江戸時代)、整地層２(室町時代後半～江戸時代)とつづき、現地表下約 1.2 mで明黄褐色粘土の地山となる。各遺構との重複関係から、整地層１は少なくとも 18 世紀以前のもの、整地層２は 17 世紀初頭以前で 15 世紀後半以降のものとわかる。地山上面の標高は約 87.4 mである。遺構検出は整地層２上面（上層）と地山上面（下層）で行った。

Ⅲ　検出遺構

検出遺構には、下層で検出した室町時代の溝２条、上層で検出した江戸時代の土坑４基がある。各遺構の詳細は一覧表にし、主要なものについて記す。

下層遺構　ＳＤ 01 は発掘区北側を東西方向にはしる溝で、発掘区東壁部分で南へ折れ曲がり、南側へ続くと考えられる。埋土は明茶褐色粘土で多量の瓦と円礫が含まれる。出土土器は少量であるが、15 世紀後半以降のものが出土した。ＳＤ 02 は発掘区南端で検出した東西方向の溝と考えられる遺構で、北岸のみ検出した。南北幅は発掘区西側で 1.3 m以上で、発掘区東側で幅を狭める。埋土はＳＤ 01 と同様な多量の瓦と円礫を含んだ明茶褐色粘土である。

上層遺構　４基の土坑を検出したが、ＳＫ 03 以外は



1　灰褐色土(解体時盛土)
2　明灰褐色土
3　暗灰黄色砂質シルト
4　青灰色粘土のブロック
5　暗灰色シルト
6　やや淡い暗灰褐色土
7　淡黒褐色土
8　赤褐色土
9　暗灰褐色土(SK06)
10　暗灰褐色土
11　暗灰褐色土
(瓦礫含む SK05)
12　灰褐色土(整地層1)
13　暗黄灰色シルト
14　灰褐色土
15　暗黄灰色土(整地層2)
16　淡灰褐色土(整地層2)
17　明茶褐色粘質土(整地層2)
18　暗茶褐色土(整地層2)
19　暗茶褐色粘質土(SD02)
20　暗茶褐色粘土(多量の瓦礫含む SD02)
21　明茶褐色粘土(多量の瓦礫含む SD02)
22　明茶褐色粘土(多量の瓦礫含む SD01)
23　明黄褐色粘土(砂礫含む 地山)

南壁土層図（1/60）

発掘区下層全景（南東から）

発掘区上層全景（南から）

発掘区外につづき全容が判明するものはない。すべて整地層１上面から掘り込まれる。いずれも塵芥処理用の土坑と考えられ、ＳＫ 03 からは多量の瓦が出土した。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱３箱分の土器類と、13 箱分の瓦類、石製品、金属製品などがある。土器類には、鎌倉～江戸時代の各時期のものがあり、土坑出土の 18 世紀以降の土器が多い。瓦類はＳＤ 02 出土品が多く、６箱分ある。各遺構出土遺物は、遺構一覧表に概要を記す。

Ⅴ　調査所見

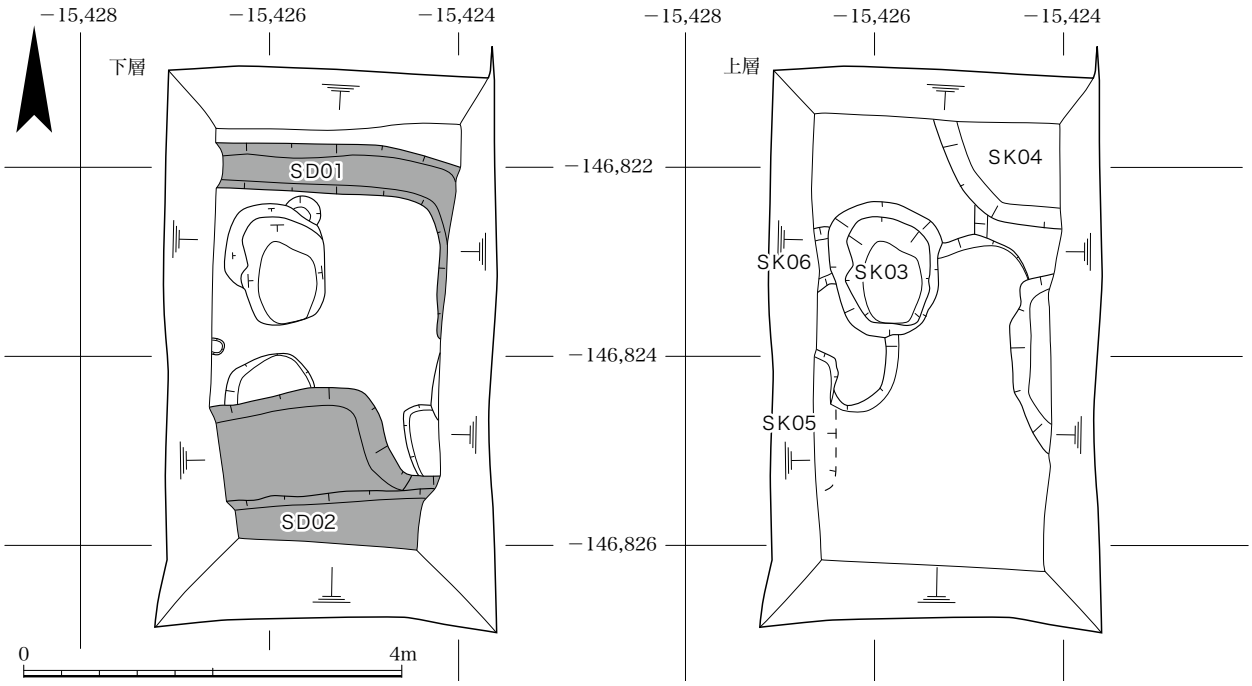
調査の結果、東塔に関する遺構は確認できなかった。発掘区内で最も古い遺構は、15 世紀後半に埋没する東西溝ＳＤ 01・02 の２条である。両溝は瓦と礫を多量に含む土で埋まることから、同時期のものと考えられ、ＳＤ 01 は発掘区東端で南に曲がり、その延長上でＳＤ 02 に接続すると想定できる。さらに西側のＧＧ第 64 次調査でも、同様な埋土の東西溝ＳＤ 10 があり、これらは一連の遺構と考えられる。調査範囲が狭いことから溝群の接続状況や性格は不明であるが、両調査地を含めた周辺が、この時期に改変をうけることがわかる。

この後周辺は整地され、江戸時代以降の遺構面が形成される。遺構は江戸時代後半のものが多く、塵芥処理用の土坑と考えられる。

また、元興寺東塔は安政六年 (1859 年) に焼失するが、それに伴う焼土層や廃瓦層などは確認しておらず、西側のＧＧ第 64 次調査と同様な成果を得た。　（中島和彦）

検出遺構一覧表

遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SD01	L 字状	幅約 0.5	0.2	15 世紀後半以降	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢類、国産陶器（常滑産甕）、青白磁壺、丸瓦、平瓦	
SD02	東西	幅 1.3 以上	0.4	15 世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦器椀、須恵器鉢（東播系）、瓦質土器擂鉢・捏鉢、鉢類、青磁碗（龍泉窯系）、円盤形土製品、軒丸瓦２（白鳳、平安以降）、軒平瓦２（平安以降）、塼、丸瓦、平瓦、砥石、取瓶、鞴羽口、鉄滓	
SK03	楕円形	東西約 1.1×南北約 1.4	0.7	19 世紀前半	土師器皿・高台付皿・炮烙、瓦質土器方形浅鉢・焜炉、国産陶器（信楽産灯明皿・土瓶・行平鍋・花瓶・尿瓶・鉢・甕、堺産擂鉢）、国産磁器（肥前産碗・皿・猪口・蓋）、土人形、軒丸瓦５（巴紋・蛇目紋）、丸瓦、平瓦、鉄釘、鞴羽口、鉄滓	
SK04	楕円形？	東西 1.3 以上 × 南北 1.1 以上	0.45	18 世紀以降	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・深鉢、国産陶器（信楽産擂鉢）、国産磁器（肥前産碗）、円盤形土製品、平瓦、鞴羽口、鉄滓	
SK05	隅丸方形？	東西 0.3 以上 × 南北約 1.6	0.5	18 世紀後半以降	土師器皿・炮烙、瓦質土器方形浅鉢・壷、国産陶器（信楽産擂鉢・壷・甕）、国産磁器（肥前産碗・鉢・蓋・仏飯器）、軒丸瓦１（巴紋）、丸瓦、平瓦、鉄釘、鉄滓、銅製品	
SK06	楕円形？	東西 0.2 以上 × 南北約 1.0	0.25	17 世紀以降	土師器羽釜、瓦質土器擂鉢、国産磁器（肥前産碗）	SK03 より古



発掘区遺構平面図（1/80）

（3）東塔院推定地・奈良町遺跡の調査　第70次

Ⅰ　はじめに

調査地は、元興寺旧境内の東塔院地区の東端で、元興寺の東面築地塀が推定される場所にあたる。また、江戸時代には、毘沙門町として町屋化している。今回の調査は、元興寺の東面築地塀の確認と、境内地から町屋への変遷過程の解明を目的として行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、既存建物の解体時の造成土直下の現地表下約1.3 mで明黄橙色土の地山となる。しかし、計画建物の基礎構造上、発掘区内の掘削は現地表下1.2 mまでにとどめており、発掘区東端と西端部でのみ地山面確認のために部分的に掘り下げた。地山は発掘区東端で確認したのみで、地山上面の標高は87.7mである。発掘区西端では、現地表下約1.3 mで茶褐色土が現れ、この上面で井戸の掘方の一部を検出した。掘方内を深さ約0.4 mまで掘削したが、掘方壁面では地山面を確認するに至らなかった。茶褐色土からは、16世紀頃の瓦質土器擂鉢が出土しており、同時期の遺構埋土または整地層と考えられる。

Ⅲ　検出遺構

上述の理由により、遺構検出が行えたのは東西両端部のみで、井戸の掘方を1基確認したに止まる。

井戸（ＳＥ01）は平面円形の掘方の一部約0.5 m分を確認したのみで構造・規模とも不明。掘方内は拳大前後の円礫で埋まる。重複関係から16世紀以降で江戸時代ものと考えられるが、掘方から古代の平瓦片が1点出土したのみで詳細な時期は不明。

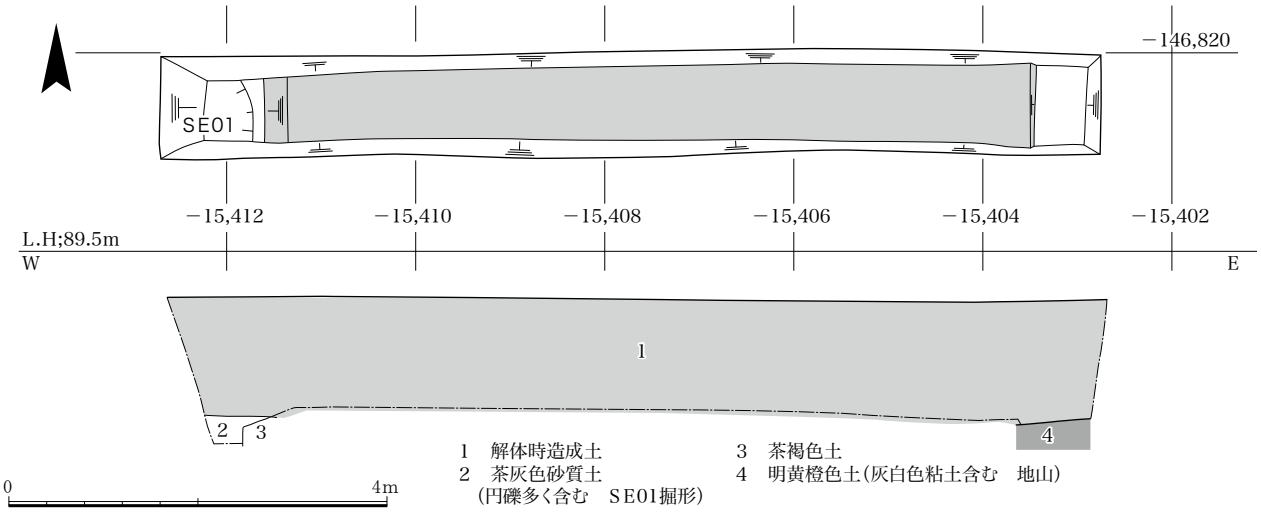
Ⅳ　出土遺物

井戸掘方出土の古代の平瓦片が1点、茶褐色土出土の瓦質土器、造成土出土の信楽産陶器が遺物整理箱1箱分ある。瓦質土器は擂鉢で、形態から16世紀頃のものである。

Ⅴ　調査所見

限定的な調査であり、元興寺の東面築地塀は確認できず、中世以降の状況も不明である。一方、部分的に確認した地山面の標高は87.7mで、周辺の発掘調査地の地山面の標高は、北西約70 mの市第ＧＧ68次調査地点が約87.9m、西約20 mの市ＧＧ第69次調査地点が約87.4mである。これらと比較して、地形が東から西へ下っていることを考慮しても、地山面が大きく削平されているとは考えられず、敷地内の地山上面には遺構が残存していると想定できる。　（中島和彦）

発掘区全景（西から）



発掘区遺構平面図・北壁土層図（1/80）

16. 西大寺旧境内の調査　第 29 次

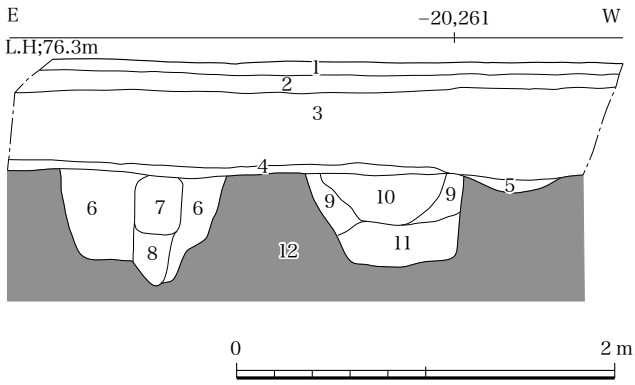
事 業 名　個人住宅新築	調 査 期 間　平成 24 年 1 月 10 日～1 月 16 日
届出者名　個人	調 査 面 積　18.5㎡
調 査 地　奈良市西大寺小坊町 341 番 1	調査担当者　池田裕英

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原では西大寺旧境内薬師金堂跡南端部の中央やや西寄りの位置にあたる。『西大寺流記資財帳』によると、薬師金堂の規模は「長十一丈九尺」「廣五丈三尺」とある。

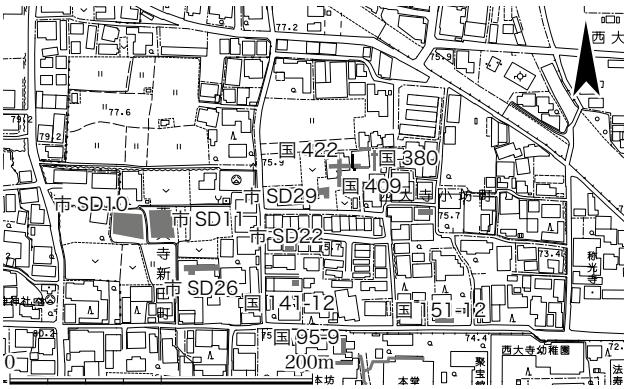
調査地の北東は浄土院境内で、周辺の土地よりも 0.7 ～ 1.0 m程度高くなっており、以前から西大寺薬師金堂の基壇の可能性が考えられていた。2007 年・2008 年度に浄土院境内で奈良文化財研究所第 409 次・第 422 次調査が行われ、基壇と柱穴を検出したことからこの高まりが薬師金堂の基壇であることが明らかとなった [1)]。基壇端の凝灰岩の破片を原位置で検出し、基壇端と庇との間隔は 12 尺であることも判明した。この結果から、本調査地では金堂基壇南端がかかることが想定された。

また、上述の調査では基壇化粧はすでに失われていたが、基壇は赤褐色土や灰色粘土、黄色土を交互に積んだ版築により築かれていることもわかった。掘込地業は確認されておらず、地山上に直接基壇を構築したと考えられている。また、基壇の規模は東西 143 尺、南北 77 尺と推定され、薬師金堂の中軸線と西大寺伽藍の中軸線とが一致する点などから薬師金堂が極めて計画的に配置されていたことが明らかとなっている。



1　クラッシャー	7　灰褐色砂質土
2　真砂土	8　暗橙茶色土・暗青灰色土
3　造成土	9　暗灰色粘土
4　暗灰褐色土	10　暗褐茶色粘土・暗青灰色粘土
5　暗灰褐色土・暗青灰色土	11　黄橙色土・茶黄色土
6　暗橙茶色土・暗青灰色土	12　茶黄色土（地山）

発掘区南壁土層図（1/40）



発掘区位置図（1/5,000）

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、上からクラッシャー（土層図 1）、真砂土（2）、造成土（3）と続き、現地表下約 0.7 m で黄茶色土の地山にいたる。部分的に暗灰褐色土の遺物包含層（4）が残るが、現在の駐車場に造成した際に地盤改良を行ったようで、遺構面はいくらか削平されているように思われた。遺構はすべてこの地山上面で検出した。地山上面の標高は 75.0 mである。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱列 2 条、室町時代（16 世紀）の土坑である。

ＳＡ 01・02 は東西方向の掘立柱列である。柱穴が東西に 3 つ並んでいるが、柱間が 1.2 m（4 尺）と短いので、柱間 2.4 m（8 尺）の柱列（建物）が同位置で建て替えられたと考えたい。東端の柱穴の南、北には組み合う位置に柱穴がないことから、柱列は発掘区外東へさらに続くのであろう。柱穴は一辺 0.8 m四方で深さは 0.3 mである。掘方から奈良時代の土師器片が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

ＳＫ 03 は 16 世紀の土坑である。東西 3.1 m以上、南北 2.7 m以上で、北・西とも発掘区外に続く。深さは 0.5 m以上あるが、建物基礎との関係からこれ以上深く掘り下げることができなかった。湧水もみられ、井戸枠の抜取り穴の可能性も考えられる。埋土から 16 世紀の土師器・瓦質土器・陶器・軒平瓦・丸瓦・平瓦に混じって奈良時代の土器や瓦、平安時代の瓦、鎌倉時代の土器などが出土した。井戸枠の抜取り穴であれば 16 世紀に井戸が廃絶したことになろう。

Ⅳ　出土遺物

今回の調査では遺物整理箱で 22 箱分の遺物が出土したが、大半はＳＫ 03 から出土した瓦類である。

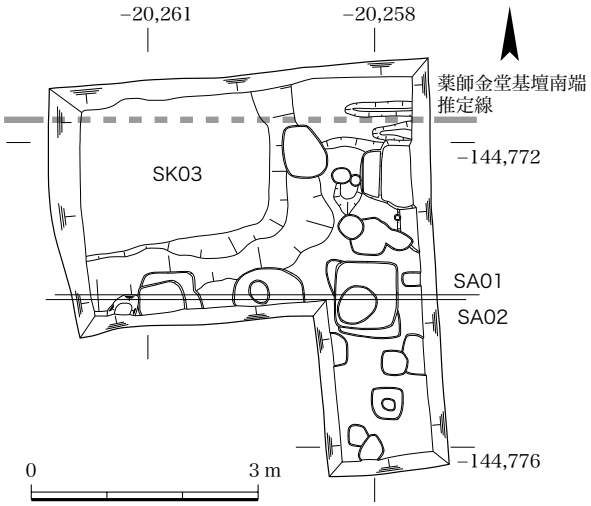
ＳＫ 03 から出土した遺物には、16 世紀の土師器（皿・甕・羽釜）、瓦質土器（羽釜・鉢・擂鉢）、陶器（信楽産擂鉢）、輸入陶器（華南産壷）、軒平瓦（西大寺 330 Ａ１点・345 Ｂ１点）、平瓦、丸瓦、道具瓦に混じって、奈良時代の土師器（皿・甕）、須恵器（蓋）、軒平瓦（6732 Ｋ１点）、垂木先瓦、平安時代の軒丸瓦（西大寺 76 Ａ３点）、軒平瓦（283 Ａ３点）、鎌倉時代の土師器（皿・羽釜）、瓦器（椀）、輸入磁器青磁（越州窯系盤）などが出土している。

Ⅴ　調査所見

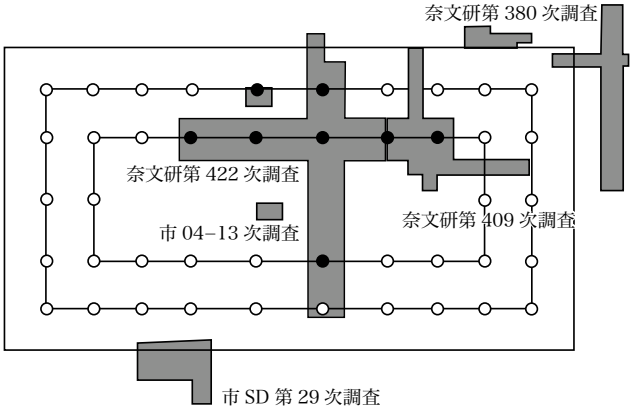
本調査では、西大寺薬師金堂の基壇土や基壇化粧といった基壇に係る遺構は認められなかった。奈文研第 409 次調査で検出された金堂基壇下の地山上面の標高が 75.5 mで、本調査での地山上面の標高（75.0 m）よりも 0.5 m高い。この点から推測すると、本調査地では基壇はすでに削平されてしまったものとみられる。ＳＫ 03 から凝灰岩片が出土していることもその証左になると思われる。削平の時期はＳＫ 03 の掘削された頃であろうか。

ＳＡ 01・02 は想定されている金堂南端との距離から考えても金堂と併存していたとは考え難く、西大寺造営以前の掘立柱列と考えておきたい。　（池田裕英）

1)「西大寺薬師金堂の調査–第 409 次」『奈良文化財研究所紀要 2007』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
「西大寺薬師金堂の調査–第 422 次」『奈良文化財研究紀要 2008』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所



発掘区遺構平面図（1/100）



西大寺薬師金堂復元概念図（註 1) 文献に加筆）

発掘区全景（東北から）

発掘区全景（南西から・後は浄土院）

17. 平成 23 年度実施小規模調査・試掘調査一覧

調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	事業者 / 事業内容	届出受理番号
2011 － 1	平城京跡（左京六条四坊二坪）	六条二丁目 996-1 他	H23.6.2	30㎡	社会福祉法人 協同福祉会 / 介護施設新築	
	現地表下 2.7m（標高 66.4m）まで掘削し、湿地に堆積する泥層を確認した。検出遺構はない。慎重工事で対応。					
2011 － 2	平城京跡（左京二条六坊北郊）	法蓮町 1368 番地	H23.7.19～7.22	42 ㎡	社会福祉法人 奈良社会福祉院 / 保育園新築	
	現地表下 1.5 ～ 1.6m(標高 79.9 ～ 80.0m)で地山上面を確認した。室町時代以前の溝、室町時代の埋甕遺構、江戸時代の土坑、時期不明の溝を検出。基礎形状を変更し、慎重工事で対応。					
2011 － 3	平城京跡（左京二条七坊十一坪）・奈良町遺跡	川久保町 6 - 1	H23.8.17～8.19	40㎡	ホームケア㈱ / 介護施設新築	
	現地表下 0.6m（標高 80.1m）で江戸時代の整地層と吉城川の旧河道を確認した。江戸時代の土坑を検出。工事立会で対応。					
2011 － 4	平城京跡（左京三条三坊二坪）	大宮町六丁目 4-15	H23.9.5 ～ 9.6	80㎡	三菱地所レジデンス㈱ / 共同住宅新築	
	現地表下 5.4m（標高 60.1m）まで掘削し、暗茶灰色粘土層上面（標高 60.5m）が奈良時代遺構面の可能性あり。検出遺構はない。北建物の基礎除却工事時に立会調査を実施し、試掘と同様の状態を確認した。工事立会で対応。					
2011 － 5	奈良町遺跡	高畑町 1203-1	H23.10.17	14㎡	㈱シンリョー / 保養・宿泊施設増築	
	現地表下 0.9 ～ 1.0m（標高 107.8 ～ 108.1 m）で地山上面を確認した。検出遺構はない。慎重工事で対応。					
2011 － 6	平城京跡（右京二条四坊四坪）	菅原町 383 番 1	H2311.7	27㎡	㈱フォレストホーム / 宅地造成	
	現地表下 0.1 ～ 0.3m（標高 81.2 ～ 81.4m）で地山上面を確認した。奈良時代の掘立柱列を検出。発掘調査（ＨＪ 654 次調査）を実施した。					
2011 － 7	平城京跡（左京二条五坊三坪）	法蓮町 80-5 他	H23.12.20	40㎡	ミサワホーム近畿㈱ / 宅地造成	
	現地表下 2.0m（標高 68.2m）まで掘削し、現地表下 0.8m（標高 69.4m）以下が旧佐保川の堆積層となる。慎重工事で対応。					
2011 － 8	平城京跡（右京二条二坊十一坪）	西大寺国見町二丁目 2132 番 4	H24.2.27	67㎡	近鉄不動産㈱ / 共同住宅新築	
	現地表下 1.8 ～ 2.9m(標高 67.8 ～ 69.1 m)まで掘削し、現地表下 1.5m(標高 69.4m)で地山上面を確認した。検出遺構はない。工事立会で対応。					
2011 － 9	平城京南方遺跡	北之庄町 483-1、484-1	H24.3.13～3.16	40㎡	㈲ＪＭＣＯ/ ひらたけ栽培施設新築	
	・現地表下 0.4m（標高 56.6m）で地山上面と旧河川を確認した。時期不明の溝状遺構を検出。工事立会で対応。					

18. 平成 23 年度実施踏査一覧

№.	踏　査　地	事業者	事業内容	事業面積	届出受理番号	踏査期日	踏査所見
1	法蓮町 1418-1 半田開町 55-4	釜阪住宅㈱	宅地造成	19,906.12 ㎡	H23.4003	H23.7.27 H23.11.9	遺跡は存在しない
2	北登美ヶ丘六丁目 1206 番地　他	三和建設㈱	宅地造成	29,649.82 ㎡	H23.4002	H24.1.30 H24.2.29	遺跡は存在しない
3	押熊町 1 587-51　他 34 筆	三和住宅㈱	開発行為 (分譲住宅)	15,411.70 ㎡	H23.4004	H24.2.22	遺跡は存在しない
4	小倉町 1101 番 2・3、1102 番 1・2 の各一部 針ヶ別所町 1・2・3 番の各一部	阪神不動産㈱	倉庫の建設	18,214.92 ㎡	H23.4005	H24.3.27	遺跡は存在しない

19. 平成 23 年度実施工事立会一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H22.3327	右京二条四坊八坪	西大寺芝辻町二丁目 11-19	個人	個人住宅新築	宅地	H23.4.1	GL−0.4m まで掘削、盛土内
2	H22.3448	西大寺旧境内	西大寺芝辻町一丁目 2537 の一部	個人	個人住宅新築	畑地	H23.4.1	GL−0.2m まで掘削、GL−0.18m で地山確認
3	H21.1204	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺三丁目 1-8	芝池水利組合	揚水タンクの設置と電柱の設置	溜池	H23.4.4	GL−1.0m まで掘削、盛土内
4	H22.3410	左京七条四坊三坪	東九条町 1014 番 33	個人	個人住宅新築	宅地	H23.4.4	GL−1.2m まで掘削、盛土内
5	H22.1179	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺町四丁目 1058 番 1 他	個人	建築物管理に係る補修及通用口新設	宅地	H23.4.4	GL−0.15m まで掘削、盛土内
6	H22.3414	左京四条五坊九坪 三条大路	三条町 492-1、492-6	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H23.4.4	GL−0.8m まで掘削、GL−0.75m で地山確認
7	H22.3406	右京七条三坊十一坪	七条二丁目 670 ～七条一丁目 12-24	大阪ガス㈱	ガス管埋設	道路	H23.4.4	GL−1.35m まで掘削、盛土内
8	H22.3427	三条大路　西二坊坊間路	尼辻北町 231 番 2	個人	診療所付住宅新築	宅地	H23.4.6	GL−1.0m まで掘削、盛土内
9	H22.3542	左京二条六坊　二条大路　　奈良町遺跡	坊屋敷町 34-3 ～坊屋敷町 34-5	大阪ガス㈱	ガス管入替	道路	H23.4.7	GL−1.0m まで掘削、盛土内
10	H22.3449	五条大路	南京終町一丁目 89 番 1 の一部他	個人	宅地造成	宅地	H23.4.11	GL−0.2m まで掘削、盛土内
11							H23.4.19	GL−1.5m まで掘削、耕作土内
12	H22.3452	右京二条三坊二坪	西大寺南町 2123-1 (17 街区 4 画地)	東急不動産㈱関西支店	店舗 (モデルルーム) 新築	宅地	H23.4.14	GL−0.2m まで掘削、盛土内
13	H22.3405	右京七条三坊十二坪 三松寺跡	七条一丁目 23-17 ～ 25-11	大阪ガス㈱	ガス管埋設	道路	H23.4.14	GL−1.25m まで掘削、盛土内
14	H22.3421	左京一条四坊十三坪 左京二条五坊北郊	法蓮町 856-3 ～ 705-1	大阪ガス㈱	ガス管埋設	道路	H23.4.15	GL−0.75m まで掘削、黄褐色土内
15							H23.5.6	GL−0.7m まで掘削、盛土内
16							H23.5.24	GL−0.7m まで掘削、盛土内
17							H23.6.7	GL−0.72m まで掘削、耕作土内
18	H22.1176	史跡東大寺旧境内	雑司町 415 番地他	奈良市長	公共下水道築造工事	道路	H23.4.19	GL−1.3m まで掘削、GL−0.7m で地山確認
19	H23.3003	ゼニヤクボ遺跡	都祁小山戸町 42 番、43 番	個人	駐車場造成	宅地	H23.4.20	GL−0.4 ～ 0.6m まで掘削、GL−0.3m で地山確認
20	H22.1169	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺一丁目 1254-1	個人	自動車車庫建築	宅地	H23.4.25	GL−0.4m まで掘削、盛土内
21	H22.3451	左京二条四坊十坪	法蓮町 359 番 3	個人	賃貸住宅新築	水田	H23.4.28	GL−0.4m まで掘削、床土内
22	H22.3419	左京二条五坊六坪	法蓮町 40 番 9	個人	個人住宅新築	宅地	H23.5.2	掘削を伴わず、整地のみ
23	H22.3380	左京七条一坊十六坪	八条五丁目 437-8	大阪ガス㈱	ガス管埋設	道路	H23.5.9	GL−2.1m まで掘削、GL−1.55m で地山確認
24	H22.3378	左京九条一坊四・五坪　　坪境小路	西九条町五丁目 4-5	ナテック㈱	工場（事務所ビル） 新築	宅地	H23.5.9	GL−1.3m まで掘削、盛土内
25	H22.3388	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1126 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H23.5.9	GL−0.3 ～ 0.45m まで掘削、盛土内
26	H22.3258	奈良町遺跡	高畑町 1443 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H23.5.10	GL−0.25m まで掘削、盛土内
27	H22.3399	右京七条三坊七坪	七条一丁目 382 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H23.5.10	GL−0.2m まで掘削、盛土内
28	H22.1164	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺一丁目地内	関西電力㈱	電柱の建替	道路	H23.5.12	GL−1.1m まで掘削、灰色土内
29	H22.3465	左京三条一坊五坪 三条大路	三条大路三丁目 500-2 他	㈱ CNC エンタープライズ	店舗新築	更地	H23.5.13	GL−1.2m まで掘削、茶褐色土内
30	H23.3009	左京五条七坊十坪 奈良町遺跡	西紀寺町 15-1 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H23.5.13	GL−0.2m まで掘削、盛土内
31	H23.3016	左京九条三坊七坪	西九条町二丁目 3-14	個人	駐車場造成	畑地	H23.5.16	GL−1.1m まで掘削、GL−1.0m で地山確認
32							H23.5.18	GL−0.6m まで掘削、茶褐色土内
33	H22.3541	左京二条六坊十三坪 奈良町遺跡　南都奉行所跡	坊屋敷町 6-1 ～坊屋敷町 6	大阪ガス㈱	ガス管入替	道路	H23.5.17	GL−0.8m まで掘削、黒褐色土内
34	H22.3379	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 265-1 ～ 265-3	大阪ガス㈱	ガス管埋設	道路	H23.5.18	GL−0.7m まで掘削、盛土内
35	H23.3015	左京三条五坊一坪	芝辻町一丁目 130 番 9	個人	個人住宅新築	宅地	H23.5.20	GL−0.15m まで掘削、茶褐色土内
36	H23.3007	左京五条六坊七坪 奈良町遺跡	西木辻町 360-1、358-3、358-4	個人	個人住宅新築	宅地	H23.5.23	GL−0.4m まで掘削、盛土内
37	H23.3037	西隆寺跡	西大寺東町二丁目 55-1、56-2 の各一部	三菱 UFJ モルガン・スタンレー証券㈱	広告塔設置	宅地	H23.5.23	GL−1.5m まで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
38	H22.3347	左京五条六坊九坪	南城戸町 19	個人	個人住宅新築	宅地	H23.5.24	GL−0.75m まで掘削、盛土内
39	H23.3032	右京二条四坊十坪	青野町 229-6	個人	個人住宅新築	宅地	H23.5.26	GL−1.3m まで掘削、GL−0.3m で地山確認
40	H23.3031	左京二条七条二坪 奈良町遺跡	北袋町 29-4、北川端町 3-3	積和不動産関西㈱	道路拡幅工事	宅地	H23.5.26	GL−1.0m まで掘削、耕作土内
41	H22.3438	水間遺跡	水間町 1115-1	KDDI ㈱	携帯電話用無線基地局建設工事	水田	H23.5.27	GL−2.0m まで掘削、盛土内
42							H23.6.1	GL−4.0m まで掘削、GL−3.5m で地山確認
43	H23.3047	奈良町遺跡	肘塚町 1 番地 5	KDDI ㈱	携帯電話用無線基地局	宅地	H23.6.2	GL−0.25m まで掘削、表土内
44	H23.3002	右京一条二坊十三坪	西大寺南町 2271 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H23.6.6	GL−0.2m まで掘削、盛土内
45	H23.3001	右京一条二坊十三坪	西大寺南町 2271 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H23.6.6	GL−0.2m まで掘削、耕作土内
46	H23.3038	右京二条四坊一坪	西大寺芝町二丁目 2031 番 3	オーエスハウジング㈱	賃貸住宅新築	宅地	H23.6.6	GL−0.2m まで掘削、盛土内
47	H22.3424	左京五条六坊十坪 奈良町遺跡	西木辻町 293-2	個人	個人住宅新築	宅地	H23.6.17	GL−0.2m まで掘削、盛土内
48	H23.3040	右京一条二坊三坪	二条町二丁目 61-4 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H23.6.17	GL−0.6m まで掘削、盛土内
49	H22.3458	左京二条七坊十一坪 奈良町遺跡	川久保町 27 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H23.6.21	GL−0.3m まで掘削、表土内
50	H23.3005	右京二条二坊十三坪	西大寺国見町二丁目 291 番地 30	㈱カーム	個人住宅新築	宅地	H23.6.22	GL−0.6m まで掘削、盛土内
51	H23.3022	左京五条四坊十一坪	大安寺六丁目 14-14 ～ 14-19	大阪ガス㈱	ガス管埋設	道路	H23.6.23	GL−0.6m まで掘削、盛土内
52	H23.3046	左京三条三坊一坪 菅原東遺跡	近鉄西大寺駅南地区 48 街区 3 画地	個人	賃貸住宅新築	宅地	H23.6.27	GL−0.3m まで掘削、盛土内
53	H23.3053	右京北辺二坊七坪	西大寺新町二丁目 91 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H23.6.28	GL−0.4m まで掘削、盛土内
54	H22.3367	西大寺旧境内（称徳陵兆域推定地）	西大寺野神町一丁目 1559、1560	プレステ㈱	宅地造成	水田	H23.7.1	GL−1.5m まで掘削、GL−0.5m で地山確認
55	H23.3059	左京二条七坊二坪 奈良町遺跡	北袋町 29 番 6 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H23.7.4	GL−0.4m まで掘削、盛土内
56	H23.3088	右京五条四坊四坪 西三坊大路	五条三丁目 9-1	共栄社化学㈱	雨水槽埋設工事	宅地	H23.7.6	GL−2.4m まで掘削、GL−0.2m で地山確認
57	H23.3008	右京六条三坊八坪	大安寺西三丁目 185-1 他	太裕電気㈱	工場新築	宅地	H23.7.8	GL−1.1m まで掘削、GL−0.7m で地山確認
58	H23.3078	右京三条一坊十一坪	三条大路四丁目 506 番 14 の一部、 37 の一部	個人	共同住宅新築	畑地	H23.7.8	GL−0.75m まで掘削、灰色砂質土内
59	H23.3110	左京四条四坊四坪 四条大路	大森町 200 番 1、200 番 5 の各一部	オーエスハウジング㈱	道路建設・下水管敷設	宅地	H23.7.11	GL−0.75m まで掘削、盛土内
60	H23.3029	薬師寺旧境内	西ノ京 256 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H23.7.13	GL−0.38m まで掘削、表土内
61	H23.3011	古市遺跡	古市町 1657 番 6、1657 番 9	個人	個人住宅新築	宅地	H23.7.13	GL−0.4m まで掘削、表土内
62	H23.3119	左京三条五坊九坪 二条大路　奈良町遺跡	芝辻町 11-8、-10、-12、-14	個人	貸ガレージ新築	宅地	H23.7.15	東端　GL−0.5m まで掘削、GL−0.3m で地山確認 西端　GL−1.0m まで掘削、GL−0.5 ～ 0.6m で地山確認
63	H23.3039	左京三条一坊四坪 朱雀大路	三条大路三丁目 3-33	個人	個人住宅新築	宅地	H23.7.19	GL−1.6m まで掘削、褐色土内
64	H23.3067	左京二条五坊十四坪 奈良町遺跡	北市町 65-1、65-3	個人	共同住宅新築	宅地	H23.7.21	GL−0.2m まで掘削、盛土内
65	H23.3057	南紀寺遺跡	南紀寺町三丁目 763-1	関西電力㈱	受電設備設置	宅地	H23.7.27	GL−3.9m まで掘削、GL−2.7m で地山確認
66	H23.3027	左京四条六坊十五坪 奈良町遺跡	椿井町 25 番地	奈良市消防局長	消防防災設備	小学校校庭	H23.7.27	GL−1.6m まで掘削、黒褐色土内
							H23.8.8	GL−5.5 っまで掘削、GL−4m で地山確認
68	H23.1003	史跡東大寺旧境内	手貝町・押上町・芝辻町・今小路町・水門町・川上町・登大路町・雑司町	奈良市長	小学校耐震補強	宅地	H23.7.29	GL−0.1 mまで掘形、暗灰色土内
69	H22.3462	右京一条二坊十三坪	西大寺南町 2371 番 1、2370 番 3、2370 番 5	㈱らくじ会 代表取締役　森山朋子	有料老人ホーム新築	宅地	H23.7.29	GL−2.5 mまで掘削、GL−1m で遺構面
70	H23.3117	右京三条四坊十四坪	宝来四丁目 700-1、701- 1	個人	個人住宅新築	宅地	H23.7.29	工事先行
71	H22.3090	左京四条四坊九坪	三条宮前町 51-2、52-1、53- 1 、53-2、53-3、54、55-1、56、57、70-1、70-3、79、87、89、650 の一部、651、659 の一部	学校法人白藤学園 理事長 綿谷正之	校舎増築	学校	H23.8.1	GL−1.3 mまで掘削、GL−1.15 mで遺構面
							H23.12.14	GL−1.5 mまで掘削、砕石土内

平成 23 年度実施工事立会一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
72	H23.3129	平城京左京五条六坊十三坪 奈良町遺跡	北京終町 17 番 1、17 番 2	個人	個人住宅増築	宅地	H23.8.4	GL−1.1 ～ 1.3 mまで掘削、GL−1.0 mで地山確認
73	H23.3099	左京一条二坊二坪	二条町一丁目 35 番 17	個人	個人住宅新築	宅地	H23.8.8	GL−0.35 mまで掘削、盛土内
74	H23.3099	右京三条三坊十三坪	宝来二丁目 24−18	個人	個人住宅新築	宅地	H23.8.8	GL−0.3 mまで掘削、盛土内
75	H22.1096	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺二丁目　1299 番 1	宗教法人大安寺 代表役員河野良文	護摩堂の改築 (竹やぶ部分)	寺院境内	H23.8.10	GL−0.05m まで掘削、表土内
					護摩堂の改築 (プレハブ取壊し)	寺院境内	H23.8.18	掘削を伴わず、整地のみ
					護摩堂の改築 (ユニットハウス撤去)	寺院境内	H23.8.19	掘削を伴わず、整地のみ
					護摩堂の改築 (西側建物掘形)	寺院境内	H23.8.25	GL−0.3 ～ 0.5 mまで掘削、盛土内
					護摩堂の改築 (東側建物掘形)	寺院境内	H23.8.29	GL−0.8 mまで掘削、黄灰色砂質土内
76	H23.3083	左京四条五坊八坪 三条大路	三条本町一番−号	ジェイアール西日本不動産開発㈱代表取締役社長　森重鉄雄	店舗増築	駅	H23.8.18	GL−2.5 ～ 3.2 mまで掘削、GL−0.9 mで地山確認
77	H23.3073	右京二条三坊十六坪	西大寺芝町二丁目地内	奈良市長	下水道築造工事	道	H23.8.22	GL−0.4 まで掘削、GL−0.4mで地山確認
78	H23.3131	奈良町遺跡	北京終町 65−1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H23.8.22	GL−0.8 まで掘削、GL−0.8 mで地山確認
79	H23.3061	左京三条五坊一坪	芝辻町一丁目	㈱新英不動産開発 代表取締役　上田義隆	分譲住宅新築	宅地	H23.8.24	GL−0.3 mまで掘削、盛土内
80	H23.3126	左京八条四坊九・十坪八条条間路	東九条町 650-3	㈱エターナル住宅流通代表取締役　田中昭治	宅地造成	宅地	H23.9.13	GL−1.3 mまで掘削、耕作土内
81	H23.3152	左京六条四坊十六坪・東四坊大路	大安寺五丁目 975-5、975-6、975-8	個人	宅地造成工事	宅地	H23.9.16	GL−0.5 mまで掘削、青灰色粘土内
82	H23.3107	左京二条五坊北郊	法蓮町 941 番 3	個人	診療所付個人住宅	宅地	H23.9.16	GL−1.0 mまで掘削、茶褐色土内
83	H23.3167	左京二条七坊二坪	北袋町 3 番 1、3 番 4	個人	個人住宅	宅地	H23.9.16	GL−1.8 mまで掘削、GL−1.5 mで地山確認
84	H23.1026	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1058−1、1126、1130−2	個人	個人住宅	宅地	H23.9.26	GL−0.3 ～ 0.4 mまで掘削、表土内
							H23.10.3	GL−0.18 mまで掘削、盛土内
85	H23.3136	左京一条四坊十三坪 東四坊大路	法蓮町 709 番地の 3	個人	個人住宅	宅地	H23.9.26	GL−0.3 ～ 0.4 mまで掘削、表土内
86	H23.3166	右京二条三坊八坪	西大寺芝町一丁目 7 − 18 ～ 9−26	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管埋設	道路	H23.10.3	GL−0.8 mまで掘削、耕作土内
87	H23.3134	左京七条四坊三坪	東九条町 1136−4	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管埋設	道路	H23.10.4	GL−1.6 mまで掘削、盛土内
88	H23.1057	朱雀大路	二条大路南三丁目他	国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所長　舟久保敏	棚田像の移設	公園	H23.10.5	GL−0.3 mまで掘削、盛土内
89	H23.3111	東一坊大路　五条大路　左京五条二坊三・四坪　左京六条二坊一・二坪	大安寺町～柏木町	奈良市公共下水道管理者	下水道工事	道路	H23.10.5	GL−2m まで掘削、地山又は池堤築成土確認
							H23.10.10	GL−5.5 mまで掘削、灰色粘砂（自然堆積層）確認
90	H23.3086	左京二条五坊十三坪	北市町 22 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H23.10.13	GL−0.9 mまで掘削、暗灰色土内
91	H23.3186	左京六条一坊十四坪	柏木町 421 番地 1	㈲京春 代表取締役 猪坂博司	店舗新築	宅地	H23.10.18	GL−0.6 mまで掘削、盛土内
92	H23.3209	左京四条三坊五坪 四条大路	三条桧町地内	奈良市水道事業管理者	水道管新設工事	道路	H23.10.19	GL−0.7 mまで掘削、盛土内
93	H23.3088	右京五条三坊十三坪	五条三丁目 9-1	共栄社化学㈱ 代表取締役社長　片岡清夫	駐輪場新築	宅地	H23.10.27	GL−0.7 mまで掘削、GL−0.2 mで地山確認
94	H23.3183	左京三条三坊四坪	大宮町七丁目 1-20	関西電力㈱ 取締役社長八木誠	危険物倉庫 車庫倉庫新築	営業所敷地	H23.10.28	GL−1m まで掘削、盛土内
95	H23.3205	左京三条四坊三坪	大宮町三丁目 210-1 の一部、210-3 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H23.10.28	GL−0.2 mまで掘削、盛土内
96	H22.3406	右京七条三坊六・十一坪　三松寺	七条二丁目 670 ～七条一丁目 12-24	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長 飯田良介	ガス管埋設	道路	H23.10.31	GL−0.8 mまで掘削、GL−0.55mで地山確認
97	H23.3153	西大寺旧境内	西大寺新池町 1821−6	個人	個人住宅新築	宅地	H23.11.2	GL−0.5 mまで掘削、盛土内
98	H23.3208	左京四条四坊三坪	三条桧町地内	奈良市水道事業管理者	水道管新設工事	道路	H23.11.3	GL−1.8 mまで掘削、GL−1.0mで地山確認

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
99	H23.3223	右京五条三坊十三坪	五条三丁目 9-1	共栄社化学㈱ 代表取締役社長　片岡清夫	配管埋設工事	宅地	H23.11.4	GL−0.6 mまで掘削、GL−0～0.2 mで地山確認
100	H23.3023	新薬師寺旧境内隣接地	高畑町	国立大学法人奈良教育大学 学長　長友恒人	図書館改修その他	学校	H23.11.10	GL−2.0 mまで掘削、灰色砂礫確認
101	H22.3445	西大寺旧境内	西大寺野神町一丁目 606	個人	個人住宅新築	宅地	H23.11.11	GL−0.5 mまで掘削、GL−0.45 mで地山確認
102	H23.3170	左京六条四坊十六坪東四坊大路	大安寺五丁目 975 番 5・6・8	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H23.11.11	GL−0.1 mまで掘削、盛土内
103	H23.3237	奈良町遺跡	高畑町 989 番 1 990 番 1 957 番 3 956 番 3 958 番 2 の一部	個人	個人住宅	宅地	H23.11.14	GL−1.0 mまで掘削、GL−1.0 mで地山掘削
104	H22.3439	左京二条七坊十一坪	川久保町 6-1、6-2、6-3	ホームケア㈱ 代表取締役 平瀬守男	介護施設新築	宅地	H23.11.15	GL−0.9 mまで掘削、赤褐色砂礫土内
105	H23.3217	右京二条三坊六坪	近鉄西大寺駅南地区 33 街区　1-2 画地	個人	賃貸住宅新築	宅地	H23.11.16	GL−0.85 mまで掘削、盛土内
106	H23.3068	左京四条四坊十一坪	三条大宮町 348-1 349-1　349-4	個人	店舗新築	宅地	H23.11.21	GL−1 mまで掘削、GL−0.9 mで地山確認
107	H23.3040	左京五条三坊十五坪	恋の窪東町 201 番 1	個人	賃貸住宅新築	畑地	H23.11.21	GL−0.5 mまで掘削、灰褐色土内
108	H23.3386	左京一条三坊十二坪	法華寺町 660 番地	個人	賃貸住宅新築	水田	H23.11.24	GL−1.0 mまで掘削、GL−0.9 mで地山確認
109	H23.3226	左京五条四坊十坪	大安寺七丁目 28-1-6	個人	個人住宅新築	宅地	H23.11.25	GL−0.4 mまで掘削、盛土内
110	H23.3255	右京一条二坊四坪	二条町二丁目 72-11	個人	賃貸住宅新築	宅地	H23.11.28	GL−0.4 mまで掘削、盛土内
111	H23.3245	左京二条七坊十坪	中御門町 19-2	個人	個人住宅新築	宅地	H23.11.28	GL−1.0 mまで掘削、明橙色粘質土内
112	H23.3250	左京五条一坊十二坪・五条大路	法華寺町 264 番地 1	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H23.12.1	GL−0.8 mまで掘削、盛土内
113	H23.3224	左京四条六坊七坪 奈良町遺跡	西城戸町 21 番 2、22 番及び 23 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H23.12.5	GL−1.25 mまで掘削、GL−1.0 mで地山確認
114	H23.3182	右京七条三坊二・七坪	七条一丁目 11-22～9-31	大阪ガス㈱導管事業部北東部導管部長 飯田良介	ガス管埋設	道路	H23.12.14	GL−0.8 mまで掘削、GL−0.7mで地山確認
115	H23.3256	三条大路　奈良町遺跡	下三条町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H23.12.20	GL−0.5～1.2 mまで掘削、盛土内
116	H23.3269	左京四条二坊十一坪	四条大路一丁目 462 番地 16	㈱ライフスケッチ 代表取締役北野眞一郎	モデルルーム建設	宅地	H23.12.26	GL−0.4 mまで掘削、盛土内
117	H23.3249	左京二条七坊三坪、二条条間、奈良町遺跡	北魚屋町 15 番 10 号	個人	個人住宅新築	宅地	H23.12.26	GL−1.4 mまで掘削、GL−0.5 mで地山確認
118	H23.3244	左京一条三坊十五坪	法華寺町 48−1、49	個人	長屋新築	宅地	H24.1.6	GL−1.5 mまで掘削、GL−1.3 mで地山確認
119	H23.3299	左京二条五坊七坪	法連町 714-1-101	個人	個人住宅新築	宅地	H24.1.6	GL−0.2 mまで掘削、盛土内
120	H23.3299	古市城跡	古市町 2163 番 2、	㈱アーネストワン 代表取締役西河洋一	分譲住宅新築	宅地	H24.1.11	GL−1.1 mまで掘削、GL−0.1 mで地山確認
121	H23.3253	左京五条六坊五坪	西木辻町～南京終町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H24.1.13	GL−1.0 mまで掘削、茶褐色土内
122	H23.3276	興福寺旧境内	小西町 12 番 1	個人	個人住宅	宅地	H24.1.16	GL−0.3 mまで掘削、暗褐色土内
123	H23.3288	右京七条三坊七坪、七条条間路	七条一丁目 420 番 2 の一部 (1 号地)	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H24.1.17	GL−0.25 mまで掘削、盛土内
124	H23.3289	右京七条三坊七坪、七条条間路	七条一丁目 420 番 2 の一部 (2 号地)	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H24.1.17	GL−0.25 mまで掘削、盛土内
125	H23.3290	右京七条三坊七坪、七条条間路	七条一丁目 420 番 2 の一部 (3 号地)	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H24.1.17	GL−0.4 mまで掘削、盛土内
126	H23.3317	左京五条七坊五坪	築地之内町 6 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H24.1.24	GL−0.5 mまで掘削、盛土内
127	H23.3157	左京三条一坊六坪東一坊坊間路	三条大路二丁目 526-1	コーナン商事㈱ 代表取締役疋田耕造	店舗新築	宅地	H24.1.26	GL−0.5 mまで掘削、盛土内
128	H23.3246	松林苑	歌姫町地内 (歌姫町 14、24 地内)	奈良市長	河川改修	水路	H24.1.26	GL−1.2～3.1 mまで掘削、GL−0.6～2.5 mで地山確認
129	H23.3262	左京二条四坊二坪、七・八坪坪境小路	法蓮町地内	奈良市公共下水道管理者 奈良市長	下水道工事	道路	H24.1.27	GL−1.9 mまで掘削、灰色土内
130	H23.3062	左京三条三坊六坪	大宮町四丁目 296-1	三交不動産㈱ 代表取締役社長　長嶋賢次	共同住宅新築	宅地	H24.1.27	GL−2.5 mまで掘削、盛土内
131	H23.3155	左京四条六坊十三坪 奈良町遺跡	陰陽町 7 番地	奈良市長	玩具ふれあい施設及び観光案内書新築	宅地	H24.1.30	GL−0.2 mまで掘削、GL−0.1 mで地山確認
							H24.2.8	GL−0.2～0.4 mまで掘削、盛土内

平成 23 年度実施工事立会一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
132	H23.3295	左京三条五坊一坪	芝辻町一丁目 119 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H24.2.3	GL−0.4 mまで掘削、GL−0.3 mで地山確認
133	H23.3213	西大寺旧境内	西大寺芝町一丁目 2-9	エヌ・ティ・ティ・ドコモ 常務執行役員関西支社長徳広清志	携帯電話無線基地局接地アース設地工事	宅地	H24.2.6	GL−0.75 mまで掘削、盛土内
134	H23.3155	左京四条六坊十三坪	二条大路南一丁目 1 番 1 号	奈良市長	玩具ふれあい施設及び観光案内所新築	宅地	H24.2.8	GL−0.2 mまで掘削、GL−0.1 mで地山確認
135	H23.3281	元興寺旧境内（花園院）	花園町 29	個人	個人住宅新築	宅地	H24.2.13	GL−1.0 mまで掘削、盛土内
136	H23.3307	右京八条四坊八坪	七条西町一丁目 609 番 93	ファースト住建㈱ 東大阪支店代表取締役中島雄司	分譲住宅新築	宅地	H24.2.14	GL−0.5 mまで掘削、盛土内
137	H23.3266	元興寺旧境内	鵲町 6 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H24.2.15	GL−0.4 mまで掘削、盛土内
138	H23.3283	西大寺旧境内	西大寺芝町二丁目 2553 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H24.2.16	GL−0.25 mまで掘削、盛土内
139	H23.3326	新薬師寺旧境内	高畑町（学内）	国立大学法人 奈良教育大学 学長　長友恒人	電気配管埋設	学校用地	H24.2.18	GL−0.7 mまで掘削、褐色土内
140	H23.3238	右京二坊二条条間路	西大寺国見町二丁目地内	奈良市長	浸水対策工事	河川	H24.2.20	GL−0.75 mまで掘削、盛土内
141	H23.3309	左京八条三坊十二坪	東九条町 433 番 3 の一部	奈良市長	ポンプ格納庫新築	駐車場	H24.2.20	GL−1.2 mまで掘削、GL−0.5 mで地山確認
142	H23.3304	右京二条三坊十四坪	青野町 113-1	個人	資材置場造成	水田	H24.2.13	GL−0.1 mまで掘削、耕作土内
	H23.3304						H24.2.20	GL−1.3 mまで掘削、GL−0.6 mで地山確認
143	H23.3199	南紀寺遺跡	高畑町 35 番 15 号	個人	個人住宅	宅地	H24.2.27	GL−0.45 mまで掘削、耕作土内
144	H23.3356	左京一坊三条大路	三条大路三丁目 505-1、-2、-3、-4、506- 1 、-2、507-1、-3、508-1、-2	大和サービス㈱ 福島長男	店舗新築	駐車場	H24.2.27	GL−0.7 mまで掘削、褐灰色土内
145	H22.4005		秋篠町 1049-1 他	奈良市長	大和中央道　切土	宅地	H24.2.28	GL−0.3 mで地山確認
146	H23.3324	左京四条三坊十六坪	宝来二丁目 146-1	個人	共同住宅新築	宅地	H24.3.1	GL−0.8 mまで掘削､GL−0.65mで地山確認
147	H23.3291	東紀寺遺跡	紀寺町 556-1	奈良交通㈱ 取締役社長中村憲兒	バス停留所	道路	H24.3.2	GL−0.8 mまで掘削、盛土内
148	H23.3282	左京三条六坊五坪	上三条町 22-7	京阪電鉄不動産㈱ 代表取締役三浦達也	モデルルーム新築	宅地	H24.3.2	GL−0.65 mまで掘削、盛土内
149	H23.3370	左京三条五坊十三坪	三条町 483	個人	店舗付住宅新築	宅地	H24.3.6	GL−1.3 mまで掘削、褐色土内
150	H23.3361	左京二条六坊二坪	法蓮町 1060	個人	共同住宅新築	宅地	H24.3.7	GL−0.5 mまで掘削、盛土内
151	H23.3292	右京六条一坊六坪	西ノ京町 1 番 65 号	個人	個人住宅新築	宅地	H24.3.9	GL−0.4 mまで掘削、盛土内
152	H23.1127	大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺一丁目 1290-1・1294-2 の各一部	芝池水利組合長　熊木健	ヒューム管の設置	水田	H24.3.12	GL−0.15 mまで掘削、盛土内
							H24.3.13	GL−0.25 mまで掘削、茶褐色土内
							H24.3.16	GL−0.5 mまで掘削、黒灰色土内
							H24.3.21	GL−0.4 mまで掘削、灰色粘質土内
							H24.3.22	掘削を伴わず、整地のみ
							H24.4.6	GL−0.55 mまで掘削、黒褐色土
153	H23.3268	左京四条六坊十三坪	脇戸町 29-1、29-3	㈱あしびや本舗 代表取締役西田由美子	店舗新築	宅地	H24.3.13	GL−1.1 mまで掘削、GL−1.1 mで地山確認
154	H23.3279	高塚遺跡	薗生町 1997-1、-5、-6、-7、-8 の一部	㈱因幡電気製作所 代表取締役社長川口久美雄	工場新築	宅地	H24.3.14	GL−0.2m まで掘削、GL−1.5 mで地山確認
155	H23.3253	左京五条六坊五坪	西木辻町から南京終町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H24.3.15	GL−0.8 mまで掘削、GL−1.0 mで地山確認
156	H23.3310	左京二条七坊十六坪	東笹鉾町 34-2、-3、-6	個人	共同住宅新築	宅地	H24.3.16	GL−0.5m まで掘削、GL−0.5 mで地山確認
157	H23.3350	左京二条七坊十四坪	北半田東町 18-2	個人	個人住宅新築	宅地	H24.3.19	GL−1.1 mまで掘削、GL−1.1 mで地山確認
158	H23.3373	左京五条三坊五条条間路	恋の窪東町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H24.3.29	GL−1.0 mまで掘削、GL−0.9 mで耕作土確認

第２章　　自然科学分析報告

奈良市教育委員会では、発掘調査の成果をより総合性の高い確実なものとするために、遺跡や遺物の肉眼観察では把握できない事象について、自然科学分析を活用している。

これまでに行ってきた主な自然科学分析は、下記の通りである。

1　環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主とした生物遺体の同定
2　年代の手がかりとなる遺物が含まれていない地層や遺構の年代を比定するために行う、試料の含有放射線量から年代値を求める年代測定（例：放射性炭素年代測定、ＴＬ年代測定）や、年代の指標性が高い広域火山灰（例：ＡＴ火山灰、ＡＨ火山灰）の同定
3　遺物に付着したり土壌に含まれたりする有機物や化学物質、あるいは土器の胎土や地質に含まれる鉱物の成分を同定する理化学分析（例：蛍光Ｘ線分析）

平成 23 年度は、下記の自然科学分析を実施した。

①　平城京第 631 次調査　　奈良時代の井戸ＳＥ 513 の井戸枠に転用された櫃部材の樹種同定、漆様膜状物質の成分分析・膜面観察、釘の材質分析、Ｘ線撮影
②　西大寺旧境内第 25 次調査　　ＳＤ 01 出土木製品の付着物に対する成分分析
③　西大寺旧境内第 25 次調査　　ＳＤ 01 木屑層から採取した植物遺体（種実・樹種）の同定作業

本章には、①の公益財団法人元興寺文化財研究所による分析成果を報告する。なお、②･③の分析成果は平成 25(2013) 年発行の『西大寺旧境内発掘調査報告書１』（奈良市埋蔵文化財調査研究報告第３冊）に掲載している。

平城京跡第 631 次調査　井戸ＳＥ 513 に転用された辛櫃の科学分析

Ⅰ　分析対象

平城京跡（左京五条四坊十六坪）第 631 次調査検出の井戸ＳＥ 513 に転用された辛櫃 1 点（図 1）である。

Ⅱ　分析内容

辛櫃に使われている木材の樹種同定、部分的に塗られている漆様膜状物質の成分分析および膜面観察、釘の成分分析、Ｘ線写真撮影を行った。

Ⅲ　使用機器と測定条件

▶　生物顕微鏡【オリンパス BX】

▶　顕微鏡撮影装置【オリンパス DP71】

樹種同定は、木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の 3 断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n －ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡で観察した。

▶　全反射フーリエ変換型赤外分光光度計（ATR-FTIR）【SensIR Technologies TravelIR】

全反射方式により、透過法では測定できない固体試料に適する。検出器 DLATGS を用い、分解能 4cm^{-1} で測定した。

漆様膜状物質の成分分析のため、試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物を同定した。

▶　ミクロトーム【日本ミクロトーム RMD-1】

▶　金属顕微鏡【オリンパス BH2】

漆膜断面観察は、僅量の漆膜片をエポキシ樹脂に包埋し、断面方向にミクロトームで切削した後、光が透過するまで研磨して薄片を作製し、永久プレパラートとして生物顕微鏡（透過光）と金属顕微鏡（落射光暗視野）で観察した。

▶　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（据置型 XRF）【SII ナノテクノロジー SEA5230】

測定は大気中で 45 kV の管電圧、または、真空中で 15kV の管電圧で 300 秒間行った。Ｘ線管球はモリブデン（Mo）である。

▶　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（ハンドヘルド型 XRF）【Innov-X Systems α -2000A】

測定は大気中で 40kV の管電圧で 15 秒間行った。

Ｘ線管球はタンタル（Ta）である。

釘の成分分析のため、試料の微小領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光Ｘ線を検出することにより元素を同定した。

▶　Ｘ線透過試験装置（XRT）【PHILIPS MG225】

試験はＸ線を管電圧 40kV、管電流 2mA で 2 分間照射し、富士写真フィルム（株）工業用Ｘ線フィルム IX100 に記録した。

Ｘ線写真撮影により、Ｘ線が物質を透過し、その透過の程度が物質により異なるという性質を利用して対象物の内部構造などを非破壊的に調べた。

Ⅳ　結果と考察

１．樹種同定

図 1 に示す①～⑦の 7 箇所からメスを用いて木材試料を採取し、樹種同定を行った。各試料の木材組織は下記の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。

※　樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

①　側板（東）

スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don

ひのき科 Cupressaceae　スギ属　*Cryptomeria* D. Don

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に散在する。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 2 個見られる。放射組織は単列で 2 ～ 10 細胞高である（図 2）。

分布：暖帯、温帯下部：本州、四国、九州、主として太平洋側。

樹形：常緑高木で直幹性。樹高 30 ～ 40 m、胸高直径 2m に達する。

用途：建築、家具、桶、樽、船、土木、下駄、彫刻、楽器　等。

出土事例：建築材、桶、底板、舟・船、下駄、箸　等。

②　側板（西）

スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don

ひのき科 Cupressaceae　スギ属　*Cryptomeria* D. Don

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に接線状に配列、あるいは散在する。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 2 個見られる。放射組織は単列で 2 ～ 12 細胞高である（図 3）。

③　側板（南）

スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don

ひのき科 Cupressaceae　スギ属　*Cryptomeria* D. Don

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に接線状に配列、あるいは散在する。分野壁孔はスギ型で１分野に２個見られる。放射組織は単列で２～22 細胞高である（図 4）。

④　側板（北）

スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don

ひのき科 Cupressaceae　スギ属　*Cryptomeria* D. Don

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に散在する。分野壁孔はスギ型で１分野に２個見られる。放射組織は単列で２～17 細胞高である（図 5）。

⑤　櫃上板（東）

スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don

ひのき科 Cupressaceae　スギ属　*Cryptomeria* D. Don

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に散在する。分野壁孔はスギ型で１分野に２個見られる。放射組織は単列で２～25 細胞高である（図 6）。

⑥　櫃上板（西）

スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don

ひのき科 Cupressaceae　スギ属　*Cryptomeria* D. Don

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に散在する。分野壁孔はスギ型で１分野に２個見られる。放射組織は単列で２～22 細胞高である（図 7）。

⑦　櫃上板（北）

スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don

ひのき科 Cupressaceae　スギ属　*Cryptomeria* D. Don

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に散在する。分野壁孔はスギ型で１分野に２個見られる。放射組織は単列で２～23 細胞高である（図 8）。

２．漆成分分析

側板（南）の図９の白丸印で示した部分より漆様膜状物質を採取した。漆様膜状物質は木地からやや浮き上がった状態で、メスで膜を一部切断して容易に分析用試料を採取することができた。

これを ATR-FTIR で分析したところ、図 10 に示した漆に特徴的な吸収を得たことから、この膜状物質は漆であると考えられた。

３．漆膜面分析

次に、この漆膜で断面観察用プレパラートを作製し、金属および生物顕微鏡で観察して落射および透過拡大像（図 11）を得たところ、漆膜は３層で漆層 a と下地 b、c からなっていると考えられた。XRF で測定すると鉄（Fe）を比較的強く検出した他、土壌成分由来と思われるアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）を検出した（図 12）。

以上のことから黄褐色下地 b、c は漆に大きな鉱物粒子を含む土を混和したものと考えられた。b は c よりやや色が濃く、b は約 30 ～ 40 μ m 、c は約 40 ～ 70 μ m の厚さであった。漆層 a は黒色系漆で、厚さは約 30 μ m であった。

４．釘分析

釘を確認することのできた 37 箇所（図 13、14、15 の矢印箇所）をハンドヘルド型 XRF で測定したところ、すべての箇所でほぼ同様のスペクトルを得、鉄を強く検出した。測定した代表的なスペクトルを図 17 に示した（図 14 の左写真の左下釘を測定したもの）。

さらに、図 15 の白矢印箇所から脱落した釘の矢印で示した頭部と脚部（図 16）を据置型 XRF で測定したところ、図 18 のようなスペクトルを得、鉄の他、弱くカルシウム、マンガン（Mn）、銅（Cu）、ヒ素（As）を検出した。

したがって、釘の主成分は鉄であると考えられた。

５．Ｘ線写真撮影

櫃上板のＸ線写真撮影を行い、その撮影箇所を図 19 に赤四角 A ～ H で示した。

櫃上板（北）では板に対して垂直な釘またはその形跡を８箇所、櫃上板（南）では板に対して垂直な釘またはその形跡を３箇所確認できた（図 20、21）。櫃上板（西）と櫃上板（東）では小口面から板に対して平行で長さ約 44mm から約 65mm の釘またはその形跡を一端につき１箇所ずつ確認できた（図 22、23）。

参考文献

北村四郎・村田源　『原色日本植物図鑑・木本編』Ⅱ　1979 年
島地謙・伊東隆夫　『日本の遺跡出土木製品総覧』 1988 年
島地謙・伊東隆夫　『図説木材組織』 1982 年

（川本耕三、ただし、樹種同定の項は木沢直子）

６．分析データ

１．樹種同定

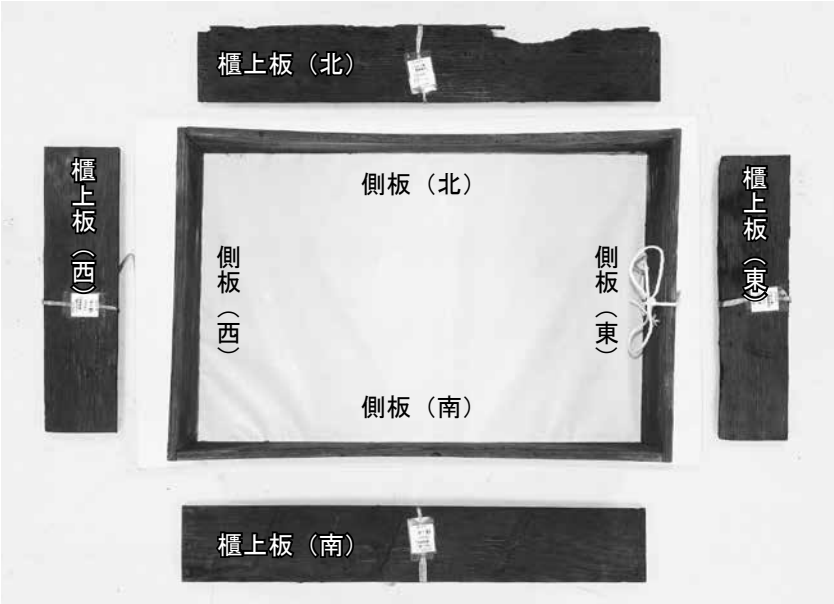
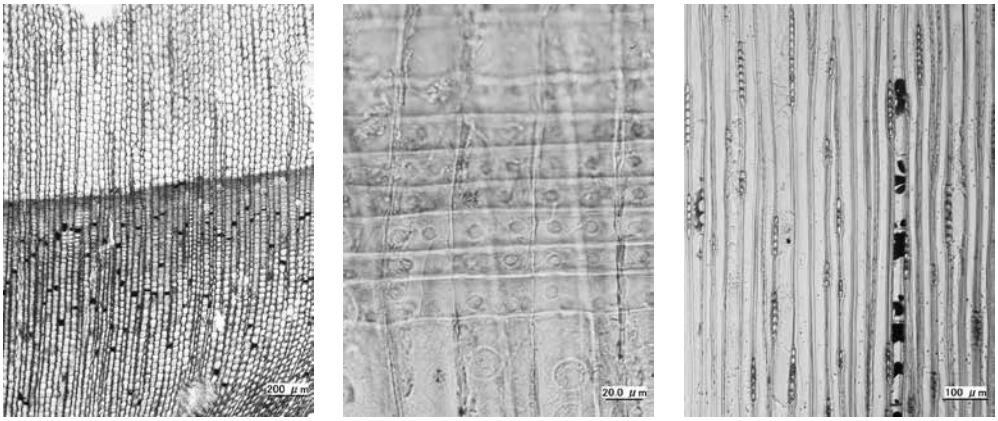


図１　平城京左京五条四坊十六坪の井戸ＳＥ 513 に転用された櫃とその樹種同定用試料採取箇所

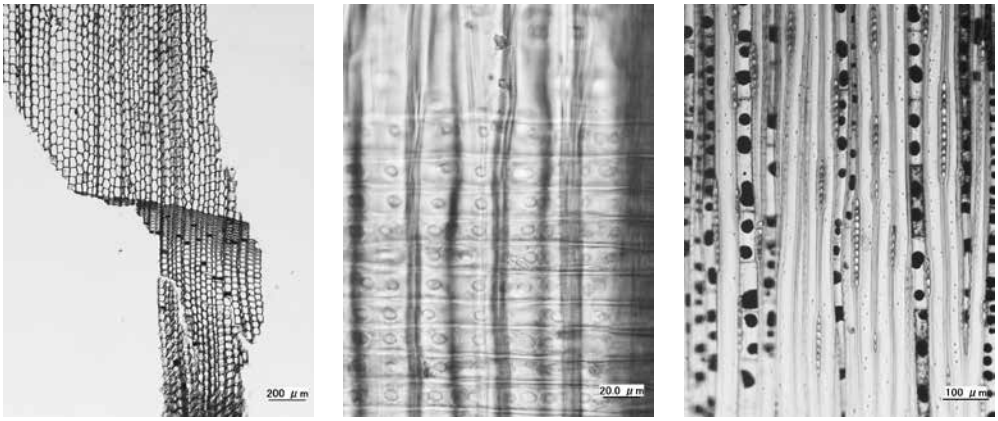
スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don



木口面　　柾目面　　板目面

図２　側板（東）（図１の分析箇所①）の木材組織顕微鏡写真

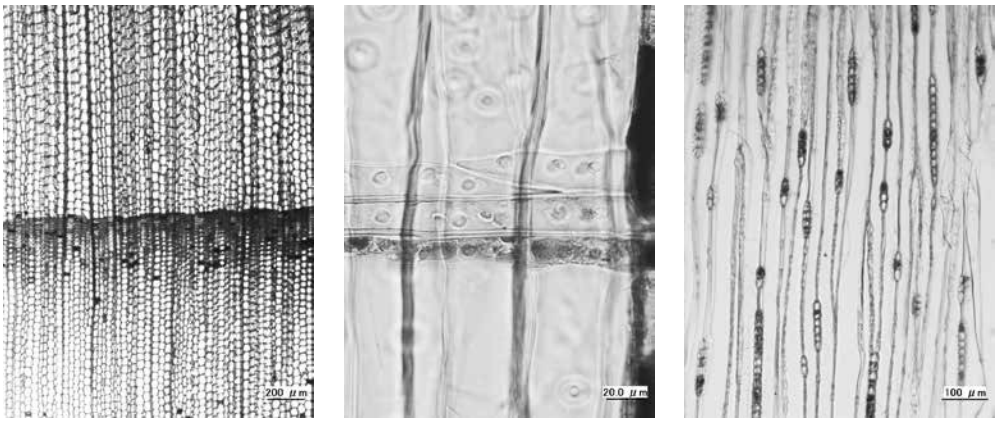
スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don



木口面　　柾目面　　板目面

図３　側板（西）（図１の分析箇所②）の木材組織顕微鏡写真

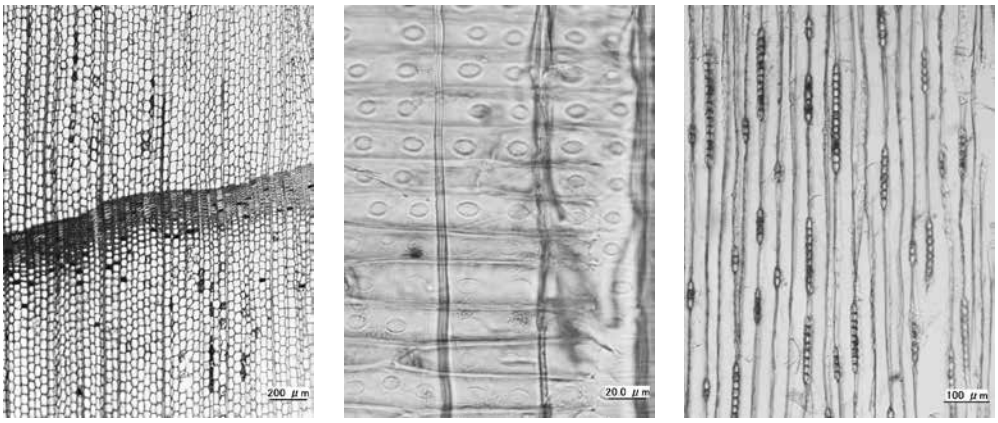
スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don



木口面　柾目面　板目面

図 4　側板（南）（図 1 の分析箇所③）の木材組織顕微鏡写真

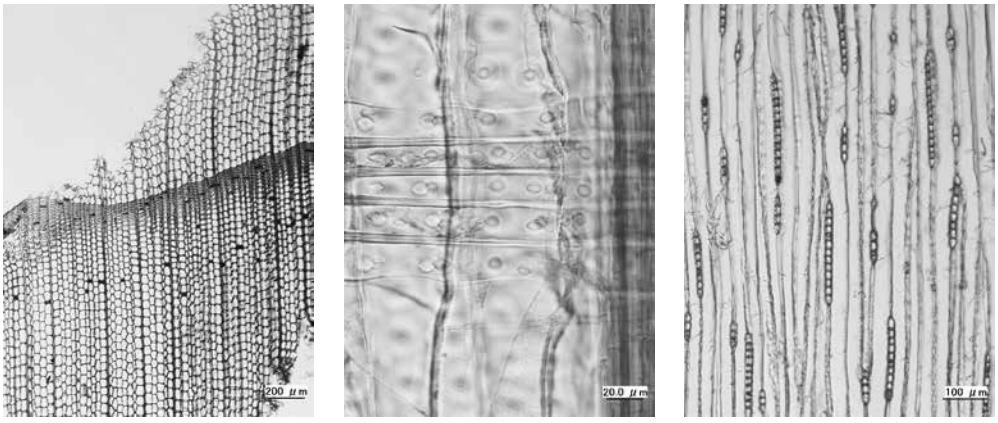
スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don



木口面　柾目面　板目面

図 5　側板（北）（図 1 の分析箇所④）の木材組織顕微鏡写真

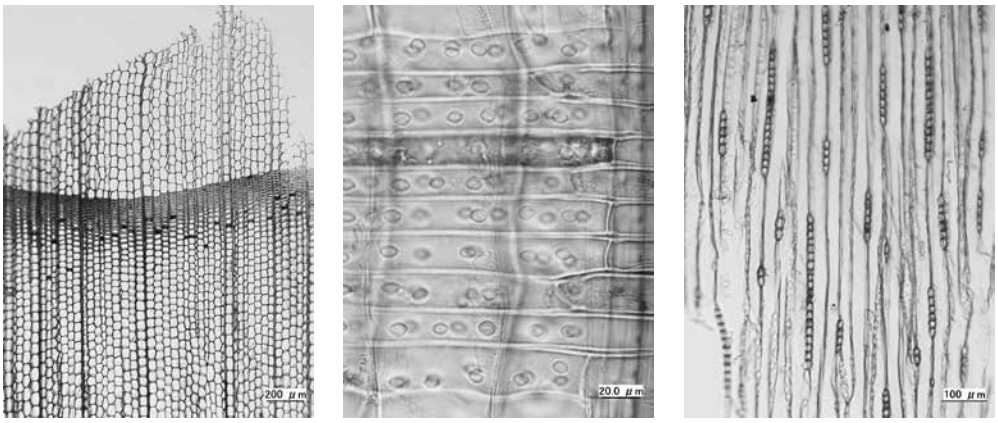
スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don



木口面　柾目面　板目面

図 6　櫃上板（東）（図 1 の分析箇所⑤）の木材組織顕微鏡写真

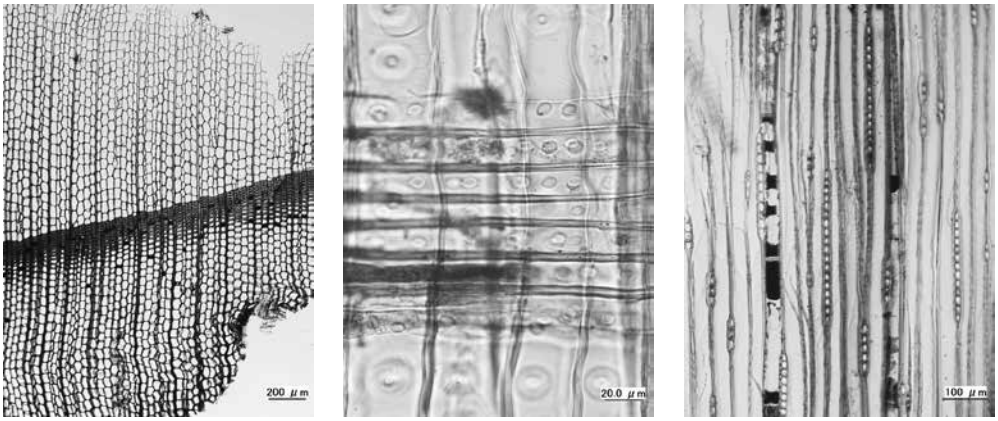
スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don



木口面　　柾目面　　板目面

図 7　櫃上板（西）（図 1 の分析箇所⑥）の木材組織顕微鏡写真

スギ　*Cryptomeria Japonica* D. Don



木口面　　柾目面　　板目面

図 8　櫃上板（北）（図 1 の分析箇所⑦）の木材組織顕微鏡写真

2．漆成分分析

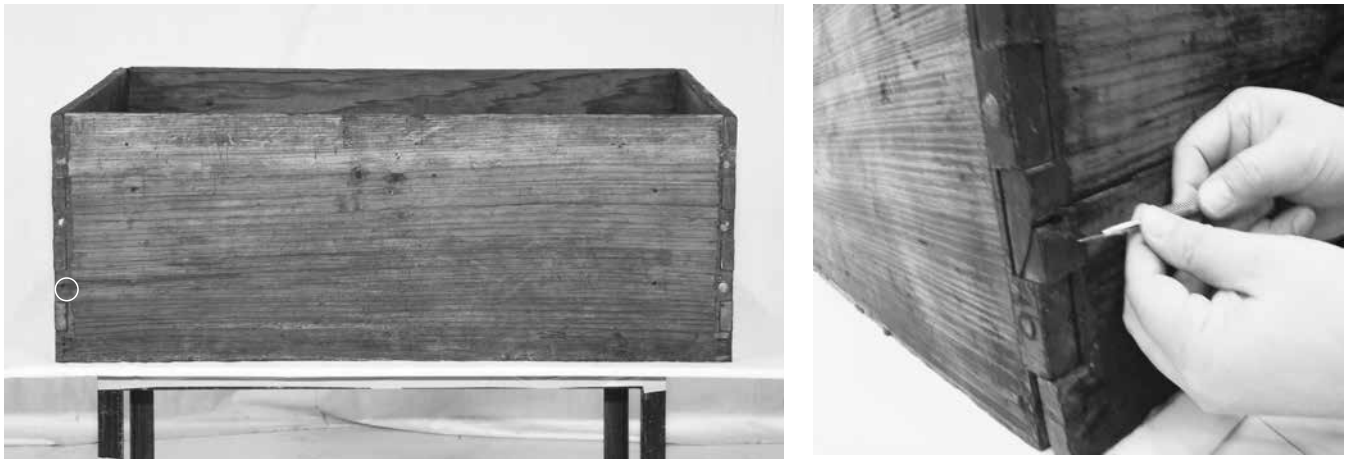


図 9　櫃付着漆様試料採取箇所（白丸印、左：側板（南）、右：採取時）

図 10　櫃付着漆様物質の ATR-FTIR スペクトル

3．漆膜面分析

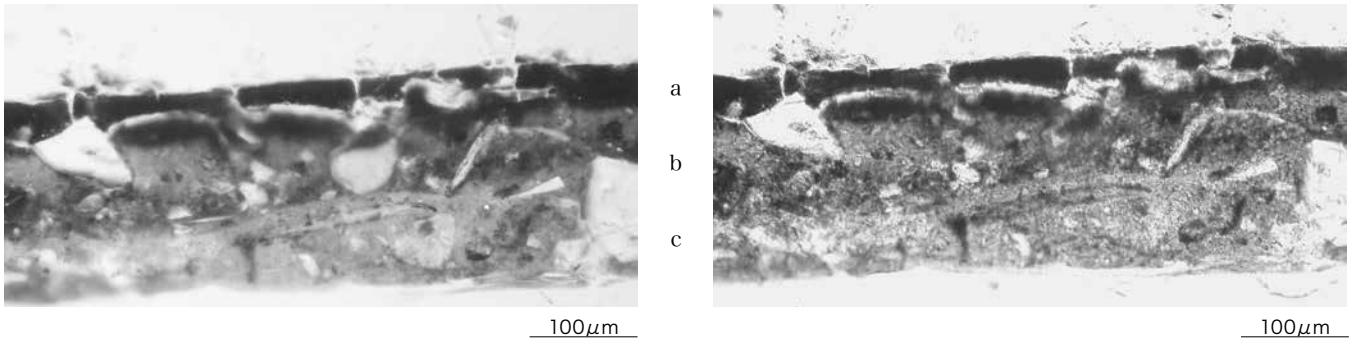


図 11　櫃付着漆様物質の断面顕微鏡写真（左：反射像、右：透過像）

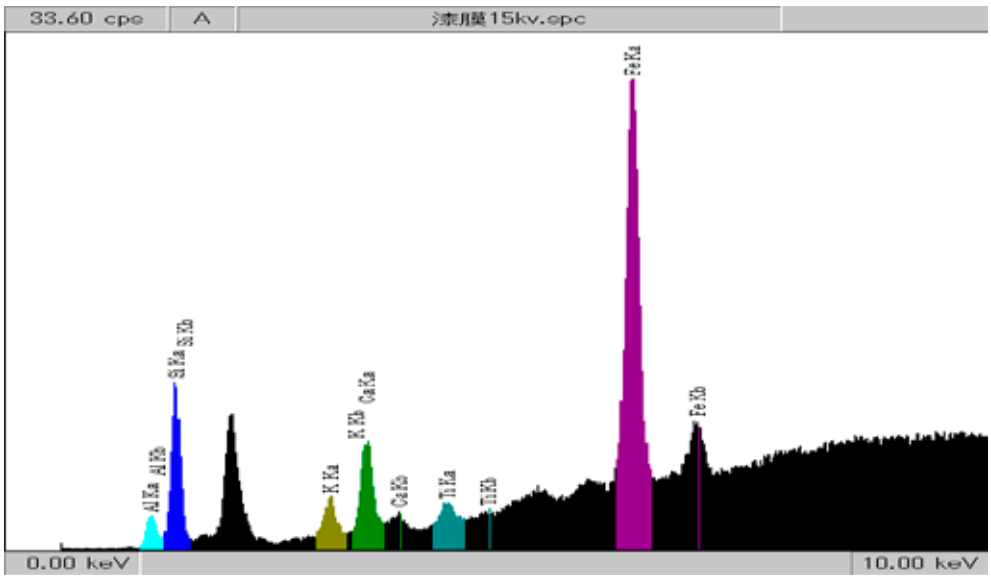


図 12　櫃付着漆様物質の XRF スペクトル (据置型 XRF、真空中、15kV)

4．釘分析

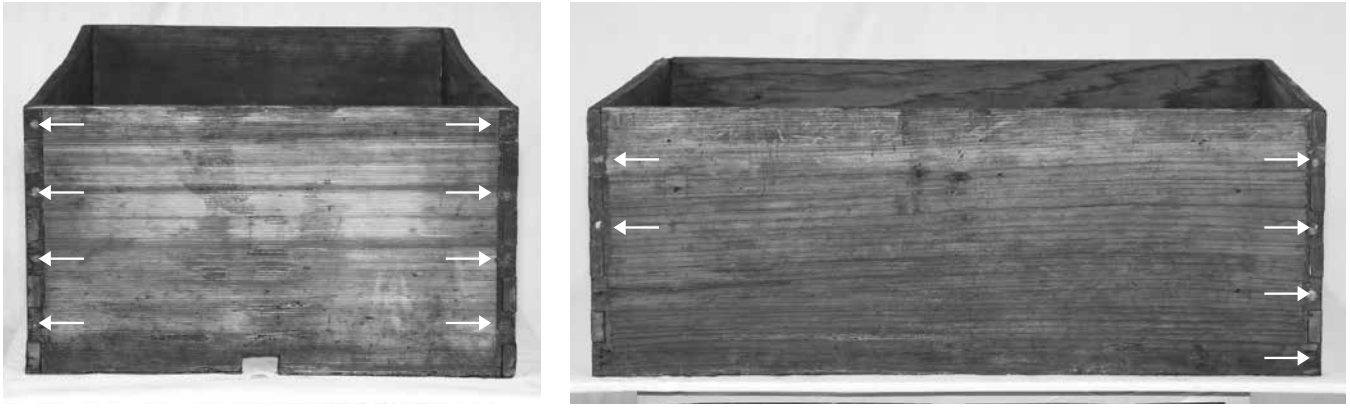


図 13　櫃の釘の XRF 分析箇所（矢印、左：側板（東）、右：側板（南））

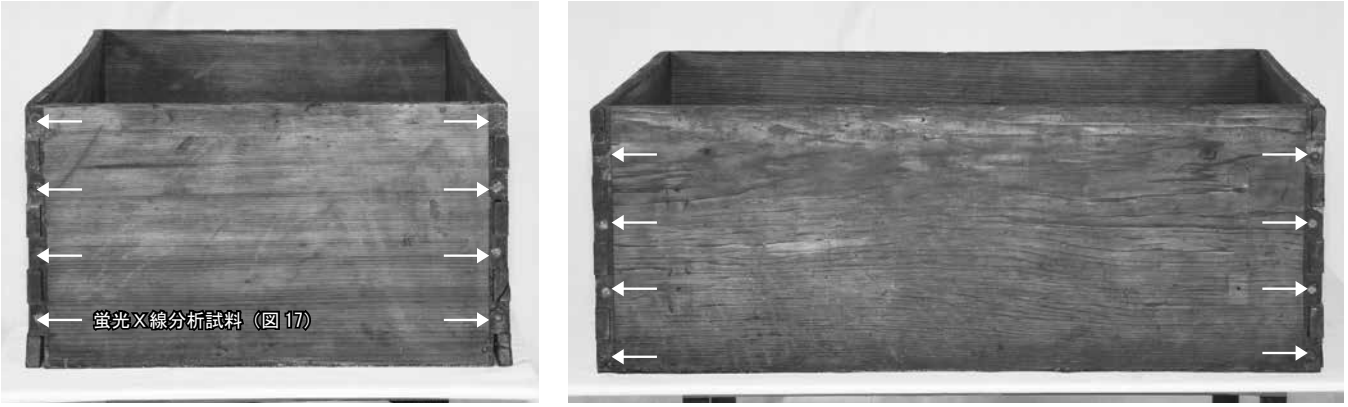


図 14　櫃の釘の XRF 分析箇所（矢印、左：側板（西）、右：側板（北））

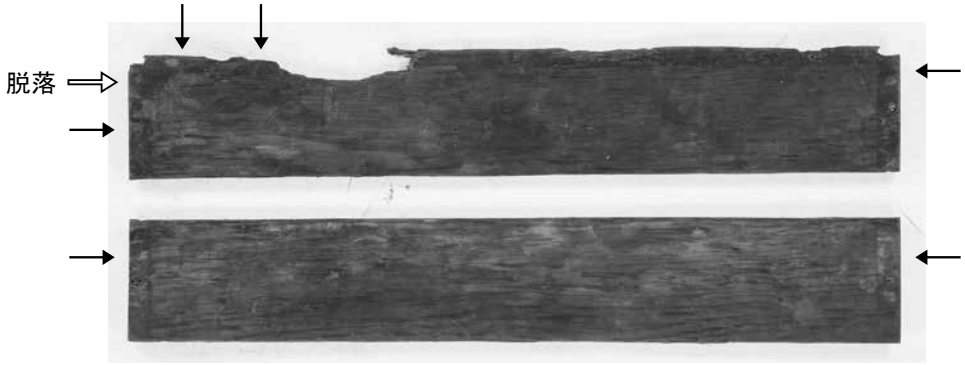


図 15　櫃の釘の XRF 分析箇所（矢印、上：櫃上板（北）、下：櫃上板（南））

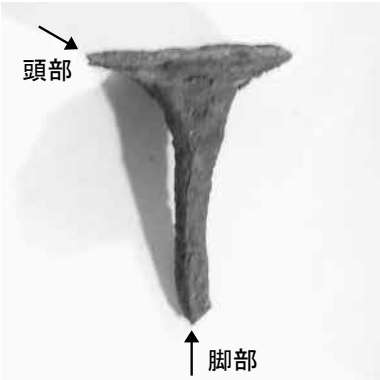


図 16　櫃から脱落した釘 (図 15 白矢印)

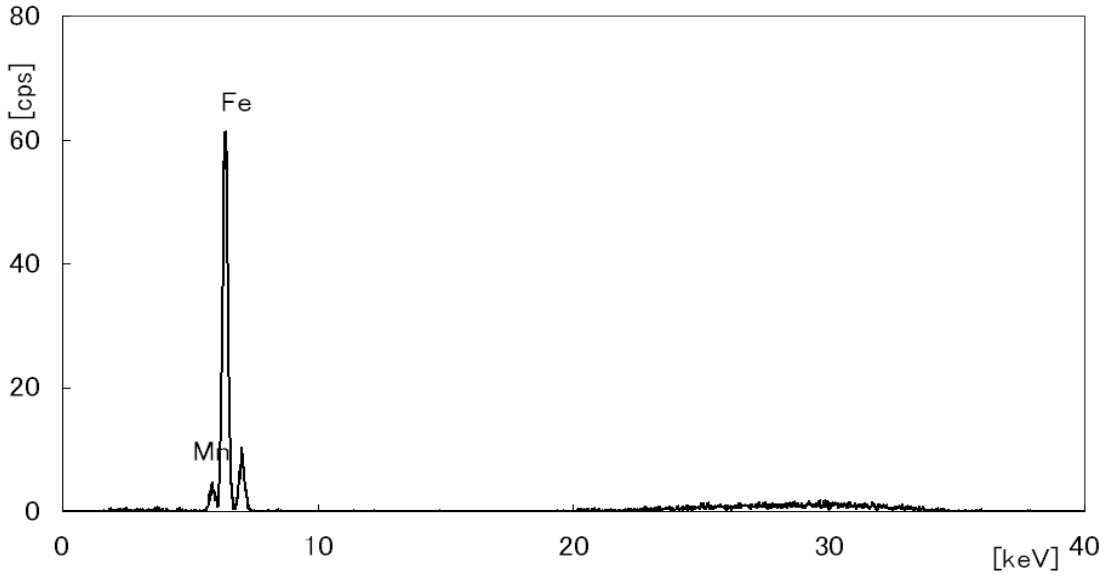


図 17　櫃の釘の XRF スペクトル（図 14 左写真の左下矢印箇所、ハンドヘルド型 XRF、大気中、40kV）

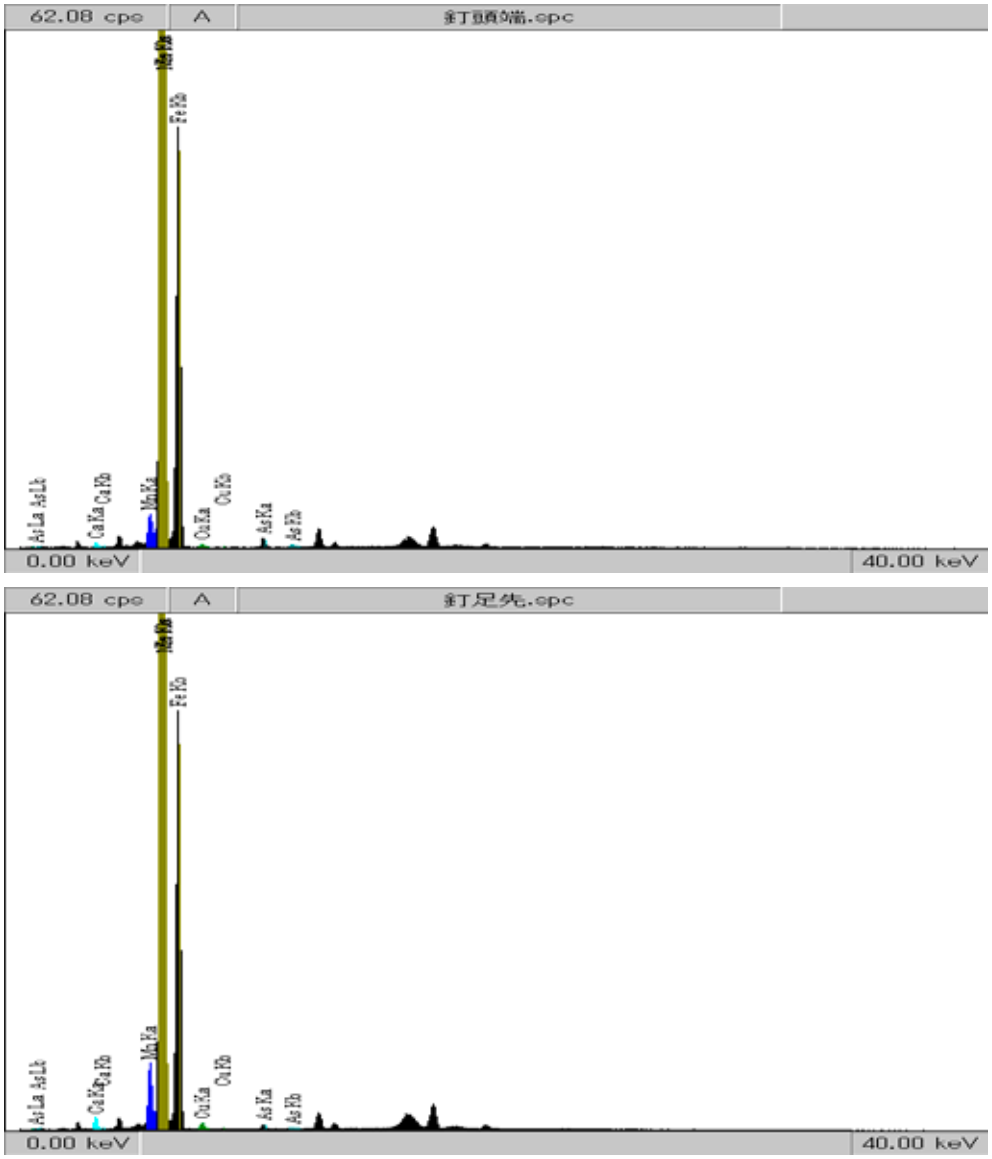


図 18　櫃から脱落した釘 (図 15 白矢印箇所、図 16）の XRF スペクトル
(上：頭部、下：脚部、据置型 XRF、大気中、45kV）

5．X線写真撮影

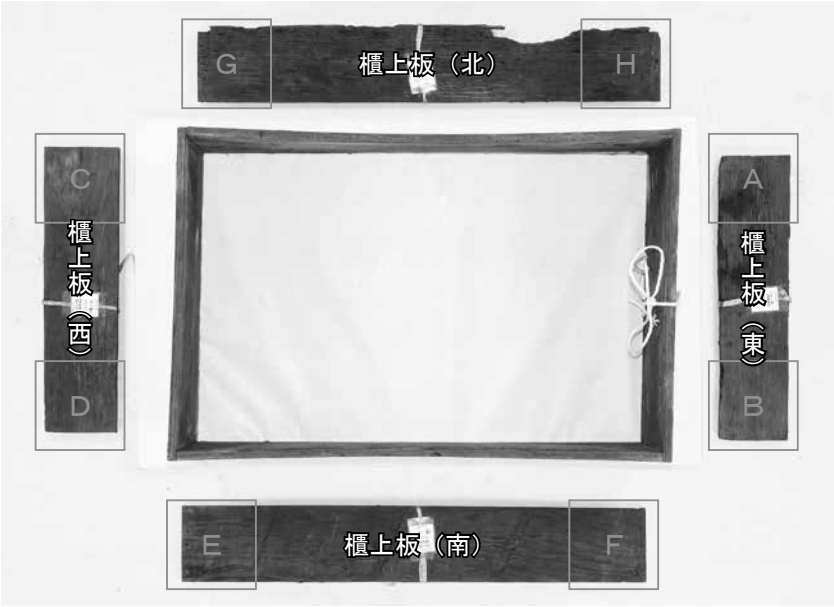


図 19　X線写真撮影箇所

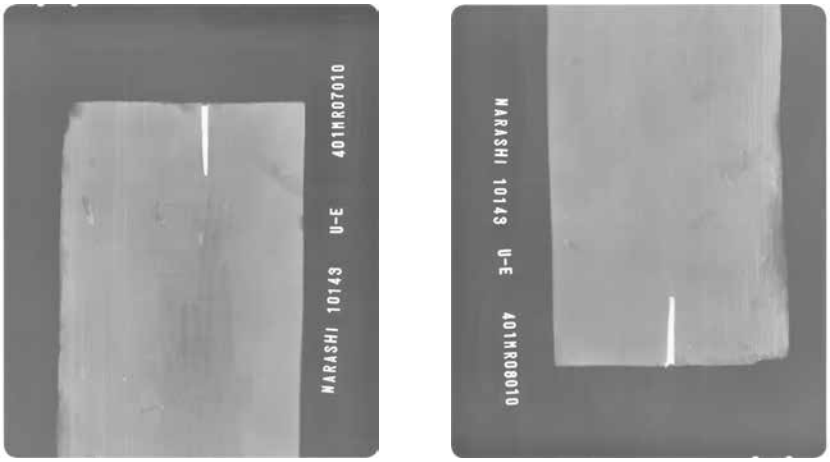


図 20　櫃上板（東）赤四角部分のX線写真（左：A、右：B）

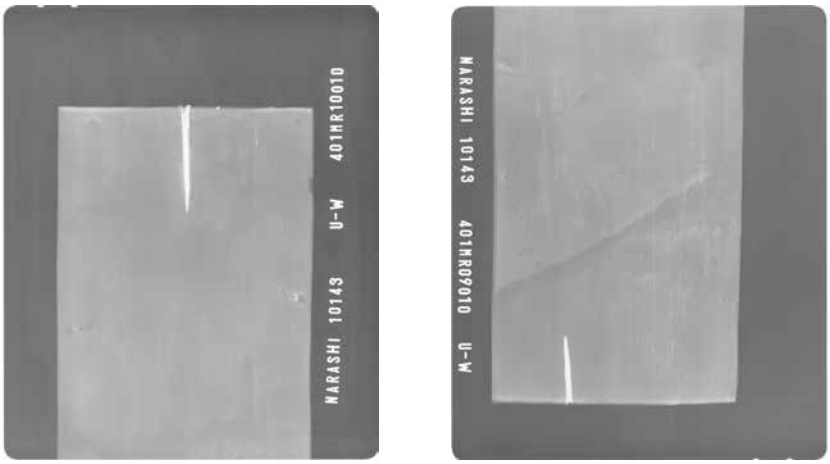


図 21　櫃上板（西）赤四角部分のX線写真（左：C、右：D）

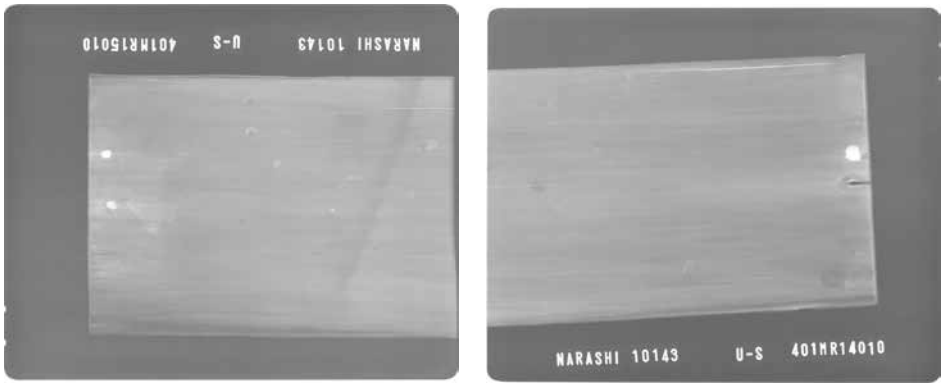


図 22　櫃上板（南）赤四角部分のＸ線写真（左：E、右：F）

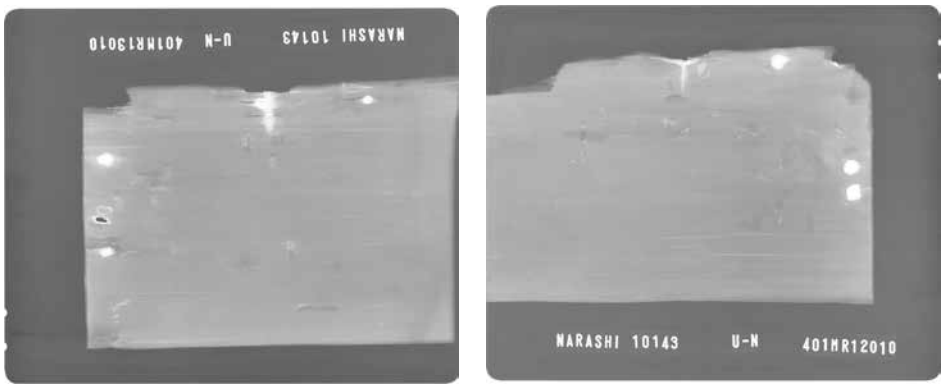


図 23　櫃上板（北）赤四角部分のＸ線写真（左：G、右：H）

第３章　　平成 23 年度 保存活用事業報告

平成 23（2011）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

1．展示

A　常設展示

対　　象：一般
会　　期：平成 23 年 4 月 1 日(金)～ 10 月 21 日(金)(139 日間)
場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室
趣　　旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知ってもらう。
内　　容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。
観覧者数：2,268 名

B　秋季特別展「南都の繁栄　－平城京その後－」の開催

対　　象：一般
会　　期：平成 23 年 11 月 1 日(火)～ 12 月 28 日(水)(58 日間)
場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室
趣　　旨：平城京廃都後の奈良で使われたうつわ・道具・瓦などを展示し、平安・鎌倉・室町（戦国）時代の奈良の人々の暮らしを紹介。
観覧者数：720 名
そ の 他：・案内を「しみんだより」11 月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。
・展示解説用パンフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

C　発掘調査速報展示（２回）の開催

対　　象：一般
趣　　旨：発掘調査などの最新の成果を夏と春の２回に分けて、展示・紹介する。

①夏季速報展示「西大寺赤田横穴墓群の調査」
会　　期：前期　平成 23 年 7 月 11 日(月)～ 8 月 31 日(水)(合計 37 日間)
場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室
内　　容：平成 22 年度に実施した赤田横穴墓群の発掘調査成果を出土遺物や写真パネルで紹介。また、昭和 58 年度調査資料も併せて展示。
観覧者数：750 名
そ の 他：・案内を「しみんだより」７月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

②春季速報展示
会　　期：平成 24 年 3 月 1 日(木)～ 3 月 30 日(金)(22 日間)
内　　容：平成 23 年度に実施した史跡東大寺旧境内大仏殿北方地区及び平城京左京五条四坊八坪の発掘調査成果を 出土遺物と写真パネルで紹介。
観覧者数：450 名
そ の 他：・案内を「しみんだより」３月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

D　年間観覧者数　4,027 名(247 日間)。月平均 335 名。月、男女、居住地、年齢別は表１のとおり。

秋季特別展「南都の繁栄－平城京その後－」

春季速報展示

表 1　（住居地別・男女別・年齢別は、判明した人数のみ）

月別：

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
149	216	452	395	424	346	286	517	203	353	236	450

住居地別：

奈良市内	奈良県内	近畿圏内	近畿圏外
263	100	199	24

男女別：

男	女
2758	1244

年齢別：

～9 歳	10 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	60 ～ 69 歳	70 歳～	学生
12	42	34	22	38	86	454	94	44

2．施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

（1）
対　　象：三笠高齢者学級　40 名
期　　日：平成 23 年 6 月 3 日(金)

（2）
対　　象：大阪府高齢者大学校考古学研究科　32 名
期　　日：平成 23 年 6 月 23 日(木)

（3）
対　　象：大安寺西小学校 6 年生　96 名
期　　日：平成 23 年 6 月 24 日(金)

（4）
対　　象：日本セカンドライフ協会　25 名
期　　日：平成 23 年 9 月 29 日(木)

（5）
対　　象：関西大学文学研究科学生　1 名
期　　日：平成 23 年 11 月 21 日(月)

（6）
対　　象：河合町郷土を学ぶ会　63 名
期　　日：平成 23 年 11 月 26 日(土)

3．講演会・教室の開催

A　埋蔵文化財講演会

期　　日：平成 23 年 11 月 26 日(土)13:00 ～ 16:30
参加者数：45 名
会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室
・佐藤亜聖「南都の繁栄－平城京その後－」
・奥井智子「中世奈良遺跡の調査について－平成 23 年度発掘調査成果から－」

B　埋蔵文化財発掘調査報告会

対　　象：一般
期　　日：平成 24 年 3 月 17 日(土)
内　　容：平成 23 年度に埋蔵文化財調査センターが行った主な発掘調査の報告を行った。
・池田裕英「西大寺赤田横穴墓群の調査」
・池田富貴子「史跡東大寺旧境内（大仏殿北方地区）の調査」
会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室
趣　　旨：平成 23 年度に実施した発掘調査の成果について、職員が図や写真などを使用して報告する。
参加者数：55 名
そ の 他：・募集案内を「しみんだより」2 月号・奈良市役所のホームページ・春季速報展ポスター・チラシに掲載。
・事前に報道機関に資料を配布。

埋蔵文化財講演会

埋蔵文化財発掘調査報告会

C　夏休み親子考古学体験

対　　象：小学４年生以上の児童とその保護者
期　　日：平成 23 年８月４日(木)
内　　容：クイズに答えながら埋蔵文化財調査センターの展示室を見学後､瓦の拓本を体験する。
会　　場：埋蔵文化財調査センター展示室・講座室
趣　　旨：展示室を見学することで、奈良の歴史を知ってもらい、本物の遺物に触れることで、考古学に親しんでもらう。
参加者数：20 名（10 組）
そ の 他：募集案内を「しみんだより」７月号・奈良市役所のホームページに掲載。

夏休み親子考古学体験

４．市民考古学講座

対　　象：一般
期　　日：平成 23 年７月 13 日(水)～平成 24 年３月７日（水）　毎月１～２回､全 13 回（表２）
内　　容：埋蔵文化財調査センターがおこなう発掘調査、出土遺物の整理、展示会などの活動支援ボランティアの養成講座。職員が講師をつとめる講座・実習のプログラムにより、将来の活動に必要な基本的知識・技術を身につける。
受講者数：25 名
そ の 他：・案内を「しみんだより」６月号と奈良市役所のホームページに掲載。

５．市民考古サポーターの活動支援

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対　　象：平成 22 年度の受講修了者 25 名
登録人員：23 名

表２

	日時	講座名
第１回	７月 13 日	開講式・オリエンテーション 考古学とは何か
第２回	７月 27 日	石器のはなし・縄文人の基礎知識
第３回	８月 10 日	弥生のくらし・古墳のはなし
第４回	９月 14 日	佐紀古墳群を訪ねる (実習)
第５回	９月 21 日	奈良の都平城京
第６回	10 月 12 日	古代の瓦・古代の土器
第７回	11 月２日	平城宮跡をみる (実習)
第８回	11 月 16 日	発掘作業の流れ
第９回	12 月 14 日	発掘現場をみる (見学)
第 10 回	１月 11 日	舞台裏をみる (出土品整理作業)
第 11 回	２月８日	拓本のとり方 (実習)
第 12 回	２月 22 日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第 13 回	３月７日	土器類の分類整理 (実習) 閉講式

活動開始：平成 23 年６月～
活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参画。
月平均活動延べ人数：126 名

６．体験学習・実習の受け入れ

A　市立高校体験学習

（１）

対　　象：一条高校人文科学科２年生　39 名
期　　日：平成 23 年７月 22・25・26・28・29 日
場　　所：平城京跡発掘調査現場 (奈良市大森町)
内　　容：発掘調査の体験実習

発掘調査の体験実習（一条高校）

（2）
対　　象：一条高校人文科学科１年生　41 名
期　　日：平成 23 年９月 27 日(火)
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：出土遺物の整理実習(洗浄・注記・拓本)

B　中学校職場体験学習

（1）
対　　象：不登校生徒　男子２名
期　　日：平成 23 年７月 15 日(金)・19 日(火)
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（2）
対　　象：伏見中学校２年生　男子３名
期　　日：平成 23 年８月３日(水)～５日(金)
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（3）
対　　象：三笠中学校　女子２名
期　　日：平成 23 年 11 月 17 日(木)・18 日(金)
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（4）
対　　象：登美ヶ丘中学校　男子３名
期　　日：平成 23 年 11 月 21 日(月)～ 22 日(火)
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（5）
対　　象：平城西中学校　男子２名
期　　日：平成 23 年 10 月 25 日(火)～ 27 日(木)
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（6）
対　　象：都跡中学校　男子３名
期　　日：平成 23 年 11 月９日(水)～ 11 日(金)
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

職場体験学習（伏見中学校）

7．文化財学習用キット（ドキ土器キット）の貸出し

対　　象：奈良市内の小中学校
趣　　旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校などへ貸し出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生･自主活動グループにも「触れることのできる文化財」として使用する。

資料の内容
①縄文土器と弥生土器
②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁
③古墳時代の埴輪と須恵器
④－１土器Ａ・④－２土器Ｂ　奈良時代の土器
⑤奈良時代の瓦　軒丸瓦・軒平瓦
⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

（1）
場　　所：鳥見小学校
期　　日：平成 23 年４月 15 日(金)～ 22 日(金)
資　　料：①

（2）
場　　所：鳥見小学校
期　　日：平成 23 年５月 13 日(金)～ 20 日(金)
資　　料：⑥

8．職員の派遣（講師など）

A　一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期　　日：①平成 23 年７月 12 日(火)
　　②平成 23 年９月 20 日(火)
場　　所：一条高校(奈良市法華寺町)
派遣人数：①②各１名
内　　容：①発掘調査について　②考古学概論

B　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館主催「大和を掘る」土曜講座

期　　日：平成 23 年７月 30 日(土)
場　　所：奈良県立橿原考古学研究所　講堂
派遣人数：２名
内　　容：平城京左京五条四坊十五・十六坪の調査について

南田原ミヤケ遺跡の調査について

C　平成 23 年度奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「発掘調査報告会」

期　　日：平成 24 年 3 月 3 日 (土)

場　　所：田原本町青垣生涯学習センター研修室

派遣人数：3 名

内　　容：史跡東大寺旧境内大仏殿北方地区の調査・奈良町遺跡の調査

D　春日公民館主催「南都再発見　～大安寺探訪～」

期　　日：平成 24 年 3 月 22 日（木）

場　　所：大安寺古墳群・大安寺境内・大安寺塔跡

派遣人数：１名

内　　容：現地学習

9．資料展示台の製作

対　　象：西大寺旧境内出土イスラム陶器

内　　容：イスラム陶器破片を復原的に展示公開するための展示台を委託製作した。

10．保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A　遺物などの貸出　13 件（表３の通り）

B　写真などの貸出・提供・掲載許可　20 件（表４の通り）

C　学術研究に関わる資料閲覧　12 件（表５の通り）

表３

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 23.4.1 ～ H 24.3.31	平城京跡出土木簡 (模造品)10 点 (礫進上木簡 1 点、月借銭進上木簡 1 点、豹皮分銭付札 1 点、渋皮御田侍奴画指木簡 1 点、北宮封緘木簡 1 点、衛府進塩付札 1 点、禄布付札 1 点、槐花進上木簡 1 点、造酒司符 1 点、瓦進上木簡 1 点)、分銅 (模造品) 1 点 (平城京跡第 167 次調査出土)
2	一宮市博物館	「硯ことはじめ～文房具のルーツをさぐる～」に展示	H 23.6.8 ～ H 23.8.10	採煙資料 24 点 (平城京跡第 228 次調査出土資料 1 点・平城京跡第 258 次調査出土資料 2 点・平城京跡第 477 － 5 次調査出土資料 14 点・元興寺旧境内第 38 次調査出土資料 1 点・元興寺旧境内第 48 次調査出土資料 1 点)
3	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	速報展「大和を掘る 29」に展示	H 23.6.28 ～ H 23.9.16	平城京左京五条四坊十五坪出土資料 17 点・平城京左京五条四坊十六坪・五条条間北小路北側溝出土資料 37 点
4	中国陝西歴史博物館	特別展「日本考古展－古都奈良考古文物精華展―」に展示	H 23.9.20 ～ H 24.1.19	神功開宝鋳銭遺物 4 点・風招 1 点・風鐸 1 点・壷形分銅 1 点・笠形分銅 1 点・奈良三彩 3 点・唐三彩 8 点・唐白磁 2 点・三彩施釉瓦 5 点・「皇甫東朝」墨書土器 1 点・イスラム陶器 4 点
5	元興寺文化財研究所	特別展「極楽行きのタイムカプセル」に展示	H 23.10.11 ～ H 23.11.7	古市城跡城山地区出土蔵骨器 10 点
6	奈良県立橿原考古学研究所	アトリウム展「奈良県内出土のガラス鋳造関係遺物」に展示	H 23.7.20 ～ H 23.9.16	ガラス小玉鋳型 4 点（大安寺旧境内出土資料 2 点・平城京跡出土資料 2 点）
7	桜井市立埋蔵文化財センター	特別展「大和の王と居館」に展示	H 23.9.20 ～ H 23.12.15	菅原東遺跡出土資料 8 点（碧玉未成品 1 点・土師器 7 点）・西大寺東遺跡出土角柱 2 点
8	奈良県立橿原考古学研究所	特別企画展「やまとの地宝―遺物が語る奈良の歴史―」に展示	H 24.1.20 ～ H 24.3.30	神功開宝鋳銭遺物 4 点・風招 1 点・風鐸 1 点・壷形分銅 1 点・笠形分銅 1 点・奈良三彩 3 点・唐三彩 8 点・唐白磁 2 点・三彩施釉瓦 5 点・「皇甫東朝」墨書土器 1 点・イスラム陶器 4 点

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
9	奈良大学文学部文化財学科	授業「考古学研究法」で活用し、洗浄・注記・実測等を行う	H 23.5.16 ～ H 24.12.31	平城京第 641 次調査ＳＫ 42・ＳＫ 43・ＳＫ 86 出土遺物３箱分
10	土浦市立博物館	特別展「暮らしをささえる女性たち―紡ぐ・織る・仕立てる・繕う―」に展示	H 23.12.15 ～ H 24.2.29	大安寺式軒丸瓦１点・大安寺式軒平瓦１点・平城宮式軒丸瓦１点・平城宮式軒平瓦１点・丸瓦１点・平瓦１点
11	木簡学会	第 33 回木簡学会に展示	H 23.12.2 ～ H 23.12.5	平城京第 622 次調査出土木簡３点

奈良市管内

12	史料保存館	「奈良の墨」展に展示	H 23.7.5 ～ H 23.9.13	平城京右京五条四坊三坪出土資料レプリカ（筆・墨・壷）３点・平城京左京三条六坊十坪出土硯１点・平城京左京二条七坊十五坪出土硯１点
13	若草公民館	「多聞城」展示会に展示	H 23.8.17 ～ H 23.8.23	多聞城跡出土資料８点（軒瓦２点・土師器皿３点・中国産陶磁器２点・国産陶器１点）

表４

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
1	H 23.4.8	地域情報ネットワーク㈱	『月刊大和路ならら』2011 年５月号に掲載	赤田横穴墓群５号墓陶棺出土状態写真１枚	貸出・掲載許可
2	H 23.4.28	奈良市柏木町公共事業推進協議会	奈良市柏木町公共事業推進協議会設立 20 周年記念事業『20 年の歩み』に掲載	平城京第 415 次調査全景写真１枚	貸出・掲載許可
3	H 23.6.8	㈱日本アート・センター	『ＮＨＫ日めくり万葉集』vol.17 に掲載	西大寺旧境内第 25 次調査出土「皇甫東朝」墨書土器写真１枚	掲載許可
4	H 23.6.13	勉誠出版㈱	『アジア遊学』147 号に掲載	西大寺旧境内第 25 次調査出土「神護景雲二年」木簡写真１枚・イスラム陶器写真１枚	貸出・掲載許可
5	H 23.6.20	葛飾区郷土と天文の博物館	展示図録『古代東海道と万葉の世界』に掲載	平城京第 506 次調査東四坊大路東側溝写真１枚・五条条間北小路南側溝写真１枚	貸出・掲載許可
6	H 23.6.30	実教出版㈱	『高校日本史Ｂ』に掲載	西大寺旧境内出土第 25 次調査出土イスラム陶器写真１枚	貸出・掲載許可
7	H 23.7.6	山の辺の道「奈良道」を守る会	『まほろば古道《山の辺の道》奈良道編』に掲載	帯解黄金塚古墳現地説明会資料の一部	転載許可
8	H 23.8.28	天理大学附属天理参考館	天理ギャラリー第 144 回展「古代日本の鏡」に使用	伝富雄丸山古墳出土三角縁神獣鏡（弥勒寺蔵）写真１枚	貸出・掲載許可
9	H 23.9.14	㈱学生社	『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』に掲載	三条遺跡出土北近畿系甕写真１枚	掲載許可
10	H 23.9.15	奈良県観光局ならの魅力創造課	iPad 等を活用した歴史展示の試行業務に使用	平城京左京二条二坊出土「相撲所」墨書土器集合写真１枚	貸出・使用許可
11	H 23.10.26	木簡学会	『木簡研究』第 33 号に掲載	平城京左京五条四坊九坪・五条条間北小路北側溝出土木簡写真２枚	掲載許可
12	H 23.10.24	㈱ジャパン通信情報センター	『文化財発掘出土情報』2012 年１月号に掲載	赤田横穴墓群現地説明会資料・赤田横穴墓群５号墓陶棺出土状態写真１枚	貸出・掲載許可
13	H 23.12.14	㈱ベストセラーズ	『歴史人』２月号「歴史スクープ」に掲載	東大寺旧境内第 13 次調査僧房跡写真１枚	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
14	H 24.1.12	ＪＲ奈良駅連続立体・街路事務所	ＪＲ奈良駅付近連続立体交差事業の工事誌に掲載	平城京第 631 次調査航空写真４枚	貸出・掲載許可
15	H 24.1.13	学校教育課	人権学習教材に掲載	平城京第 252 次調査防空壕全景写真１枚	貸出・掲載許可
16	H 24.1.16	専修大学教授	『東アジア世界史研究センター年報』6 号「遣唐使と来日外国人」に掲載	西大寺旧境内第 25 次調査出土「皇甫東朝」墨書土器写真１枚・「神護景雲二年」木簡写真１枚・調査位置図１枚	貸出・掲載許可
17	H 24.3.1	長野県立歴史館	歴史館セミナー「信濃古代史の再構築に向けて」に掲載	西大寺旧境内第 25 次調査出土「東海道」木簡写真１枚	貸出・掲載許可
18	H 24.3.27	奈良県立図書情報館	芸亭院関連展示に使用	西大寺旧境内第 25 次調査出土「石上朝臣」木簡写真１枚	貸出・使用許可

表５

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H 23.6.20 6.21	橿原考古学研究所非常勤研究員	個人研究	水間遺跡出土の木の節・木端など
2	H 23.7.14	関西大学大学院学生	個人研究	平城京各所出土の塼仏４点
3	H 23.8.19	三重県埋蔵文化財センター職員	個人研究	柏木遺跡出土石杵１点
4	H 23.8.31	龍谷大学大学院学生	資料調査	水間遺跡・杣ノ川町遺物散布地出土土器・石器
5	H 23.12.22	奈良文化財研究所職員	資料調査	大安寺旧境内出土の大官大寺式軒瓦
6	H 24.1.17	大阪市立大学職員ほか	資料調査	西大寺旧境内第 25 次調査出土の木簡・墨書土器

11. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している木製・金属製などの遺物について、化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を図った。

対象資料：西大寺旧境内第 23 次調査出土鉄製腰刀２点
西大寺旧境内第 25 次調査出土木簡・木製品 379 点

12. 資料の整理・復元

奈良県緊急雇用創出事業補助金を得て、次の３つの事業を実施した。

Ａ　埋蔵文化財調査記録資料整理活用事業

埋蔵文化財の調査記録資料（写真・日誌等）をデジタル化して整理し､保存活用を図るための環境を整備した。

実施期間：平成 23 年６月７日～平成 24 年２月 28 日

整理資料：

・立会・試掘調査日誌等(平成 12 年度以前) 2599 件
・平城京発掘調査写真（35㎜） 86,187 枚

Ｂ 「ならまち資料」整理活用事業

「ならまち」に関連する未整理の考古資料について、展示公開・活用を可能にするための作業（資料の分類・計量・台帳作成・収納）などを行った。

実施期間：平成 23 年４月４日～平成 24 年２月 28 日

対象資料：平城京第 559 次調査資料　約 800 箱分

Ｃ　埋蔵文化財復元活用事業

多くの活用が見込まれる重要な埋蔵文化財資料を選別し、欠損部等を復元して今後の展示公開・保存活用の充実を図る。

実施期間：平成 24 年１月４日～平成 24 年３月 30 日

復元資料：

・小型陶棺１基（赤田横穴墓群７号墓出土）
・常滑甕１点（奈良町遺跡第２次調査出土）
・備前甕１点（平城京第 482 次調査出土）
・奈良火鉢１点（東大寺旧境内第５次調査出土）
・瓦質土器風炉１点（平城京第 424 次調査出土）
・青磁碗１点（平城京第 258 次調査出土）
・青磁碗２点（西大寺旧境内第 23 次調査出土）
・青花蓮池水禽文皿１点（元興寺旧境内第９次調査出土）
・伊万里染付大皿１点（平城京第 115 次調査出土）
・須恵器円面硯６点・杯１点・壷１点（平城京跡各所出土）
・緑釉陶器椀３点・蓋１点・香炉１点（平城京跡各所出土）
・灰釉多稜硯１点（平城京第 378 次調査出土）
・須恵器蹄脚硯・宝珠硯・円形硯各１点（平城京各所出土）
・灰釉陶器皿２点・段皿２点・椀２点（平城京跡各所出土）
・土師器皿５点・杯８点・椀３点・蓋１点・甕１点（平城京第 440 次調査出土）
・黒色土器鉢１点（平城京第 440 次調査出土）

第4章　　紀　要

大安寺垂木先瓦考

中井　公

あをによし奈良の都の大安寺、その創建の仏堂は、屋根軒裏にいたるまで、ど派手だったに相違ない。垂木の一枝一枝を、瑠璃の瓦で、咲く花の薫ふがごとくとばかり、賑わしく飾り立てたのだから。

この寺の創建瓦を思い浮べる時、忘れ難いひとつは、釉薬で花紋を描いて焼きあげた美しい二彩の、くだんの垂木先瓦だろう。従前、奈良文化財研究所・天理大学附属天理参考館・奈良市教育委員会の３者それぞれの所蔵資料が知られてきたが、これらに関わる著述を眺めていて、気にかかる事柄いくつかがあった。そこで、実際に資料調査しながら、そのあたりをまとめたのが小稿である。

１　大安寺垂木先瓦概観

では、これら主題の垂木先瓦を、概観することからはじめよう（図１・表１参照）。

地垂木用の円形垂木先瓦と、飛檐垂木用の方形垂木先瓦とがある。かつ方形のそれには、僅かに寸法が違う（大）・（小）の２種類がある。

「地円飛角」両者とも、素地は糸切りした粘土板。これを台上にのせ、両面の糸切り痕を丁寧に磨り消す。中には、片面もしくは両面に布目痕が残るものもある。台上に布を敷き、あるいは粘土板上面からも布をあて押圧したこともあったようだ。布目も同様に磨り消す。ある程度に乾燥したら裁断。円形・方形の素地を切り出す。円形のかたどりにはコンパスを、方形のそれには定規を用いたと推察されている（近江昌司 1985）。円形品の釘孔はおよそ正確に中心に穿たれているから、コンパスの中心痕を目印にしたとすると理解はしやすい。かたや方形品で、上下２箇所の釘孔の位置がほぼ正確にどれも同じであるのは、どうしてだろうか。一つひとつ定規で位置決めするというのは、いかにも煩雑だ。あるいは型紙使用も考慮の余地があるかも知れない。

この素地を一度素焼きした後、表面に釉薬をかけて施紋し、二度焼きすると完成である。円形・方形のものとも主紋は四弁花紋。前者は花紋を芯に、後者は長円を芯に、先端三葉形の花びら４枚を、緑釉で線太く筆書きする。ともに周縁も縁取り、前者周縁の弁間位置と、後者周縁４隅には内向花紋を配している。緑釉描線の間の地は、円形品が白釉、方形品が黄釉。両者とも周縁の緑釉は側面にも及ぶが、裏面は無釉。

ところで、旧境内地出土品には、釉薬をかけていない、すなわち素地を一度素焼きした状態のままのものもある。

さらに種別ごと、特徴を概観しておこう。

地垂木用円形品　従前の記述によると、奈良文化財研究所資料は径 15.5㎝、天理参考館資料のそれは 15.4 ～ 15.6㎝、奈良市教育委員会資料のそれは 16.2㎝とある。方形品に（大）・（小）があるのは周知のことであったから、それら面径の数値を見て、あるいは円形品にも径 16.2㎝ほどの（大）きなものと、径 15.5㎝前後の（小）さなものとがあるのではないかと、疑い期待した。だが実際に、中央の釘孔とともに外周 180 度以上が残る個体は３点だけで、径は各々 15.8・16.0・16.2㎝である。ほかは、釘孔と周縁が残る破片なら半径を測り、それを倍して復元径を求めることになる[1]。得られるそれは 15.3 ～ 16.7㎝で、ばらつきが大きい。中央に穿たれた釘孔の位置が、個体によって僅かにずれていることが原因である。前述のとおり、穿孔は素地をかたどった際のコンパスの中心痕を目印にしたようだが、手作業のことだ、周囲に多少ずれたりもするだろう。図１－３を実例にあげれば、釘孔中心から周縁までの半径 8.05 ～ 8.25㎝。仮に 8.05㎝を採って直径を復元すると 16.1㎝、8.25㎝だと 16.5㎝になる。釘孔中心が 0.1㎝ずれれば、その短半径が描く円と長半径が描く円との直径の差は、４倍の 0.4㎝になる勘定だ。以上要するに、現存資料に依拠した復元径から（大）・（小）の存否を見極めることは難しい。直径実測値が知れる３例をとっても、また同様である。

したがって、円形品は規格１種類。径 15.8 ～ 16.2㎝。厚さ 1.05 ～ 1.6㎝。中央に一辺 0.6 ～ 0.8㎝の方形釘孔を穿つ。施釉品と無釉品の両者があり、前者緑釉花紋の間の地には白釉を塗る。従前、花紋間の地が「淡い黄釉」だと表現された事例もあったが、白釉がやや濃く発色したもののようだ。方形品の黄釉とは明らかに色調が異なるからである。すなわち地色には、円形品が白釉、方形品が黄釉、という確かな区分があったとみたく、今後とも注意したいところ。

飛檐垂木用方形品（大）　縦 16.6 ～ 16.7㎝、横 13.3 ～ 13.4㎝、厚さ 1.2 ～ 1.5㎝。縦中軸線上の上下２箇所に一辺 0.7 ～ 0.8㎝の方形釘孔を穿つ。２孔とも残る

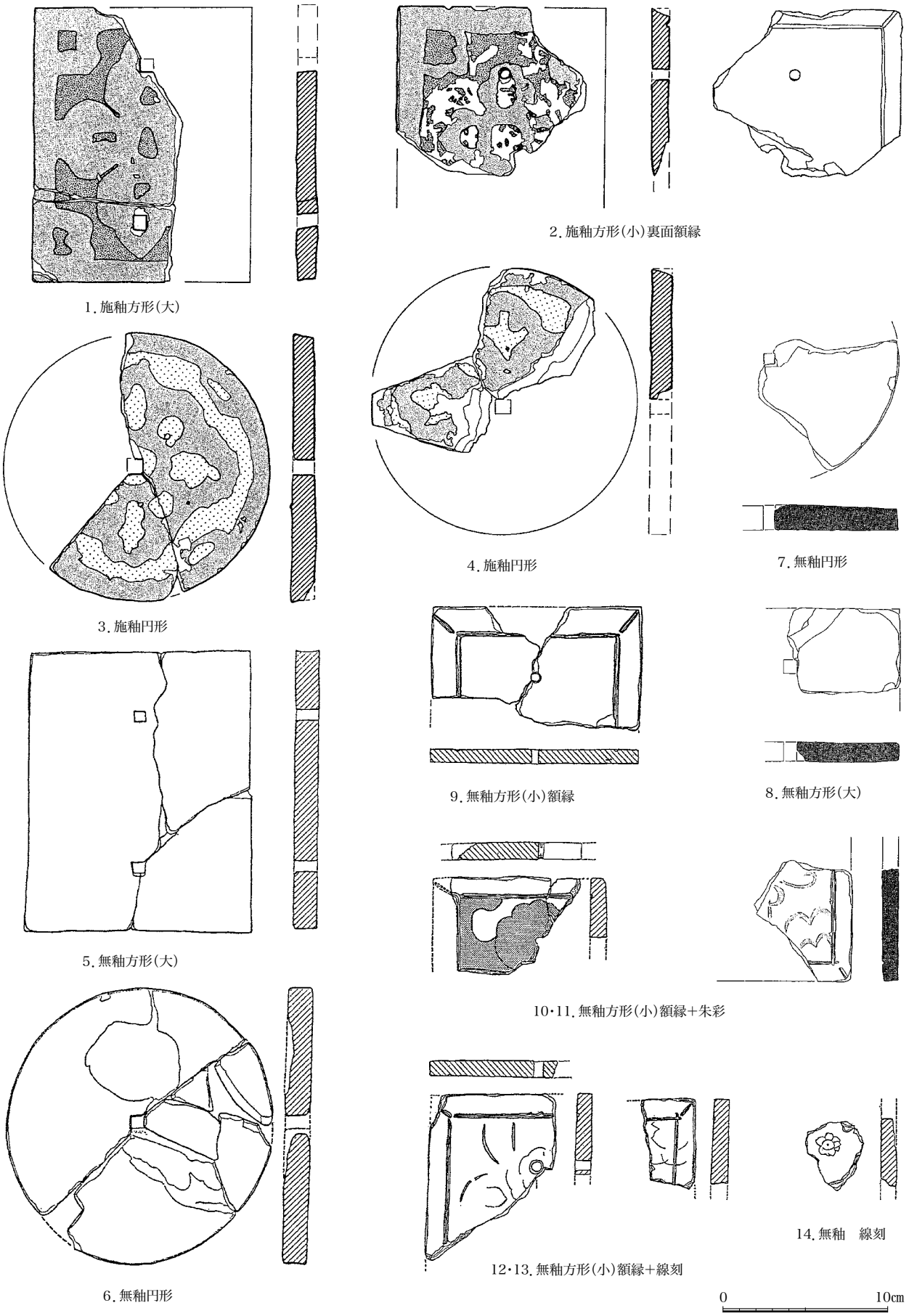


図1　大安寺出土垂木先瓦（1～4・7・8・11は奈良市教委、5・6・9・10・12～14は天理参考館所蔵資料）

個体は僅かに３点だが、うち２点は、１孔の位置が孔半分ほど軸線をずれた特徴が一致する。施釉品と無釉品の両者があり、後者は「両面のっぺらぼう」と表現すればぴったりだ。

飛檐垂木用方形品（小）　縦寸法不明、横 12.5 ～ 12.6㎝、厚さ 0.8 ～ 1.2㎝。同形（大）に比べ薄手である。方形(大)と同様、上下２箇所に釘孔を穿つ。ただし、円孔（径 0.55 ～ 0.65㎝）になっている点は対照的である。施釉品と無釉品とがあるが、後者の際だった特徴は、片面の周縁を一条の手彫り沈線で縁取る（周縁端から沈線までの幅 1.2 ～ 1.8㎝）こと。周縁端隅と沈線隅の間にも対角の沈線を加え、額縁さながらの体裁をつくっている。中には、額縁内のキャンバスに朱色顔料で花紋を、稀に線刻でそれを描いたものもある。となると、これら無釉品は額縁面が表面ということだ。ところが厄介なことに、額縁面の裏面に釉薬で施紋した例も僅少ある。紋様は同形（大）と同じ四弁花紋で、意匠・配色とも同様である。額縁面は無釉。こちらは逆に、施釉面が表面、額縁面が裏面ということになる。素地本来の表裏を替えて使った代物だろう。かたや、額縁表現がない普通の素地の施釉品が現存するのであるから。なお、額縁表現がない「両面のっぺらぼう」の無釉品（小）は見あたらない。

次いでこれらを、数量ともども、出土場所との関係で概観しておこう（図２参照）。

奈良文化財研究所所蔵資料　大安寺小学校の校舎建設に先立ち、昭和 41 年（1966）に講堂南面地区で行われた発掘調査での出土品。当該「調査概要」（八賀晋 1967）によると、主題の瓦を含む「遺物は、金堂と講堂の間に一面に堆積した焼土層の中から検出したものである。とくに講堂前には東西 8m、南北 3.5m、深さ 50 ㎝の土壙があり、このなかに遺物が充満していた。これらの遺物は延喜 11 年の講堂焼亡に関係し一括投棄されたものと考えられる。」由。垂木先瓦は、施釉品 27 点と、施釉の有無が判然としない剥離片（大小不明の方形品）1 点の、28 点である。うち９点に「灰層」と注記があるが、ほかは出土場所未注記。だが、「概要」記述から察して、

表１　大安寺出土垂木先瓦 一覧

所蔵機関	出土地点	遺構ほか	垂木先瓦種別	点数	共伴遺物	発掘調査次数ほか備考	文献
奈良市教育委員会	A 金堂北側	土坑 SK07	●	2 点	軒丸 6138E、6304D、7251 軒平 6712A・B 土師器（平安）	大安寺第 68 次調査 遺物包含層から唐三彩陶枕出土	原田ほか 1996
			■(大)	4 点			
			■(大小不明)	1 点			
		土坑 SK08	●	1 点			
		土坑 SK09	■（小／裏面額縁）	1 点	土師器（平安）		
		不明	■(大)	1 点			
	B 金堂北東隅あたり	不明	●	1 点		立会 1063（960110）	
	C 金堂東側	焼土層	●	2 点		大安寺第 69 次調査	安井 1997
		焼土層の下	●	1 点			
	F 東中房北列東側	遺物包含層	■（大）	1 点		大安寺第 70 次調査	宮崎ほか 1996
	G 杉山瓦窯	4 号窯灰原	○	1 点	軒丸 6138Cb、NM01、 軒平 6661B、6664A・F、6682B、6712A・B・C、6716C・F、6717A NH01、NH02、NH03 瓦器椀（12 世紀頃）	大安寺第 58・65 次調査	宮崎 1997
			□（大）	1 点			
			□（小／額縁）	1 点			
		遺物包含層	○	2 点			
			□（小／額縁＋朱彩）	1 点			
			□（小／額縁）	1 点			
奈良文化財研究所	D 講堂南側	焼土・灰層および土壙	●	8 点	軒丸 6091A・B、6137A、6138C・E、6284D、6304D、7251 軒平 6661B、6664A、6690A、6699A、6712A・B、6716C、6717A、6721I 土師器・黒色土器（平安）、須恵器（奈良）、唐三彩陶枕、施釉陶器（奈良・平安）	奈文研（昭和 41 年）調査	八賀 1967 山本 1984
			■（大）	1 点			
			■（小）	2 点			
			■（大小不明）	11 点			
			■ or □（大小不明）	1 点			
			● or ■不明	5 点			
	E 講堂南西隅外側		●	不明		奈文研・奈良県（昭和 38 年）調査	杉山 1963
			■	不明			
天理参考館	杉山古墳前方部付近か	不明	○	35 個体		採集品 □（小）には（額縁＋朱彩）or（額縁＋線刻）例もあり	近江 1985
			□（大）	2 個体			
			□（小／額縁）	数 10 個体			

記号凡例：●円形施釉品　○円形無釉品　■方形施釉品　□方形無釉品

おおかたは焼土層もしくは土坑からの出土品とみてよいのだろう。火災を受け施釉面が変色したものが大半で、そうした痕跡がない美品も少数ある。施釉品 27 点の種別内訳は、円形品が 7 点、方形品が（大）1 点・(小）2 点・(大小不明）11 点で、円形・方形の別が不明なもの 5 点である。

なおこのほか、昭和 38 年（1963）に奈良国立文化財研究所・奈良県教育委員会が実施した講堂地区の発掘調査でも施釉品が出土している。当該「調査概要」(杉山信三 1963）には、「出土遺物については、現在のところでは未整理であるため言及することを避けねばならないが、唯一つ、三彩釉の垂木瓦が講堂基壇南西隅の外側で検出されたことを、挙げておかねばならないだろう。この種の垂木瓦は、すでに西大寺の西塔跡に於いて発見しているが、今回発見した大安寺の破片はそれほど大きいものではなく、文様などは不明であるが、端を含んでいるから円形（地垂木）と方形（飛簷垂木）であったことはわかる。この垂木瓦が講堂に使ってあったとすれば、講堂の建築の質を想像することが出来よう。」と記述されている。探索にもかかわらず当該品は所在不明との由。そうと聞くと、講堂南面地区出土の前記 28 点のうち何ら注記がない 3 点があることが、気にかかる。ほか 25 点はみな遺物番号が書き込まれ一貫しているから、その点いよいよ異質の感が強い。しかも当該 3 点は、内訳が「それほど大きいものではなく、文様は不明であるが、端を含んでいる」円形品 2 点と方形品（小）1 点であるから、記述との辻褄をも満たしている。ひょっとすると、昭和 38 年調査のそれが紛れ込んでいるのかも知れない。行方不明が続く限り、その可能性は捨てきれない。

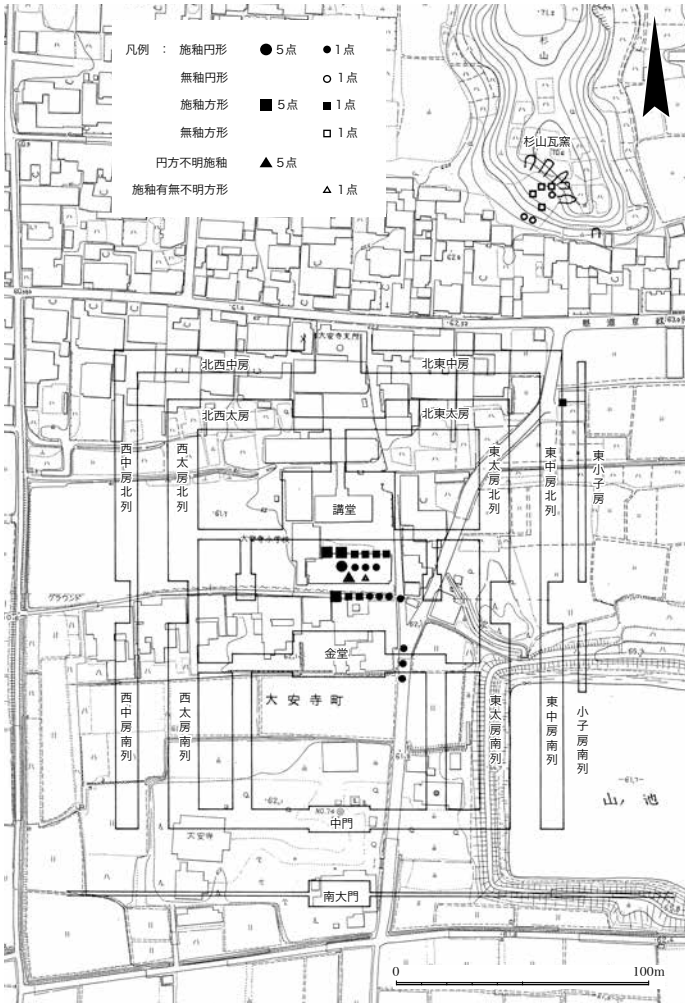


図２　大安寺旧境内での垂木先瓦の出土場所（1/3,000）

奈良市教育委員会所蔵資料　金堂北面地区出土品 14 点、東中房北列地区出土品 1 点、杉山瓦窯地区出土品 7 点がある。

金堂北面地区のものは、金堂・講堂間の東西市道および両堂東辺の南北市道に下水管を埋設する際の事前発掘調査（原田憲二郎・山前智敬ほか 1996、安井宣也 1997）出土品。この調査では、前記の講堂南面焼土層と同一とみられる焼土層が金堂北面まで広がる事実が判明した。焼土層の下には土坑がいくつかあり、主題の瓦は双方から出土。すべて施釉品で、円形品が 7 点、方形品が（大）5 点・(小）1 点・(大小不明）1 点である。方形（小）は裏面額縁である。なお、焼土層出土はうち円形品 2 点で、二次的に火を受け変色しているが、土坑出土品にはそうした形跡がない。

東中房北列地区の調査（宮崎正裕ほか 1996）で出土した 1 点は施釉方形品（大)。僧房地区ではほかに出土事例はない。もとは金堂か講堂の所用品だろう。

杉山瓦窯地区調査（宮崎正裕 1997）の出土品は、みな無釉品。金堂・講堂地区出土品が施釉品であるのとは対照的である。瓦窯 4 号窯の灰原から方形品（大）1 点・同（小）2 点が、瓦窯 1 ～ 5 号窯灰原を覆う遺物包含層から円形品 3 点･方形品（小）1 点が出土している。後者方形（小）は額縁＋朱彩紋様。ちなみに 4 号窯は、焚口と燃焼室の窯壁が部分的に調査されただけだが、半地下式有牀平窯だとみられる。燃焼室壁に軒平瓦 6712 Ａが使われ、隔壁粘土には瓦器片が混入。構築時期は 12 世紀中頃以降である。

天理参考館所蔵資料　前二者をはるかに上回る数量の資料群である。これを紹介した「近江昌司論文」(近江昌司 1985）の記述を借りると、円形品は「35 個体分を越える破片」､方形品は（大）が「完形になるもの 1 個と、半分の破片 1 個だけ」、(小）が「個体にして約数 10 個分とみられる」。注目すべきは全て無釉品であることで、この様相は前記の杉山瓦窯地区出土品のそれと共通す

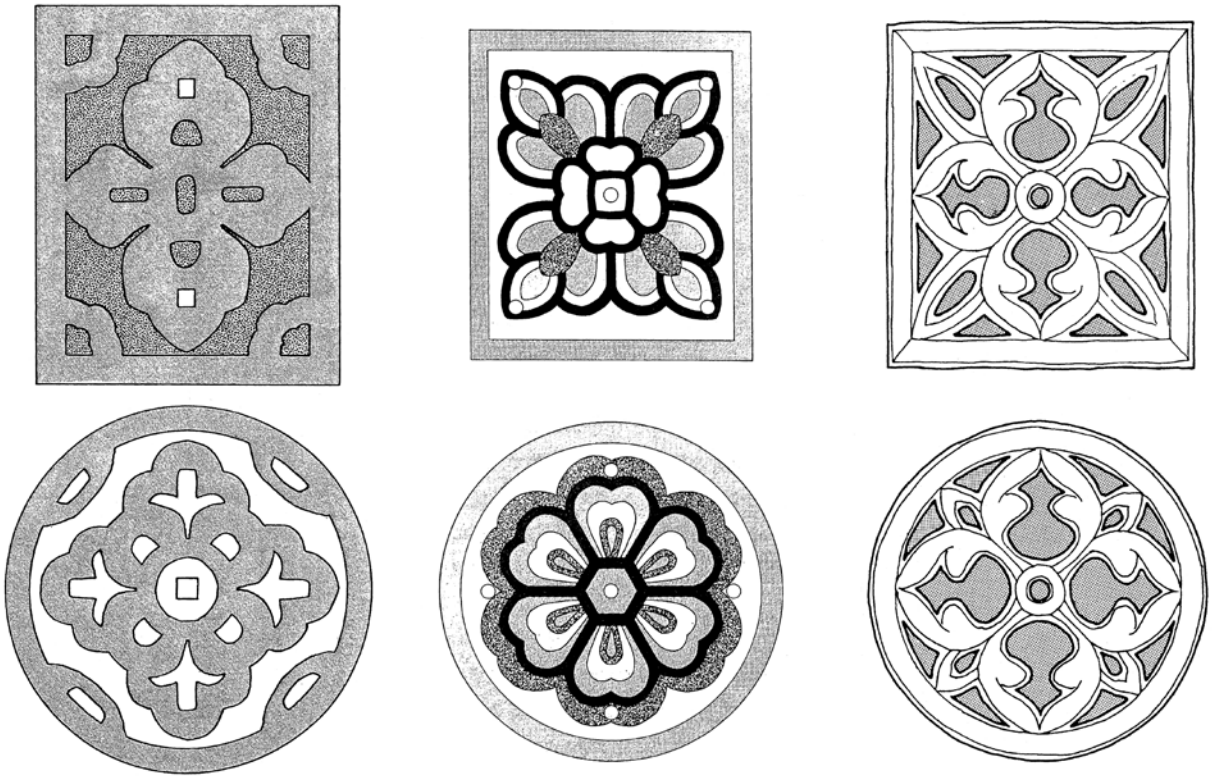
る。うち方形品（小）は破片の全隅数 34・全釘孔数 21 を数えるが、これらを含めみな片面額縁仕様。その多くには額縁内に朱色顔料で花紋が描かれている。紋様全体がわかるものはないが、隅に三葉形の内向花紋、あるいは中央に三葉形花弁 4 枚とみられる花紋の一部が確認できるから、施釉品のそれと共通する図柄のものもあったことがわかる。なお、焼成前に線刻で花紋を描いたもの 3 点があることは、すでに知られるとおり。

さて、これら一括の資料群は、かつては奈良市在住の古瓦蒐集家・山前陽氏のコレクションであった。蒐集の経緯につき前記同「論文」は、「山前氏の語るところを要約すると、奈良市大安寺町の農家Ａ氏宅に所蔵されていたものを請いうけたものである。また農家Ａ氏はむかし（年月未詳）大安寺の池の堤防を修築した際に発見し、拾得しておいたものである。」と説明している。結果、「大安寺の池」というのは金堂伽藍地区東側に所在する「芝池あるいは山ノ池と称する」溜池だろうと、近江氏は目星をつけた。だが小稿とりまとめにあたり、当該資料の出土地につき、ご子息（山前智敬氏－何の巡り合わせだろうか－わが同僚である）を通じてご当人の山前陽氏に伺った内容は、意外にも異なっていた。お父上の話では、「昭和 40 年代のはじめ頃、奈良市大安寺支所の北向いの並びの一軒で、住宅基礎工事の廃土の中に混じっているのを偶然見つけて、譲り受けた。」とのこと。「どの家か正確には覚えていない。」由だが、かつての大安寺支所の所在地といえば、北東中房西端と北西中房東端を確認した場所である。その北側だとなると、杉山古墳前方部西側の外堤もしくは周濠にあたるあたり。同じ手の無釉垂木先瓦が出土した杉山瓦窯地区にほど近いところだ。かかる事実に照らしても、出土地は僧房北方の古墳前方部付近だとみてよい。蛇足ながら、当該資料の大半には同質の土が付着している。数量の夥しさとこのことから察すると、もとは土坑に一括投棄されたものだったろうか。

天理参考館資料の出土地詮索をかかるとおりとして、以上、旧境内地で当該瓦は、施釉品が金堂・講堂地区でのみ、無釉品が杉山古墳前方部（の瓦窯地区）と近接地でのみ出土している実情を、はっきりと知ることができる。

表２　施釉垂木先瓦・垂木先金具　本文関係資料一覧

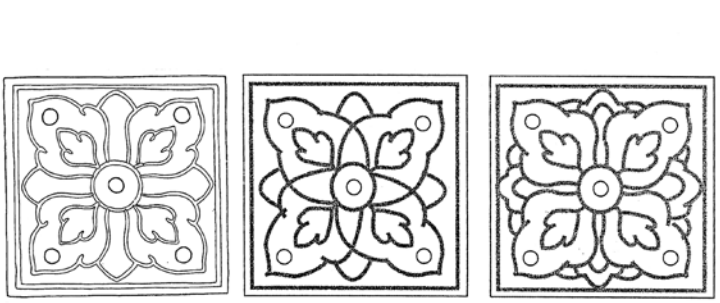
瓦・金具の別	出土地	形状		寸法（mm） 径	縦×横	厚	備考	文献
施釉垂木先瓦	大安寺	円形		158～162	－	10.5～16	二彩、金堂・講堂所用か	表 1 参照
		方形	（大）	－	166～167 ×133～134	12～15		
			（小）	－	不明 ×125～126	8～12		
	西大寺	円形		150	－	11	三彩、塔所用	小澤 1990
		方形		－	146×126	10		
	薬師寺	方形		－	157 ×117～123		緑釉	土肥ほか 1978 山崎 1987 薬師寺 2005
	平城京左京 8 条 1 坊 13・14 坪境小路南側溝	方形		－	不明	16	三彩、推定垂木先瓦（塼の可能性もあり）	小林 1990
	井手寺	方形		－	96× 96	8	紋様線刻＋三彩	内田 2004 茨木 2005
	掎鹿廃寺	方形		－	不明		片（施釉）面額縁	今 2003 今 2004
垂木先金具	薬師寺	円形	（大）	150	－	2～4	本屋根用	黒崎 1987
			（小）	100	－	2.5	裳階用	
		方形	（大）	－	150×135	3～4	本屋根用	
			（小）	－	120×105	3～4	裳階用	
	本薬師寺	円形	（小）	100	－		西塔裳階所用	千田ほか 1997
		方形	（小）	－	120×105		東塔裳階所用	花谷 1995
	法華寺阿弥陀浄土院	方形		－	112×110	0.6		井上ほか 2000
	興福寺	円形		145	－	2.3		加藤ほか 1999
				125	－	2.5		
金具（参考品）	興福寺	方形		－	150×150	2	垂木先には大きいか	次山 2002
				－	170×170	2		



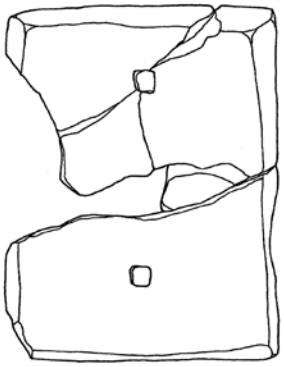
1.大安寺　施釉垂木先瓦
（復元図）

2.西大寺　施釉垂木先瓦
（復元図）

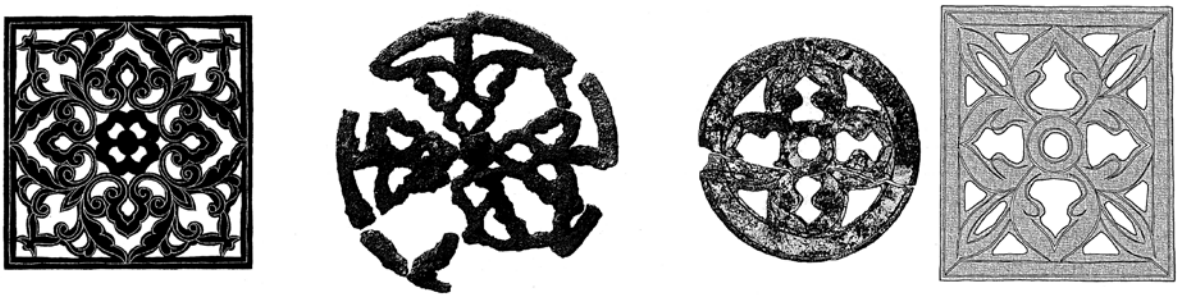
5.薬師寺　垂木先金具
（本屋根用／復元図）



4.井手寺　施釉垂木先瓦
（復元図）



3.薬師寺　施釉垂木先瓦



7.法華寺阿弥陀浄土院
垂木先金具（復元図）

8.興福寺　垂木先金具

6.本薬師寺　垂木先金具
（裳階用／方形は復元図）

0　10cm

図３　施釉垂木先瓦・金銅垂木先金具（本文関係資料）

2　京内寺院の施釉垂木先瓦と垂木先金具

大安寺のほか平城京内の寺院では、西大寺・薬師寺からも施釉垂木先瓦が出土している。相互の比較検討のために、次にこれらを概観しておこう（図３・表２参照）。

西大寺／施釉垂木先瓦　地垂木用の円形垂木先瓦と、飛檐垂木用の方形垂木先瓦の両者がある（小澤毅 1990）。

円形品は、４種の釉薬（濃淡２種の緑釉および褐釉と白釉）を塗り分けて、六弁花紋を描いたもの。外周の対称位置４箇所と中心の計５箇所に、小さな円形の釘孔を穿つ。大安寺のそれが中心のみ大きな角孔１箇所であるのとは対照的である。復元径 15.0㎝。

方形品は、同じ釉薬４種を用いて、花紋を芯に、三葉形の花びらを対角線方向にあしらった、四弁花紋を描いたもの。中心と対角線上４隅の、計５箇所に小さな円形釘孔を穿ち、円形品と同様の体裁を採る。これも、大安寺のそれが上下２箇所であることと、際立った違いである。復元高 14.6㎝・復元幅 12.4㎝。

前者 29 点・後者 38 点・形状不明 29 点がある。東西両塔の近辺から集中的に出土し、他の区域での分布は稀薄との由。五重双塔の地円飛角の二軒先を飾った優品である。

薬師寺／施釉垂木先瓦　無紋方形品のみある（土肥孝・安田龍太郎 1978、山崎信二 1987、薬師寺 2005）。表面の周縁沿いを面取り、全面に緑釉をかけている（ただし裏面の施釉はうすい）。上下２箇所に方形の釘孔を穿つが、中心線をずれたり、上下端縁との間隔に狭広があったりで、位置のばらつきが目立つ。穿孔も素地の角がつぶれるなど、仕事は概して粗い。縦 15.7㎝・横 11.7 ～ 12.3㎝。

食堂後方の十字廊の基壇に掘り込まれた中世の土坑から 29 点が出土。後述するが、西塔・金堂・講堂では金銅製の垂木先金具が使用されたので、本例は食堂あたりの所用品か。ところで、方形品がある一方、同仕様の円形品はみあたらない。ちなみに「造金堂所解」から知られる法華寺金堂は、飛檐垂木先にのみ施釉瓦を用い、地垂木先を緑青塗りとしたようだ。薬師寺食堂級の建物だとなると、一軒角垂木は考えにくいから、同様の体裁だったのかも知れないが、それとも地角飛角か。

平城京右京８条１坊／施釉垂木先瓦　ところで、平城右京８条１坊 13・14 坪の坪境小路の南側溝から、方形垂木先瓦とみられる三彩品が出土している（小林謙一 1990）。とりあえず挙げておくとしよう（薄手の塼である可能性は排除しきれない）。一辺が残る小片で、表面と側面に施釉していることがわかる。厚さ 1.6㎝。本来の使用場所不明だが、11・13・14 坪一帯には金属・ガラス・漆・皮革などの工房が集中しており、あるいは製作品だったのかも知れない。

井手寺／施釉垂木先瓦　京外の事例だが、京都府綴喜郡井手町所在の井手寺跡から方形品 26 点が出土している（内田真雄 2004、茨木敏仁 2005）。さすが井手左大臣・橘諸兄の建立と伝わる寺院ならではのものだろうか。沈線一条で周縁を縁取った中に、対角線方向の三葉形花弁に間弁を添えた、四弁花紋を手彫り線描し、緑釉・褐釉で着色した逸品である（あるいは白釉を加えた三彩かもか知れないが）。おまけに裏面にまで全面に白釉をかける入念さだが、何故だろうか。紋様は、全体が推定復元できる３種と、それが困難な２種の、少なくとも５種類が知られる。前者３種は、四弁花紋の基本形がほぼ同じで、間弁の表現が異なる。かつ同紋品にも、細部の線描表現に多少の違いがみられる。型紙をなぞってつけたアタリ線を手彫りしたことで生じた変化だろう。そこまで手間かけながら釉薬の塗り分けが雑なのは惜しいが、ともかくも、筆で直接紋様を描く大安寺・西大寺例よりも一段手が込んでいる。中心と４隅の計５箇所に円形釘孔を開けるのは、西大寺例と同じ。（参考まで、法華寺金堂の施釉飛檐垂木先瓦は、「造金堂所解」によると 1,672 本の釘が調達されているから、１枚につき釘４本〔すなわち瓦 418 枚〕だとみられる。これも恐らく４隅に釘孔を穿ったものであったろう。）復元高・復元幅とも 9.6㎝。正方形はあるいは、木負から先の下面を反り上げた、飛檐垂木の木口の形状を反映したものかも知れない。ところで、9.6㎝幅というのは、大安寺・薬師寺・西大寺例に比べ１寸前後も、さらに後述薬師寺裳階の垂木先金具のそれより３分ほど小さい勘定だ。垂木そのものの規格差ならば、建物は相応格下ということだろうか。

椅鹿（はしか）廃寺／施釉垂木先瓦　さらに遠く、兵庫県加東郡東条町椅鹿谷の山間に所在する椅鹿廃寺で、方形品４点の出土が知られる（今芳也 2003、今芳也 2004）。（ちなみに、同地は『播磨国風土記』所載の「賀毛郡端鹿里」にあたり、当該寺院は、出土軒瓦からすると、７世紀後半の創建かとみられる。）沈線一条による額縁状周縁の表現のほか、紋様らしき痕跡をうかがうことはできない。表面には一部わずかに緑釉が残存。ただし、異なる釉薬を塗り分けて紋様が描かれていた可能性は排除できず、単彩・多彩の別および紋様の有無とも判然としない、とするのが現状では穏当か。４隅に円形釘孔を穿つが、中

心の釘孔の有無は不明。かつ全形を復元し得る確実な手がかりを欠き、正方形・長方形の別と寸法も不明。なお胎土精良で、上述諸特徴と併せ、当該品は平城京出土品と見まがうばかり。都から運ばれた公算大とみたいところだ。

ところで、垂木の先端を飾ったのは施釉瓦だけではない。『正倉院文書』に残る法華寺あるいは石山寺などの造営関係資料をみると、当時の造東大寺司では、普通のタルキには「架」の文字を、地隅木・飛檐隅木・尾垂木など大柄のタルキ類には「垂木」の文字をあて、両者を書き分け訓み分けていたらしいと、福山敏男氏はいう（福山敏男 1986）。さすれば、『興福寺流記（山階流記）』が引く「天平流記」・「宝字記」・「延暦記」の次の内容は、興福寺創建伽藍の少なくとも南大門・中門・講堂の普通のタルキの先すべてに、金メッキ銅製の飾り金具が付けられていたことを伝えるものだろう。すなわち、南大門に「加端。皆用裁金銅云云。（宝字記）」と、中門に「架端皆用金泥裁銅。（宝字記・延暦記）」と、講堂に「架端皆用金塗裁銅。（天平流記）」との解説が付されている。事実、興福寺では実例も出土。ほか薬師寺・法華寺阿弥陀浄土院でも出土品が知られる。金具の方が軽量かつ耐久性に優れていたのだろうか。あるいは調達が比較的容易だったのかも知れない。それとも、デザイナーの嗜好によるものか。いずれにせよ、京内寺院出土の垂木先金具の実例も概観して、あわせて参考にしよう（図３・表２参照）。

薬師寺／金銅垂木先金具　平城京薬師寺では７種（合計 10 数点）の垂木先金具が従前知られている（黒崎直 1987）。地垂木用円形のものと飛檐垂木用方形のものがあり、両者それぞれに寸法が異なる（大）・（小）の２種がある。紋様はみな、四弁の対葉花紋と弁間に蕾形を透し彫りした同意匠のもの。ただし、花紋細部の変化（や毛彫りの輪郭線の有無）で、各々Ａ・Ｂ・Ｃの３種に分類することが可能なようである。実物が確認できるのは、方形（大）Ａ・Ｂ・Ｃ、方形（小）Ａ、円形（大）Ａ・Ｃ、円形（小）Ｂの７種だが、これからみると、両形ともに、少なくとも（大）３種・（小）３種の計６種があったものと推察できる。寸法は、円形（大）が径 15㎝、同（小）が径 10㎝、方形（大）が縦 15㎝・横 13.5㎝、同（小）が縦 12㎝・横 10.5㎝。

西塔跡・金堂跡・講堂跡から出土しており、（大）は本屋根用、（小）は裳階用とみて相違ない。最も紋様の整ったＡが創建当初使用のものだろう。Ｂ・Ｃは再建時ないし補修時にＡを模倣して製作されたものとの見方もあるが、その時期ともどもはっきりとしない。

さて、保延６年（1140）に南都を訪れた大江親通は『七大寺巡礼私記』に、薬師寺金堂の軒回りの様相を「花榱□桷皆餝金鐺」と書き留めている。「花榱□桷」は通常の垂木を含まない表現の公算大かも知れないが、とにもかくにも親通は、厳存したそれを目の当りにしたはずではある。

本薬師寺／金銅垂木先金具　藤原京本薬師寺でも、平城京薬師寺のものと同意匠の垂木先金具が使われた。東塔跡から飛檐垂木用方形のもの（花谷浩 1995）、西塔跡から地垂木用円形のもの（千田剛道ほか 1997）各１点が出土している。前者は、寸法縦 12㎝・横 10.5㎝に復元でき、方形（小）に分類できる。紋様は平城京薬師寺Ａ（創建当初品）と酷似する。ただし従前知られるものとは、対葉花内の透しの形状や毛彫りの輪郭線表現などに微妙な違いがあるようだ。後者は、径 10㎝で円形（小）に分類できるが、かたや対葉花紋間の蕾形の表現を欠いている。こちらは、少なくともＡより一段退化したものだ。蕾の欠落に限れば同様にＢ・Ｃより後出品とみることも可能かも知れないが、他方、対葉花内の透かしがスペード形を保ち、かつ毛彫りの輪郭線表現が割に整っていることなど、それと単純比較してよいものか、躊躇する側面もある。

ところで、後世（11 ～ 14 世紀）に撰述・書写された『薬師寺縁起』のいくつかは、『流記資財帳』に「宝塔四基、二口在本寺」とある旨を伝えている。となると、４基共通して同意匠の金具が踏襲ないし採用されたということだ。ただ、紋様退化の進んだものが本薬師寺から出土するのは、どうしたことか。後補品ゆえの結末だろうか。あるいは、本薬師寺西塔の建立時期をめぐって、それが平城京薬師寺造営後にまで降る可能性を取りざたする議論も別途ある（花谷浩 1997 ａ）。かかる可能性と相俟って、興味そそられるところでもある。

法華寺阿弥陀浄土院／金銅垂木先金具　院内の石敷園池の池底から方形品１点が出土（井上和人ほか 2000）。四葉花紋を芯に、四弁の対葉花紋と、弁間に蕾形と蕨手唐草紋を透し彫りし、複雑な文様輪郭線を毛彫りで強調表現した優品である。寸法 11.2㎝ ×11.0㎝で、ほぼ正方形。あるいは、木負から先の下面を反り上げた、飛檐垂木の木口の形状を反映したものだろうか。

興福寺／銅製垂木先金具ほか　地垂木用円形のもの２種類が知られる（加藤真二・次山淳 1999）。ひとつは、花文先端と縁部が残るのみで全体不明だが、部分的特徴が薬師寺出土のそれと似た雰囲気をもつもの。創建ある

いはそれに近い時期のものかも知れない。復元径 14.5 ㎝というから、薬師寺円形（大）の 15㎝とほぼ同寸とみてよい。いまひとつは、釘孔を中心に四弁の対葉花紋と棒状間弁を透かし彫りしたもの。薬師寺例のような輪郭線の毛彫り表現がなく、紋様自体も線が細い。径 12.5㎝で、前者よりかなり小振り。紋様表現の特徴や出土した層位から、11 ～ 12 世紀頃の製品とみられる由。ともに中門地区から出土。このほか中金堂前面でも、地垂木用円形品の縁部の小片が出土している（次山淳 2000）。

ところで、中金堂東側と北面廻廊北側の取り付き部付近の土坑から、方形の「銅製飾金具」が出土。参考まで一瞥しておこう。銅板に花紋を透かし彫りしたもので、紋様と寸法を異にする２種類がある。ひとつは、内向する三葉花紋を上下左右に配したもので、寸法一辺 17 ㎝。いまひとつは、中心から対角線上に外向する同紋を配し、一辺 15㎝ある。両者とも、隅の透かし部分に釘を打ち、部材に留めていたようだ。さて、前者 17㎝角という寸法は、仮に中金堂級の建物でその使用部位を推察するとなると、普通の（飛檐）垂木先とみるには大きい感がするし、さりとて尾垂木先には小さすぎる。普通の垂木の事例では、落下痕跡から知られる藤原京大官大寺金堂のそれが方約 15cm あり[2]（奈良国立文化財研究所 1975）、最大級の部類だろう。さすれば、後者 15cm の金具はあるいは通常の垂木先用かと思えなくもないが、17cm となるとどうも過大だ。両者を掲載した「発掘調査概報」（次山淳 2002）が、当該品を「銅製飾金具」と呼び、使用部位への言及を留保しているのは、かかる事情によるものだろうか。ともかくも、気にかかる代物ではある。

３　施釉品使用堂宇の想定

小稿冒頭に記した「気にかかる事柄」の具体的中身のひとつは、それら大安寺の施釉垂木先瓦がはたして、どの堂宇の荘厳品であったのかということだ。

従前、奈良文化財研究所所蔵資料は、これらが講堂南面地区に広がる焼土層から出土したことから、講堂の軒先を飾ったものだと考えられてきた。しかしながら、焼土層の広がりは金堂北面に及ぶようであるし、同地区でも同じ手の瓦が出土する。したがって、その全てが講堂所用品だと俄かに断じることは、困難になったとみるべきだろう。加えて飛檐垂木用方形品には、（大）・（小）２種がある。はたして、全てが同じひとつの建物の所用品なのか、との疑問もわく。使用場所の候補は、新たに金堂を加えて、2 棟だとみるべきだ。蛇足ながら、南大門・中門・回廊・塔の地区では、当該瓦の出土は皆無である。例外は東中房北列地区から出土した１点だが、もとは金堂か講堂のものであったろう。僧房で使用された形跡もまた、ない。

つまるところ、金堂と講堂とに絞られるわけだが、さて、どちらか１棟だけのものなのだろうか。あるいは、両棟のものが混在しているのかも知れない。そこで、そのあたりの手がかりを追求してみよう。

金堂はまったく未発掘、講堂も基壇延石の一部が確認されている（杉山信三 1963、森下恵介 1982）だけで、両者とも発掘遺構から建物規模・構造を知る手がかりはない。だが、金堂は、『資財帳』〔天平 19 年（747）〕に長 11 丈８尺・広６丈とあり、「官宣旨案」〔寛治元年（1094）〕や『七大寺巡礼私記』〔保延６年（1140）〕に５間４面とあるので、桁行７間・梁間４間の建物だったことがわかる。平面寸法からみて、裳階がつく余地はない。単層との見方（大岡實 1966）と、筆頭官大寺の金堂であるから重層との見方（岡田英男 1984）とがある。

かたや講堂は、『資財帳』によると長 14 丈６尺・広９丈２尺。『巡礼私記』は５間４面とするが、「官宣旨案」は７間４面とする。平面寸法からは桁行９間・梁間６間の建物とみるのが適当のようで、７間４面の周囲に裳階を想定する考え（大岡實 1966）と、5×2 間の身舎に廂を２重にまわしたとみる考え（岡田英男 1984）がある。建物の性格上、単層だろうが、裳階つきであった可能性も考慮できるというわけだ。

となると、これらに照らして、飛檐垂木用方形品（大）・（小）２種の使用場所につき、いくつかの想定が可能にはなる。目ぼしいところを挙げながら、検討してみよう。

第１案　重層金堂の、下層用が（大）、上層用が（小）とみるのはどうだろうか。

古代の重層金堂の現存遺構となると、法隆寺金堂しかないので、これを参考にしよう。垂木は角垂木一軒である。下層の垂木は平均寸法が、丈 4.86 寸（14.73㎝）・幅４寸（12.12㎝）強。上層のそれは、丈 4.83 寸（14.63㎝）・幅 3.89 寸（11.79㎝）である。その評価や、「上重の垂木は初重よりごくわずか細いとされるが、差は仕事斑の範囲を出ず、当初材のみみると初重と差はないようでもあり、有意的な差かどうかわからない」（澤村仁 1981）由。また、仏殿ではないが、薬師寺東塔（垂木は地円飛角）の場合、地垂木は、初層本屋根と二層本屋根は同じく径５寸（15.15㎝）、裳階は各層ともに径３寸（9.09㎝）である（木岡敬雄ほか 1984、三層本屋根はデータを欠く）。

表３　そのほかの主要垂木先瓦一覧

出土地		形状	区分	紋様	寸法（mm） 径	縦×横	備考	文献
大和	飛鳥寺	円形	Ⅰ	素９蓮華紋	146	-	河内新堂廃寺Ｒ群と同笵	花谷 1997 b
			Ⅱ	素６蓮華紋	118	-	彩色例あり	花谷 2000 a
			Ⅳ	単８蓮華紋	125	-	弁央に凸線	花谷 2000 b
			Ⅴ	素８蓮華紋	150	-	古宮遺跡Ａと同笵、末ノ奥窯産	花谷 2005
			Ⅵ	単８蓮華紋	167	-	山田寺Ａと同笵	
			Ⅶ	単８？蓮華紋	復元 122	-	山田寺式（山田寺とは異笵）	
	平吉遺跡（豊浦寺）	円形		素８？蓮華紋（船橋廃寺式）	不明	-	古宮遺跡Ｃと同笵？、末ノ奥窯産？	花谷 2005
	古宮遺跡	円形	Ａ	素８？蓮華紋（船橋廃寺式）	復元 150	-	飛鳥寺Ｖと同笵、末ノ奥窯産、雷丘東方 or 北方遺跡から同笵例出土	花谷 2000 b 花谷 2005
			Ｂ		復元 160	-	中房８角形？、末ノ奥窯産？	小澤ほか 2000
			Ｃ		不明	-	平吉遺跡例と同笵？、末ノ奥窯産？	
	坂田寺	円形	ⅠＡ	素８蓮華紋	復元 130	-	Ⅰ型式は間弁が楔形	花谷 2005 奈文研 1991
			ⅠＢ		復元 120	-		
			ⅠＣ		復元 120	-		
			ⅠＤ		復元 130	-		
			ⅠＥ		復元 120	-		
			ⅡＡ		復元 130	-	Ⅱ型式は間弁が長く中房に届く	
			ⅡＢ		復元 120	-		
			ⅡＣ		復元 120	-		
	山田寺	円形	Ａ	単８蓮華紋（山田寺式）	167	-	金堂所用、彩色例あり	花谷 2005 伊藤 2002
			Ｂ		156	-	塔所用	
			Ｃ		142	-	塔・（講堂？）所用、彩色例あり	
			Ｄ		139	-	中門・回廊所用、彩色例あり（＊出土回廊垂木の径は 110 ～ 165）	
			Ｅ		176	-	金堂所用、彩色例あり	
	檜隈寺	円形	Ａ	単８蓮華紋	143 ～ 148	-	金堂所用、彩色？例あり	花谷 2005
			Ｂ	複８蓮華紋	146	-	金堂所用、檜隈寺軒丸瓦ⅡＣと同笵	奈文研 1980 奈文研 1981a
	粟原寺	円形		複８蓮華紋	87	-		奈良博 1970
	大官大寺	円形		単８蓮華紋（山田寺式）	128	-	伝膳夫寺出土軒丸瓦と同笵？、外縁Ｋ	花谷 2005 奈文研 1981b
	楢池廃寺	方形	単圏	宝相華紋	-	122× 97		近江 1962
			重圏		-	123×111		
				単８蓮華紋	-	117×108		
	只塚廃寺	円形		複８蓮華紋	119	-	外縁ＬＶ	橿考研 2003
	居伝瓜山瓦窯	円形		単４蓮華紋	137	-	外縁Ｓ、供給先不明	橿考研 1997
		方形		単４蓮華紋	-	120×109		
山背	広隆寺	円形		素８？蓮華紋	復元 145	-		石田 1936
	法琳寺	方形		結紐紋	-	約 130× 約 116	３者同笵（＊小栗栖瓦窯＝天神山瓦窯）	京文研 1996
	小栗栖瓦窯	方形		結紐紋	-	約 130× 約 116		木村ほか 1989
	岡本廃寺	方形		結紐紋	-			杉本ほか 1987
近江	大東廃寺	円形		単８蓮華紋		-	軒丸瓦当の中房に円孔を穿つ（＊垂木先？）	石田 1938
	長束廃寺	円形		複８？蓮華紋	復元 102	-	外縁ＭＶ	西田 1984
河内	新堂廃寺	円形	Ｒ群	素９蓮華紋	137 ～ 140	-	大和飛鳥寺Ⅰと同笵	粟田ほか 2003
			Ｓ群	素８蓮華紋	125	-		
			Ｔ群	素８蓮華紋	127	-		
			Ｕ群	単 12 蓮華紋	126	-		
			ⅠＣ 04	素？蓮華紋？	不明	-		大阪府教委 2001
		楕円形	Ｗ群	単 10 蓮華紋	168×125	-		粟田ほか 2003
下総	結城廃寺	方形		素８蓮華紋	-	一辺 132	外縁Ｓ	瓦吹ほか 1994
尾張	勝川廃寺	円形		重圏紋？	復元 60	-	重圏は中心から放射状８？単位分割、（＊小径にすぎ垂木先？）	春日井市教委 1984
美濃	大隆寺廃寺	方形		複８？蓮華紋	-	復元一辺 136	４隅に３葉パルメット紋を配置	奈良博 1970
讃岐	妙音寺	方形		単８蓮華紋	-	一辺 148		高松市歴史資料館 1996
		八角形		単８蓮華紋	復元 116	-		
伊予	法安寺	円形		複８蓮華紋	131	-	法隆寺式軒丸の内区に焼成後円孔を穿つ、（＊垂木先？）	石田 1936
筑後	上岩田廃寺	円形	大	単８蓮華紋	155	-		宮田 2000
			小		121 ～ 124	-		
		方形		単４蓮華紋	-	一辺 119 前後		

事例僅少ながら敷衍して、上下層の垂木寸法に大差なしとみたいところだ。加えて、（大）・（小）は、紋様共通だが釘孔形状を異にし、統一性を欠く。厚さをとっても、方形（小）は同（大）より薄い。製作時期が前後したからではなかろうか。ともに、同一建物での使用を想定するのには、不利な要素とすべきだろう。

第２案　裳階つき講堂の、本屋根用が（大）、裳階用が（小）とみるのはどうだろうか。

同時代の裳階つき建物の現存遺構は、薬師寺東塔だけだ。上記のとおり、本屋根と裳階の地垂木径の寸法比は5：3。かかる寸法差は、西塔跡・金堂跡・講堂跡から出土した垂木先金具をみても、およそ同様の傾向を示す。すなわち、本屋根用円形金具の径 15㎝に対し、裳階用のそれは 10㎝。本屋根用方形金具の縦横寸法 15×13.5㎝に対し、裳階用のそれ 12×10.05㎝である。

かたや大安寺方形品（大）：（小）の縦横寸法比は16.7×13.4㎝：縦寸不明 ×12.5㎝であるから、双方の差はいわば僅かだ。しかも円形品に寸法差はないから、薬師寺例を指標にするなら、大安寺の（大）・（小）を同様に同一建物の本屋根と裳階の関係で捉えてみることにも、ためらいを感じる。なお蛇足ながら、仕様に不統一があることが同じ建物の所用品だと考えるのには不利なこと、第１案とまた同様である。

第３案　金堂所用品が（大）、講堂所用品が（小）とみるのはどうだろうか。

実のところ、これが一番無難な考え方だろう。参考とすべきは、山田寺での堂塔ごとの明確な使い分けである（伊藤敬太郎 2002、表３参照）。同寺の垂木先瓦は、創建「山田寺式軒丸瓦」と同紋の単弁８弁蓮華紋を飾る円形品。笵型が異なるＡ・Ｂ・Ｃａ・Ｃｂ・Ｄ・Ｅの６種類がある（Ｃａ→Ｃｂは同笵彫り直しの関係）。金堂周辺にはＡ・Ｅ種が、塔周辺にはＢ・Ｃａ・Ｃｂ種が、回廊周辺にはＤ種が集中しており、各堂塔での所用品が特定できる。製作の新旧関係はＡ→Ｂ・Ｄ・Ｅ→Ｃａ・Ｃｂであることが明らかで、Ａ種およびＢ・Ｄ・Ｅ種が石川麻呂造営期、Ｃａ・Ｃｂが天武朝造営期の製品だとみられている。講堂と中門は遺構の削平がひどく、出土分布から所用品を特定できないようだが、中門は回廊と一連の建物なので同じＤ種が、講堂は『上宮聖徳法王帝説』裏書によると天武朝の造営であるからＣａ・Ｃｂ種が候補とされる。すなわち、最も面径が大きいＥ種（17.6㎝）とＡ種（16.7㎝）が金堂で、次いでひと回り小さいＢ種（15.6㎝）とＣ種（14.2㎝）が塔で使用されていた。講堂所用品も同じＣ種だから、ひと回り小さい。中門・回廊のそれは、さらにひと回り小さなＤ種（13.9㎝）である。つまり然るべきことだろうが、かかる事実は、建物ごとの用材規格差の反映でもあるはずだ。ただし、回廊所用のＤ種（13.9㎝）に対し、出土した回廊垂木の径は 11.6 ～ 16.5㎝と、実際にはバラつきがある（島田敏男 1995）のも事実ではある。平城宮朱雀門や大極殿の再建建物の部材を精密加工している今日とは違い、当時は大らかだったのかも知れないが、垂木先瓦の規格差が堂塔の格を映し出す鏡であることに、大筋間違いはないだろう。

このようにみると、やはり、（大）きな方は格式高い金堂にこそふさわしい。幾分か仕様が違い、あるいは製作時期も多少違うかも知れない（小）さなそれは、格式下の講堂に用いられたとみたいところだ。いかがだろうか。

それでも、「両者交えて葺かれたかも知れない」と、異を立てる人はいるだろう。だがしかし、例えば法華寺金堂の新築にあたっては、垂木の本数にあわせて施釉垂木先瓦を調製し、その釘孔の合計数にあわせて留め釘を調製しているのだ（「造金堂所解」）。釘の寸法や形状の仕様だって、事前に決められていたに相違ない。くだんの意見あれば、かかる周到さを引合いに、反論を試みるとしよう。

ただ、第３案を採るとなると、いま少しく検討しておかなければならない事柄がある。これら施釉垂木先瓦を包含する講堂南面地区の焼土層を、発掘調査者の八賀晋氏が「延喜 11 年（911）の大安寺講堂焼亡によるものであろう」とみなしたこと（八賀晋 1967）に関してである。延喜 11 年の焼亡とは、『一代要記』（13 世紀後半成立）の「大安寺講堂、三面坊百二十五間焼く」の記述によるものだ。前述のとおり、この焼土層には方形品（大）・（小）が混在している。金堂の所用品だとみたい（大）も含まれているのだから、それでは不具合が生じることになる。すると、この折に金堂もともに罹災したのだろうか。しかしながら、はじめての金堂焼失は寛仁元年（1017）のことであったらしく、この時の大火災では講堂も焼けている（『巡礼私記』が引く「或記」・『御堂関白記』・『日本紀略』・『扶桑略記』など）。

当該焼土層の延喜 11 年説について、太田博太郎氏は次のようにみている。すなわち、「その根拠は示されていないが、おそらく遺物の年代が延喜より新しいものは含まれていないという判断からであろうが、つぎの寛仁年間の火災に講堂が焼けたことには言及しておらず、遺物の年代も延喜以後のものはないとも言っていないので、これだけでは延喜の火災が確認されたとはいえない。

寛仁に講堂が焼けたとする『巡礼私記』の「或記」の記載が正しければ、延喜から寛仁までの百年間に再建されたことになるが、再建に関する史料はなく、焼土層も二重になっていないから、延喜に焼けて再建されなかったか、延喜には焼けないで寛仁に焼けたかのいずれかであろう。」との由（太田博太郎 1977）。

そのいずれかを決する手がかりは、やはり出土遺物をおいてほかにない。焼土層の出土品につき「調査概要」（八賀晋 1967）には、垂木先瓦と陶枕を除き、詳述がない。わけても時期決定の有力手がかりになる土器類の様相の報告が待たれたが、後に巽淳一郎氏が『大安寺史・史料』でこれを公表したのだった（巽淳一郎 1984）。すなわち、「講堂南面地域の調査では、延喜 11 年（911）の講堂の焼亡によると考えられる焼土・灰層を確認した。これらの層からは、大量の瓦塼類・神功開宝・海獣葡萄鏡・ガラス片とともに土師器・黒色土器・須恵器・施釉陶器（灰釉・緑釉・二彩・三彩・青磁）等の容器類と施釉した陶枕が出土し」ている。「土器容器類は、いずれも小片で少量しか出土していない」が、土師器皿・土釜、「内外面とも黒色処理した」黒色土器椀、須恵器甕、灰釉陶器高台付皿・段皿・椀、二彩三彩陶器短頸壷・瓶、緑釉陶器椀・輪花椀・壷、中国越州産青磁椀がある。また、灰層下の遺物包含層から奈良時代中頃の須恵器平瓶・土師器皿が出土している。

文脈からして巽氏は、これら焼土・灰層出土の土器類が延喜 11 年（911）までのものだとみている。八賀氏が提唱した考えを踏襲・追認した格好だ。しかしながら、「内外面とも黒色処理した」黒色土器（すなわちＢ類）の椀が混在するというではないか。すると 10 世紀初頭をさらに降るかも知れないとの疑いもわく。そこで、筆者の瓦観察にあわせて当該の土器を観察したわが同僚・三好美穂氏の所見を拝借、以下に要点を列挙してみよう。（ところで、平安時代の土師器の年代比定に彼女は、自らの「南都土器編年」（三好美穂 1996）をこよなく愛用している。小稿でもそれを遵用した。）

焼土・灰層出土土器　施釉陶器に 10 世紀初頭を降る例はなさそうだ。しかしながら土師器杯・皿の小片には南都Ⅲ期古段階～Ⅲ期新段階（930 年頃～ 11 世紀初頭頃）のものがみられる。黒色土器Ｂ類椀は 10 世紀中頃～後半の間のものだろう。

灰層下砂質土出土土器　灰層下砂質土とは灰層下の遺物包含層だと思われる。土師器・須恵器がある。須恵器は奈良時代のものだが、土師器杯・皿には南都Ⅲ期古段階（930 年頃～ 10 世紀中頃）のものが混在する。

加えて金堂北面地区の調査（原田憲二郎・山前智敬ほか 1996）でも、これと一連とみられる焼土層がみつかっており、その下に主題垂木先瓦を包含した土坑があったことは先述のとおりだが、うち数基からは土器少量がともに出土している。それらの土器についても、三好氏は次のように評価する。

焼土下土坑出土土器　土師器杯があり、小片ながらも特徴がつかめる。南都Ⅱ期中段階～Ⅲ期古段階（9 世紀末頃～ 10 世紀中頃）のものがみられ、あるいはⅢ期新段階（10 世紀末頃～ 11 世紀初頭）まで降る可能性があるものも僅少ある、とのこと。

以上要するに、当該の焼土層の年代は延喜 11 年（911）を降るとみざるを得ない。寛仁元年（1017）の火災にあてることも不可能ではないようだ。ついでながら、講堂では北辺でも過去に小規模調査（森下恵介 1982）が行われているが、基壇の北側に焼土・灰の堆積はみられない。三面僧房と一緒に焼けたのだとすると、北側にも焼土の類が残っていてもよさそうなもので、かかるあたりも不審ではある。焼土層の広がりからみても、これが金堂と講堂のものである蓋然性は高いとみるべきで、かつ寛仁元年火災が候補となり得ること、くだんの説明のとおりである。蛇足ながら、延喜に焼けて再建された講堂が、寛仁に再び焼けたという筋書きは、描けそうにない。全焼した講堂の施釉品の垂木先瓦とあっては、よもや再利用はかなうまいから。

4　無釉品への評価をめぐって

「気にかかる事柄」のいまひとつは、釉薬で花紋を描き再度焼成する前段階の、素焼きの素地が相当数残る事由は那辺にあったのか、ということである。これらには実際に使用された形跡がない。前述のとおり、七堂伽藍（だだし食堂は位置不明）で出土皆無であることが、そのことを如実に示している。あるいは無釉品が円形品と方形品（大）のごとく両面が「のっぺらぼう」のものばかりだったなら、余りないしはストックが不要になって廃棄処分されたものだと、大方は一致して、それまでだったかも知れない。

だが、方形品（小）に額縁仕様のものがあること、かつ中に朱彩や線刻で花紋を描いたものがあることには、同列に不要品だけで終わらせるには口惜しい背景が秘められているような気がする。すでに近江昌司氏がこれにつき考えるところを披瀝している（近江昌司 1985）ので、主要箇所を抜き書きしてみよう。すなわち、「額縁状素縁は、陶枕の多くに類似の素縁を見出すことができるが、

これをめぐらすからには、中の主文様も刻線で描く予定であったに違いない。一見戯画ともみえる主題の刻線花文は、そのためのココロミの習作であった可能性が考えられるのではあるまいか。もし刻線による主文様が完成しており、その上に施釉されていると、陶枕の方形をした一面とよく似た技法・様式になることはいうまでもない。ところが何等かの理由で主文は描かれないまま素焼の窯にいれられたが、釉薬の不足から施釉・二度焼きは難渋し、一部には朱彩の描くことも試行されたが、遂に功ならず、その段階で放棄されたものと考えたい」との、示唆に富む内容である。小稿のおわりに、後に知られた新事実を添えながら、所見をまとめたい。

繰り返すが、方形垂木先瓦には、（大）・（小）２種類があり、さらに後者には片面額縁仕様のものがあるから、3 種類の規格品の群があるとみてよい。なかで注意すべきは、（小）の額縁面裏面に花紋を施釉した例があることで、これは本来の表裏を替えて素地を使った、いわば転用品だろう。額縁仕様でない（小）規格の素地に生じた不足を補った製品に相違ない。使用先は先の想定どおり講堂とみた。つまり、金堂と講堂の垂木先には、飛檐のそれに両者僅かな寸法差こそあれ、表面無地の素地に、釉薬をつけた筆で直に花紋を描いた飾り瓦を採用することが、はっきり意図されていたのだ。通常かかる荘厳は最も重要な金堂で真っ先に行われたと、考えたいところ。さすれば瓦の調達（調製）も金堂→講堂の順序であっただろう。額縁仕様の一群は、次なる主要建物を飾るべく用意されていたのではないのか。ちなみに、薬師寺では食堂近くの十字廊地区から、西大寺では東西の五重塔から、まとまった数量の施釉垂木先瓦が出土していることは、先に説明のとおり。前者の場合、廊に葺かれたとは考えにくいから、食堂は有力候補になるだろう。大安寺食堂は「資財帳」によると、長 14 丈 5 尺・広 8 丈 6 尺とあり、講堂に次ぐ規模をもつ。食堂あるいは七重塔（ただし西塔は平安時代初期の建立だから、この場合、西大寺造塔に先立って神護景雲頃までには竣工していたとみられる東塔）あたりだと、同寸の垂木先瓦も似合いそうではある。

ところで、額縁柄のデザインは何から採ったのだろうか。陶枕のそれを模したとみる近江説に、筆者も賛同である。講堂前面の灰層・焼土層からは、施釉垂木先瓦とともに、約 200 片・50 個体もの施釉陶枕が出土した。多くは中国盛唐代の作で舶載品だが、これを手本に製作された国産品も含まれている。なかに前者作例を模して額縁区画をめぐらす後者の事例もあり、注意を引くのは、沈線を刻む多少ぞんざいな特徴が、瓦のそれに共通することである。隅の沈線の接続処理があまく、僅かに彫り過ぎたり、足りなかったりといったあたりは、そっくりだ。そもそもこれら国産陶枕は、1 ～ 1.5㎝厚の粘土板 6 枚を組み立てて箱形にしたもの。かつ当該粘土板の胎土は、すでに巽淳一郎氏が指摘したとおり（巽淳一郎 1984）、「伴出した施釉垂木先瓦と近似する」。無論、施釉・焼成の技術に、陶枕（陶器）と瓦の別はない。となれば、垂木先瓦と陶枕の両者は同じ工房の製品かも知れない、との思いが俄然強くなる。

一部の瓦に線刻花紋が描けたのも、手本の陶枕が手元にあったからだろう。これにつき近江氏は次のように評価している（近江昌司 1985）。すなわち、「陶枕の花文の多くは焼成前に施された印文であるが、刻印による施文陶器がまだ始まっていないわが国の工人は、脳裏に描いた唐三彩の花文を自らの陶製品にうつすには、刻文によって描くことが、まずさしあたっての作業であったろう。それも単なる戯画として製作のすさびにへらをはしらせたものではなく、主題棰先瓦の工人が美麗な唐三彩陶枕をみて大いに啓発刺激され、そこに押された印花刻文を棰先瓦に応用してみようとした、いわば試行の一例がこのような不鮮明なヘラ描の花文になったと考えるのは憶測にすぎようか。」と。だが、くだんの線刻花紋は手慰みの類いだろうと、筆者は推察する。焼成後の額縁仕様素地には、金堂・講堂所用品と同意匠の四弁花紋を朱描したものが多数みられるが、それらは釉薬で同じ紋様を描くことが指向されていたことを示唆してはいないのか。額縁の彫刻は、従前フリーハンドで筆書きしていた周縁を強調して際立たせるための工夫ではないのか。掎鹿廃寺出土品が同様の仕様を採っていることを、見逃してはならない。沈線で表現されるのは同じ体裁の額縁だけ。いわば額縁の中をキャンバスに使う（あるいは使うことが可能な）素地は、大安寺だけのものではなかったのだ。額縁素地は「何等かの理由で主文は描かれないまま素焼の窯にいれられた」のでは決してない。かかる仕様を明確に意図して焼きあげたものだったのだ。ところが次の工程に至るや、「釉薬の不足から施釉・二度焼きは難渋し、一部には朱彩の描くことも試行されたが、遂に功ならず、その段階で放棄された」あたりの事情は、およそ推察のとおりであったのだろう。

最後に、これら垂木先瓦の製作場所として、寺院地内に工房・瓦窯が存在した可能性が取りざたされたことにつき、触れておこう。使用された形跡がない無釉品多数が、伽藍地外の、とある場所から集中して出土したとな

れば、当該地を投棄場とみて、付近に工房か窯の存在を想定するのは、ひとつの成り行きではあるだろう。近江氏も、そのように考えた（近江昌司 1985）。かたや境内地で存在が確認できた窯の遺構は、杉山古墳前方部に構築された６基をおいて、ほかにはないのが実情だ。これら「杉山瓦窯」６基の開窯は､恐らく平安時代になってからのこと。主題の垂木先瓦の生産に関わるものではない。瓦窯群を覆う遺物包含層と４号窯の灰原から無釉品が出土してはいるが、当該４号窯の構築が 12 世紀中頃以降であることは、前述のとおり。つまり、寺院地内に窯を想定するとなると、未知のそれを想定しなければならないことになる。

とはいっても、これら施釉前の素地が寺院地内の何処かで、ストックされていたものである蓋然性は極めて高い。寺院地内工房や営繕の部署は、依然として魅力的な候補地であり続けるだろう。僅少だが寺院地ではガラス小玉の鋳型や銅･鉄が付着したルツボも出土している[(3)]から、身近で製作・調達できた品々もあったのかも知れない。だがその一方で、次のような疑問をも抱く。京内には大安寺はじめ薬師寺・東大寺・西大寺など施釉瓦が出土する寺院がいくつかあるが、当時最先端の施釉・焼成のハイテク技術を導入した工房を、そのすべてが、はたして完備していたのだろうか、とも。

つまるところ、寺院地での工房・瓦窯の存否については、今後の発掘調査の展開に委ねざるを得ない、というところに落ち着くか。

小稿作成にあたり、次の方々にお世話になりました。

近江昌司・太田三喜・藤原郁代・深澤芳樹・花谷浩・今井晃樹・中川あや・森川実・三好美穂・原田憲二郎・原田香織・宮崎正裕・山前智敬のみなさん、あらためてご厚情に感謝申し上げます。ありがとうございました。

［註］

（１）蛇足ながら、あるいは円弧をもとに径を求める方法もあるにはある。だが、実資料には切り出しで生じた弧の歪みがあるので、ここで実際には適さない。

（２）ところで当該の垂木痕跡につき、上野邦一氏はこれを飛檐垂木の痕跡だとみる（上野邦一 1984）。かたや木下正史氏は一軒地垂木だとみている（木下正史 2005）。仮に二軒の軒先が落下したとしても、地垂木までが同様に突き刺さった状態で痕跡を残す公算は低いだろう。したがって、２種類の痕跡がみられないことを理由に、これを一軒だと断じることは危うい。発掘遺構では、側柱から基壇端まで 13 尺に復元できる由（奈良国立文化財研究所 1975）だから、軒の出はそれ以上。現存遺構では、法隆寺金堂が、丸桁の出 6.16 尺・地垂木の出 8.34 尺で、軒の出 14.49 尺あるから、一軒でも同程度の突き出しは可能ではあろう。ただ、京内で先に造営された本薬師寺の主要堂塔が二軒を採用していた事実を勘案するならやはり、二軒であったとみるのが適当なような気がするのだが。

（３）南大門地区（宮崎正裕・三好美穂 2002）でルツボが、賤院推定地（宮崎正裕 2002）と西塔地区（松浦五輪美 2005）でガラス小玉の鋳型が出土している。

引用・参考文献

粟田薫ほか 2003『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』富田林市教育委員会

石田茂作 1936『飛鳥時代寺院址の研究』

石田茂作 1938「棰先瓦考」『銅鐸 第７号』立正大学考古学会

伊藤敬太郎 2002「第Ⅴ章　遺物　２瓦塼類　Ｅ垂木先瓦」･「第Ⅵ章　考察　３瓦の編年と使用堂塔の比定　Ｄ垂木先瓦」『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所

井上和人ほか 2000「Ⅱ平城京等の調査　法華寺阿弥陀浄土院の調査－第 312 次」『奈良国立文化財研究所年報　2000 －Ⅲ』

茨木敏仁 2005『井手寺跡発掘調査概報－平成 16 年度調査－』（京都府井手町文化財報告書　第７集）井手町教育委員会

上野邦一 1984「大官大寺跡の発掘調査」『大安寺史・史料』大安寺史編集委員会編　大安寺刊

内田真雄 2004『井手寺跡発掘調査概報－平成 15 年度調査－』（京都府井手町文化財報告書　第６集）井手町教育委員会

近江昌司 1962「大和楢池廃寺の遺跡と遺物」『大和文化研究 第７巻８号』大和文化研究会

近江昌司 1985「大安寺出土棰先瓦の新例」『天理大学学報 145』天理大学

大岡實 1966「第四編　大安寺」『南都七大寺の研究』中央公論美術出版

大阪府教育委員会 2001『大阪府埋蔵文化財調査報告 2000 － 1 新堂廃寺』

太田博太郎 1977「解説　大安寺　大安寺の歴史」（註 18 の記述）『大和古寺大観』第３巻（元興寺極楽坊・元興寺・大安寺・般若寺・十輪院）　岩波書店

岡田英男 1984「大安寺伽藍と建築」『大安寺史・史料』大安寺史編集委員会編　大安寺刊

小澤毅 1990「第Ⅲ部発掘調査　第３章遺物　３瓦塼」『西大寺防災工事・発掘調査報告書』奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編　西大寺刊

小澤毅・西川雄大 2000「Ⅳ－１飛鳥の船橋廃寺式および細弁蓮華文軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅰ』　奈良国立文化財研究所

春日井市教育委員会 1984『尾張 勝川廃寺範囲確認調査概報 第４次』

加藤真二・次山淳 1999「６出土遺物　(3) 金属製品・銭貨」『興福寺　第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅰ』奈良国立文化財研究所編　興福寺刊

瓦吹堅･佐藤正好･黒沢彰哉 1994「結城廃寺」『茨城県における古代瓦の研究』

茨城県立歴史館
木岡敬雄ほか 1984「図面　薬師寺東塔　各重裳階・各重組物詳細図」『日本建築史基礎資料集成』十一（塔婆Ⅰ）中央公論美術出版
木下正史 2005『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』角川選書 369　角川書店
木村捷三郎監修・廣田長三郎編 1989『ひろたコレクション 古瓦図考』ミネルヴァ書房
黒崎直 1987「第Ⅴ章　遺物　4 金属製品」『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
小林謙一 1990「第Ⅳ章　遺物　7 瓦塼類　C 道具瓦・塼」『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所編　大和郡山市教育委員会刊
今芳也 2003「9 掎鹿廃寺」『埋蔵文化財調査年報－ 2001 年度－』（兵庫県）加東郡教育委員会
今芳也 2004「5 掎鹿廃寺（2 次）」『埋蔵文化財調査年報－ 2002 年度－』（兵庫県）加東郡教育委員会
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996『木村捷三郎収集古瓦図録』
澤村仁 1981「解説　一　法隆寺金堂」『日本建築史基礎資料集成』四（仏堂Ⅰ）中央公論美術出版
島田敏男 1995「第Ⅲ章　部材解説　15 垂木・垂木栓」『山田寺出土建築部材集成』奈良国立文化財研究所
杉本宏ほか 1987「Ⅲ . 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第 10 集』宇治市教育委員会
杉山信三 1963「大安寺講堂跡等発掘調査概報」『大和文化研究』第 8 巻 11 号　大和文化研究会
高松市歴史資料館 1996『第 11 回特別展 讃岐の古瓦展』
巽淳一郎 1984「大安寺の土器類」『大安寺史・史料』大安寺史編集委員会編　大安寺刊
千田剛道ほか 1997「Ⅱ藤原京の調査　本薬師寺の調査　1 西塔・南面回廊の調査（1995 － 1 次）」『奈良国立文化財研究所年報　1997 －Ⅱ』
次山淳 2000「4 出土遺物　(2) 金属製品・銭貨」『興福寺　第 1 期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』奈良国立文化財研究所編　興福寺刊
次山淳 2002「5 出土遺物　5 － 3 金属製品・石製品・ガラス製品その他」『興福寺　第 1 期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅲ』奈良文化財研究所編　興福寺刊
土肥孝・安田龍太郎 1978「平城宮跡と平城京跡の発掘調査　2 平城京の調査　薬師寺西小子房・十字廊の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1978』
奈良県立橿原考古学研究所 1997「五條市 京奈和自動車道「五條道路」発掘調査概報－平成 8 年度－」『奈良県遺跡調査概報 1996 年度（第 2 分冊）』
奈良県立橿原考古学研究所 2003『只塚廃寺・首子遺跡』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第 57 冊）
奈良国立博物館 1970『飛鳥白鳳の古瓦』
奈良国立文化財研究所 1975「大官大寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 5』
奈良国立文化財研究所 1980「桧隈寺第 1 次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 10』
奈良国立文化財研究所 1981a「桧隈寺第 2 次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 11』
奈良国立文化財研究所 1981b「大官大寺第 7 次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 11』
奈良国立文化財研究所 1991「3 坂田寺第 6 次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 21』
西田弘 1984「近江の古瓦Ⅵ 湖南 2」『文化財教室シリーズ 73』（財）滋賀県文化財保護協会
八賀晋 1967「大安寺発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報 1967』
花谷浩 1995「Ⅱ藤原京の調査　8 本薬師寺の調査　A 本薬師寺 1993 － 3 次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 25』奈良国立文化財研究所
花谷浩 1997 a「Ⅱ藤原京の調査　本薬師寺の調査　5 本薬師寺出土の瓦」『奈良国立文化財研究所年報　1997 －Ⅱ』
花谷浩 1997 b「飛鳥寺同笵瓦二題」『奈良国立文化財研究所年報 1997 －Ⅰ』
花谷浩 2000 a「Ⅱ－ 3 飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈良国立文化財研究所
花谷浩 2000 b「京内廿四寺について」『研究論集ⅩⅠ』奈良国立文化財研究所
花谷浩 2005「軒裏の華－飛鳥寺院の垂木先装飾」『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集』同刊行会
原田憲二郎・山前智敬ほか 1996「Ⅱ寺院跡の調査　1 史跡大安寺旧境内の調査（1）金堂・西面太房・西面中房の調査　第 68 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 7 年度』奈良市教育委員会
福山敏男 1986「正倉院文書に見える建築用語」『正倉院年報』第 8 号　宮内庁正倉院事務所
松浦五輪美 2005「Ⅲ史跡大安寺旧境内の調査　1 史跡大安寺旧境内（西塔跡）の調査　第 94 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 13 年度』奈良市教育委員会
宮崎正裕ほか 1996「Ⅱ寺院跡の調査　1 史跡大安寺旧境内の調査（2）東面中房の調査　第 70 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 7 年度』奈良市教育委員会
宮崎正裕 1997「第Ⅳ章　出土遺物　第 2 節　瓦・塼類」『史跡大安寺旧境内Ⅰ　杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告』（奈良市埋蔵文化財調査研究報告　第 1 冊）奈良市教育委員会
宮崎正裕・三好美穂 2002「Ⅱ寺院跡の調査　1 史跡大安寺旧境内の調査（1）史跡大安寺旧境内（南大門）の調査　第 92 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 12 年度』奈良市教育委員会
宮崎正裕 2002「Ⅱ寺院跡の調査　1 史跡大安寺旧境内の調査（4）史跡大安寺旧境内（賤院推定地）の調査　第 88 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 12 年度』奈良市教育委員会
宮田浩之 2000「9 筑後の山田寺系垂木先瓦・鬼瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅣ』古代瓦研究会
三好美穂 1996「南都における平安時代前半期の土器様相－土師器の供膳形

態を中心とした編年試案－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1995』奈良市教育委員会

森下恵介 1982「大安寺旧境内発掘調査報告　Ⅲ 81 － 2 次調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和 56 年度』奈良市教育委員会

薬師寺 2005『薬師寺』第 144 号

安井宣也 1997「Ⅱ平城京内寺院の調査　1 史跡大安寺旧境内の調査(1)講堂、回廊、僧房の調査　第 69 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 8 年度』奈良市教育委員会

山崎信二 1987「第Ⅴ章　遺物　2 瓦塼」『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所

山本忠尚 1984「大安寺の屋瓦」『大安寺史・史料』大安寺史編集委員会編　大安寺刊

印刷・製本仕様データ

表　　紙：アートポストカード220kg/㎡・マットpp加工
見 返 し：白色上質紙110kg/㎡
巻首図版：特アート紙135kg/㎡
本　　文：白色マットコート紙104.7kg/㎡
本文ﾌｫﾝﾄ：ヒラギノ明朝体
製　　本：縦開き・糸かがり綴じ

ⓒ2014 by the Nara Municipal Board of Education
No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成23(2011)年度

ISSN 1882-9775

印　刷　平成 26 年(2014)年 3 月 18 日

発　行　平成 26 年(2014)年 3 月 28 日

編　集　奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135　奈良市大安寺西二丁目 281 番地
ＴＥＬ　０７４２－３３－１８２１
ＦＡＸ　０７４２－３３－１８２２
ＵＲＬ　http://www.city.nara.nara.jp/
E-mail　maizoubunka@city.nara.lg.jp

発　行　奈良市教育委員会
630-8580　奈良市二条大路南一丁目１－１
ＴＥＬ　０７４２－３４－１１１１（代）

印　刷　関西美術印刷株式会社
630-8325　奈良市西木辻町 153 －１

ISSN 1882-9775

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2011

CONTENTS

Ⅰ PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2011.

Ⅱ REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE.

Ⅲ REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2011.

Ⅳ BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCHCENTER OF NARA CITY.

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION
2014

ANNUAL RESEARCH REPORT

OF

ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA

2011

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2014